
VALIANT OF REVOLT～反逆の英雄～

我狼 龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VALIANT OF REVOLT（反逆の英雄）

【Nコード】

N6330R

【作者名】

我狼 龍牙

【あらすじ】

更新日9月16日

以前の『濃い霧の中で』の前編、中編を1つに纏め、新たに前編として公開しています。

狂いだした世界の中、人々は様々なものを失った。

家族を。愛する恋人を。共に語り合う仲間^{とも}を。

『彼ら』もまたそうだった。

彼らは己の憎しみのために武器を取る。

真っ赤な鮮血に濡れたそれぞれの道。その先にいたい何が待ち受けているというのだろうか。

心に灯る憎しみの炎が今、動き出す。

仲間（とも）（前書き）

嘗ての栄光は消え去り、果てしなく死地は続く。

空は黒煙に吞まれ、大地は鮮血を纏っている。

そこに住むはずの生命は死に絶え、残ったのは永久に緑を宿さない世界。

そう、世界は滅んだ。

悲しい。私は悲しい。

私の世界が、私の箱庭が、私の楽園が、全てが潰えた。

私が望んだのはこんなものではない。

そうこんなものではないのだ。

望まぬものは・・・・・・壊せばいい。そして、創り直すのだ。

私が巣くうべき楽園を。

さあ、旅立て、我が分身達よ。

全てを破壊し、創世しなおせ。

私が楽しむ、新たな物語のために。

仲間（とも）

黒いコートを風になびかせ、銀髪の男は青く生い茂った芝生を踏みつけた。

何もない平原の中、男は無言のまま歩き続ける。

歩く度に揺れる長い銀髪は、雲の間から差し込む光を受け神々しい輝きを辺りに振りまいていた。

それを纏う背は、高い。

周りに比べるものがないが、それでもかなりの背丈を持っているのが分かる。

そんな彼の先にあるのは、そこだけ時が止まったような集落だった。

数分と立たずに銀髪の男はそこへたどり着いた。

全く人気のない村。

そんな中、男は周りに一切目もくれず、無言で荒れた道を進んでいく。

両脇に並ぶ木造の家屋は、所々が剥げ落ち、窓には無数の亀裂が入っている。

もう誰も住んでいないのだろう。

風とブーツが砂利を潰す音だけが今この村を支配していた。

その静寂の中を歩き続ける彼は、いつの間にか開けた場所にてていた。

そこで男は初めて首をめぐらせた。

どうやらそこは広場のようで、真ん中には枯れた噴水があり、その周りにはひび割れた椅子が取り残されたかのように置かれている。そこまで見たところで、後ろから土を踏みしめる音がその耳に届いた。

「おっさん、なんか用か？」

若い男の声。

銀髪の男は、随分前から気づいていたその声にゆっくりと振り返った。

そこにいたのは、どうやら近くの村の不良のようで、顔の至る所にピアスをしている若い黒髪の男だった。

上から下まで品定めしてから、銀髪の男は一つに結った髪を揺らし、反対の方向へ歩き出した。

「おっと、すまないな。ここは行き止まりだ。」

だがその男の前に、見上げるような巨漢の男が立ちふさがっていた。

その手に握られているのは、その髪、体と同じく黒く巨大な斧『バトルアックス』。

さらにその周りは、すでに十人以上の男達に囲まれていた。

それぞれの手には剣やナイフ、槍など様々な武器が握られ、ジャラジャラと耳障りな金属音を奏でている。

「悪いな、おっさん。金恵んでくれよ？　そうすれば半殺しぐらいにしといてやるからさ。」

先の顔中ピアスの言葉に周りの男も下品な笑い声を上げた。

手近にあった酒瓶などが銀髪の男の足下へと投げつけられる。

だが、動かない。

石像の様にそれは動かない。

「どうした？ 怖くて声もでないのか？ おっさん。」
それを見て調子に乗った一人がナイフを片手に銀髪の男に近づいていく。

「なあ、金をくれよ。な？」

そして醜い笑みのまま銀髪の男の肩に手を置いた。その瞬間、
ピチャ

「んっ？」

その頬に感触が、水滴が当たったような感触が伝わってきた。
顔に触れた液体、男はそれをナイフを握った右手で拭った。

その甲についていた色は、赤。

それが何か理解できない男の前を、肌色の物体が赤い尾を引きながら飛んでいった。

「今の、誰の手？」

そう間拔けに呟く男の脳天に無慈悲な剣が振りおろされた。
股間まで一気に切り裂かれた男は、その傷口からきれいに寸断された臓物や脳漿をばらまき、絶命する。

「て、てめえ！！」

何が起こったか理解した一人が、躊躇いなく銀髪の男に駆け出した。

槍を構え、体勢を低くしながら走り、背後から狙うのは、その足。

それは剣という武器に下段に対する対処が少ないことを知っているからだ。

銀髪の男の大振りの剣ですら届かない遠距離から、片手で足薙あしなぎを繰り出した。

常人では決して反応できない攻撃。

だが、銀髪の男はそれを音もなく、軽々と飛んで交わした。それどころか、その槍を地面に踏みつけ、男の手からもぎ取ってさえた。

「っ!!」

男は腰に差しているナイフを取り出そうと手を伸ばすが、それよりも早く、その体は斜めにずり下がっていた。

ドサッ

地面に体が落ちる音と共に男たちは一歩、後ずさった。

骨にぶつかる音すらない、恐るべき技量とその切れ味。

男たちも冷静な判断が出来ていれば、この実力差に気づき、すぐにでも逃げ出していただろう。

だがあまりの恐怖によって恐慌状態に陥った彼らに、そんな行動など取れるわけがなかった。

怯える彼らの前で御披露目をするかのよう、銀髪の男は愛剣を掲げた。

それは人を持ち上げているようにさえ見える、鋼色に輝く幅の広い片刃の剣（片刃の剣）。

その剣と銀髪の男から発せられる尋常ではない威圧は、容易く人を狂わせた。

「う、うわああああ!!」

悲鳴のような声を上げながら、顔中ピアスも含めた男達は突撃を始めた。

もう彼らの頭に策という文字はない。

ただ彼らを突き動かすのは、死への恐怖。それだけだった。

「馬鹿やろう!! 止めろ!!」

巨漢の男がハッとして叫ぶが、恐怖に取り付かれた彼らは止まらない。

対する銀髪の男は、サングラスで隠れた瞳に冷たい光を宿したまま、ただその六人の愚者達を見つめていた。

「ああああ!!」

最初に叫びながら切りかかってきた剣士を銀髪の男はゆっくりとした動きでかわすと、容易くその剣士の腕を切断。さらに、がら空きになった腹を真っ二つに切り裂いた。

それを出始めに、銀髪の男は流れるように緩やか、だが鋭い動きで、ものの数秒で六人という数を切り伏せ、

その後に残ったのは、無惨に転がる切り裂かれた肉塊だけだった。

「くそが!!」

叫ぶと同時に巨漢の男は銀髪の男に走り出した。

巨大なバトルアックスを腰だめにし、銀髪の男が間合いに入った瞬間、それを降り出す。

ギロチンのような巨大な刃が銀髪の男を横から襲う。

空気が裂ける音と共に繰り出された全力の一撃。

「な、に？」

しかしそれは微かな金属音と共に大振りの剣に受け止められていた。

「っ、クソが！！」

激昂した巨漢の男はもうがむしゃらにバトルアックスを振るう・
・・・・ように見せかけて、時に足払いや石付きなどの技を繰り出していく。

だがその全てが例外なく剣に受け止められていた。

そして一際高い金属音が辺りに響いた。

何かが、大きな目をいっばいに開く巨漢の男を飛び越え、音叉おんさのような音ともに噴水の頂上に突き刺さった。

それは先ほどまで巨漢の男が握っていた巨大なバトルアックスだった。

巨漢の男はその斧を弾きとばされた大きな手を見て、ドサリと膝をついた。

「殺せ。俺の負けだ」

そのまま両手を地面につくと、頭を差し出し、目を瞑った。

完璧な敗北だった。

もう終わりだ。そう男は覚悟した。

だが、いつまでたっても来るべき衝撃が来ない。

巨漢の男は不思議に思い顔を上げると、その銀髪の方は枯れた噴水、その中心の柱に腰掛けていた。

指に挟んだ細長い煙草をくわえるその姿は、どこか幻想的な雰囲気醸し出している。

「なぜ殺さない？」

巨漢の男の問いに銀髪の方はチラリと視線を向けるが、何も言わない。

「なぜだ!？」

吐き出された怒号に、細く紫煙を吐き出してから初めて銀髪の方は口を開いた。

「お前が気に入った。」

「は？」

「俺と旅をしないか？」

「何を……」

巨漢の男はその言葉が理解できなかった。

「俺は今、仲間を集めている。」

お前の心意気、潔さ、覚悟。気に入った。お前も来ないか？」

外したサングラスの下から現れた形のいい紅い瞳。それが、いかつい顔へと向けられる。

一方で、巨漢の男は固まっていた。

開いたままの口が塞がらない。

彼は向けられたその瞳に見覚えがあった。

彼の中でそれを尋ねたい気持ちが湧き上がってくる。
本当にその通りなのか。それともただの勘違いなのか。

「……なぜ仲間がいる？」

だが彼の口について出たのは別の問いだった。
もしかしたら、ただ似ているだけかもしれない。
そう考えた巨漢の男は否定を恐れ、訊くに訊けなかったのだ。

しかし、これもそれと同様に気になる。

なぜ仲間がいるのか。

そしてそれは本当に自分でいいのか。

それを察してか、銀髪の男は長く息を吐き、立ち上がった。
それを不思議そうに見あげる巨漢の男にあえて背を向け、目当て
のものに視線を落とした。

銀髪の男は指に挟んだ煙草を投げ捨て、代わりに握り込んだのは、
柱に突き立つ巨大な斧。

そしてそれを軽々と、反動もなく引き抜いた。

「この国を滅ぼす。」

「なっ！？ 正気か！？」

「ああ。どうだ？ やらないか？」

ニヤリと笑ってみせるそれに、巨漢の男はなぜか惹きつけられた。
心の奥が沸き立つような、そんな不思議な高揚感がその体を満た
していく。

「なぜ国を滅ぼす？」

だがそれでも巨漢の男は誰もが疑問に思う理由を問う。

ただ自分がついていくに値する男か測るために。

「ついてきたら教えてやる。」

その意味深な言葉と仕草に、巨漢の男は極限までの心の高ぶりを覚えた。

「俺は三年前までこの国のために戦う騎士だった。」

「ならその自分が守ったモノを『壊す』のもまた一興だとは思わないか？」

その心は決まった。

敗者は勝者に従わなければならない。

だがそれ以上に、この男についていきたい、そう思った。

巨漢の男は立ち上がり、差し出されたバトルアックスを掴んだ。

その大きな顔に浮かんでいるのは、笑み。

「ああ、いいだろう。」

このガムルⅡランパード、死ぬまで貴様について行くことをここに誓おう。」

そう告げてから巨漢の男、ガムルは笑ってみせた。

「騎士らしいだろ？」

「ふん。」

それにつられ、銀髪の男もまた口の端を吊り上げていた。

静かに笑いあう二人。

その間をゆつくりと新たな風が駆け抜けた。

「で、どこに行くんだ？」

廃村から幾らか離れたところにある街をガムルは銀髪の男の後に
ついて歩いていた。

廃村から最も近い街、その中でもこの市場はかなりの人でごった
返している。

「まずはここから一番近い『フィリーズ』に行く。」

「『商業都市 フィリーズ』か。歩いて二週間といったところか。」
「ああ。」

銀髪の男は中指でサングラスを押し上げながら頷いた。

「そうだ。そういえばお前の名前、まだ聞いてなかったな……
・どうかしたか？」

「いや、」

いきなり立ち止まった銀髪の男にガムルは訝しげな表情を浮かべるが、

「リユーガ!!」

それを尋ねるよりも早くその姿が消えた。

「え?」

ポカンと口を開けるガムルは何となく視線を落とした。

先ほどまで銀髪の男がいた地面にあるのは二つの真新しい溝。

それを辿り後ろへ視線を向けると、見つけた。

数メートル後ろになぜかそれはいた。

普通に立ったままだが、ガムルはその姿に何か違和感を感じた。

服装、髪型、顔、特に変わったところはない。

だが、何かが違う。ガムルはそう感じた。

じっくり眺めていると、なにやらその腹部で黒いものが揺れているのが見えた。

「……」

無言で目をこすり、ガムルは近づいてみるが、それはいくら目をこすっても消えない。

そして後一メートルというところでやっと理解した。

それは男に抱きついている黒髪の少女だった。

周りから奇異なものを見る視線が集まるが、少女はまるで気にしない。

彼女の歳はまだ十代だろう。腰まで伸ばした黒髪の影からチラリと見える横顔は、まだ幼さが残るがとても整っている。

「どこに行ってたの？ 私、探してたのに。」

抱きついたまま頬を膨らますその姿は、ついつい抱き締めたくなくなるような可愛さがあった。

その可愛らしさに、周囲からの視線がふと緩んだのをガムルは感じた。

美形の二人が抱きつきあうのは確かに絵になる。

だがガムルは一刻も早くその場から離れたいというのが本音だった。

「すまない。少しばかり用事があったな。」

「まったく……あれ？ そっちの人は？」

そんな彼女はやっとガムルの存在に気づいたようだ。

「新しい仲間だ。」

突き出した少女の指を優しく包み込みながら銀髪の男が応えた。

「へー、初めまして。フィロって言います。」

リユーガから聞きました？」

「リユーガってこいつのことだよな？」

ガムルが銀髪の男をさすと、フィロは一度頷いてからさっきとは違う冷たい視線を銀髪の男に向けた。

「また名前も言わずに連れてきたの？」

「ああ。」

「ああって……まあ、いつものことだけど。」

あからさまな溜め息をつく少々、フィロ。

だがため息をつかれた銀髪の男は代わりに周りを軽く窺いながら、ガムルと向かい合った。

「すまない。俺の名は龍牙。龍牙ⅡFⅡエスぺラント」

「龍牙ⅡFⅡエスぺラント……ってあの!？」

ガムルまでしか届かないような声で紡がれたその名前に、ガムルは驚いた。

「……すまないが、あまり大きな声を出さないでくれ。」

「うっ……、すまない。」

冷たい声にガムルはまた周囲の視線が集まっていることに気づき、一瞬でも高揚してしまった自分を恥じた。

（やっぱり、そうなのか。）

俯いたまま、ガムルはフィロと何事か話す龍牙に視線を向けた。

（あのサングラス、あれは恐らく自分の正体をばらさないためのものだろうな。）

ガムルはまだ興奮が冷めやまない心を必死に抑えつけ、その黒い十字架の刻まれたサングラスを見つめた。

（リユーガがいる。ただそれだけで街は大騒ぎになるよな。だってあいつは……）

「行くぞ。他が待っている。」

思考の渦から引き戻されたガムルは、それに頷き返し、後を追って歩き出した。

それから三人は龍牙を先頭に、市場から外れ、狭い道を進んでいった。

戦時中、敵に攻め込まれないようにと考えて作られた狭く入り組んだ道だが、

「今の住人達からしてみれば迷惑この上ないよな。」

そのようなことを人事のように考えながら、ガムルは二人の後について歩いていった。

薄い黄色い家々が並ぶ道を何度か折れ、たどり着いたのは、路地裏にある異様な雰囲気放つ建物だった。

龍牙とフィロがためらいなく入っていくのを見てから、ガムルはもう一度建物を見上げた。

この街に多く見られる赤い煉瓦造りの建物。建ててからかなり経つのか、あまり大きくもない壁の所々にひびが入っている。

その横にかかっているボロボロの看板には宿屋の文字。

それを見てガムルは何か身の危険を感じずにはいられなかった。

「おーい、新人さん。早く来てくださいよ。」

中から元気な声と共にフィロが手招きしているのが見える。

それに一度手で応えてから、ガムルは天を見上げた。

「この世界も捨てたもんじゃないな。」

微かに口からこぼれ出た言葉はその音量とは逆に、どこか重みがあつた。

「神だかなんだか知らないけどな、やってくれるよ、本当。」
ガムルは小さく安堵の表情を浮かべながら、古びた扉の下をくぐった。

体を屈めながら入った先は、外から見たものよりも遥かに広がった。

しかもそればかりではなく、王室のように豪華でもあった。

入ってすぐ左には、かなりの数のワインなどが置かれたバーがあり、頭上にはシャンデリア。置かれている家具も高級品なのが一目で分かる。

「こっちこっち。」

ガムルはバーと反対側から手招きするフィロへ近づくと、高級そうなソファに腰掛けた彼女の前に二人、この辺りであまり見ない顔があった。

一人は華奢な体躯に黒髪、白に近い肌色のコートを羽織っている若い男。

（銃使いか。）

その腰と足首の辺りの膨らみから横に視線をずらした。

その横にいるのは金髪を肩の辺りで切りそろえた、身体の色々なところが露出している際どい服を着た美女だ。

（こっちは弓使いか。）

綺麗なリズムを打つ彼女の右手の指、その荒れ具合からすぐに予想がついた。

チラリと周りに視線を向けるが、周りには彼ら以外いないようだ。

その間にもフィロは紹介を始めていた。

「こっちの男の人がダンゼルさん。」

「ダンゼルⅡホーキンスだよ。よろしく。」

人懐っこい笑みを浮かべる彼の手をガムルはしっかりと握り返した。

「で、その横にいるのがリタニアさんです。」

「リタニアⅡマクベスよ。よろしく、新入りさん。」

妖艶な笑みを浮かべる彼女に戸惑いながらもガムルはその華奢な手を握った。

「あ、後、ダンゼルさんはうちの『整備士』^{エンジニア}も兼ねていますので。」
「誰か『機械剣』でも使っているのか？」

「ええ。私達四人共使っていますよ。」

ガムルはその言葉に驚きを隠せなかった。

『機械剣』とは精密な部品で組まれた、特殊なギミックがついた武器の総称である。

この名前はよく知られてはいるが、実物はあまり市場には出回っていない。

その理由は主にコストと生産量の少なさが理由だ。

もちろんそれはこの国も例外ではない。

この国にある騎士団という、いわゆる戦闘のエリート集団でさえ、最近になってやっと普及し始めたような最先端の技術だ。

そんな貴重なモノがここに四つもある。それだけでガムルを驚かせるには十分だった。

「大丈夫、あなたの分もすぐに組んでくれますから。」

「任せてくれて構わないよ。」

ダンゼルの柔和な笑みに、いつの間にかガムルの顔にも笑みが浮かんでいた。

「それじゃ、自己紹介でもお願いしましょうか。」

あ、あまり重い話はしなくても大丈夫ですから。」

フィロにしっかりと頷き返し、ガムルは口を開いた。

「俺はガムルⅡランパード。」

六年前まで騎士団に所属し、隣国と戦っていた。まあ、三年前の人員削減ではじき出されたけどな。

それからはここで、ごろつきみたいなことをしていた。」

「意外と普通の落ちこぼれっぷりね。」

淡々と語るガムルの話に真っ先に口を開いたのは、意外にもリタニアだった。

「リタニアさん！」

「何がしたい？」

「あんた、なんで帝国と戦うの？」

リタニアの鋭い視線に射抜かれ、ガムルは動けなかった。

「ここにいる三人は元は騎士団、あるいは宮廷術師団の大隊長クラスよ。」

そんなのが帝国を滅ぼそうなんて簡単に言うと思う？」

「思わないな。」

ガムルは即座に応えた。それは考えるまでもなく明らかだった。

「つまりそれだけの地位を捨てるだけの怨みや妬み、憎しみ、様々な負の感情が私達を支配している。」

だけど、あなたからは何の意志も感じられない。

それこそ枯れ果ててしまったみたいだね。

だから私は、いや私達は聞きたい。」

ガムルが気づいた時には、その首に矢の鏃が当てられていた。

「あんた、帝国と殺し合う気あるの？」

「あるさ。」

ガムルの予想外の即答にリタニアは目を丸くした。

「俺はこの三年間、ずっと一人だった。どこかのグループに入っても誰とも打ち解けることはなかった。」

瞼の裏に鮮明に浮かぶのは三年前、仲間の死体の真ん中に立つ、自分を『こんな状態』にした憎き女。

『私が憎いか？少年。』

ならもつと憎め。

憎しみ、怒り、泣き叫べ。

その負の感情がお前を強くする。

そして、いつか私を殺しに来い。

また『元』に戻りたかったらな』

「もしかしたら心の中で仲間を失うことを恐れていたのかもしれない。自分でも分からないほどにな。」

だけど、そんな俺をあいっつは必要だと言ってくれた。」

ガムルは自分の手をしっかりと握りしめた。

「はつきり言って嬉しかった。こんなゴツくなった男が言うのもなんだけどな。」

それでも久しぶりなんだ。誰かのために何かをしたいって思うのは。それに……」

彼は続くはずの言葉を、呑み込んだ。

彼自身を突き動かすもう一つの大きな理由。秘めたる目的。

だがガムル自身、よく分かっていた。

それは今生まれる新たな関係を、容易く引き裂くものだ。

だからこそ彼は心の底に秘めることを改めて決意する。

これまでと同じように。

ただ一人で背負っていくために。

「それがあなたが戦う理由？」

「・・・・・・ああ。」

しっかりと頷くガムルに対し、リタニアはその顔を下に俯け、肩を震わした。

しまったかな、とガムルが回避のために身構えていると、リタニアは顔を上げ笑い出した。

「ハハッ、いい、いいよ。気に入った。」

リタニアはガムルの首から矢を外すと一歩離れ、両手を大きく広げた。

「ようこそ、我ら『銀翼旅団』へ。」

歓迎するわよ、ガムルⅡランパード。」

最初は呆気にとられていたが、その笑顔にガムルもまた自然と笑みを浮かべていた。そして感じていた、

これが新たな日々の始まりなのだ。

脱出

その後四人は親交を深めるため、ということで特に取り留めのない話をしていた。

好きな料理、趣味、最終的にはどこに所属していたかという話になっていたが、

「ちなみに私は元『宮廷騎士』。階級は第九階梯。

ダンゼルは『技術開発局』のエリートエンジニア。開発主任とかもしてたらしいわ。

フィロは『冥術師』

階級は第十階梯だったわよね？」

「はい。」

ガムルは絶句していた。その余りの階級の高さに、だ。

この世界には冥術と言うものが存在する。

冥力と呼ばれる体内を駆け巡る力の奔流を操り、体外、体内で変化を起こす技だ。

簡単に言えば、様々な図形が刻み込まれた『破天石』と呼ばれる鉱石などにその冥力を流し込むことで火や氷といった物質を生み出せるといったものだ。

主に冥術のみを使い、広範囲に強力な攻撃をしたり、治癒など味方をサポートする者を冥術師と呼ぶ。

彼女達が言っていた『階梯』というのは、『騎士』『冥術士』としての階級を表す言葉で、上が十、下は零までである。

これは世界共通の表現で、四年に一度、世界中から騎士、冥術師が集まりひと月もかけて試験を行う。

つまりそれだけ毎回競争が激しいのだ。

そんな中、第十階梯と言えば、世界でも『冥術士』、『騎士』合わせておよそ六十人ほどしかない、尊敬を通り越して崇拜の対象となる称号だ。

「その歳で、第十階梯？」

「はい。飛び級みたいなので一気に第八まで、その次でなくなりました。」

あっさりと言ったのけるフィロに、ガムルは開いた口が塞がらなかった。

超難関と言われる試験で、たったの二回で最高位の階級まで取得することがどれほどのものか、ガムルにも容易く想像がつく。

「私もそんな感じよ。」

ちなみにリユーガも第十階梯だから。知ってると思うけど。」

「ああ、知ってるさ。」

（嫌というほどな）

心中でそう呟いていると、リタニアが「そういえば、」と切り出した。

「ガムル。あんたは？」

「ん？ ああ。俺はその試験を受けてないんだ。だからそんな称号なんかない。」

「へえ」

その答えにリタニアは意外そうに頷くとその華奢な手を顎に当てた。

「そう。まあ、良いけど。」

「だけど変なのよね、」

「………なにがだ？」

「私、三年前はまだ『騎士団』にいたけど。あんたみたいな巨漢の男、いなかったはずなんだけど？」

「っ………ただ覚えてないだけじゃないのか？」

息を呑んだのを隠すようにガムルは少し語気を強めた。

その反応に気づいたのか、リタニアはニヤリと笑って見せた。

「まあ、良いけど、ね。」

その意味ありげな笑みにガムルは焦った。

（何に、気づかれた？）

これ以上何かに感づかれる前にとガムルは思い切って口を開いた。

「そういえば、ダンゼルは？」

話題の転換のためにと辺りを見回してみるが、やはりダンゼルがいない。

このエントランスにいるのはこの三人だけのようだ。

「さっき食糧を調達して来るって出たきり……」

リタニアがそこまで言葉を紡いだ時に入り口から、買い物袋を手に、血相を変えたダンゼルが駆け込んで来た。

「騎士団が来た!!」

開口一番に告げられた報告に、リタニアとフィロからため息がこぼれ、ガムルは意味が分からず呆然とした。

「場所と数は？」

「街の門におおよそ五十。」

「五十!？」

やっと思考が追いついたガムルから驚きの声上がるが、他は至って冷静だった。

それどころか、

「たったそれだけ？」

「はあ!？」

「なによ？」

煩い、とりタニアは顔をしかめてくるが、ガムルは尚も声を張り上げた。

「なによって、騎士団が五十人もいるんだぞ？」

『騎士団』とは、冥術士の言わば逆、武術を主に冥術を補助として用いる騎士の集団のことで、言わば戦闘のスペシャリストである。それが五十人もいるのだ。

これを脅威と言わず何というか。

なのに、なぜここまで冷静でいられるのか、ガムルには全く分らなかった。

「だからなによ？ 雑魚が何匹いたって一緒。

そうだ。ダンゼル、ちなみに統率してたやつ何階梯分かる？」

「多分、第六階梯だったと思う。」

リタニアはゆっくり立ち上がると腰に手を当て、伸びをした。

「了解。じゃ、行くとしますか。」

「行くなってどこにだよ？」

柔軟体操を終えたリタニアは、そう尋ねるガムルにニヤリと笑ってみせた。

「騎士団のところ。」

「ばっ、戦う気か!？」

「当たり前じゃない。あいつらしつこいから先に蹴散らした方が楽なの。」

はいはい、行くよ。」

リタニアはその華奢な右手でガムルの首根っこを掴んだ。

「うおっ！？　は、離せ！！」

巨漢のガムルを軽々と持ち上げたリタニアは、そのまま入り口から外へボールのように蹴りだした。

外から派手な破壊音と悲鳴が飛んでくるが、蹴りだした本人は全く気にも止めない。

リタニアはカウンターから水を一杯受け取り、一気に煽った。

「ダンゼル、」

「なにかな？」

「リユーガには伝えた？」

浮かんだ不安の色を隠そうと口を拭うリタニア。それにダンゼルは安心するよう笑いかけた。

「うん。すぐにどこかに飛んでいったけど。」

「そう、分かった。」

安堵を呟いてから、一度大きく息を吸った。

戦いが始まる。

リタニアは腰から手の平と同じぐらいの長さがある円柱状の金属を引き抜いた。

「それじゃ、新人さんもいることだし、派手にいきましょうか。」
「うん。」

「了解です。」

応える後ろの二人の手にも同じモノが握られていた。

「『銀翼旅団』の力、見せてやろうじゃない。」

「どういうことだ？」

大破した家屋だったものの中、ガムルは仰向けに横たわっていた。

その目の前に見えるのは、逆さに立っている数え切れないほどの鉛色の鎧達。

「立て!!」

首もとに剣を突き出されたガムルは、仕方なさげに両手を上げ、立ち上がる。

するとその前に兜を小脇に抱えた少し年のいった男が出てきた。その風格からそれが部隊長だとガムルには分かった。

「貴様、『銀翼旅団』の者か？」

そのあまりにもストレートな質問に、ガムルは吹き出しそうになるのを必死に堪えながら、小さく首を振った。

「本当か？」

疑わしげな視線にガムルは頷いてみせる。

「『銀翼旅団』って、あんな恐ろしい連中に関わるわけないじゃないですか。」

「そんなに恐ろしいか？」

なぜか食いついてきた部隊長らしき男にガムルは頷いた。

「そりゃあ、元騎士やらなんやらの集まりなんですから。」

「ああ、そうだな……」

だが、なぜお前はそれを知っている？
「は？」

してやったり、という表情を浮かべる騎士の意図がガムルには全く掴めなかった。

「何がですかね？」

「『銀翼旅団』という団体名は我々がここに来る前に発覚したこと。つまりのメンバーが分かった？」

「そ、それは……」

額に冷や汗を噴き出させながらガムルは頭を回転させる。

（どうする、どうやって切り抜ける？）

「じ、実は……」

ガムルが苦し紛れに何事か話そうと口を開いた瞬間、ガムルの脇の騎士が小爆発と共に吹き飛んだ。

「えっ？」

呆氣にとられるガムルと騎士達。

そこに、今度はガムルに剣を突き出していた騎士が吹き飛ばされた。

「敵襲だ!!」

「誰だ!？」

口々に叫ぶ騎士達。

「あつ、ごめん。手が滑っちゃった。」

そこへそれをあざ笑うかのような軽い声が降り注いだ。

「あそこだ!!」

騎士の一人が指し示した一点へ、全員の視線が集まる。

その無数の視線の先にいたのは、建物の上に立つ、銀色の弓を左手に持った妖艶な女性。

その圧倒的な存在感に、部隊長の口は自然とその名を紡いでいた。

「リタニア……マクベス」

「ガムルー、今すぐそこを離れなさい。」

リタニアは口元に手を当て愉快げにガムルに呼びかけながら体を横に逸らした。

彼女の頭があった場所を通り過ぎるのは白い光の球。

「『光』の系統か。さすが騎士団。お金の使い方が違うわね。」

迫り来る無数の光の球が織りなす白い波。

リタニアはそれを軽々と屋根を飛び移りながらかわしていく。

屋根を縫うような彼女の走りに、それらは標的を見失い、その後の建物に容赦なく穴を開けていた。

だがそこから新たに生まれるのは、一つ一つが鋭利かつ鈍重な破片達。

視界を覆うそれらをかわすために彼女は一際大きく跳んだ。

高く舞い上がった彼女の視界に、街の端を収めながら、優雅に着地。

そこは騎士達の攻撃範囲外であるその通りの突き当たりだった。

「ガムルー」

「分かってる、ってしつこいな。離せ！！」

屋根の上からかかる声を適当に返し、それに向けて走りながらガムルは後ろを見た。

そこにいたのは、ガムルの服を必死に掴む、ぽっちゃりとした体型の騎士だった。

その額に滴るのは汗、汗、汗。そしてそれはガムルの服に容赦なくシミを作っていく。ガムルは怒りのあまり血の気が引いていくのを感じた。

「その汚い汗を、俺につけるんじゃ、ねえ!!」

振り向き様に滝のように汗をかいているその騎士の腹を殴りつけ、そのまま駆け出した。

吹っ飛んだその騎士は汗を辺りに撒き散らしながら、戸惑う騎士達の集団に突っ込んでいく。

「うわっ!?! なんだ!?!」

「何だ!?! この液体は!?!」

「ヌメヌメするぞ!?!」

「臭え!!」

その後ろから聞こえてくる数人の罵倒と足音にガムルの足はさらに早まる。

それを楽しげに見ていたリタニアは屈み、もう一度叫んだ。

「ガムルー、早くしないと……死ぬわよ。」

「マジかよ!?!」

その言葉にガムルは自然と自分が出せる限界を超えたスピードで走っていた。

「よしよし。じゃあ、行くわよー」

満足げに頷いてからリタニアは弓を上 to 構え、矢のない弦を引いた。

彼女の瞳にのみ映る、一本の線。デッドライン

迫り来る騎士達の前を走るガムルがそこを通った瞬間、

放った。

「『妖精の雨』フェアリーテア」

上空に打ち出された白い矢は、リタニアの声に空中で分散、青空を一瞬にして白く染め上げた。

その眩い光にガムルは腕で目を覆った。

その閃光はすぐに収まるが、次いで激しい揺れが襲いかかる。

「くっ」

平衡感覚を失うような一瞬の強い縦揺れ。

ガムルはゆつくりとその目を開け、ただただ啞然とした。

「マジかよ………」

先ほどまで視界一杯に広がっていた騎士達が、一人残らず光輝く白い矢に貫かれていたのだ。

恐らく騎士達の殆どがこのような攻撃だと分かっていただろう。

現に、上空に向け防御系の術式を展開していたのをガムルは見ていた。

だが、分かっているても防げない、かわせない。

そんな絶対的な力の差が彼女と彼らにはあった。

「うっ、うう」

「くそう」

「痛え」

それでも彼女の優しさなのか、その全てがただ騎士達の四肢のみを貫いていた。

「殺しても良かったんだけど、あまり雑魚を殺すのは好きじゃないのよね、私。」

ガムルの傍らにひらりと着地したりタニアは、言い訳するように呟く。

「す、すごいな。」

腰を抜かしたままガムルは彼女を見上げた。

「こんなのは序の口。私よりフィロの方が派手よ。」

何を競ってるんだ？と疑問に思いながらもガムルは差し出された手を取った。

「さっさと逃げるわよ。」

「おい、だけどまだ騎士達が残っているんじゃない？」

さっさと宿に帰っていくリタニアにガムルは制止の手を伸ばした。

「ああ、それならフィロとダンゼルが行ったから大丈夫よ。」

そろそろ帰ってくるんじゃない？」

その返事を待っていたかのように、二人の前にフィロとダンゼルが颯爽と現れた。

「お疲れ。」

それに見向きもせずかけられる労いの言葉。

「うん。そちらこそ。」

その応えにリタニアはチラリと彼らに視線を向けた。

「……………で、片付いた？」

リタニアのその視線に、二人は視線を外し、渋い表情を浮かべた。

「それが……………」

「どうやら一人逃げられたみたいで……………」

「はあ？」

歯切れ悪く伝える二人にリタニアは呆れたような表情を浮かべる。ガシガシと髪を掻きあげ、ぼさぼさの頭のまま腕を振り下ろした。

「まあいいわ。とりあえずさっさとここを離れましょ。」

まさか騎士団の中隊がこんな近くにいるとは思わなかった。」

「同感です。」

「本当に珍しいよね。」

口々にこの状況訝しがる三人は宿に向かう。

「なあ、」

だがそれ呼び止める声があった。

三人は足を止め、振り返る。

「騎士団中隊がこんな小さな街にいるのって珍しいことだよな？」

その視線の先にいたガムルの言葉にリタニアは頷いてみせる。

「この程度の大きさなら通常一小隊だけで十分ね。」

「だからおかしいなって話をしているんだよ。」

「それって、もしかしてあいつ等は俺達とは別の奴を追いかけていたんじゃないのか？」

そのガムルの指摘にリタニアとダンゼルは揃って口を噤んだ。

「五十人って人数。確かに第九、十階梯がぞろぞろいるここにとっ

てみたら少ないかもしれない。

だけどそれがたった一人の、そう、第九階梯ぐらいが対象だったら脅威になるとは思わないか？」

「確かにそうね。」

リタニアは意外にもあっさりとガムルの意見に頷いた。
それ程にこの意見には力があつた。

「ガムルの言うとおりかもしれないわ。

でも、何にしてもまずはこの街を出ないと。

もたもたしていると恐いおじさん達が来るからね。」

「恐いおじさん？」

茶化した感じに言うリタニアにガムルは疑問の声を上げる。

「『騎士団総司令室』の四人のことですよ。」

答えたのはその横にいるフィロだったが、それにはガムルは納得せざるを得なかった。

何万という騎士達をたった四人で束ねる人外の力の持ち主達、人々は彼らに敬意と畏怖の念を込めてこう呼ぶ、

「『四聖人』か。」

そう呟きながら荷物のないガムルはソファにもたれかかった。
薄い黄色の壁で覆われたこの広間には誰もいない。 カウンター
にいた主人も奥に消えていた。

「あいつ等が来るのは早くて明後日、それまでに逃げれば大丈夫だよ。」

後ろから近寄るダンゼルの方へ目を向け、ガムルはげっそりした。

「なんだ、その荷物？」

ダンゼルの後ろにあるのは、馬が引くような大きな台車に乗せられた大量の荷物だった。

その量は尋常ではなく、時節天井に荷物がこすれている。

「機材とかがかさばっちゃうんだよ。」

「そんなに大きいと目立つんじゃないか？」

「ああ、大丈夫大丈夫。こうすれば、よっと。」

訝しげな表情をするガムルに笑いかけながら、ダンゼルは引き手の少し下にあるレバーをグイッと引っ張った。

すると、ボンッという音と共に、その壁と化していた荷物が、一瞬にして消えた。

「うおっ？」

代わりにダンゼルの手にはキャリーバックが握られていた。

「へえ、便利だな。」

「まあ、時々中のモノが壊れたりするのが難点だけどね。」

ガムルはその言葉の裏に、壊れてもすぐ直せるという自信に満ち

ているのが分かった。

「次の街に着いたらガムルさんの機械剣を作ってあげるよ。」

「ああ、頼む。」

そこまで話したところで二人は近づいてくる女性陣が目に入った。

「なにボーっとしてるの。行くわよ。」

真っ先に飛んでくる怒声。

「俺らの方が早かったのにな。」

「本当にね。」

「なんか言った？」

ひそひそと話すガムルとダンゼル。

だがそれはリタニアの一睨みで断ち切られた。

「いえ、何も言ってないです!!」

「ならいい。さっさと行くわよ。」

もう一度ガムル達を急かしてからリタニアはフィロを連れて外へと出ていく。

それを見て、ガムルとダンゼルがため息をついたのは言うまでもない。

まだうずくまる騎士達の前を素通りした四人はあの市場に来てい

た。

ここに来たのは、人ごみに紛れ、追っ手を撒くためだ。

恐らくいないだろうが、念のために四人は二手に分かれ、街の外、集合場所である街の南側にある森の入り口を目指し、歩き出した。

「なるほど、木を隠すなら森の中。人を隠すなら人ごみのなかっ
か。昔の人は偉大なことだ。」

一足早く、目印として指定された石碑の前に立っていたガムルが
呟く。

その視線の先では膨れた風呂敷を背負っている人、大きな台車を
馬に引かせている行商人、観光客などでこった返している。

「帝都から『フィリーズ』まで、この道を通るのが一番の近道だか
らね。」

その横ではこのような空き時間も惜しんで、ダンゼルが小さな機
械をいじっている。

「だけどそれなら騎士団も一番警戒してるんじゃないのか？」

「うん、まあね。」

その軽い返しにガムルはずっこけそうになる。

「まあねって、お前……」

「僕達がこの道を通るのは直接『フィリーズ』に行くためじゃない
よ。」

そう言いながら、ダンゼルは肩から掛けているカバンの中をこそごとと漁り始めた。

「これを使うんだよ。」

見つけた目当ての物を背の高いガムルに掲げるようにして見せた。

「なんだこれ？」

ガムルは手に取って陽にかざしてみると、それは鍵だった。

見ればその中心に水晶が埋め込まれており、中に紋様が刻まれている。

「それを受け取りに行くんだよ。」

「全く意味が分からん。」

それを陽に照らし色々な角度から眺めてみるが、何も変わらない。

「そっか、三年前はまだ騎士団に普及してなかったんだっけ。」

「なんの話かさっぱりなんだが？」

「見たらすぐに分かるよ。」

ガムルから鍵を返してもらいながら、ダンゼルは幼さの残る笑みを浮かべた。

そこでふとガムルはある疑問が浮かんだ。

「そういえばダンゼルって何歳だ？」

内心、その外見とは違って二十ぐらいだと予想していたが、

「十六だけど？」

「・・・・・・は？」

返された答えにガムルはだらしなく口を開いた。

それは予想の遙か上、いや下を行っていた。

「マジか？」

「『マジ』だよ。ちなみにフィロちゃんは十五だよ。」

その言葉にガムルはさらにショックを受けていた。

「マジかよ・・・・・・」

「どうかした？ さっきから同じことしか言っていないよ。」

「いや、何でもない。」

ガムルは騒ぐのも馬鹿らしくなり、がっくりと肩を落とした。

（年下のやつに負けてるのか？ 俺は）

ガムルとしてではない自分のプライドが傷ついたのを彼は感じた。

だが、すぐに首を振り負の考えを打ち消し、代わりにあることを口に出した。

「そういえば、リユーガはどこに行ったんだ？」

ガムルの思いつきの質問に、ダンゼルはネジを締めながら口を開いた。

「さあ、いつもふらふら、とどこかに行っているからね。」
「気にならないのか？」

ガムルのその言葉の裏に隠された意味。それを探るためにダンゼルは機械をいじくる手を止め、ガムルの黒い瞳を見つめた。

無言で見つめ合う二人。

言葉ではない視線のみの会話。

先にそれを外したのはダンゼルだった。

「……正直気になるよ。だけど、あの人は、」

「戦死したことになっている、か？」

先を続けたガムルにダンゼルは頷きうつすらと笑みを浮かべた。

「そりゃあ知ってるよね。なんせ……『英雄』だったから。」

「そうだな。」

そうじゃないんだけどな、と心中でぼやきながらもガムルは頷いた。

「ま、多分『駅』で会えるよ。」

語尾を強めたダンゼルは、ガムルにはそう自分に言い聞かせているようにも見えた。

彼らも不安なのだ。団員を纏める団長がふらふらといなくなる。それに不安にならない方がおかしい。

だが、それでも彼らは信じているのだ、彼を。かつて『英雄』と呼ばれた男を。

その真摯な態度にガムルは微笑んでいた。

「『駅』ってさっきの鍵を使う場所か？」

「そういうこと。さっ、彼女たちも来たみたいだし、行こうよ。」

機材を鞆に押し込むとダンゼルは立ち上がる。

歩き出した彼は人垣の向こうにいる女性陣に大きく手を振りながら雑踏の中に姿を消した。

「また会える、か。」

ガムルはそれから視線を外し、何ともなしにまた空を見上げた。

空はあの時と同じ、雲一つない晴天だった。

『また会えるよね！？』

瞼の裏に浮かぶのは懐かしい顔。

「ああ、そうだな。」

「ガムルさくん」

ダンゼルは既に彼女たちに合流したらしく、こちらにまた大きく手を振っているのが見える。

それに軽く振り返しながら、ガムルは新たな仲間たちの元へと歩き出した。

「かつて商業都市として発展してたのに、いまでは寂れてしまったね。」

先ほどまでガムル達がいた街『グロウス』。その中で一番高い塔の上に一人の男が座っていた。

黒いコートに身を包む美形の青年だ。

縁に座り込む彼は、風から守るようにその金髪をなでつけた。

「こうして会うのは何年ぶりかな？」

「三年だ。」

答えたのは、いつの間にか背中合わせに座り込んでいた銀髪の男。

龍牙だった。

「いつこっちに来た？」

「一週間ぐらい前かな。身の寄せどころを見つけてね。」

金に銀、対称的な色を持つ二人からは一種の神々しさが感じられる。

だがその親しげな会話の裏に微かな敵意が蠢いていた。

「そうだ、さっきは悪かったね。僕の追っ手がそっちに流れてしま
って……」

「それより他に謝ることはないのか？ バニット」

リユーガの言葉に、『バニット虚無』と呼ばれた青年はただ肩をすくめて
みせた。

「忘れたとは言わせない。」

「忘れたわけじゃないよ。」

ただ懐かしんでただけさ。」

「ふん。」

鼻を鳴らす龍牙に苦笑し、バニットは立ち上がった。

「本当はもう少し話したかったけど、時間だ。失礼するよ。」

「そうか。」

龍牙は振り返らない。それが彼なりの別れの告げ方だった。

「リユーガ。」

「なんだ？」

背中ごしでも龍牙はバニットが何かためらっているのが分かった。

だが急かさない。それが彼なりの優しさ、そしてかつての相棒に
向ける最大の敬意だった。

少し間を置き、ふう、と息を吐く音の後にバニットは口を開いた。

「君は僕を……恨んでいるかい？」
「ああ。」

バニットは即答されたことに驚きながらも、どこかほっとしたような表情を浮かべた。

「よかった。これで心置きなくやれるよ。」

続いて浮かんだのは晴れやかな笑顔。

「ありがとう。」

また会える日を楽しみにしてるよ。」

そう言い残し、バニットは風の音と共に姿を消した。

背中ですれを感じながら、龍牙は煙草を唇で挟み火をつける。

深く息を吸い、吐き出す。ただそれだけで体中から嫌なものが吐き出されていく気がした。

「また会える、か。」

その言葉にかつての記憶が呼び覚まされていく。

ボロボロの建物の前、もう顔さえ思い出せない誰かに必死で腕を伸ばしている。届かないと分かっているのに、ただ必死に千切れるくらいに伸ばした。

だがやはり届かない。ただその小さい背中が見えなくなっていくばかり。

『また、会えるよね!?』

幼い自分はなぜか泣きながら叫んでいた。

知らない女性に手を引かれていた誰かは振り返り、ただしっかりと頷き返し、何事か叫んでいる。

なんと言っているのか分からない。声は届いているのに理解ができない。

そこで、ふっと龍牙は現実に戻された。

どうやらいつの間にか眠っていたらしい。

龍牙は煙草を押しつぶしてから立ち上がった。

幼い頃の曖昧な記憶。

真実か夢か分からない不完全な思い出。

だが、それを思い出す度に龍牙は何かは抜け落ちていくのを感じていた。

あれは誰だったのだろうか。

分からない。思い出せない。

今まで何度となく繰り返した自問自答を首を軽く降って打ち切る
と、龍牙は塔の上から勢いよく飛び降りた。

駅（前書き）

この世界に英雄は必要なのだろうか

駅

四人は人の多いこの国有数の街道である『ダマスカ通り』を南に進んでいた。

横を雑木林に囲まれた街道はどこか空気が澄んでいるように感じた。

所々にある出店に目を奪われながらも前をいく三人に声をかけた。

「で、どこに向かってるんだ？」

「さっき言った通り『駅』に向かってるんだよ。」

前にいたダンゼルがガムルの横に並びながら答えた。

「どこにあるんだ？」

その質問を察していたらしくダンゼルはすでにその手に地図を持っている。

「これがこの国、『ロザンツ帝国』の地図。で、中心にある帝都から南に伸びる太いこの線がこの『ダマスカ街道』」

東と南が海に面した円に近い領土が刷られた地図。確かにそれにはダンゼルの言った通りのことが書かれていた。

「で、今までいた『グロウス』がここ。」

ガムルが広げる地図に少し背伸びをしながら指したのは、その『
ダマスカ街道』の真ん中の辺りだった。

そこもまた街の印と共に『グロウス』の文字がある。

「で、騎士団が常時警備しているのが次の街『ガルシア』、特にそれといった特徴のないところだよ。

ただ物資の郵送のために馬を替えたりする時に商人が落としていく金で成り立ってるみたい。」

「おいおい、街の事情に一々口出しするなよ。もしその街の人がいたらからま……」

絡まれる、ガムルはそう忠告しようとしたが、遅かった。

「おい兄ちゃん。随分な言いようだな。」

案の定横を歩いていたガラの悪そうな男達が二人を囲んでいた。その数は六人。

「事実を言っただけです、何か？」

額に手を当てるガムルの横で、ダンゼルは水をかけるところか、逆に火に油を注ぎ続けた。

「なんだと？ 口には気をつけるよ、この『クソガキ』が！！」

ダンゼルの肩を掴んだ男の言葉に掴まれた体がピクリと跳ねた。

「『クソガキ』？」

「へ？」

今までと違う雰囲気声色に男たちは揃って戸惑いの色が走る。

「ガムル！！ 早くダンゼルから離れなさい！！」

恐らく異変に気づいたのだろう。リタニアが必死の形相で叫んでいる。

それよりも早く、ガムルはその人の輪から飛び出していた。

ダンゼルの声色が変わった瞬間、彼の中で警鐘が鳴らされていた。「早く逃げろ。」と。

地面を転がりるガムルは、なぜか雑踏で見えないはずのダンゼルの言葉がはつきりと耳に届いていた。

「ブッコロス」

一瞬だった。

ほんの一瞬にしてダンゼルは周りにいた六人を吹き飛ばした。

「・・・・・・・・へ？」

その光景にガムルは一度目をこすった。

だが、その映像は変わらない。

ダンゼルの手に握られている二丁の銃。

だがガムルの耳には銃声が一つだけにしか聞こえなかった。

だがそれは聞き間違いではない。

恐らくその場にいる通行人全員がそう聞こえただろう。

そしてガムルは理解した、それは、常識を遥かに凌駕した神速の連射。つまり、

六発の弾丸を音よりも速く放ったのだ。

どうやらそれは空砲だったようだが、ダンゼルの冥力で強化されているのだろう。

なにが起こったのか理解できないまま、六人は軽々と何メートルも先まで飛ばされ、様々なものに激突していく。

骨の二、三本は逝っているかもしれない。

周りの通行人もまだ何が起こったのか理解できず呆然としている。そんな中、ダンゼルは最初につかみかかってきた男に近付いた。

「ひ、ひい」

おかしな方向に折れ曲がった左腕を押さえながら、男は短く悲鳴を上げる。

そんな男の横にしゃがみこみ、その顎に銃口を突きつけた。

「ねえ、」

浮かんでいるのは悪魔の微笑。

「は、はひ。」

「二度と『クソガキ』なんて言うなよ？」

裏に脅しを込めたその言葉は効果抜群だったようだ。

「はい。はい、二度と言いません。」

首がとれるほど男は頷く。

「そっか、それならいいんだよ。」

それを満足げに見てから、ダンゼルは銃をホルスターにしまい、ガムルの方へと歩き出した。

「ガムルさん、」

「な、なんだ？」

いきなり名前を呼ばれたガムルは、座ったままその肩をビクリと跳ねさせた。

「いや、何もそこまで驚かなくても。
なんで座り込んでるのかな？ って。」

ダンゼルは手を差し出すと、ガムルは恐る恐るといった感じにそ

れを取った。

「さっさと行こうよ。」

今度は先頭を歩き始めたダンゼルを遠い目で見ていたガムルにリタニアが近付いた。

「説明するの忘れてたけどダンゼルの地雷は踏んじゃダメよ。命がいくつあっても足りないから。」

「地雷って？」

リタニアは考え込むように手を顎に当てる。

「主に『ガキ』がつくとアウトね。詳しくは私も分からない。ねえ、調べてみてくれない？」

リタニアは妖艶な笑みを浮かべるが、ガムルは深くため息をついた。

「お前は悪魔か？俺も命は惜しい。」

「ははは、冗談よ。」

肩を落とすガムルの背中をバシッと叩いてからリタニアはフィロを連れ歩き出した。

ガムルは、大声で笑っているリタニアと、その横で顔を紅くするフィロを見てさらに深くため息をついた。

「前途多難だ。」

そう呟かずにはいられなかった。

木に囲まれた『ダマスカ街道』を包む気まずい空気。

それを掻き分けるように四人は進んでいく。

すれ違っていく通行人から向けられる奇異の視線にただ一人ガムルだけが俯いていた。

それもそうだろう。前の三人は何を思ったか、歩きながら自分の武器を整備していたのだ。

その奇怪なそして危険な集団に属したことにガムルは少しばかり後悔していた。

「はあ。」

またため息。五歩あるく度に一度の割合でガムルはため息をつき続けていた。

その間に、俯き、ため息を吐くガムルを置き去りに、三人がなんの前触れもなくその森の中へと入っていった。

その少し後ろを歩いていたガムルもとっさに気づき、足を早めた
が、

「へ？」

ガムルがそこへ入った時には誰一人としてそこにはいなかった。

「あれ？ あいつらどこに……」

首を巡らしながらガムルは薄暗い森の中に一步踏み込んだ時だった。

その瞬間、虚空から現れた何かにガムルの体は引っ張られた。

「うわっ!？」

一瞬視界を青いものが横切ったと思っていると、いつの間にか目の前にリタニアが立っていた。

ガムルは引っ張られた胸元を伸ばしながら自分の立つ場所を確認しようと立ち上がってみる。

そこは先の森などではなく、石などで整備された広場だった。

その脇や地面に様々な武具などを並べた出店が見える。

「ここは？」

「闇市場。」

「簡潔な回答をありがとう。」

事も無げに言っただけのリタニアにガムルはため息をつくしかなかった。

「ほら、さっさと行くわよ。」

「ああ。」

リタニアの先導に従い、二人は人の間を縫っていく。

闇市場というのだから怪しい暗い感じの場所をガムルは予想していたが、実際はその正反対だった。

確かに条例違反してはいるが、広場は明るい笑い声で満ちている。

「闇市場ってどこもこんな感じなのか？」

ガムルにとってこのような場所は初めての体験だった。

その瞳は子供のように輝いている。

「ええ。闇市場と一言で言っても、皇帝のせいであんならざる、またはそこを利用せざるを得なかった人達の集まりだからね。」

それにガムルは納得した。

現ロザンツ帝国皇帝、ノーブルⅡヘイルⅡロザンツ

彼は民に対してかなり高圧的な政治をしていた。

質素儉約を掲げて民に強制しているが、実際、城の中では贅沢三昧というありがちなことをしている皇帝だ。

しかも色々な黒い噂が絶えないことでも知られている。

特に話題に上がるのは彼の即位そのものであったりする。

王族でもない彼がなぜ皇帝になれたのか、国民は揃って首を傾げている。もちろん今もだ。

それこそ私設の調査団まで設立されたほどだった。
だが結局は分らずじまい。

そこまでの情報を引き出し、ガムルはふう、と息を吐いた。

「相変わらずだな、あの皇帝も。」

「あら、会ったことがあるような言い方ね？」

ガムルは意外そうな表情を浮かべるリタニアに少しだけな、と答えてから天を仰いだ。

人だかりのせいか分からないが生ぬるい風が彼の短い黒髪を揺らした。

もうすぐ夏がくる。

そう知らせているように強い日差しが降り注いでいた。

「ガムルさん、遅いですよ。」 他が待っているらしい出店にガムルが入ると、すぐさま非難の声が飛んできた。

出店の一角にあるテーブルを陣取っていた二人によるものだった。

「いや、教えてくれなかったお前らにも責任あるだろ？」
それに負けじと声を張り上げるガムル。

「私達のせいだと？」

だが、にこやかに問いかけてくるフィロに、なぜか全身から暑さとは違った汗が流れていく。

「いや、だからな、」

「わ、た、し、た、ち、のせいですか？」

またものにこやかにフィロに強調され、ガムルはいつの間にか地面に正座していた。

「えっと、だから、その」

「はい。」

「はい！！全面的に俺が悪いです！！調子に乗ってすいませんでした！！」

ついには耐えきれず、ガムルはその頭を地面にこすりつけていた。

十五歳の少女に大の大人が土下座する姿はなんとも異様だった。

ガムルは頭を下げたまま横に佇む二人に視線で援護を要求する。

「うちで一番恐いのは絶対にフィロよね？」

「同感。」

そうぼそぼそと二人は話していたが、フィロの鋭い眼光にその動きを止めた。

「喉乾いたし、私、ジュース買ってこよ。」

「あっ、僕も行くよ。」

ガムルの必死の懇願も虚しく、自分の保身に走った二人は棒読み口調で店内へと消えていった。

それにガムルは、

「薄情者!!」

と叫びたかったが、あまりの威圧感に顔をあげることもすらできない。

「……………以後、迷子にならないように」

「なら最初に目的地とルートを教えて……………」

「迷子にならないように。分かりましたね？」

「はい……………」

発言すら認めてもらえないガムルはただ頷くしかなかった。

鬼だ、とガムルはぼやいた。心の中で。

「さて、そろそろ行きましようか。二人とも行きますよ。」

「へーい。」

「うん。」

芋を揚げたポテトフライとジュースのコップを持ったまま二人は頷いた。

そのお気楽な二人にガムルは殺意を覚えずにはいられなかった。

「次はどこに行くんだ？」

怒りを抑え、ガムルが恐る恐る尋ねると意外にも軽く答えが返ってきた。

「自動屋ですよ。」

「なんだそれ？」

だが、ガムルにはその意味が分からない。

必死に頭の中の辞書を捲っていくが、一つとして引っかからない。

「え？知らないんですか？」

「あ、ああ。」

逆になんて知らないの？、という顔をされたガムルは、その大きな体を縮こまらせた。

「フィロちゃん、仕方ないよ。あれが騎士団に配備されたのは二年前からだから。」

哀れなほどに小さく縮こまったガムルを助けようとダンゼルが追撃を遮った。

「そういえばそうだったかもしれないわね。

まあ、とりあえず行きましょ。

リユーガが待ってるわ。」

それに同調したリタニアもまたフィロの前に立ち遮った。

それに守られたガムルは感謝の目を向けているかと思うと、

「あ、足が――」

もがいていた。

リタニアが口にした龍牙の名前に、ガムルはとっさに立ち上がろうとしたが、ガムルは忘れていたのだ。今まで長時間正座をしていたことを。

それで案の定、小鹿のように足を震わせているのだ。

「助けてく………」

「さっさと行こうか。」

「そうですね。」

「行こう行こう。」

気づいているはずなのに、見向きもせず通り過ぎていく三人。そしてその横顔にうっすらと滲み出ていた笑い。

「薄情者――！！」

それに今度こそガムルは叫んでいた。

また三人に置いていかれたガムルはまだ痺れの残る足を引きずりながら南へと進んでいた。

「自動屋ってどこだ？」

キョロキョロと辺りを見回していると、少し先に地図があるのが目に入った。

これで場所が分かる、と安堵の息を漏らしそうになるが、その間に横たわるものに彼はげっそりとした。

目当てのものは、人の往来の激しい通りの反対にあるのだ。

それに向かって出来るだけ人に当たらないよう進むが、余りの人の多さになかなか辿り着けない。

数分かけて、やっとその前にたどり着いたときには、ガムルはまた汗にまみれていた。

「暑い。それより自動屋、自動屋」

シャツをパタパタと扇ぎながらも掲示板のようなボードに目を落とすと、意外にも簡単に見つけることが出来た。だが、

「広いなー」

地図によると、この市場はどうやら南北に長い長方形の形をとっているようで、その内の南半分をその自動屋というのが占めているのだ。

たどり着いてからまたさまよわなければならないのは明白だった。

「まあ行ってから考えるか。」

とりあえずガムルは一度そう結論づけてからまた南に向けて歩き出した。

出店が連なる市場の中を進むこと三十分。

「やっとついた・・・・・・・・」

人混みにもみくちゃにされながらもガムルはやっとのことで『自動屋』なる場所に到着していた。

「あぢい」

顎の汗を腕で拭いながらガムルは辺りを見回した。

そこはどちらかというところと広場に近く、かなりの奥行きがあるのが分かる。

だが、そこに置かれているものは広場とは程遠いものだった。

「なるほど、だから『自動』屋か。」

ガムルは手前にあった一つに触れてみた。

黒い本体に二つの車輪ボディタイヤ、それは『自動二輪バイク』と呼ばれる乗り物だった。

奥には車輪が前後に2つずついた『自動四輪ビークル』まである。

ガムルは名残惜しげにバイクから手を離し、とりあえず奥へと歩き出した。

そこには市場ほどではないが、かなりの人が行き交っていた。

旅行目的であろう人から始まり、背中に武器を背負った狩人ハンターまで様々な人で溢れている。

右手には横長い建物があり、そこに設置された三つの窓口には行列が出来ていた。

その横の壁に貼られた看板には車種と値段の書かれた表が貼っている。

どうやらここはバイクやカーの売買だけではなく、貸し出しや預かりのようなことをしているようだ。

ガムルはじつくりとバイクをみたいのもまた我慢し、辺りを見回しながら進み始めるが、ふとある一点に目が止まった。

「ん？」

立ち止まるガムルの視線の先にいるのは、少し長めの金髪に青い目をした若い男だった。

なぜか、ガムルの目にはその男が明らかに周りから浮いて見えていた。

それは身につけている季節はずれな黒いコートのせい、ではない。

遠目からでも分かる整った顔立ち。

ガムルはその顔に見覚えがある気がしたのだ。

だが、思い出せない。

その代わりにその男はただ者ではないのが分かった。

自分だけに向けられる圧倒的な存在感が、ガムルの肩に重くのしかかる。

呼吸が乱れる。汗が噴き出す。

その男と視線が絡まったのは一瞬。

殺られる。ガムルはその一瞬で直感的に思った。

だが、男は何をするでもなく、こちらに背を向けると、その先にある壁の中へとけ込んでいった。

物理的に有り得ない所行。

だが、なぜだろう。ガムルは全く驚かなかった。
逆に納得すらしていた。

なぜそのような考えを持ったのか自分でも分からない。

「今の、なんだ？」

「ガムルさくん。こっちこっち。」

ガムルはハッと我に返り、声のする方へ目を向けた。

百メートルほど先でダンゼルが手を振っている。
それを確認してからまたさっきの方向へ視線を向けた。

「・・・・・・・・」

だが、やはり何もない。あるのは日に焼けた灰色の壁だけだ。

首を傾げながら、ガムルは声の方へと歩き出した。

メンバーの元にたどり着いたガムルは、また正座をさせられていた。

「全くあなたという人は……」

その前に仁王立ちする少女。

ガムルはその背中にメラメラと炎が燃えているのが見えた。

「いやいや、フィロちゃん。さすがに今回は僕らが悪いって。」

流石に可哀想と思ったのか、ダンゼルが消火しようと間に入った。

少し沈静化したフィロは、しばらくガムルとダンゼルの顔を見比べていたが、最後には、はあ、と深くため息を吐いた。

「………全く。」

ボソツと呟いた許諾にダンゼルはホッと胸をなで下ろした。だがそれに対し、ガムルは特に反応を示さない。

ガムルはまだ先ほどの青年のことが頭から離れないでいた。

どこかで見たはずと辛い記憶を掘り返していく。

だが、何一つ当たらない。まるで答えをわざわざ避けているような、不思議な感覚。

思考の海に落ちたガムルはただ呆然とその成り行きを見つめていた。

「分かりました。もういいですよ。」
「おう。」

フィロの許しを得て、思考を断ち切ったガムルはゆっくりと立ち上がった。

念のため、足首などを回してみるが特に問題はない。

「で、これを受け取りに来たのか？」

「うん、まあね。」

これがないと不便なんだよ、色々と。」

「そうか。」

ガムルは目の前の白いビークルに触れた。

それは他に置いてあるものを二つ繋げたぐらいの大きさで、どうやら中にはキッチンやベッドなどもあるようだ。

「あれ？ リューガは？」

「もうすぐ……あつ、来たみたいだよ。」

ダンゼルの示す方へ目を向けると、黒塗りのバイクが丁度こちらに走ってくるのが見えた。

横幅のある、狼のような猛々しさを感じさせる黒いボディに、ビークルで使うような大きめのタイヤ。

一目見ただけでかなり改造カスタマイズされているのが分かる。

そんなバイクから降りた龍牙は四人を見回した。

「すまない。待たせたか。」

「いや、今、ガムルが来たところよ、リユーガ。」
「そうか。」

相づちを打ちながら龍牙はサングラスを外した。

その下から現れるのはやはり紅い瞳。

それにガムルは無意識に唾を呑み込んでいた。

「とりあえず出発しよう。早めに出ないと約束に遅れるよ。」

ダンゼルの言葉に頷き、龍牙はサングラスをかけ直しながらバイクにまたがった。

「じゃあ、行くとしますか。」

「はい。行きましょう。」

その四人の楽しげな打ち解けた者同士のみで出来るやりとりにより、ガムルは逃げるように無言でビークルに乗り込んだ。

「・・・・・・」

「あれ？ ガムルさん、どうしたのかな？」

龍牙の視線に気づいたダンゼルは小さく首を傾げた。

「さっきまであんなに、リユーガは？ って聞いてたから話でもあるのかと思ってただけど・・・・・・」
リユーガさん？」

じっと車体を見つめていた龍牙は軽く肩をすくめてみせた。

「いや、なんでもない。」

もう一度チラリとガムルの乗ったビークルを見てから、バイクに差し込んだキーを回し、起動させた。

燃料である『重灯石』から得たエネルギーでピストンを動かす、独特の音が辺りに響く。

「先に行く。」

「了解。」

頷くリタニア。

「気をつけて、リ्यूガ。」

「ああ。」

フィロの言葉に小さく頷いてから、龍牙は勢いよく『自動屋』を飛び出していく。

それを見送ってから、リタニアは大きく伸びをした。

「私達もちゃっちゃと行きますか。」

お互いに頷いてから三人はビークルに乗り込んだ。

その頃、ガムルはビークルの後ろの方にあるソファに横たわっていた。

その表情は、暗い。

「なんで逃げてきたんだろ、俺。」

それは龍牙に話しかけられなかった自分に対する嫌悪。

「あれだけ話したいと思ってたのにな……」

胸元にある指輪に視線を落とした。

自分で自分が分からない。

三人と話している時の龍牙を見て、ガムルはどうにも声をかけられなかったのだ。

またため息をついていると、ガムルの顔に影が差した。

「ガムル。ちょっといい？」

「リタニアか……何か用か？」

「まあね。」

軽く返し、服の中にそっと指輪をしまいながらガムルの横にリタニアが腰を下ろした。

「なんでリユーガと話さなかったの？」

「特に理由はない。」

いきなりの核心をつく問いにガムルはぶっきらぼうに答えた。

「へえ？ とてもそうには見えないけど？」

意地悪そうに笑みを浮かべるリタニアから視線を外し、ガムルは窓の外を見た。

いつの間にか車体は動き出していたようで、幾つものビークルやバイクが来ては流れていく。

川みたいだな、とガムルはらしくない感想を抱いた。

来ては過ぎていく。その場に止まろうとすれば流されるだろう。だから全力で抗ってみる。自分が求める場所に向かうために。

「どうだっていいだろ。」

「つれないなー」

からかうようにニヤニヤと笑う彼女に、ガムルはいつもなら感じるはずの腹立たしさを感じないでいた。

たった一つ、考え方を変えるだけで心境が変わることに彼自身驚いていた。

「ふん。何が言いたい？」

「別に。ただ、なんかため込んでるみたいだからさ。」

いきなり真面目な表情になったリタニアにガムルは狐につままれた気分だった。

「あまり無理しないでいいんじゃない？ 私達、もう仲間ともでしょ？」

リタニアはまたガムルに笑いかけた。今度は全く負が混ざっていない純粹な笑顔で。

リタニアはもっとクールで冷徹な感じだと気を張っていたが、どうやらそれは徒労だったようだ。

何年もの間、かけられなかった言葉に、ガムルは自分の心を覆う鎧が一つ外れた気がした。

「お前って、そんな顔できたんだな……」

不覚にも見とれてしまったガムルは知らず知らず呟いていた。

それほどまでにその横顔は美しかった。

「何かいった？」

「っ、いや、なんでもない。」

見とれていた顔を急に向けられて、また視線を窓の外に戻した。

それからしばらく、ガムルはリタニアを直視できなかったことを彼が明かすことはなかった。

近い存在（前書き）

近くて遠い存在

近い存在

太陽が真上から少し傾き始めた頃、一行を乗せたビークルは草原を駆け抜けていた。

「これで『フリーリーズ』まで行くのか？」

「うん。一応、三日後の正午に着く予定だよ。」

余り身長の高くないダンゼルが運転席でガチャガチャと操作している姿に、ガムルの肩は自然と震えていた。

吹き出ようとする笑いをなんとかこらえようと口に腕を当てる。

「なにがおかしいのかな？」

だが、ガムルがそれに必死になっている間に、そのダンゼルは振り返っていた。

「いや、なにも。」

笑顔だが、その目がガムルの未来を物語っている。

その無言の圧力にガムルは固まったまま首を横に振るしかできなかった。

「ふーん。そうなんだ。へー。」

明らかに好感度が急降下している。そう感づいたガムルは即座にその場に正座した。

「すみませんでした!!」

今日、俺何回謝った?、とぼやきたかったが命には変えられない。

ガムルは本日、三度目の土下座を繰り出した。

「全く、もういいよ。だけど次言ったら、」

「次言ったら?」

ガムルが気づいた時には、額に硬いモノが当てられていた。

全身の毛穴という毛穴から汗が噴き出しているのが分かる。

「風穴、開けるよ?」

「・・・・・・ここではそれが流行なのか?」

「さあね。」

銃をホルスターにしまいながら、ダンゼルはまた運転席に戻っていった。

誰も運転してなかったのか? とつつこむ余裕もなく、ガムルはへたり込んだ。

恐い。それがガムルの率直な感想だった。

太陽が真上から少し傾き始めた頃、一行を乗せたビークルは草原を駆け抜けていた。

「これで『フリーズ』まで行くのか?」

「うん。一応、三日後の正午に着く予定だよ。」

余り身長の高くないダンゼルが運転席でガチャガチャと操作している姿に、ガムルの肩は自然と震えていた。

吹き出ようとする笑いをなんとかこらえようと口に腕を当てる。

「なにがおかしいのかな？」

だが、ガムルがそれに必死になっている間に、そのダンゼルは振り返っていた。

「いや、なにも。」

笑顔だが、その目がガムルの未来を物語っている。

その無言の圧力にガムルは固まったまま首を横に振るしかできなかった。

「ふーん。そうなんだ。へー。」

明らかに好感度が急降下している。そう感じたガムルは即座にその場に正座した。

「すいませんでした!!」

今日、俺何回謝った？、とぼやきたかったが命には変えられない。

ガムルは本日、三度目の土下座を繰り出した。

「全く、もういいよ。だけど次言ったら、」

「次言ったら？」

ガムルが気づいた時には、額に硬いモノが当てられていた。

全身の毛穴という毛穴から汗が噴き出しているのが分かる。

「風穴、開けるよ？」

「……ここではそれが流行なのか？」

「さあね。」

銃をホルスターにしまいながら、ダンゼルはまた運転席に戻っていった。

誰も運転してなかったのか？ とつつこむ余裕もなく、ガムルはへたり込んだ。

怖い。それがガムルの率直な感想だった。

「大変なんだな。」

「ま、慣れればそんなことないわよ。意外とスリルがあって楽しいしね。」

「お前、絶対後半が本音だよな。」

呆れながらもガムルは細かく波打つ水面に目を落とした。

中身は黒い色をした珈琲コーヒーのようだ。

恐る恐るカップに口をつけ、少し傾ける。

香りと共に口の中に広がる味は、思っていた以上に苦かった。

太陽が山の向こうへ姿を消しかけてきたころ、一行は草原を抜けた先にある森の中程にいた。

「このペースなら予定より早く着きそうね。」

燃え盛る火の前でリタニアは地図を広げた。

ビークルの横でテントの杭を打ち終えたガムルは額の汗を拭いながら、その地図を覗き込んだ。

「今、どのあたりなんだ？」

ガムルの問いにリタニアが綺麗な指である一点を差した。

「今日一日でこの『ザファイラ草原』を抜けて、今はこの『タスピカの森』の真ん中ね。」

「もうこんなところまで来たのか。これなら本当に明日には着きそうだな。」

カサッ

そこでふとガムルは茂みの方を振り返った。

「どうかした？」

「いや、なんでもない。」

「そっ。じゃ、あたしはもう寝るから。」

ひらひらと手を振るリタニアの姿がビークルの中に消えるのを確認してからガムルは茂みに振り返った。

「いい加減出てこいよ。いるんだろ？」

ガムルの声が闇に消えてから、一分、二分と沈黙が辺りを支配する。

そして三分目、その茂みからため息と共に人の気配が現れた。

ガムルは目を細め、木の陰からゆっくりと、焦らすように出てくる人物を見据える。

「まさか気づかれるとは思ってませんでした。どうやってお気づきに？」

それは全身を黒いスーツに包み、同じく黒いシルクハットを被った男だった。そのシルクハットの下にあるのは白髪に恐ろしいほどに白い肌。

その違和感の塊に顔をしかめながらガムルは口を開いた。

「お前のいる木の周りだけ鳥が全くいなかった、それだけだ。この森の鳥達は臆病で有名だからな。」

「なるほど。動物に感づかれないぐらい気配を消さなくてはならない、か。勉強になりました。」

男は、黒いジャケットの内側から取り出した冊子に差しであったペンで何事か書き始める。

止まらないペンの動きにしびれを切らしたガムルが一步詰め寄った。

「で、俺達に何のようだ？」

「あ、そうでした、そうでした。」

ポンと手を打ち、冊子を内側にしまうと反対から書類を取り出した。

「これを。」

ガムルは訝しげな顔をしながらも差し出してきたそれを受け取った。

「意外と素直に受け取るんですね。」

「ふん。これに罠なんかを仕込むんだったら食料に毒でも混ぜた方がよっぽど効率的だろ？」

「確かに。」

ガムルの言葉に頷き、男はまたあの手帳に何事か書き込む。

ガムルはそれに何が書かれているのか気になったが、それよりも訊きたいことがあった。

「で、これはどういうことだ？」

ガムルは右手に持つ紙をひらひらさせる。
その顔は明らかに不機嫌だった。

「その紙面に書いてある通りですよ。」

「また『秦国』を攻める気なのか？」

今いる『ロザンツ帝国』がある『ユーロピア大陸』にはこの国を含め三つの国がある。

一つは、大陸の北半分を支配する工業で有名な『ラグレイト帝国』、もう一つは西側を支配する豊富な地下資源を売りにする『秦国』。

『ロザンツ帝国』は度々『秦国』との交易を持ちかけていたが、失敗に終わっていた。

それもそのはず。『ロザンツ帝国』は交易をさせるだけのメリツトを提示できなかったのだ。

そこで貿易を断念したこの国は、何度も何度も資源が豊富な『秦国』を奪おうと攻め込んだ。

だが、その度に『秦国』に撃退されていた、秦国は無傷のまま。

『ロザンツ帝国』は、いや、皇帝はまたその不毛な戦いを始めようとしているのだ。

「あいつらには勝てない。」

ガムルは唇を噛み締めた。

「なぜですか？」

「奴らの強みは切り立った崖や急勾配な山々などの大軍が攻め込みにくい地形。後、その『力』にある。」

「ほう。経験者は言うことが違いますね。」

ニヤリと不敵に笑う男にガムルは殺気に満ちた視線を向ける。

「おっと、言葉がすぎました。」

「で、これを俺に教えてどうしろと？」

全く『掴めない』男をガムルは探るような目で見た。

しかし男は一向にその態度を崩さない。

「あなたもご存知でしょう？ 貴族の中にも今の皇帝のやり方に不満を持つ方がおられることを。」

「汚れ役をやれと？」

「ご名答。」

ガムルはそこまで言って手に持つ紙に目を落とした。

そこに書かれていたのは、皇帝を殺してくれという依頼の文字と莫大な報酬を示す数字だった。

「なぜこれを俺に？」

ガムルは紙を揺らしながら問いかけるが、その問いを待っていたかのように男はさらに口元を歪めた。

「あなたが最も龍牙ⅡFⅡエスぺラントに近い存在だと記憶していたんですが？」

その言葉にガムルは一度ハッとした後、傍らに置いていたバトル

アックスを構えた。

「お前……どこまで知っている」

「さあ？」

おちゃらけてみせる男の顔が一瞬固まった。

「答えろ。」

予想外の方向から飛んできた声に振り返ろうとするが、動けない。先まで男と対峙していたはずのガムルがその首に巨大な刃を当てていたのだ。

「お速いですね。」

だが、男は元の表情に戻りやれやれと首を振った。その動きには、どこか余裕が感じられた。

「吐け。」

しかし、現状は圧倒的にガムルの優位。援軍でもない限りこの優位は崩れない、ハズだった。

「ですが、まだ詰めが甘いようだ。」

「何を……っ!？」

とっさに後ろへ飛び退くが、その胸を何かが浅く切り裂いた。

ガムルの胸元には横一直線に赤い筋が現れていた。その端から赤い滴が滴っていく。

一度その傷口を見てから、ガムルは男の方へと目を移した。

その男は、人形のように蹴りを放った体勢で固まっていた。

よく見ると、その持ち上げたままの左足の踵に小さな刃物が顔を覗かせている。

だがその刃物以上にガムルは背中に冷や汗が流れるのを感じた。

（見えなかった・・・・・・・・）

初動どころか途中の動きすら全くガムルは捉えることができなかった。

（いくら実戦を離れたからって、そんなに・・・・・・・・）

思考を始めようとしたガムルは黙り込む口を無理やり開いた。

今重要なのは、どれだけ情報を集められるか。ガムルはそれを理解していた。

「・・・・・・・・暗器か。やっぱりお前『タツ謀報機関』の人間だな。」

動揺してはさらに吞まれ、主導権を握られる。

ガムルは出来るだけ普通を装った。

「ご名答。で、お返事を戴きたいのですが？」

ズレた帽子を被り直しながら、男はまたあの不敵な笑みを浮かべた。

「断る。」

しかしこの状況でもガムルは冷静だった。

「ふむ。分かってはいましたが、なぜですか？
悪い話ではないと思いますがね？」

ガムルはふと紙面に書かれていた数字を思い出しそうになるが、
なんとかそれを押しとどめる。

「その貴族すら俺達の敵だ。考えるまでもない。」
はつきりと言い切るガムルに男はあからさまに顔をしかめてみせた。

「そうですか。」

もしかしたらそれは彼の本当の感情なのかもしれない。帽子の端
で顔を隠しながら男はガムルに背を向けた。

「ちなみに宣戦布告は一年後のようですよ。」

背中越しに与えられる情報。それは今、ガムルが最も欲していた
ものだった。

「なぜそれを教える？」

「さあ？ あなたの劇的な再会を祝ってということでしょうかね？」
「お前・・・・・・・・」

男は何か思い出したのかピタッと足を止め振り返った。

「そういえば、申し遅れました。」

帽子を取り、その白髪を外気にさらしながら、恭しく一礼。

「私の名はフォーメル。以後、お見知りおきを。」

ガムルが歯を剥き出しにして睨んでみると、二人の間を突風が駆け抜けた。

「では、ご機嫌よう。」

ガムルが目を庇っていた腕を外した時には、もうそこには誰もいなかった。

「で、何してたのよ？」

翌朝、案の定ガムルはリタニアに捕まり、昨夜のことを尋問されていた。

「狐がいたんだよ、狐。」

「狐にこんなところを切られる？」

リタニアが指差したのは昨夜フォーメルに切り裂かれた胸元。

傷はもう跡形もなく治っていたが、流石にその服まで元に戻る訳がなく、ぱっくりと口を開いていた。

ガムルはフォーメルを張り倒したいという気持ちが湧き上がってくるのをなんとか抑え、またリタニアが用意してくれたカップに口をつけた。

「ウマいな。」

「ありがとう。じゃなくて……もういいや。」

リタニアは諦めたのか、窓の前に置かれたソファにもたれかかり、流れる景色に目を移した。

それを見て少し罪悪感を感じながらもガムルは黙り込んだ。

口が裂けても話す訳にはいかなかった。

それは自分の過去を暴かれる、悪ければこの『銀翼旅団』の信頼を裏切ることになる。

まだそれは早い、そう判断したからこそガムルは沈黙を、自分一人で悩み苦しむ道を選んだ。

そんな重苦しい空気を放つ二人を載せたビークルは、森の中を南へ走っていた。

森の中とはいっても、昔は馬車などが通っていた道のため、それほど激しい揺れはない。

ガムルもカップに口をつけながらリタニアにならい、彼女と反対の窓から外へ目を向けた。

天気は曇り。それも今にも降り出しそうな暗い、嫌な雲だ。

ガムルは一度それから目を離し、中を見回した。

奥に二段ベッドを横に置き、その前に自分達が座るソファ、そこと操縦席の間に簡易キッチンとトイレと風呂がある。

龍牙に会わなければ、恐らく一生目にできなかった光景。

自分の生活の変わりようをしみじみと感じながら、ガムルはまた外を見た。

暗い雲と鬱蒼と生い茂る森。それはガムルに何とも言えない胸のざわめきを感じさせた。

何かが起こる。

そう思ったのは昨日出会ったフォーメルのせいかもしれない。

だが、嘗て死地で戦っていたガムルは知っていた、この予感はず当たると。

直後、ビークルは激しく横に揺れ始めた。

「っ、なんだ？」

揺れが収まるとガムルとリタニアは急いで、運転席へと向かった。そして見た。この場にあるべきではないものを。

「なんだよ、それ。」

運転席の前、そこにあったのはでこぼこした円柱状の物体。しかも、なぜかぐねぐねと動いている。

その向こうには粉々に砕かれた馬車の残骸と、一本だけ、馬の足が転がっていた。

その惨状に目を奪われている間にも、それは大きく体を反らし、その先端を運転席に突き出してきた。

「俺達はどれだけついてないんだよ・・・・・・・・・・」

そこにあっていたのは糸を引きながら何重にも鋭い歯だった。

その予想外の出現に、リタニアはぼそりとその名を紡いだ。

「『砂漠の大食漢』・・・・・・・・・・」

「サンドワームって、確か北の砂漠の辺りに生息しているはずだろ！？　なんでこんなところに・・・・・・・・・・」

「私だって分からないわよ！！　とりあえず、一時退却！！」

リタニアの言葉を合図に、ビークルは全速力で後ろ向きに走り出す。

一瞬遅れて、目の前にサンドワームの頭が打ちつけられた。

その質量を示すかのように、その頭部が地面に深くめり込む。

それを引き抜いている間に、ビークルはなんとか距離を稼いだ。

甲高いブレーキ音と共に止まったカーから飛び降りたガムルは、改めてそれを見上げた。

その体は、宮殿の塔とそう大差はなかった。

裕に二十メートルはあろう巨体が、まるで天を支えるかのように真っ直ぐに伸びているのだ。

「さすが『変異種』^{ヴァリアント}ね。」

そこにビークルからリタニアが降りてきた。

この世界には様々な姿形をした生物がいる。

人々はそれを総称して『人ならざる者』^{モンスター}と呼び、時にはそれを狩って食用としたり、家畜として、或いはペットとして所有したりするなど、様々な扱いをしている。

だが、当然のように、中にはどうしようもなく狂暴な、或いは巨大なものも存在する。

それらを人々は、『変異種』^{ヴァリアント}と呼ぶのだ。

「で、なんで砂漠にいるはずのこいつがこんなところにいるんだよ。」

「
そうばやくガムルの横に、不機嫌そうなりタニアが並んだ。

その後ろにフィロもいることから、どうやらダンゼル以外全員参戦するらしい。

「分からないわよ。だけど、一つだけ分かることがあるわ。」
「なんだ？」

そう尋ね返すが、地面を割りながらこちらに向かってくるサンドワームから目を離さない、いや、離せない。

「殺す気満々ってことがね。」

そして三人に向けてその巨大な頭部が降り降ろされた。

それを合図に、迫り来る無数の牙を三人は別々の方向へ跳んだ。

派手な破碎音と爆風に、リタニアの体は一瞬バランスを崩すが、すぐさま立て直し、着地と同時に駆け出した。

バキバキという地面を噛み砕く音に、背筋が凍るのを感じた。
もしあれを喰らえば、という考えが一瞬脳裏をよぎる。

『人ならざる者』との戦闘は、対人戦とは全くの別物である。

人は何かしら考えてから行動するが、『人ならざる者』達の行動には全くと言っていいほど思考がない。

ただそれを聞くと楽なように聞こえる、だが実際は逆だ。

考えない、それは人間が持つ思考から行動へという過程を飛ばしているということ。

つまり、それだけ反応が早くなるのだ。

それを理解しているからこそ、バランスを崩してもリタニアは動きを絶対に止めない。

攻撃を避けながら、彼女は腰から『機械剣』を引き抜いた。

「『展開』」

それを合図に、その銀色の棒は輝きだし光を纏ったままその形を変えていく。

そして、駆ける彼女の手にはあの弓が握られていた。

それが完了するまで、時間にして一秒。

その短時間で現れた白い大きな弓をリタニアはしっかりと握ると、走りながら弦を引き、放った。

ただ一度しか引いていないその弓からは、水の奔流のように矢が放たれていく。

そしてそれらは寸分変わらず円柱状の体を捉えた。

『フブオオオオ!!』

角笛のような低い叫びを上げながら、サンドワームはその長い体をぐねぐねとくねらせる。

だが、その反応とは裏腹に、その体には目立った外傷がない。

『ブオオオオオ』

天に向かって吼えると、その頭部をある一人に向けた。

その先にいたのは、

「俺かよ!?!」

悲鳴に近い情けない声を上げながら、ガムルは迫り来る巨大な口をすれすれでかわした。

「おらっ!!」

まだめり込んでいるその頭に、ガムルは思いっきり斧を振り下ろした。

それは容易く頭部にめり込み、辺りに緑色の液体が飛び散る。

だが半ばまで刺さったところで、ガムルはそれを引き抜き、すぐさま飛び退く。

「っ!？」

その鼻の先を掠めるように、また巨体が持ち上げられていく。

ガムルは立ち上がり喉を鳴らすそれに、目を見開いた。

たった今、彼が刻んだ傷が、気泡に包まれ、治癒していくのだ。

ガムルが呆然と見ていた数秒、たった数秒でその傷は完璧に塞がっていた。

「『超速再生』持ちか。面倒ね。」

弦を引きながらリタニアはぼやいた。

「援護します。」

その横にはいつの間にかフィロが並んでいる。

「フィロが出たら私がすることがなくなるんだけど?」

チラリと見ながら言うリタニアの言葉を黙殺し、フィロは何もないはずの空間を右手で撫でた。

その華奢な手が触れた部分から異変は起こる。

絵の具を水に落としたように赤が大気に染み渡ってゆくのだ。

それは徐々にまとまり始め、ある形、血まみれの牙を彷彿させる

真紅の槍へと変化していた。

それは蔓のように三本が絡まり、先端は牙のように鋭利なのが見て取れる。

「ガムルー。戻って来なさい。」

「はあ？」

かわしたサンドワームの頭に向けて斧を振り降ろしながら、ガムルは意味が分からない、という声を上げた。

「ほら、早くしないと、」

「『補足』」

その間にフィロは一度その鋭い牙とも言える槍を祈りを捧げるように胸に抱え、刃とは逆にある石突いしづきを地面に打ちつけた。

そこを中心に、赤い円形の術式が彼女を守るように展開される。

「死ぬわよ。」

「またそれかよ!! くそっ。」

悪態づきながらガムルは迫り来るサンドワームに背を向け、リタニアの方へ駆け出した。

後ろでまたガリガリと背筋の凍るような音がするが、ガムルは足を止めない。

前回でガムルは学んでいた、この忠告を聞かなければ本当に死ぬ、と。

必死に走るガムルに対し、リタニアは名残惜しそうに弓を元の筒状に戻した。

「あーあ、終わった。これ以上、私何もできないわね。」

「そんな余裕っ、で大丈夫なのかつ!？」

突き出された大きな口による噛みつきをギリギリでかわし、ガムルはリタニアの横に転がりこんだ。

「ええ。まあ見てなさい。」

十階梯は………伊達じゃないわよ。」

諦めの混じった声。

それを見上げてから、ガムルは唯一戦闘体勢に入っている少女へと目を移した。

標的を変え迫ってくるサンドワームを平然と見据える彼女は、怖じ気づくことなくただ平然と告げた。

「燃え散れ。」

その断罪の瞬間⁰⁴¹⁷を。

フィロの声に反応し、盾のようにその前にもう一つ術式が展開。

そして、その中心が膨らんだかと思うと、刹那、真紅の線が吐き出された。

「うおっ!？」

凄まじい熱気と共に吐き出されたそれは、木の葉を焼き、大地を溶かし、そして直立するサンドワームの巨体を貫いた。

それは瞬殺、という言葉が相応しい早業だった。

「・・・・・・・・」

ガムルは何も言えず、ただ魚のように跳ね回るその頭部を見ていた。

フィロの攻撃に呆気にとられたわけではない。

胴と切り離されてもまだ生きているその生命力にあきれていたのだ。

「スゴいな・・・・・・・・」

「まだよ。」

感嘆の声を零すとそれをリタニアが遮った。

彼女は何やら通信機を手誰かに話しかけている。

「ダンゼル？ 本体は？」

『北西に五百、そこから百ぐらい。今動き出したよ。』

その黒い機体からは、くぐもっているがまだ少し高い少年の声が洩れていた。

リタニアは二、三事会話を交わしてからそれをボタンのついた胸ポケットにしまった。

ガムルはその会話を終始聞いていたが、

「何の話だ？」

全く話が掴めないでいた。

期待の眼差しを向けてはみるが、リタニアは何も応えず、その顔をもう一人の方へと向けた。

「フィロ？」

「聞こえてます。」

未だに分からないガムルに対し、この二人は何か理解しているようだ。

フィロは槍を数回地面に打ちつけてから両手で構えなおした。

それを確認したリタニアもまた機械剣を取り出す。

ただ一人取り残されたガムルは何が何だか分からないまま、とり

あえず斧を両手で構えていた。

何が起こるのか、何とも言えない不安に、ガムルは忙しなく辺りを見回し続ける。

「ん？」

そこでガムルは一瞬足下に違和感を感じた。

そこにあるのは、何の変哲もないどこにでもある普通の石。

だが、なぜかそれは小刻みに揺れていた。

「なんで……うっ!？」

ズン

突如起こった体の中を突き上げるような縦揺れ。

それは足下の小石を跳ねさせ、ガムルに膝をつかせた。

「来たわね。」

立て続けにくる衝撃の中、リタニアだけは平然と立ち、地面を睨みつけていた。

ガムルも屈んだままそこへ目を向けるが、何もない。

しかし、リタニアはその一点から目をそらさない。

まるでその奥に何かがいるかのように。

『来た!!』

「ふっ。」

突如響いたダンゼルの合図に、一点を睨んでいたリタニアは大きく上へ飛び上がり、

先ほどまで彼女がいた地面が吹き飛ばされた。

そこだけではない。

その辺り一帯の地面が根こそぎもっていかれていた。

冥力によって強化されたリタニアの跳躍は、通常では届かない遙か上空まで彼女の体を持ち上げていく。

飛んでくる岩を身を捻ってかわしながら、未だ上昇を続けるリタニアは『それ』を見下ろした。

地底から浮き上がってくる、茶色い物体。

半球状のそれは、網のように縦横に線が走り、表面が盛り上がっている。

一目でその強固さが分かる外形だ。

そこまで見たところでリタニアの体は重力に絡めとられ、静止。

落下を始めた。

その高さは地上から数十メートルはあるだろうか。

だが、彼女の体が急落下することはなかった。

「『浮床』^{フロア}」

その横で同じく落下をしているフィロが緑色の術式を展開したのだ。

その術式が消えると同時に、二人の落下速度が緩まっていく。

「相変わらず便利な術式ね。」

雲のように浮いているような不思議な感覚。それを楽しみながら、リタニアは横を向いた。

しかし、それを発動した本人はなぜか不満そうだった。

リタニアが問いかけるよりも早く、緑色に変わった槍に腰かけたままフィロはある一点を指差した。

「それより『あれ』どうしますか？」

「ん？・・・あぁ。」

ゆっくりと少しずつ下降する二人はそこに呆れたような視線を向けた。

「おい！！　これなんなんだよ！？」

だが、それを向けられている本人はその視線に気付いていないようだ。

年甲斐もなく茶色い物体の上で叫び、跳び、地団太を踏んでいる。

「まさか、あの突き上げをくらってピンピンしてるとはね。」

「恐ろしいまでの頑丈さです。」

「全くね。」

喚くガムルに今度は憐れみの視線を送ってから二人は全体を見回した。

直径百メートルはあろうかという半球状の甲羅。

その下からは先ほど千切られたのと同じ筒が四本、新たに出現していた。

どうやらあの筒はこの物体の一部だったようだ。

「触手が五本。まだ『幼体』ようたいみたいね。」

リタニアの意見にフィロは頷く。

「ええ。思ったほど大きくもないみたいですし。」

ガムルがこの場にいれば、恐らくその言葉に呆氣にとられているであろう。

だがリタニアもまたさも当然のように頷いた。

「一気にけりをつける？」

「そうしましょう。じゃあ、リタニアさんはあれの救出をお願いします。」

私はそれが完了すると同時に起爆するので。」

「了解。一応援護よろしく。」

リタニアがフィロと軽く拳を触れさせると、彼女の体はガクンとその落下速度を速めた。

それを待っていたとばかりに四本の筒が吼える。

「煩いわね。」

その耳障りな音に顔をしかめながらもリタニアは右手で弦を引き絞り、放った。

冥力によって作り出された純白の矢が一直線に飛んでいく。

それは彼女に迫る四本の内の一本を貫通。大きな穴を穿った。

『ウボオオオオオアア』

激痛に残りの三本が絶叫し、穴の開いた一本は声ではなく緑色の血液を飛び散らした。

それでもそこは流石『人ならざるもの』というべきか、それだけの損傷を受けてもその触手は攻撃を緩めなかった。

緑の軌跡を残しながら繰り出される横殴りの攻撃。

常人が受ければ四肢がバラバラになるだろう。

だが空中にいるリタニアはそれに対し、空気抵抗を減らすことでその速度を速めた。

だが、あまりにも遅すぎた。

それで避けられるわけもなく、その触手が容赦なく彼女に打ちつけられた、

「危なっ・・・・・・・・え？」

それを下から見ていたガムルはだらしなく口を開けた。

それもそのはず。

あの攻撃を食らったはずのリタニアが『まだ落下し続けている』のだから。

当のリタニアは落下を続ける体に纏わりつく緑の液体に顔をしかめながらも、次の行動を考えていた。

通常、空中で移動などできない。

だからこそ彼女は開けたのだ、自分自身が通る『突破口』を。

彼女自身が作り出した肉のトンネル。

そこを通り抜けることでその攻撃をかわしきったのだ。

それでも危険は過ぎ去ってはいない。

彼女の体はすでに地面まで後数メートルというところまで来ている。

だがリタニアはまだ冷静だった。

彼女はもう一度、今度は下にある甲羅に向けて引き絞っていた矢を放った。

膨大な冥力を纏った純白の矢は、茶色の甲羅に突き刺さり爆発。肉が焼け焦げる臭いと共に爆風が巻き起こる。

『ウオオオオオオオ!!』

残った三本から悲痛なうめき声が吐き出される。

その間にも、噴き出された爆風は、それを起こしたりタニアを押し返そうと上空へと吹き上げていく。

それを全身で受け止めたリタニアは落下速度を緩め、静かに甲羅の上に着地した。

「よし。」

一度足場を確認してから大穴が開いている部分を飛び越え、彼女はガムルの方へと踏み出した、

「ガムル!!　っ!?!」

だがその最初の一步からそれ以上前へ進むことはなかった。

「カハッ」

一瞬腹部に感じた痛み。

肺から空気が全て吐き出され、痛みの代わりに腹部に熱が走る。

熱い。

リタニアは少しずつ全身に熱が回っていくのが分かった。

意識が、朦朧とする。

揺れる視界の中、その先にいる仲間のリタニアは手を伸ばした。

だがその手が届くよりも早く、リタニアの意識は熱に吸われるように薄れていった。

「リタニア！！」

リタニアの悲鳴にガムルは駆け寄ろうとするが、その踏み出した足ですぐさま後ろへ飛んだ。

飛び退く彼の横を凄まじい速さで何かが伸びていく。

目の前で舞う数本の髪の毛に舌打ちをこぼしながら空中で一回転、甲羅の上を滑った。

そこはリタニアとは正反対の方向だが、そう言っていられるほどの余裕は今のガムルにはなかった。

斧を手に、なんとかリタニアの元へ走ろうとするが、それもまた目の前に突如現れたものに遮られる。

「くそっ。」

頬に走る鋭い痛みで顔をひきつらせ、それを睨んだ。

それは無数に並ぶ針の束だった。

数え切れないほどの本数に加え、その一本一本が既に人の丈程もある、規格外の大きさ。

ガムルは斧を叩きつけてみるが、予想通り弾かれ、鈍い衝撃が腕を突き抜けた。

ガムルは仕方なく、また同じ場所、甲羅の中心へと舞い戻った。

「くそっ」

その顔には焦りしかない。

ここからは見えないが、ガムルは確かにリタニアが倒れるのを目撃していた。

「くそっ」

早くリタニアのところへ、と気持ちばかりが急ぎ、また焦りを引き起こす。

その体は負の連鎖に絡めとられていた。

今のガムルにはリタニアまでの数十メートルが、とてつもなく遠

い場所に思えた。

焦る気持ちをなんとか抑え、少しずつだが確実に思考を巡らせていく。

（考えろ、考えるんだ……ん？）

そこでガムルはある違和感を覚えた。

数メートル先ではまだ針が剣山のように突き出されたまま残っている。

なら甲羅から針を出せるのになぜ『ここを攻撃しないのだろう』か。

その小さな疑問からガムルはさらに思考を深めていく。

『攻撃しない』のではなくて、『できない』。
なぜか。

「ここにすることが分からないから………なるほど、そういうことか。」

ガムルは愛用の巨大な斧を盾のように体の前に立て、走り出した。

しばらく進むとまた同じように針が突き出される。

それを斧で受け止め、飛び退くと、今度はまた別の方向へと走り始めた。

何度それを繰り返しただろうか。また元の場所まで戻されたガムルは構えた斧を下ろした。

その体には生々しい裂傷が至る所にあり、少くない量の血が流れている。

しかしその顔に浮かぶのは笑み。勝利を確信した笑み。

「見えたぞ、このデカブツ。」

ガムルは腰に手を回し、何かを手にとるとそれを遠くへ放り投げた。

投げ出された白い球体はしばらく空中をさまよっていたが、突然それから煙が吹き出した。

その破裂と同時にガムルはそれと逆、つまりリタニアの方へと走り出した。

斧を構えず彼自身の出せる全速力で走る。

そして徐々にあの針のあった場所へと近づいていた。

そう『あった』場所に。

今は何も遮るものがないそこを、ガムルは全速力のまま走り抜けた。

後ろをチラリと見ると煙のところで、あの大針が何度も突き出されているのが見える。

それに心中でガッツポーズをしながら、ガムルは横たわるリタニアに近づいた。

ガムルの読みは的中した。

ガムルのいた場所、そこは甲羅の中心にも関わらず攻撃されなかった。

ここで組みあがる仮説は一つ。

そこが『死角』だったから。

だがもし視覚で感知しているならこの平らな甲羅の上で死角などあるわけがない。

ならなぜ見えない、いや、感じられないのか。

四方にある四本の筒、その形状からも分かるが恐らく視力がほとんどない。地中で生活していたためだろう。

では、何で感じているのか。

それは『嗅覚』

サンドワームは匂いで獲物の位置を察知しているのだ。

触覚や聴覚も視覚と同じく、ガムルのいた場所を攻撃できない理由がない。

また攻撃範囲にも制限があることにもガムルは気づいていた。

ある一カ所で針を出すと他のところでは出せなくなるのだ。

色々な方向に走っていたのもそれを確かめるためだった。

そこまで考えてガムルは賭けに出た。

爆薬の匂いのする煙玉を投げることで敵の察知能力を攪乱したのだ。

その賭けに見事に勝利したガムルは地に転がるリタニアの体を見回した。

横たわる彼女の体に腹部のかすり傷以外、目立った外傷はない。

だが、その顔は死人のように青白かった。

この状態からガムルの中で思い当たるものは一つしかなかった。

「毒か。」

ガムルはもう一度後ろへあの白い球体を投げてから、リタニアを抱えあげた。

パン、という爆発音。

それと同時にガムルはまた走り出した。

この甲羅の端まで十数メートル。それをスピードを緩めることなく一気に駆け抜ける。

毒が回らないようあまり動かすべきでないのは分かっているが、今はそうは言っていられない。

ガムルはそのまま甲羅からためらいなく飛び降りた。

「うおっ!? 高え」

飛び出してからガムルは初めて自分が今いる高さをはっきりと認識した。

建物で言えば十階分ぐらいの高さだろうか。かなり樹齢のある木々が親指ぐらいにしか見えない。

「これ、死ぬかもな。」

重力に引かれ落下を始めたガムルは他人事のように呟いていた。

そうぼやきながらもリタニアを引き寄せ、上手く空気抵抗を受けながら足を下に向けた。

無意味とも言える行為だが、ガムルにはもうそれしかできること

がなかった。

「頼む。」

後、五メートル。

限界まで冥力を足に注ぎ、ガムルは衝撃に備えた。

一秒、二秒、

スタッ

「ん？」

もう来てもおかしくない足が碎けるほどの衝撃が来ない。

代わりに足の裏に伝わる感触にガムルは閉じていた目を恐る恐る開いた。

「あれ？ 立ってる、のか？」

日常的に感じている、地に足がつく感覚。それを今ガムルは感じていた。

「なんで、まだ力は戻っていないのに……」
「間に合いましたか？」

飛んできた声に、ガムルは声の方を見上げた。

そこにいたのは緑色の槍に腰掛ける黒髪の少女、

フィロだった。

「お前が？」

まだ状況を掴めないガムルの前にフィロはゆっくりと舞い降りた。

「ええ。ギリギリでしたが間に合って良かった、いや、どうやらあまり時間はくれないようですね。」

ガムルから視線を外し、彼女は軽く腰を落とした。

「時間って……………」

「気をつけてください……………来ますよ。」

槍を構え直したフィロ目掛けて、またあの筒が振りおろされた。

フィロは派手に岩石を巻き上げるそれを間一髪でかわし、体の回転を使って赤く染まった槍を横に振るう。

それと同時にその筒の根元に巨大な術式が展開。そして、

弾けた。

『ウボオオオオオオア』

生き物のようにうねる爆炎は、先ほどとは比べものにならない熱風を巻き起こし、その周りを容赦なく焼き尽くしていく。

「うっ。」

その熱風に、樹の陰に飛び込んだガムルは肺が焼けないよう息を止め、布をリタニアの口元に軽く当てた。

あまりの熱気に目を開けているのでさえ厳しい。
だがそれを閉じるわけにはいかなかった。

相手は『人ならざるもの』、常識は通用しない。

しばらくその痛みに耐えていると、急に痛みがスツと消えた。

「ダンゼルさんのところへ行って下さい。解毒薬があります。」

サンドワームを凝視したままフィロが声を飛ばす。

フィロの術式だと理解したガムルは何も言わず、その小さい背中に頷いた。

情けない話だ、とガムルは自嘲の笑みをこぼしたくなるが、そんなことよりもリタニアのことが優先だ。

また小刻みに震える彼女の体を抱え上げ、恐らくダンゼルがいるであろう方向へと走り出した。

「私の仲間を傷つけましたね。」

未だに呻き声をあげる怪物を睨みつけ、少女は一步踏み出した。

「あなたは狙う相手を間違えました。」

少女が一步踏み出す度に残りの三本から威嚇の声が大きくなる。

だがそれはどこか、来ないでくれ、と怯えているようにも聞こえた。

「ダメですよ。」

しかし少女はその懇願を躊躇いなく斬り捨てる。

「この『ツケ』、しっかりと支払ってもらいますよ?」

それが『合図』だった。

史上最年少、第十階梯の虐殺が始まる。

「いた。ダンゼル!!」

木々の間に見えた白いボディにガムルは声を張り上げた。

そこにはすでに連絡を受けていたのであろうダンゼルが白衣を着て待っていた。

「ガムルさん!!」

話はフィロちゃんから聞いている。早く中へ。」

「ああ!!」

ダンゼルの指示通り、ビークルの中にある台にゆっくりとりタニ

アを横たわらせ、ダンゼルに目配せをした。

それに頷き返し、ダンゼルはリタニアの顔色、傷口などを確認し、傍らにあった演算器パソコンに何事か打ち込んでからカバンから一本の注射器を取り出した。

「大丈夫なのか？」

「神経毒の一種だね。全身の神経が麻痺してる。でも思ったよりも少量でよかったよ。」

腕に針を差し込み、少し青みがかった液体をゆっくりと流し込んでいく。

全て流し終えたところでダンゼルはふう、と一息ついた。

「後一時間ぐらいで抜けると思うよ。」

「そうか。運んだ方がいいよな？」

「そうだね。ベッドに運んでもらおうかな。」

ガムルは頷き、ゆっくりとリタニアを持ち上げた。

「もうすぐフィロちゃんも帰ってくるだろうから、出発の用意もしようか。」

こんなに早く？とガムルが疑問に思うことはなかった。それは彼の中で常識が壊れてきているからかもしれない。

この集団で『常識』は常識ではなく、『非常識』が常識なのだ。

「ああ。ありがとうな。」

「どういたしまして。だけどガムルさん、その傷、治療しないでいいの？」

「問題ない。」

「そう。」

お互いに笑いあってから、ダンゼルは外へ出て行った。

「リタニア、ごめんな。」

残ったガムルはすやすやと眠るリタニアを見下ろした。
先ほどよりも幾分か顔色もよくなっているように見える。
それに安堵の色を浮かべるが、すぐに陰った。

ガムルは疲労の色を見せながら、ドサツと傍らのソファに腰掛けた。

「俺、足手まといだよな。」

つい先日、『銀翼旅団』の一員だと豪語したばかりなのに、開けてみればこれだ。

敵の存在に気づかず、そこを助けてくれたリタニアが逆にやられた……。

ガムルはショックだった。

「俺にあの『力』があれば……」

そこまで呟いたところで悪い考えを振り払うように首を強く振った。

「ないものを言っても始まらないだろ。しっかりしろ、俺。」

ビシビシと頬を叩き、ガムルは深く深呼吸をした。

「昔から嫌なことがあればよくこうしていたな。」

もう戻ることも取り返すことも出来ない、虚しい、だが懐かしい。忘れたくても忘れられない、家族との時間。

「またあの頃に戻れたらいいのにな。」

そんな幻想を抱きながらガムルは頭上にある天窓を見上げた。

その向こうでは、雲間から太陽が慰めるように顔を覗かせていた。

だがそれを見るガムルは気づいていなかった。

ベッドに横たわる瞳がうつすらと開いていたのを。

『ウボオオオオオ』

また一本数を減らすと、残りの筒が天に向かって吼えた。

「耳障りですよ。」

眉をひそめながらフィロはまた赤い槍を振るう。

それに呼応し、今度は術式が二つ同時に展開。

吼える二本を塵すら残さず焼き尽くす。

切り落とされた先端が先ほどと違い、力なく地に落ちた。

「そろそろ顔を出してもらえませんか？ いい加減終わらせたいので。」

茶色い甲羅だけが残るそこへ、フィロは明らかな軽蔑の視線を送る。

挑発ともとれるその言動に、怒りからか、突然その甲羅が震えだした、いや、甲羅が波打っているのだ。

それは地震の模型を見ているような奇妙な光景だった。

あれほどまでの堅牢さを見せていた甲羅が水面のように波打つのだ。

その揺れに周囲の大地はひび割れ、木々が倒れていく。

だんだんとその振動は激しくなり、ついにはその甲羅が、
浮いた。

「全く、手間取らさないで下さい。」

フィロは呆れたようにため息をつき、すぐさま横へ跳んだ。

バゴンッ

それを追うように彼女がいた空間は、大量の空気とともに一気に
呑み込まれた。

「空気はおいしいですか？」

槍を構えながらフィロはもう一度ため息をついた。

呆れる彼女の視線の先にあるのは、丸く、先端の尖った巨大な『
頭』。

よく見れば浮いているように見える甲羅も四本の大樹の如き足に
支えられている。

それは巨大な亀だった。

『ウオオオオオオア』

尖ったくちばしを大きく開き、そこから発せられる雄叫びがまた

大地を揺らす。

「うるさいですよ。」

その怪物はその大きな目をギョロリと動かし、淡々と告げるフィロを捉えた。

『お前か、私の邪魔をするのは。』

しわがれた声と共に丸い頭の五分の一を占める大きな瞳が少女を映す。

対して、少女、フィロはそれに動じるどころか笑みを浮かべるほどの余裕があった。

「あれ、幼体でしゃべれるんですね。意外です。」

皮肉の混じった言葉に怪物の目が細められる。
それに気づいてもフィロはその口を止めない。

「やっぱり『召還門』^{ゲート}を通ると話せるのですか？ ねえ？ そうですねですか？」

『・・・・・・・・・・』

「沈黙もまた肯定なり、ですよ。」

では次、あなたを呼んだ術者はどこですか？」

無言のまま少女と怪物の視線が交錯する。

最初にそれを外したのはサンドワームの方だった。

『・・・・・・・・何の話だ。』

「とぼけないで下さい。それとも、こうしましょうか？」

フィロの言葉に合わせ、また赤い術式が展開する。

その上にあるのはその巨大な頭を支える首。

『ふん。まだ十数年しか生きていない小娘が。』

ギョロリとまた目を動かし状況を確認してから開いたくちばしの間からしわがれた声が紡がれる。

「そういうあなたもまだ幼体ですよね？」

『それはまるで私の一族に会ったことがあるような言い方だな。まあ、そんなわけな・・・・・・・・』

「ブギヤナン」

『っ！？ 小娘、なぜその名を知っている！？』

フィロのたった一言で亀の雰囲気は豹変した。

目は血走り、体全体が小刻みに揺れ、茶色から血のような赤に染まっていく。

それはフィロに火山を彷彿させた。

「殺した相手の名前を覚えていておかしいですか？」

だが彼女は物怖じしない。

まだ火力が足りないと言わんばかりに油を注いでいく。

『お前が先代を、『六王獣^{りくおうじゅう}』の一角を倒した、だと……』
「ええ。」

そこで初めて亀の瞳に恐怖の色が混じった。

『六王獣』、それはこの国にいる『異常種』の六大勢力の頭の総称。それ一体は街一つを容易く潰せるほどの力を持っていると言われ、膨大な懸賞金がかけられている。

だが、六王獣の方は理由は分からないが、勢力同士の衝突はあってもめったに自分達から人を襲うことはない。

そのため帝国側は牽制をするだけで刺激をしないようにしているのだ。懸賞金もまたかけられてはいるが帝国側の皇帝の許可が必要となる。

なのにこの少女はそれを殺したと言っている。

確かに一年前、その頭が変死を遂げていた。

全身が焼けただれ、一部は炭化、消滅していた。

そうこの少女の術と全く同じ現象なのだ。

焦りを見せ始めるそれに微笑みながらフィロは一步、踏み出した。

氷の張った湖のような、肌を突き刺す冷たい殺気が彼女達を包んでいく。

「さて、私は答えました。つぎはそちらの番です。

術者は誰ですか？」

『・・・・・・・・知らない。』

その声色からフィロは真実と判断し、軽く頷いた。

「じゃあ質問を変えましょう。それはどこにいますか？」

『分からない。いつの間にかここに呼び出され、操られていた。』

「なるほど。

では、操られていたと言いましたが、どのような命令でした？」

何の感情も含めず、彼女はただ淡々と質問を続ける。

『・・・・・・・・あの道を通る男2人と女2人の集団を殺せ、と。』

「・・・・・・・・そうですか。ありがとうございました。」

若干の歯切れの悪さに信憑性は欠けるが、フィロは軽く頷き、ぺこりと頭を下げた。

その反応にサンドワームは身の安全を感じたのか、目を細めながらゆっくりと首を甲羅へ戻し始めた。

「さようなら。」

しかし、少女の唐突な一言で、またその体が凍りついた。

顔を上げたフィロは満面の笑みと共に、手にある炎のように赤い槍を地面に打ちつけた。

『ウオオオオオオアアア』

瞬く間に火柱が五つ噴きだし、剥き出しになっている肉を容赦なく炙っていく。

その部分は火傷を通り越し、炭化。そして塵へと変わっていた。

『小娘えええええ！！』

「言ったはずです。」

叫び声を上げるそれに背を向け、フィロは歩き出した。

「仲間を傷つけるものは誰であろうと許さない、と。」

後ろから炎を纏ったあの巨大な頭が迫る。

尖った口が少女を呑み込まんと大きく開かれた。

『ウオオオオオオオオオオオ』

最後の力を振り絞った決死の攻撃。

だがそれは彼女の服に微かに掠るだけで、終わった。

彼女のすぐ後ろで、長い断末魔の後に、もう一度だけ小さく地面

が揺れた。

『私が、こんな、小娘に………』

老人のような奥から絞り出された声。

「本当は私はあなたと同じなのかもしれません。」

それを背中越しに聞きながら、フィロはぼそりと間もなく死に逝くものに呟いた。

「私は道具。ただ戦うためだけに産み出された兵器。」

彼女の表情に変化はない。いや、何も表情がない。

「だけど、そんな私をリユーガは必要としてくれた。みんなが必要としてくれた。」

淡々とした彼女の言葉だけが辺りを支配する。

もうそれは事切れている。それが分かっているながら、フィロの口は止まらなかった。

「あなたはそれを傷つけた。あなたは私の絶対領域に踏み込んだ。」

黒い塵を巻き上げた風が、彼女の黒髪をなびかせた。

「だから私はあなたを殺した。大切なものを守るために。」

風に翻弄されるそれを押さえつけながら、彼女は元来た道に戻り始めた。

「あつ、ガムルさん。フィロちゃんが帰ってきたよ。」

運転席でハンドルにもたれていたダンゼルが体を起こした。

ガラスの向こうからフィロが近づいてくるのを確認してから鍵を捻った。

ドロン、という起動音とともに車体が小刻みに揺れ始める。

「お帰り。」

「ただいまです。」

激しい戦闘をした後のはずなのに、その体からは出ていった時と変わらず、全く疲労の色が見えなかった。

さすがだな、と感心しながらもダンゼルは傍らに置いてあった水を差し出した。

「ありがとうございます。」

それを笑顔で受け取り、フィロは助手席に腰掛けた。

「ガムルさん。出すけど、大丈夫？」

「ああ。大丈夫だ。」

奥からの返答によし、と頷いてからダンゼルはペダルを踏み込んだ。

「ちっ。しくじりやがって。」

そこからいくらか離れた森の中、木にもたれかかり、耳に手を当てた男がいた。

茶色の着物を纏い、腰にはいくつも紙を丸めたものをさしている。

「砂漠の三大異常種の一つと呼ばれているから呼び出したのに、期待はずれにも程がある。」

「何がだ？」

「そりゃあ、・・・・・・・・誰だ!？」

いきなり後ろからかかった声に男はとっさに振り返る。

だがそこには誰もいない。

「誰だ!？ どこに、っ!？」

右へ左へ首を巡らせていると男はその首もとに冷たい金属の感触を感じた。

視線を落とすと、見覚えのあるものがそこにあった。

刀身が通常の二倍はある、機械を彷彿させる片刃の剣。常人には扱えないであろう武器^{えもの}。

こんなものを持っているのは、この国に一人しかいない。

「りゅ、リユーガⅡFⅡエスペラント……」

「さっきの話を詳しく聞きたいんだが、答えてくれるか？」

龍牙は剣を男の首に軽く押し付けた。たったそれだけで首もとに赤い筋が走り、滴が垂れていく。

「何が、知りたい……」

「お前が何者か、後、お前のバックについている者だ。」

「ちっ。ガッ、アアアア！」

男は分かっていた。答えたところで自分が助かることはない。だから黙秘しようとした。

だが何だこの痛みは。

痛みのあまり思考は途切れ、ただその問いのみがぐるぐると廻る。

今まで感じたことのない、信じられないほどの痛み。しかもそれが全身から感じられるのだ。

「な、何をした……」

「答えてくれるか？」

「誰、ガ、アアアア！？」

体中がタオルを絞るようにメキメキと捻れていく、そんな激痛が

駆け巡る。

「仕方がないな。」

呻いている男の前に回り込み、その目を覗き込んだ。

龍牙の瞳が一段と濃い紅に染まるのを認識したのと同時に、男は左手に痛みを感じた。

今度は捻られるのではなく、刺されたような鋭い痛み。

今までと全く違う痛みに、自然とそこへ目が向けられる。

信じられないほどゆっくりに感じられたその動作の後、男は自分の目を疑った。

（いつ、現れた・・・・・・）

巨大な黒い物体が彼の腕をくわえていたのだ。

獰猛さを際立たす、鋭く伸びた牙に四肢の先にある爪。

それは犬だった。

その体躯は男の背丈と変わらないほどに大きい。

「は、離せ！！　ぐっ！！」

払おうと右手をとっさに伸ばす。

だがそれもどこからか現れた別の黒い犬に噛みつかれた。

「なんなんだ……お前らはいったい何なんだよ!？」

なんとか振りほどこうと動かすが、牙が深く突き刺さっているの
だろう、全く抜ける様子がない。

「なんだよ!？ なんなんだよ!？」

四方八方から向けられる殺気に、男はチラリと周りを見て、動き
を止めた。

いや、動けなかった。

自分の両腕に噛みつく黒い大型の犬。それが周りに数え切れない
ほどひしめき合っていたのだ。

「嘘だろ……なんで、」

その黒い波はじりじりと獲物を追い詰めるように近づき、一気に
飛びかかった。

「いったい何なんだあ!!」

質量を増していく黒い塊に埋もれ、男の声は虚しく掻き消されて
いった。

「永遠の地獄を彷徨え。」

龍牙は膝をつき白目を向く男に背を向け、歩き出した。

そこは先ほどの森の中。

そしてそこにいるのは、二人。

男の体には目立った外傷がないが、何度も痙攣を繰り返している。

それを振り返りもせず龍牙は歩き続けた。

しばらく進むと、前方から森の終わりを告げる光が差し込んできた。

そのまま森を出るとあまりの明るさに手をかざしながらすぐ横にある茂みに近づいていく。

龍牙の肩ほどまである茂みの前に立ち、右手を差し込むと、ゆっくりと何かを引き抜いた。

出てきたのは愛用の黒塗りの『自動二輪^{バイク}』。

それについた葉を丁寧に払いのけてから跨ると、それは重低音を奏でながら走り出した。

黒い狼は見渡す限りの青い地平線を駆け抜けていく。

巻きあがる植物の葉が放つ独特の香りを風に乗せ、龍牙は走り続けた。

彼を待つ、仲間の元へと。

商業都市（前篇）（前書き）

何かを失うことで手に入るものもある。

俺はそれを見つけたんだ。

商業都市（前篇）

「リタニアさん。調子はどう？」

焚き火を挟んで向かいに座るリタニアにダンゼルは不安そうな視線を向けた。

「大丈夫よ。流石に3日も経てばね。」

当の本人はそれとは対称的に元氣そうな笑みで頷き返した。それにつられ、ダンゼルもまた笑顔を浮かべる。

「そう。それは良かった。」

あの異常種の襲撃から三日、一行は目的地、商業都市『フィリーズ』のすぐ北、『タスピカの森』の南にある『バナー丘陵』にいた。

ここはなだらかな丘の続く地で、近くに大きめの川がいくつもあるため、あまり不自由を感じない場所だ。

今、彼らがいるのは『バナー丘陵』に南北に流れる三つの川のうち東側の河原だった。

「僕はもう寝るよ。」

「私もそろそろ失礼しますね。」

「うん。おやすみ。」

頷くりタニアの前で、ダンゼルに続いて立ち上がったフィロは、

チラリとリタニア、ではなくその背後を見た。

傍らに流れる大きめの川。

そのほとりに辺りが暗くなってきたても分かる大きな背中があった。

「大丈夫。私がなんとかするから。」

その視線の意味を察したリタニアは、もう一度にっこりと笑って
みせてから歩き出した。

「フィロちゃん。リタニアさんに任せようよ。」

「・・・・・・・・はい。」

歩き出すダンゼルを追ってフィロも足を踏み出すが、ピタリとそ
の足を止めた。

ゆっくりとなにか名残惜しそうにもう一度振り返る。

その先では丁度、リタニアがその大きな背中の中横に座るところだ
った。

親しげに話す二人にフィロは小さく首を傾げてから早足でビーク
ルへと向かった。

「なあに落ち込んでるのよ？」

後ろからかかった声にガムルは何も言わなかった。いや言えなか
った。

何を話せばいいのか、皆目見当がつかなかった。

「よっと。」

答えないガムルにしびれを切らしたのか、リタニアはガムルのすぐ横に腰をおろした。

「・・・・・・・・大丈夫なのか？」

散々悩んだ挙げ句、なんとか紡いだ言葉はなんともお粗末なものだった。

「平気、平気。あの程度でやられたりするようなヤワな鍛え方はしてないわよ。」

それでもリタニアは笑って答えたそれに答えた。

「そうか。」

その気遣いに感謝しながら首肯した。

しかし、また沈黙。

黙り込んだガムルはチラリと彼女の脇腹を見た。

もう熱や腫れは引き、完治したと聞いていたが、ガムルが心配することには変わらない。

これは自分のせいなのだから、と。

「もしかして私が怪我したのを自分のせいだとか思ってるの？」

核心をつく問いかけにガムルはピクリと肩を震わせた。

その反応に、やっぱりか、とため息をついてからリタニアは肩を

落とした。

がっかりだ、と言いたげな表情だ。

「ガムル、一つ言わせてもらっている？」

顔を横に向けると、彼女が真剣な表情で見ていることに気づき、ガムルは少し驚いた。

「・・・・・・・・なんだ？」

慰めの言葉かと少し肩の力を抜くが、

「自惚れるんじゃないわよ。」

返ってきたのは予想の遥か斜め上をいく叱責だった。

「・・・・・・・・・・は？」

ガムルは予想外の叱責に驚きを隠せなかった。

自惚れるな、などと言われることをした覚えはない。

「あなたは私が倒れたのが自分のせいだと言う。どうしてそう思うわけ？」

「それは・・・・・・・・俺が弱いからだろ？」

もし俺が戦えたら、お前は倒れる必要なんてなかった。」

ガムルは思う通りのことを話した。

「それが自惚れなのよ。」

だが、返ってきたのは同じ否の声。

「……………どういう意味だ？」

またのダメ出しにガムルは何がなんだか分からなくなってきていた。

「そのままよ。階梯持ちですらないあなたが、第九階梯である私の怪我を自分の弱さのせいだという。

これほどの自惚れはないわ。」

「何を、」

高圧的なリタニアの口調に反論しようと口を開くが、すぐに閉じた。

彼女の目には、どこか哀れみの色が混じっているように見えた。

「分かる？ あなたは今いる、私達五人の中で間違いなく一番弱いわ。」

それこそ騎士と平民なみの差がある。」

その言葉にガムルは言葉を詰まらせるしかなかった。

今、一番聞きたくなかった言葉だ。

自分は弱い。その現実を突きつけるなんの装飾もない言葉。

「騎士達は何の力もない平民を守るわ。それこそ命がけで。

平民からしたら助けてもらうことに負い目を感じるかもしれない。だけど、騎士の強さはその弱い平民を守った上で評価されること

なのよ。」

なんとなくリタニアの言いたいことがガムルにも分かってきた。

「その守る対象にそんなことを思われたら、私達は自分の力を否定され、存在意義を無くしてしまう。」

彼女達はまだ国民を守る騎士なのだ。

弱い者を危険から守る。

それが彼らの使命であり誇り。

そこに平民から、ガムルのような気持ちをもたれるということは、彼女達に力がないということを暗に示し、さらにはその誇りを汚すことを意味する。

だからこそ彼女は怒ったのだ。

だが、

「それでも俺が、お前らを、仲間ともを守りたい。

そう思うのはいけないことなのか？」

震えるガムルの言葉にリタニアは無言で首を振った。

「そうじゃないわ。

ただあなたはまだ弱い、一人で飛べない『ひな』よ。」

ガムルは口の中に血の味が広がるのを感じた。どうやら唇を噛み

すぎたようだ。

「だからまだ今は私達があなたを助けてあげる。」
だが、止めない。

唇を喰い千切らんばかりに噛み締める。

「いつかは飛べるように、ね。」

ガムルは水面に目を落とし、小さく頷いた。リタニアに気付かれないように唇を噛み締めたまま。

分かっていた。そう、ガムルは分かっていた。

「そうだな。そうだったな。」

ガムルは悔しかった。

本当なら、昔の彼ならそのようなことは言われない。言われるわけがない。

だがガムル自身が一番現状をよく理解していた。

今、自分は『弱い』のだと。

これまでに何度も感じた敗北感、劣等感が彼の中を掻き乱す。

特に今回加わったものは一際大きかった。

「じゃ、私はもう寝るわ。」

「・・・・・・ああ。」

叫びたい衝動を抑え込み、それが表に出ないようになんとか平然を装う。

暗闇であつたのも幸いしたのか、予想通りリタニアは気付かなかつたようで、何も言わず立ち上がった。

そこに吹く風が彼女の金髪を靡かせる。

女性特有の香りを漂わせてからリタニアはガムルの視界から外れた。

彼女の靴が小石を踏みつける音が徐々に遠のいていく。

リタニアがビークルの中へ消えていくのを背中を感じながら、ガムルはまた視線を水面に落とした。

後から後からとめどなく流れ続ける川。

その煌めく水面には、歪んだ満月が浮かんでいた。

「荷物はもういいよね？　行くよ。」

その翌朝、ダンゼルの軽快な声と共に一行を乗せるビークルは走り出した。

いつものように風景が矢のごとくすぎていく窓の横にガムルは座

っていた。

鼻歌混じりに運転をするダンゼルとは対称的に、その表情は複雑だった。

昨日のリタニアの言葉もあるが、最大の原因は目の前にいる男。

「どうかしたか？」

「いや・・・・・・・・なんでもない。」

ガムルは向けられた視線に耐えきれず顔を俯けた。

そう、珍しくビークルに龍牙が乗っていたのだ。

この辺りは治安がよく、盗賊も出ないため、めったに騎士団も通らない。

治安がいいことはよいことだ。だがこの時ばかりはガムルはそれを恨まずにはいられなかった。

（気まずい・・・・・・・・）

発車してからまだ数分だが、ガムルの全身がすでにこの沈黙に耐えられなくなってきた。

「そうだ。ガムルさん。」

「なんだ？」

ダンゼルの鶴の一声にガムルはその空気から逃げるように運転席へ向かった。

「どうした？」

内心で礼を言いながらガムルは運転席の背もたれに手をつく。

「フィリーズでガムルさんの『機械剣』を造ろうと思ってさ。注文はある？」

「そうだな・・・」

「私、外しますね。」

「おっ、ありがとな。」

助手席から立ち上がるフィロを通してから開いた席に腰掛けた。

「で、まず埋め込む『破天石』だけど、何がいい？」

傍らに置いてあるパソコンを見もせずに操りながら運転を続けている。

そのダンゼルの器用さに目を奪われながら、ガムルは顎に手を当てた。

「そうだな。メインは『地』系統でその他ははっきり言って何でもいいかな。」

ただ、こいつを嵌めてくれないか？」

ガムルはポケットから取り出した黒い石をダンゼルに差し出した。

ダンゼルはそれにチラリと目を向けてから、パソコンを操っていた右手でそれを受け取った。

左手でハンドルを握り締めたままダンゼルはその石を光にかざす。表面は磨かれており、宝石のように滑らか。だが、その石は宝石とは決定的に違う部分があった。

「珍しいね。真っ黒な輝かない『破天石』って。」

「ああ。うちの家に代々伝わるものだ。潰れちまったから拝借してきたんだよ。」

潰れた、というところでダンゼルはチラリとガムルを見やるが追求はしなかった。

「へえ。じゃあ系統は？ 分かる？」

その石をパソコンの横にある機器に差し込む。

「ああ。一応、『召還』術式だ。」

「へえ。本当に珍しいや。」

ダンゼルが運転しながらチラチラと目を向ける画面には、様々な数値や曲線、表が表示されている。

相変わらずそれが示す意味をガムルが分かりかねていると、ダンゼルは機器からあの石を取り外し、その横に置いてあった容器に丁寧に入れた。

「じゃあ、次は形状とギミックかな？ どうする？」

ダンゼルが容器のふたを閉めたところで床が縦に揺れた。

ビークルがまた一つ丘を越えたのだ。

下り坂になったそこからは、かなり遠くまで見渡せるようになっていた。

「そうだな・・・・・・・・」

下り始めるビークルの先、そこにはこれまでとは全く違う、異質なものが横たわっていた。

高くそびえる防護壁。何十メートルもあるだろう。

だがそれでもその全体を隠しきれないものがあつた。

それは天まで伸びる、建物の群れ。

そしてそれを内包する、視界一面に広がる巨大な都市がそこにあつた。

だが二人はそれを気にもかけず、その話を続ける。

彼らの会話が途切れたのは、それからしばらくして、その街へ到着してからだった。

「ほお。」

ダンゼルとの会話が一段落したところでガムルは窓から外を見た。

「やっぱりこの街はデカいな。というより、またデカくなってないか？」

そう言いながら見上げた建物はその頂上が正午に近い太陽と重なっている。

「ほんとうにね。まあ、技術力を誇示したいだけだろうけど。」

小川にかかる橋を渡り、ビークルは街の中へと続く門のところまで来ていた。

「衛兵がいるけど、大丈夫なのか？」

ガムルの視線の先にあるのは街の中へ入れる唯一の門。

その両脇にはガムルの言う通り、衛兵が二人ずつ並んでいる。

通る車両を一台一台呼び止め通行証の提示を求めているようだ。

「大丈夫だよ。パスもあるしね。」

そう言いながらガムルに差し出したダンゼルの手には身分証明書が握られていた。もちろん偽造だ。

相変わらずの用意周到さにガムルはもう驚かなかった。

街に入る門のところで待っていると、順番が回ってきたのか、衛兵が軽く窓をコンコンと二度叩いた。

それにダンゼルはゆっくりと窓を開け、衛兵に偽造した身分証明書を提示。

衛兵はそれを左から右へと目を動かしてから、もう一人の方へ合図を送った。

「お通り

証明書を返してから一礼。衛兵は次の車両へと向かっていく。

ダンゼルは受け取ったそれを様々なカードの入ったケースに戻し、前方に横たわっていた棒が上に上がのを待ってからゆっくりと発進した。

『商業都市　フィリーズ』

数ある大陸中に散らばる商業を売りにする都市の中で随一の実績を上げている都市である。

海に面しているため、長距離の海運業も盛んで、ロザンツ帝国の港町としての側面も持つ。

貿易は儲かる。自国で作るものより格段に安い値段で商品を仕入れられ、さらに通常よりも割増に値段をつけても普通よりも安くなるのだ。

つまり船成金と呼ばれる富裕層が生まれる。

さて、その成金達がその儲けた金で何をするのか。

それは、自らの権力の誇示。すなわち、建造物だ。

他よりも巨大な、あるいは奇抜なものを作ることには稼いだ金を使

う。これによって今度は建造業の技術が向上。

さらに、それに続くようにして他の分野でも技術が進み、数年前、エネルギー革命が起こった。

それによって産まれたのが『自動二輪』や『自動車』といった、これまでの馬とは違い、疲れることの知らない『重灯石』による輸送方法だ。

これは瞬く間に国内に広がり、富裕層から絶大な人気を得ている。

値段のため市民にはまだ手は出せないが、後数年もすれば全国民に普及することだろう。そこで技術開発局では……………

「だとさ。」

助手席の脇にあった『猿でも分かる街の裏情報』という見出しのガイドブックを捲るのを止め、それを放り投げた。

さぞかし面白い情報が分かりやすく載っているのだろう、とガムルは期待していたが、どうやら普通のガイドブックに私的な意見が入っただけのようだ。

「ここまで言うならなんでビークルとかを他の国に売らないんだろうな？」

「必要ないんだってさ。」

綺麗に整備された市街地の間をなめらかに曲がりながらダンゼルはチラリとガムルを見た。

「必要ないって言うのは？」

「そのまんまだよ。ラグレイト帝国はもう自国で開発しているから、秦国は単純に必要なからだってさ。」

「へえ」

技術者の泣きそうな顔が目には浮かび、ガムルは小さく笑った。

彼らは今、フィリーズの市街地を走っていた。

市街地は標高のある建物の群れを囲むようにある。

最近開発されたゴムなどを加えた特殊材質による舗装などもある。綺麗に区画整理されている。

明るい印象を受ける街だ。

建物自体もそれぞれデザインや色などが違っているが、上手く調和が取れている。

何台か対向車とすれ違ってから、ダンゼルは右にハンドルをきいた。

「で、最近売り出そうとしているのが、アレだよ。」

「ん？」

ガムルは一旦交差点で停止したビークルの窓から顔を出し、ダンゼルの指さす方を見た。

街の中心部にいくつもある高い建物のうち、一つだけ飛び抜けているものがある。

ダンゼルが指したのはその頂上付近にくっついているの奇妙なもの

の。

「なんだ、あれ？」

「『飛空艇^{ひくうてい}』って言うんだって。

燃料は『重灯石』

速度は船で一週間かかるところを二日で行けるらしいよ。」

「マジかよ。」

ガムルは動き出したビークルからまた顔を出し、それを見上げた。

逆光であまり形状はよく見えないが、かなりの大きさがあるのが分かる。

「積荷の量は船には劣るけど、速さを重視して連絡船みたいな形で売り出すみたい。」

「へえ。よく知ってるな、そんなこと。」

頭の中に引っ込めながら感心したように呟く。

「仕事柄、そういうのに敏感なだけだよ。」

そんなガムルにダンゼルは照れたように応え、もう一度ハンドルを右にきった。

「はい。みんな、着いたよ。」

少し声を張り上げながらダンゼルは荷物の整理にかかった。

荷物の少ないガムルは手持ち無沙汰になり、何気なく窓の外に目を移した。

綺麗に整備された道路。

その横に周りよりも一際縦にも横にも大きな建物があつた。

『ホテル ウアルファール』

ガムルはふと先ほどのガイドブックに書いてあつたことを思い出していた。

『ホテル ウアンファール』

貴族の屋敷を彷彿させる豪華な造りに豪華な食事を売りにするホテル……というのは表の顔。

その実、反逆者などに隠れ家などとして使われたりしている。そのため騎士団も度々潜入しているらしい。……

またガイドブックを放り投げ、背もたれにもたれかかった。

「ここ、あまりよくないんじゃないのか？」

ぼやくガムル。

「ガムルさん？」

だがその後ろからかかる抑揚のない声、それにガムルの背筋は自然と伸びていた。

「ガムルさん？」

もう一度かけられる声。

「は、はい。」

ガムルは恐る恐る顔を後ろ向け、後悔した。

「みんな待ってますよ？」

そこにいたのは、恐怖を感じさせる笑顔を貼り付けた鬼。ファイロ

「は、はい。すいません。」

ガムルの額から冷や汗が滝のように流れる。

（目が、目が笑っていない。）

「行きましょうか。」

疑問系にすらなっていない有無を言わせぬ言葉。
もう何もかもが手遅れだ、そうガムルは直感した。

「はい。」

この後一時間、ガムルは説教と正座から解放してもらえることはなかった。

「いてて。」

「大変だね。」

まだ痺れる足を引きずるようにして歩くガムルにダンゼルは苦笑した。

「他人事みたいに言いやがって。」

「だって他人事だから、ね。」

ニヤニヤ笑うリタニアにガムルは何か言おうと口を開くが、言葉が見つからずそのまま閉口した。

「ま、あなたの服を買いに行くんだからいいじゃない。機嫌直しなさいよ。」

「・・・・・・ああ。」

先ほどから周りからの視線が痛い。

不満そうな顔のままガムルは自分の体を見回した。

フォーメルに裂かれた胸元、さらにサンドワームによって肩から先や脇腹を破かれ、筋骨隆々の二の腕や腹筋が露わになっている。

露出狂のように見られているんだろうな、とガムルは心の中で嘆息した。

「確かに、早く新しい服が欲しい。」

「でしょ？　ならさっさと行くわよ。」

呆れる二人に構わずリタニアは人がひしめき合う商店街に入っていく。

「はあ、行くか。」

「うん。」

それをどこか遠い目で見ていたガムル達もまたゆっくりと歩き出

した。

両脇の建物の間に丸い屋根が端から端までかけられた商店街では、ガムルが外から見たよりも多くの人でごった返していた。

衣服類から始まり、果ては護身用の武具まで、幅広い店が所狭しと軒並みを連ねている。

ゆつくりと進むの人の波。だが、その中をスイスイと進むものが一人いた。

「ガムル〜！！ これいいんじゃない？」

「あつ、これもいい！！」

「かわいい〜 フィロに買って帰ろ！！」

「おじさん。この手袋いくら？」

止まることを知らないリタニアの口と手と財布、それに比例してガムルの腕に重なる荷物も増えていく。

ついにはダンゼルの腕にも荷物が出現していた。

「リ、リタニア。そろそろ帰らないか？」

「あつ、これかわいい！！」

「お婆さん、これちょうだい！！」

「はいよ。千リラだよ。」

ガムルを完全に無視したリタニアが選んだのはマフラー。

それをその店の白髪のおばさんが素早く包装していく。

「はい。」

「毎度あり。ほれ、かわいい娘にはサービスだよ。」

リタニアが渡した代金の代わりにおばさんは商品と後もう一つ、手渡した。

「わっ、ありがとう。」

サービスでもらった耳当てを品物と共に満面の笑みで受け取り、手を振りながらガムル達に近づいた。

「かわいい娘だって。かわいいからサービスだって。」

「分かった。分かったからもう帰ろうぜ。」

耳当てを手に近づくとリタニアの目は眩いほどに輝いている。

お前はガキか！？ と突っ込みたかったが自粛した。

仮にも服を買ってもらっている立場なのだ。多少のことも流さなければ、というガムルの大人な対応。

それに対し、リタニアはハイテンションはそのまま、マフラーと耳当ての入った袋をガムルの荷物が一番上に乗せ走り出した。

「なあ、ダンゼル。」

「なに？」

また何か見つけたのか新たな店へ突入するリタニア。
それを目で追いながらガムルは溜め息混じりに呟いた。

「俺の中のリタニアのイメージが崩れていく。」
「ハハ、実は僕もその体験者。」

力無く笑いあう二人。

「二人とも！！ 次、次行くわよ！！」

そこにまた集合の声がかかった。

それに呆然とした後、二人は自然と顔を見合わせていた。

「ガムルさん、今回は僕も呟きたい……………」

「ああ……………」

「マジかよ……………」

「マジかよ……………」

始めてガムルとダンゼルの息が合った瞬間だった。

「つ、疲れたー」

「もう無理、動けないよ。」

それからさらに数時間後、新しい服に身を包んだガムルとダンゼ
ルは、揃ってソファの上でぐったりしていた。

あの後、休む暇もなくリタニアに連れ回されていた二人の体力は
もう限界だった。

だらりとソファにもたれかかったまま、ガムルは逆さに今いる部屋を見回した。

そこは彼らに割り当てられた部屋。だが普通の部屋ではない。

そこは貴族の最上級階級が使う、スイートルームと呼ばれる部屋だった。

広さは通常の二人用の部屋のおおよそ八倍。最上階の三分の一を占める広さだ。

一泊でどれほどの金額に及ぶのかガムルには皆目見当がつかない。

実際、この部屋は膨大な会費を必要とする会員にならないと借りられないものだ。

そんなものがガムルに予想出来るわけがなかった。

頭に血が上ってきたのを感じたガムルは、それを持ち上げた。

疲労感漂う二人、だがその正面で別の二人が騒いでいた。

「フィロ、似合うじゃない!!」

「そ、そうですか?」

「でね、でね、これをこうやったらもつと、やだー、かわいい!!」

「リタニアさん、苦しいです。」

先ほどから延々と繰り返されるこの行動。

買ってきた服をフィロに着せてはフィロに抱きつく。

さっきまであれだけ騒いだのにどこからあの活力が出てくるのか。

疲労感の原因をガムルとダンゼルは恨めしげに見ていた。

ガムルは、最初はリタニアに対してクールというイメージを持っていた。だが、今はもうその幻想は欠片も残っていない。

「はぁ。ダンゼル、俺、少し出てくる。」

「・・・・・・・・うん。僕は寝ることにするよ。」

二人揃ってゆっくり立ち上がると、ダンゼルは寝室、ガムルは玄関へノロノロと歩き出した。

何か言われるかなと思っていたが、ガムルの心配は徒労に終わった。

どうやらリタニアはフィロに夢中で周りが見えていないようだ。

なんとなくゆっくりと玄関のドアを閉め、ガムルは溜め息を一つ吐いた。

「キヤー、これもかわいい!!」

「・・・・・・・・」

ドアを挟んでも聞こえるこの騒ぎようにガムルはただ呆れるしか

なかった。

「はあ。」

もう一つ溜め息をついてから、ガムルは階下へ行くため『移動個室』^{エレベーター}へと向かった。

『昇降機』^{エレベーター}とは、人を十人ほど乗せたまま上下へ移動する箱のことで、最近になって高層建造物につけられるようになったものだ。

それを利用するため廊下を進み、一度右に折れ、目的地であるそれがいくつも集まる広間に出た。

四つある左右にスライドして開く扉。

ガムルはその扉と扉の間にあるボタンを押した。

そのボタンが黄色く点灯すると同時に駆動音が奏でられる。

扉の上につけられたエレベーターの場所を示すランプを眺めていると、すぐ後ろで、チン、という到着を告げる鐘の音が聞こえた。

ガムルが振り返ると、開き始めた扉の向こうに見知った顔があるのに気づいた。

長く結った銀髪にサングラス。

龍牙だった。

「ん？」

扉が開ききると龍牙も気づいたようで、ガムルに近づいてきた。

「何をしているんだ？」

「いや、街に行こうかと思ってな。」

軽く肩をすくめるガムル。

それに、そうか、と応えながら龍牙はサングラスを外した。

「ならすまないが、それは後にしてもらいたい。」

「何かあるのか？」

警戒するガムルに龍牙は不敵に笑ってみせた。

「スポンサー後ろ盾が来る。お前の紹介をしておきたい。」

「ああ、なるほどな。分かった。」

その理由にガムルはあっさり頷くと龍牙よりも先に部屋へと歩き出した。

「で、そのスポンサーはいつ来るんだ？」

「もうすぐだ。」

ガムルが先を歩きながら尋ねてみると相変わらずの抑揚のない声が返ってくる。

部屋まで後数メートルとは言え、沈黙は辛い。ガムルはなんとか会話を続けようと続けた。

「ちなみに、誰だ？」

「ふっ。会えば分かる。」

（またあの笑みを浮かべているだろうな。）

ガムルは敢えて後ろを振り返らず、目の前の扉を開け、中に入った。

玄関を進んだ先にあるリビング。その入り口でガムルは立ち止まっていた。

龍牙を待っているわけではない。

まだ継続されているファッションショーに呆れていたのだ。

「もう、フィロはかわいいわね、本当に。」

「リタニアさん、あの、」

恐らくガムル、さらにはその奥にいる龍牙に気づいたのだろう。

フィロはさっきよりもさらに顔を赤らめ俯いた。

だがその意図することに気づかず、リタニアは新たなワンピースを手に持ったままその顔を訝しげに覗きこんだ。

「ん？　どうかしたの……ああ、リユーガ、帰ってたの？」

そこで立ち止まるガムルの横をすり抜け、リビングに踏み込んだ龍牙に気づきリタニアが声音を落とした。

もう少しやりたかったのに、といったげな表情を浮かべるが龍牙は気にもかけない。

「ああ。スポンサーが来るからな。」

ガムルが座っていたソファに座り、取り出したタバコをくわえた。それと同時にその先に火が赤く灯る。

「相変わらず便利ね、リユーガの能力は。だけどここは禁煙よ。」

しかし龍牙が一度吸い込んだところでリタニアはそれを取りあげ、握り潰した。

それに少し眉間にしわを寄せながら龍牙は渋々それをしまった。

「それより、どう？」

「どう？　というの？」

「フィロよ、フィロ。かわいいでしょ？」

そう言われた龍牙の目を見て、ガムルは即座に分かることがあった。

（こいつ、今気づいたな。）

ガムルも服に関しては詳しくはない。

今のガムルのランニングにベスト、カーゴパンツという服装もリタニアに選んでもらったものだ。

だが、そんなガムルでも分かる。

龍牙はそんな感性を微塵も持ち合わせていないことが。

「ああ、そうだな。」

曖昧な龍牙の反応。

それにリタニアは呆れ、フィロは若干目を赤くし、ガムルは、

「プフッ」

口に腕を当て笑いを必死にこらえていた。

「ククク」

「何を笑っている。」

龍牙が若干苛立たしげな声を上げるが、ガムルは肩を揺らし続けた。

いつもと違い、八つ当たりのように視線を向けてくる龍牙。その意外な子どもっぽさにガムルは笑いが止まらなかった。

「騒がしいなー」

混沌と化しつつあるその部屋に、欠伸混じりにダンゼルが入ってきた。

いつもと様子が違うことに若干戸惑いながらも、ダンゼルは近くで笑うガムルに近づいた。

「ガムルさん、どうかした？」

「……いや、別に。ププ」

若干引き気味にダンゼルが尋ねてくるが、ガムルは笑いのせいでそうとしか応えられなかった。

「教えてくれてもいいじゃん。」

不満げなダンゼルはガムルを問い詰めようと詰め寄るが、

リンゴーン

それを遮るように鐘の音が鳴り響いた。

それにダンゼルは部屋を見回すが、客が来たというのに、目の前のガムルを含め誰一人として動こうとはしない。

それに仕方なく足を止めると、ダンゼルはそれを玄関へと向けた。

その背中を見ながら、ガムルはやっと収まった笑いがぶり返さないよう、深呼吸を一つした。

未だに騒ぎ続ける三人の横をすり抜け、玄関とは反対にある窓に向かう。

ベランダへと続く一面ガラス張りの壁。

ガムルはそこに近づくにつれ、表情が陰しくなっていく。

辺りが暗くなっているせいだろう、ガラスには鏡のようにガムルの全身が映しだされていた。

チツと小さく舌打ちをしながらも、外から見られないようガムルはカーテンを引いた、

「ん？」

だが、後数センチで締めきるところでガムルはふと手を止めた。

（誰かが、見てる？）

誰かの視線が体に突き刺さるのを感じる。

ガムルはカーテンが引っかかっているような仕草をしながら、辺りの気配を探り始めた。

近くから徐々に距離を伸ばしてゆき、

（あそこか。）

見つけた。

開始から発見までおよそ、二秒。

チラリとガムルが一瞬だけ視界に捉えたのは、正面にある建物だった。

高さはここと変わらない何の変哲もない無機質な建物。

気配はその屋上から感じられた。

距離はそれなりにあるとはいえ、それでも感じ取れる気配は常人では感じ取れないほど微量だ。

フォーメルほどではないにせよ、かなりの技量を持っていることは確かだった。

ガムルは気づいたことに気づかれないよう、無言ですぐさまカーテンを締め切った。

（いったい、誰だ………？ それに………）

少しそこで佇み思考を巡らせたかったが、狙撃される可能性を恐れ、そのまま三人のいるリビングへと戻っていった。

ガムルが締め切った後、その建物の上で蠢く影があった。

「あー、気づかれたか？ 結構頑張ったんだけどなー」

隠密行動を失敗したとは思えない、あっけらかんとした声。

「勘がいいのか、それとも実力か。微妙なところだなー」

街の灯りに照らされたその顔はまだ幼さの残る、若い青年だった。服装は工場の作業服のようなぶかぶかとしたものを着崩している。

「あーあ。叱られるかもな。」

「どう思うよ？」

「…………お気づきでしたか？」

その青年が振り返る先、何もない闇からそれは現れた。

闇から新たな闇が産まれるように現れた黒ずくめの男は、頭に乘せたシルクハットを外し優雅に一礼した。

「周りとそこだけ違和感があったからなく」

「そうですか。まさか『四聖人』の方と話せるとは思っていませんでした。」

今週は色々と勉強になることが多いみたいですね。」

ジャケットの内側から冊子を取り出し書き込む。

その服装と冊子。それはまさしく数日前、ガムルと接触していたフォーメルだった。

「で、^{タップ}諜報機関がなぜここに……………って決まってるか。」

自嘲ぎみに笑う青年にフォーメルも小さく笑ってみせる。

「そちらにとって不利益となりうることのためです。」

「じゃあ、ここでお前を殺した方がいいか？」

チリッ

肌を突き刺すような研ぎ澄まされた殺気。だがそれを向けられたフォーメルは笑みを崩さない。

「止めておきましょう。お互い、あちらにバレると色々面倒だと思うので。」

「なんだ？ 本気でやったら俺に勝てるとも言いたげだな？」

「ええ。私の術式なら可能ですよ。」

フォーメルの返答に青年は一瞬キョトンとするが、すぐに大口をあけて笑い出した。

「ハハハッ、気に入った。俺と対等にやれるなんてな、よく言えたもんだ。」

胡座をかく青年はポンと膝を打ち、立ち上がった。

「分かった、今日は退いてやる。」

「だけど、次は容赦しない。いいか？」

「それなら出来れば会いたくないですね。」

「つれないな。じゃあな」

つなぎの青年は声だけ残し、一瞬にして姿を消した。

「全く、騎士団の方は血の気が多くて困りますね。」

残されたフォーメルは青年が消えたであろう方向を見つめてからホテルに視線を戻した。

「さて、これからどう動くんですか？ ロー、いや、ガムル＝ラン
パード」

そしてその姿は闇に消えた。

「やあ、久しぶりだね。リユーガくん。」

「久しぶりだな、ヒューズ。」

ダンゼルの後ろからついてきた茶髪の男は笑顔で龍牙と握手を交わした。

「何ヶ月ぶりかな？」

「もう一年ぐらいか。」

龍牙はヒューズに座るよう促し、ヒューズは、失礼、と軽く会釈しながらはソファに腰を下ろした。

それを少し離れた所で見っていたガムルは、その意外な人物に純粋に驚いていた。

ヒューズⅡクラーク、二四で設立した会社を僅か十年でこの国でも五指に入るほどの企業に育て上げた凄腕の企業家。

「確か、今、三七ぐらいだよな？」

「うん。この間パーティーやったらしいよ。」

両手に持つグラスのうちの一つをガムルに差し出しながら、ダンゼルは答えた。そういえば、とガムルはあの雑誌の記事を思い出した。

そこにはこのホテルもまたヒューズの会社の傘下だと書かれていたのだ。

「悪い。で、あの超有名な社長がなんでこんな小さな集団に援助するんだ？」

ガムルは受け取ったグラスを口に運んだ。

ゴクリと飲み込むと二酸化炭素を高圧で溶かし込んだ、炭酸ジュース独特の弾ける感覚が広がる。

「なんだか売上の一割を納税しろって言われたらしいよ。」

「あの皇帝にか。」

嫌な話を聞いた、と憎々しげに呟くガムル。

それをダンゼルは横目で見ていたが、不意に疑問を口にした。

「前から気になってたんだけど。ガムルさん、皇帝と面識あるの？」

「いや、ないぞ。」

素っ気ない答え。

訝しげな表情を浮かべるダンゼルから追求されないために、ガムルはまたグラスをぐっと傾けた。

その爽快感を心地よく感じながらも、その口を離した。

「お前はあるのか？」

逆にガムルが問い返すと、ダンゼルは意外そうな顔をした。

「僕？ 前の皇帝はあるけど、今のはあまり好きになれなくて会いに行かなかったよ。」

ダンゼルの表情には若干の陰りが見えるが、それを疑問に思うよりも早く、ガムルの口は動いていた。

「……何でだ？」

「だって、『皇帝』は基本的に王家の中で議会による投票によって決まるのに、王家ではないアイツが即位するのはおかしいよ。絶対に何か裏があるんだ。」

ダンゼルのその発言にガムルの肩がピクリと震えた。

ガムルは知っている、いや、見た。今の皇帝が即位したその許されない方法を……

「それに最近、王家からの発表が一つもないし。」

王家とは言わば、ロザンツ帝国の『象徴』である。

そのため、重大な事件や決定事項があれば王家の方から発表があるのだ。

しかし、最近では王家からではなく、皇帝、上級貴族によって組織されている『帝国議会』の方から発表されている。

これはこの国では初めてのことだった。

それだけに、ダンゼルだけではなく国民全員が疑問に思っているのだ。

それに加え、私腹を肥やそうとしているのが見え見えの皇帝の政策。

そんな皇帝を支持する者は、貴族以外にいないといっても構わないほどに少ない。

だが、そうは言っても帝政における皇帝の権力は絶対。国民達に
はどうしようもなかった。

「本当にな。なんでだと思う？」

ガムルはなぜか知らず知らずの内にこう質問していた。

聞く必要はないのに。

ただ、自分の古傷を触るだけだと言うのに。

「まさか王家が滅ぼされたとか・・・・・・・・」

ズキッ

だが訊いてしまった、聞いてしまった。

ダンゼルの言葉にガムルは心が悲鳴を上げるのを聞いた。

手が震える。グラスからジュースが零れ落ちそうになるのを何と
かもう一方の手で押さえた。

だが、その代わりに足が震え始める。

「・・・・・・・・悪い。気分が悪くなったから休んでくる。」

「え？ だけど挨拶しないと・・・・・・・・」

「適当に言っておいてくれ。」

焦るダンゼルに背を向け、震える足に鞭を打ち、すぐ後ろにある

扉をくぐった。

後ろ手にしっかりとドアを閉めた後、ガムルはまだ震えの治まらない足を引きずるようにゆっくりと自分の部屋へ歩き出した。

「全く、どうするんだよ。」

ダンゼルは恨めしげに扉を見、口を尖らせた。
傍から見れば子供がいじけているようにも見える。

「この場の意味がないじゃないか。」

「ダンゼル、ガムルは？」

歩み寄ってくるリタニアにダンゼルは首を横に振り後ろの扉を親指で指した。

「気分が悪くなったんだってさ。」

「ふーん。ちなみに二人で何の話をしてたの？」

「ヒューズさんや皇帝についてだよ。」

そう答えながらダンゼルは気づいた、リタニアの目が一瞬細ったのに。

「ダンゼル、その会話覚えてる？」

「う、うん。」

リタニアの何時になく真剣な眼差しにダンゼルはぎこちなく頷く。

それを確認しながらリタニアは近くの椅子に腰を下ろし、ダンゼ
ルを促した。

「それ、詳しく教えて。」

「……………っていう話だよ。」

先ほどガムルと話したそのまま伝える終わると、リタニアは顎に
手を当て黙り込んだ。

「なるほど……………これは放っておけないかもしれないわね。」

微かに動く唇とともに吐き出された吐息のような呟き。

だがそれは微かに空気を揺らすだけでダンゼルの耳には届かなか
ったようだ。

「リタニアさん？」

微動だにしないリタニアの顔を不安げに覗き込む。

確実にその視界には入っている。だが反応はない。

しばらくその前で手を振っているとやっとそれに気づいたのか、
リタニアは手を目で追い出した。

「ん？ ああ、ごめんごめん。ぼーっとしてた。」

リタニアは常に明るく振る舞い、周りを元気づける、そのような立ち位置だとダンゼルは認識していた。

だが、今の彼女は違う。

どこか悲しげな、迷っているような、複雑な表情をしている。

そのような顔を見るのは初めてだった。

「じゃあ私、リユーガにガムルのこと伝えてくるから。」

「え？ あ、ちよつと……」

だがそれをダンゼルが問うよりも早く彼に背を向け歩き出した。

足早に去っていくリタニアに手を伸ばすが、その手が掴んだのは生ぬるい空気だけだった。

暗い灯りも点いていない部屋の中、ガムルはベッドに横たわっていた。

開け放たれた窓から昼間に蓄積した熱気が街の明かりと共に入ってくる。

少し汗ばんだ額を光らせながら、ゆっくりと瞳を閉じた。

瞼の裏に浮かぶのは『二度』の惨劇。そして、月を背に齒をむき出しにして笑う、狂気に満ちた獰猛な獣。

そう獣だ。

口を裂けそうなほど吊り上げ、狂ったように人の血を求める。

獣だ。

窓にはめられた格子の向こうで、親しい人達の頭を千切る、切り落とす、吹き飛ばす。

地獄だ。

人形のように声もなく、ただ水しぶきの音を奏でながら倒れていく。

それに対して出来ることは、目の前で震える唯一の繋がり of 耳を塞ぐこと。

そして、ただただ強く目を閉じ祈ることだった。

これが夢だと。

これが幻だと。

いつかこれが覚めるのだと。

だが、月が山の向こうに消え、獰猛な笑みが消えても、何も変わらなかった。

少年は目を閉じ続けた。

もう二度とこれを見まいと。

ただ、強く、強く、強く。

そして響くのは悪魔の囁き。

『私が憎いか？ 少年』

「ハッ！！」

そこでガムルは飛び起きた。

「嫌な……夢だ。」

より暗さを増した部屋の中、短針に刻まれている数は四。

もう街から灯りは殆ど消え、月明かりのみが仄かに射し込んでいる。

ガムルはベッドから降りるとすぐに着ていたシャツを脱いだ。

汗を吸ったそれは肌に張り付き、ガムルの心のように重い。

脱いだシャツをベッドに放り投げ、上半身を空気にさらしたまま

鏡の前に立った。

大きな鏡に映る、射し込む光に照らされた自分の体。

普通の男よりも大きな肩幅に、筋肉。そしてその上につけられた大きな目、鼻、唇、手、腕、足。

それにガムルは無意識に拳を振りかざしていた。

だが、鏡が砕けることはなかった。

彼に残された自制心がその拳が鏡に触れる寸前で止めていた。

「クソッ」

どす黒い感情が彼の中を駆け巡る。

それを抑えつけるようにガムルは長く息を吐いた。

「あと少しだ。」

他の四人には見せない深い闇を閉じ込めた瞳。

「後、一年・・・・・・・・まだ一年もあるのかよ、くそっ」

歯が砕けそうなほど強く噛み締める。

ギリリと砕けそうな音が鳴ると、ガムルはふとその力を緩めた。

まだ、落ち着いてはいないがいくらかましになった心と共に彼は動いた。

強く握った拳を開き、昼間に買ったシャツを頭に被りながら彼は部屋を飛び出した。

ふらふらと歩いていると、ガムルはいつの間にか昼間、服を買っていた商店街にいた。

夜中だと言うのに昼間ほどではないにせよ、かなりの人が行き交っている。

ただ昼間と違うのは、開いている店が、バーや風俗店に変わったことと、アルコールの臭いが嗅覚を刺激することだけだ。

ガムルはブルツと体を震わせた。

いくら夏が近いとは言え、流石に夜中は肌寒くなる。ガムルは上着を持って来なかったことを悔やんだ。

だが取りに帰るのも面倒だ、とそのまま道を歩き出した。

奥に進むにつれ、相変わらずアルコールや衛生上よろしくなさそうな臭いが充満しているが、幾分か寒さも和らいでいた。

特に目的もなく出てきたガムルはキョロキョロと辺りを見回す、こともなく、ただ前を見据えて歩いていた。

ガムルが外に出てきたのは、ただ喧騒にまみれるため。気分が落ち込んだ時、部屋に引きこもっていても仕方がないという考えからだ。

店の方から風俗嬢が誘いの声がかかるが、無視。

肩がぶつかり怒鳴られるが、それも無視。

どこも煌びやかに飾られているが、どれ一つとしてガムルを惹きつけるものがなかった。

「そろそろ帰るか……ん？」

長い商店街の最後、行き止まりまで歩いたガムルは、ふと一番端にある店が目にとまった。

『夢の石』

人一人がやっと通れる入り口の横にかけられた看板にそう書かれていた。

「夢の石ねえ。」

雰囲気から『破天石』を扱っているのだろうと予想したガムルはその入り口の前に立った。

どうやら店は地下にあるようで、入ってすぐに階段がある。

少しためらいながらも好奇心に負け、ガムルはそこに踏み込んだ。

階段は狭いが長さはかなりあるようで底で何か仄かな光が見えた。

ガムルは石で出来たそれを慎重に降りていく。

横の壁が石で積み上げられているせいか、ガムルは肌寒さが増し

たように感じた。

まるまる二分かけて降りきると、目の前に木製の扉があった。

一枚の板から作られたもののようで、かなり年季がいつているが割れたりなどは一切していない。

少し錆び付いたノブに手を掛け、ゆっくりと開いた。

急に増してくる光量。それに目を細めながらガムルは足を踏み入れた。

そこは地下ということもあってか、ガムルが想像したものよりも広く、また明るかった。

入って左手には様々な鉱石が所狭しと並べられ、右手には酒場がある。

酒場にはこれまた意外にも、かなりの人が集まっているのが見える。

「いらっしやい。」

ガムルはそこでボーっと立っていると、そう声をかけられた。

声の方を見るとそこには、腰にエプロンを巻いた茶髪の若い女性が立っていた。

「やあ、見かけない顔だね。ここは初めてかな？」

「あ、ああ。」

ガクガクと頷くガムルに微笑みながら、彼女は頭に巻いていたバンダナを外した。

「じゃあ初めましてか。」

私はこの店主兼職人をしている麗那だ。よろしく。あんたは？」

「ああ、ガムルだ。よろしく、レイナ。」

差し出された手を軽く握り返してからガムルはもう一度店を見回した。

「何をお探しかな？」

「いや、実はふと目に止まって入っただけ……………」

「ちなみに本日のオススメはこれだよ。」

ガムルの言葉を遮り、麗那は近くに置いてあった珠を取った。

「いや、だから持ち合わせが……………」

「鉱山の最深部でしか採れない特殊系だよ。」

「だ……………」

「見てみなよ、この中に刻まれた紋様。綺麗だろ？」

押され負けしたガムルは渋々それを手に取り、固まった。

綺麗な赤い透明な珠、その中に刻まれているのは鷹が翼を広げている紋様だ。

ガムルの瞳がそれから離れない。

真紅の珠を握るガムルの手は、微かに震えている。

（なぜ、ここにある？）

「珍しいだろ？　あまり見かけない……」

「どこに、これがあった？」

「ん？　スラヌ鉱山だよ。それがどうかしたかい？」

急に真面目になったガムルの顔を麗那は覗きこむ。

だが、ガムルの狭まった視界に彼女が入ることはなかった。

唯一ガムルの目が捉えていたものは、その血のように紅い珠。

（なんでこれが、これは長が封印したはず……）

「おーい。封印ってなんのことかな？」

目の前で手を振る麗那にガムルは目を見開いた。

「なんで、それを！？」

「いや、自分で言ってたから。」

呆れたように応える麗那にガムルは恥ずかしさからか顔を背けた。

この暑さにも関わらず、真っ赤な顔から湯気が出ている。

「なあ、これいくらだ？」

それを隠すように敢えてぶっきらぼうに尋ねた。

「五十万リラだよ。」

目を輝かせながら応える麗那に苦笑しながら、まだ顔を赤らめたままガムルは珠に視線を落とした。

（いい値段するな・・・）

「実は今、持ち合わせがないんだ。

だから、これ取っておいてくれないか？」

「はいはい。了解了解。」

ガムルの提案に麗那は間髪入れず、満足げに頷いてみせた。

「一応、三日は取り置きしてあげるから。どうせそんなに早く売れないだろうしね。」

「ああ。助かる。」

その後、二三事話してから、にこにこ満面の笑みを浮かべる麗那に見送られながら、ガムルは店を出た。

その帰り道、ガムルは来た道とは違い薄暗い路地裏を歩いていた。

灰色の大きな壁には所狭しと大きな文字や女体の落書きがされ、地面にはゴミが散乱し異臭を放っている。

そこをさらに進み、銀翼旅団のメンバーのいるホテルが見えてきたところでガムルは足を止めた。

「一応、お前と話すためにここを通ってるんだ。出てこいよ。」

少し大きめの声が路地裏に木霊する。

それに混じり、後ろからコツコツと足音が近づいてきた。

「全く、あなたはどれだけ私の自信を打ち砕くおつもりですか？」

振り返ったガムルの前に立つのは、お馴染みの黒い服に身を包んだファーマルだった。

「何の用だ？」

前回と違って全く殺気を感じないぞ？」

表情を貼り付けないガムルにファーマルはいつものごとく一礼。

「今日は『忠告』、いや、『警告』をしに来ました。」

「『警告』？」

眉をひそめるガムルにファーマルは頷く。

「ええ。ご存知ですか？ この街に今、『四聖人』がいるのを。」

一言。

そのたった一つの言葉に、ガムルは自分の中で何かが沸き立つのを感じた。

「誰だ？」

「はい？」

ガムルは憎しみと怒りに満ちた目をフォーメルに向けた。

「『四聖人』の内の誰だ、と聞いているんだ。」

ガムルの表情の意味を理解したフォーメルはいつもの笑みを浮かべたまま首を横に振った。

「残念ながらあなたの『意中の人』ではありませんよ。」

「ちっ」

その舌打ちを合図に、ガムルの中で沸騰していたものが一気に冷めていく。

「で、それがどう俺達に関係があるの？」

「その方の目的は、もちろんあなた方です。」

「……なぜそれを俺達に教える？」

「我々にとっても、邪魔な存在ですから。」

さらっと国内の裏事情をこぼすフォーメルにガムルは溜め息をつくしかなかった。

「昨日の晩にお前と一緒にいたやつのことだよな？」

だが、ガムルもある程度フォーメルという男を把握していた。

ならばやることは一つ。

一つでも多く情報を得る。

「やはりお気づきでしたか。」

それにしても、上手く打ち解けているようで安心しましたよ？
どうでしたか、久しぶりの『再会』のご感想は？」

気味の悪い笑みで尋ねてくる色白の紳士。

それにガムルはあからさまに嫌そうな顔をしてみせた。

「ない。」

「それにしても本当によく潜り込めましたね。何と話したんですか？」

素っ気ない答えで話を切ろうとするが、その反応が面白いのか、
フォーメルは口は止まらない。

その問いにガムルはさらに顔をしかめた。

「思ったことを話したただけだ。人聞きの悪いことを言うな。」

失礼な、と言いかけたが、元々無礼なやつに何を言っても同じだと
敢えて口にしなかった。

「ははっ、そうですか。」

敵同士とは思えない和やかな会話。だがその裏でどす黒い腹の探
り合いが行われていた。

「お前はどこまでついてくる気だ？」

「一応、あなた方の旅が終わるまでですよ。監視しろと命令されているので……」

「命令ということは上も動いているんだな？」

してやったりというガムルに対し、フォーメルは額に手を当てた。

「誘導尋問ですか。やられました。」

ガムルは、これまでの仕返しができた、とニヤニヤしながら、がつくりと肩を落とすフォーメルを見た。

それを恨めしそうに見返した後、男は一步後ろにさがった。

「そろそろ失礼します。」

これ以上話すと叱られてしまうので。」

シルクハットを頭から外し、一礼。

だが、まだ引きずっているのか、微かに手は震え、その笑顔はどこかぎこちない。

「まあ、落ち込むなよ。こういうこともある。」

「……次は、負けませんよ。」

捨て台詞なのか分からない言葉。

その声が消えていく前に、フォーメルの姿は空気に溶け込むように消えた。

「ククク」

いいストレス発散になった、と小さく笑いながらガムルもその路地を出た。

薄暗い路地と違って、ホテルの前は既に朝日が射し込んでいる。

その角を出たところでガムルは足下で何かが輝いているのに気づいた。

しゃがみこみ、太くごつごつ手で掴んだそれは、少し長めの金髪だった。

「汚ね。」

それをすぐさま払い落とし、手をズボンにこすりつけながらガムルはホテルへと歩き出した。

ガムルはホテルの最上階にある彼らに割り当てられた部屋の扉をゆっくり開いた。

夜明けが近いとは言え、中央にある廊下はまだ薄暗い。

そんな中、リビングの向かいの部屋から光が一筋漏れているのが見えた。

（誰か起きてるのか。）

出来るだけ音をたてないようにガムルはゆっくりと玄関のドアを

閉め、擦り足で廊下を進んでいく。

「遅かったね。」

だが、その努力も虚しく、丁度その部屋の前で聞き覚えのある声に呼び止められた。

一瞬、素通りしようかという考えがよぎるが、呼び止められては仕方がない、とガムルはその部屋の扉を開けた。

「どこに行ってたの？」

唯一の明かりが灯った机に向かったまま、ダンゼルは背中越しに尋ねてきた。

「夜風に当たりに行ってただけだ。」

「ふーん。」

返ってきた適当な相づちにガムルは何気なくそれに近づいた。

ダンゼルの影に隠れてあまりよく見えないが、スタンドライトに照らされた机の上にはパーツが広げられており、それを組み上げているようだ。

その中で、小さなパーツと同じようにガムルの見覚えのあるものが机に置かれていた。

「注文通り、ガムルさんの斧を使わせてもらってるよ。良かったかな？」

読心術でも使ったのかと聞きたくなるようなタイミングにガムルは若干戸惑いながらも頷いた。

「ああ。全く問題ない。

後どのくらいかかるんだ？」

ガムルの質問にダンゼルは机の上に視線を落としたまま頭をかいた。

「えっと、これで最後……あつ、しまった。これじゃダメだ。」

「どうかしたか？」

頭をかきむしるダンゼル。それに驚いたガムルは机の上を見下ろせる位置まで移動した。

「ごめん。ガムルさん。僕のミスだ。

『破天石』のバランスを間違えちゃった。」

机の上に手に持っていた赤い破天石を置き、頭をかきむしった。

「僕がこんな初歩的なミスをするなんて……」

「悪い。俺の変な注文のせいだよな。」

近づいたガムルにダンゼルは首を横に振ってみせた。

「いや。その注文に応えるのが僕の仕事なんだ。ガムルさんは何も悪くないよ。」

そう言うダンゼルの肩越しにガムルはそれを覗いてみた。

ガムルの漆黒の斧、それ自体特に形状は変わっていない。ただ、その刃の部分に五つの窪みが彫られていた。

既にそのうちの四つが埋まり、後一つ、ガムルから見て左端の窪みのみがぽっかりと口を開けていた。

ダンゼルは他の『破天石』をそこに嵌め込んでみるが、机上にあるパソコンを見てため息と共にそれを外した。

「全然ダメだー」

そう言いながらも不機嫌そうに今置いた破天石をつついた。

「こいつは使えないし、持ち合わせでハマるやつもないし。」

「なあ。悪いけど、何の話だ？」

ガムルがダンゼルの言葉の内、理解できたのはおよそ三割。残り
は全く耳に留まりもしなかった。

キャスター付きの椅子をくるりと回し、ダンゼルはポンと手を打
った。

「『機械剣』には二つの特徴があるのは知ってるよね？」

「ああ、多分。」

やや自信なさげなガムルにダンゼルは指をピツと上に立てた。

「一つは『形状変化』。携帯時の『銀筒』ぎんとうと呼ばれる棒状から複数の
武器に形を変えることだね。」

そう言いながら、机の上にあった斧を手に取り、『銀筒』の状態
にしてみせる。

それを見て頷くガムルにダンゼルはまたもう一本指を立てた。

「で、今回問題なのは二つ目の『増幅機能』

『機械剣』には装備できる『破天石』の効力を増加する機能があるけど、何でも装備出来るわけじゃないんだ。」

そこまでダンゼルが言ったところで、何を言いたいのかガムルは理解した。

「相性ってことか？」

「そういうこと。」

『破天石』も人と同じだよ、好き嫌いがあるんだ。

それをこの機械で調べるんだけど、ほら、波が見えるでしょ？」

ダンゼルは銀筒を斧に戻し、それを机に置くと代わりにパソコンを手を取った。

ガムルがその画面を覗きこんで見ると、四角く区切られた表に緑色の波が描かれている。特に異常はなく、綺麗な曲線だ。

「これが大きくて綺麗だったら言い訳だ。」

「そう言うこと。だけど、こうすると、」

ダンゼルが机の上にあった『破天石』をはめ込んでみると、

「へえ、確かに小さくてぐちゃぐちゃだな。」

ガムルの感想通り、綺麗な曲線を描いていた波は乱れ、波自体の高さは半分以下にまで落ちてしまった。

「つまり、『破天石』と『機械剣』、更にはその持ち主との組み合わせ次第で最強の武器にも最弱の武器にもなりえるんだ。」

斧を見ながらダンゼルは続けた。

「それに悪ければ暴発することもあるし。

まあ、そうならないようにそれを調整するのが僕達『整備士』の仕事だけだね。」

「へえ」

ガムルは納得した風に頷きながら机の上に転がる『破天石』を手にとった。

「なあ、じゃあ新しいのを買いに行かないといけないんだよね？」

ガムルの確認にダンゼルは頷く。

「この辺りに鉱山はないから、そうなるね。」

そう答えるダンゼルから視線を外し、ガムルは一度手の中の石を見た。

赤色のそれは宝石のように綺麗だが……だが、あの珠ほどではない。

どうやら思った以上にあの珠に惚れ込んでいたらしい。

そう気づいた時には、すでにガムルの口は動いていた。

「実はさっきまで商店街にある『破天石』の店に行ってたんだ。」

今までとは違う遠回しな言い方に、ダンゼルはガムルが言いたいことを悟ったのだろう。ニヤリと笑ってみせた。

「気に入ったのでもあったの？」

「ああ。だけど……」

金が、と続くはずのガムルの言葉は、またもダンゼルに遮られた。

「お金は気にしなくてもいいよ。たんまり軍資金はもらってるから。」

それでも金額が金額なだけに不安を隠せないガムルは、本当に大丈夫か、と視線で問いかけるが、ダンゼルは「大丈夫だよ」、と頷き返した。

「……それに、こんな夜中にやっている店っていうのも気になるしね……」

ぼそり、と囁かれる言葉。それは微かにガムルの鼓膜を揺らすだけだった。

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、何も言っていないよ。」

それより部屋に戻って寝たら？ あまり寝てないんだよね？」

何か言ったような、とガムルは首を傾げていたが、それを問い質す前にその巨体は部屋の外へと押し出されていた。

商業都市（中篇）

暗く狭い階段を『それ』は降りていく。

「・・・・・・・・」

闇をそのまま纏ったような黒いローブに身を包み、その顔は目深に被られたフードに隠されている。

陽は昇っているのに、ここは夜と間違えるほどに暗い。

コツコツと石段独特の足音が狭い通路に反響する。

『それ』は無言のまま階段の最下層にある踊場にとどり着いた。

「・・・・・・・・」

漆黒の世界に射す一筋の光。

その先から漏れる光に照らされながら、『それ』は目の前にある扉を開いた。

扉が開くにつれ強まる光。

だが『それ』は暗闇から急に明るい場所に来たにも関わらず、何の反応も見せなかった。

「ん？ すいませーん。まだ店は開けていなんです。」

そんな男に快活な声がかかった。

カウンターの奥から聞こえてくるそれはまだ若い女性のもの。

「・・・・・・・・」

だが、それはその声を無視し、左手へと進んでいく。

「お客さーん？」

更なる制止の声。

それでも、それは聞かずに歩を進めていく。

そして、それは立ち止まった。

様々な色の石が並べられている棚。

そのうちの一つの前にそれは止まっていた。

「・・・・・・・・」

本当に『それ』は生きているのだろうか。

『それ』は全く微動だにしない。

呼吸のために上下するはずの胸すら動かない。

その完璧なる制止を保つその手がピクリと動いた。
ゆっくりと持ち上げたその手を目の前の物に伸ばした。

黒い手袋をはめた手が取ったのは、

『売約済み』の札がついた、紅い珠だった。

「おい、待て!!」

高く昇っていた陽が傾き、空が赤く染まり始めた頃、無機質な壁に囲まれた路地を駆ける二つの影があった。

「くそっ」

二つの内、後ろ。追いかけている巨漢の男、ガムルは前を走る黒い影を睨んだ。

二人はかなりの距離を走っていた。

現に坂を駆け上がっているが、そのスピードも、二人の距離も変わる様子がない。

かれこれ数十分続くこの状況に、ガムルは苛立ちを募らせていた。

（何か、足止めできるものは……あれは！）

両脇にそびえる灰色の壁。

辺りを見回していた目が、その下で止まった。

スピードを落とさずに少し方向を変え、それを驚掴みにした。

手の中にあるのは、一メートルほどの二本の鉄パイプ。

それに一度目をやってからガムルは前を走る影を見た。

黒いローブに身を包んでいるせいで性別は分からないが、これまでの逃走劇での動きを見る限りただ者ではないのは明らかだ。

それに標的を絞ったガムルは、走りながらその内の一本を投擲のように構え、

「おらぁああ！！」

投げた。

人が投げたとは思えない速度でそれは一直線にその影に向かっていく。

「……………っ!？」

殺気を感じたのか、その影は顔を後ろへ向けずに大きく横へ飛ん

だ。

パイプをなめるようにかわす、一瞬の気の緩みも許さない極限の動き。

その人影の足がズザッと地面を滑る横で、標的を失った鉄パイプはその先の壁につきたった。

「やっと追いついたぞ。」

音叉のような音になるそこは、直角に曲がった曲がり角だった。

二十メートルは離れていたはずの二人の距離はもう三メートルしか残っていない。

しかも、その人影は角に追いつめられている。
簡単に逃げることはできないのは明白だった。

（完全に、追い詰めた。）

……なぜこの様な状況になったのか。それは半刻ほど遡る。

まだ陽が高く昇っている頃、ガムルとダンゼルの二人は昨日訪れた商店街を歩いていた。

夏が近づいてきている中、今日は快晴。

ランニングから覗かすガムルの肩には大粒の水滴が浮き出していた。

「あっちー」

シャツの襟元でパタパタと扇いではみるが、ガムルの体には生ぬるい風しか来ない。

それに本日何度目かのため息をこぼす。

「マジで溶けそう。」

「本当に暑いね。」

そう横で同調するダンゼルはと言うと、いつも通りのコート姿だった。

暑い暑いと言っているが、その体からは一滴も汗が出ていない。

その平然とした立ち振る舞いを恨めしく思いながら、ガムルは額の汗を拭った。

「つたく、リユーガさえあんなことを言わなければもっと涼しい時間に出れたのにな。」

「本当にね。」

だるそうな、生気の失せた目でガムルは前を見た。

「フィロちゃんは何買う？」

「私はドレスとか着てみたいです。」

「いいわね。いいわね。じゃあ、まずは、」

既視感を感じるその光景にまたため息をつきながら、今朝のことを思い出した。

全ては今朝の龍牙の一言で始まった。

「明日だが、パーティーに出ることになった。」

それは、ガムルが二度寝を終え、リビングで全員揃ってダンゼルが作った朝食を食べていた時だった。

ピシッ

その時、ガムルは確かにそのような音を聞いた。

その出どころへ目を向けると、案の定リタニアが、そして意外にもフィロも固まっていた。

「ねえ、リユーガ？」

「なんだ？」

「私達も招待されているよね？ リユーガ」

「あ、ああ・・・・・・・・」

キラキラと眩いほどに目を輝かせながら詰め寄る二人に、龍牙の顔が若干引きつっている。

それを気にもかけず、尚も二人は詰め寄る。

「ちなみに主催は？」

「ヒューズだが、それが・・・・・・・・」

「よっし！！　フィロちゃん。二十分後に街に繰り出すわよ！！」

「ラジャー！！」

「お、おい・・・・・・・・」

龍牙の制止も聞かずに恐るべきスピードで朝食をかき込むと、二人はドタバタと部屋を飛び出していった。

閉じられたドアの向こうからはドツタンバツタンと収納が開閉される音が忙しく響いてくる。

ガムルはしばらく無視された龍牙を憐れみの目で見ていたが、肩をつつかれる感触に、視線をそのままに体をそちらへ傾けた。

「なんだ？」

「リタニアさん達は買い物に行くんだよね？」

「そうだな。」

ガムルは頷きながらカップに入ったコーヒーを啜った。

「それがどうかしたか？」

いつもと変わらない味に小さく笑みを浮かべながら、妙に切実な声を発するダンゼルに先を促した。

「いや、荷物持ちは誰がやるのかなーって。」

そのダンゼルの一言で、ガムルはカップを持ったまま固まった。

脳裏によぎるのは炎天下の中、延々と重石を持たされ続ける拷問（荷物持ち）。

「ダンゼル、」

「うん。そうすべきだと思う。」

頷きあう二人。

決断は早かった。

目の前にある朝食を急いでかき込み、コーヒーを一気に飲み干す。

食べ物は大切に、という言葉を真っ正面から裏切ってから、二人は落ち着く間もなく立ち上がった。

まだ何食わぬ顔でのんびりとコーヒーを飲む龍牙。

その横をすり抜け、二人は大急ぎで玄関へと駆け出した。

「ダンゼル！！ ガムル！！ どこ行くの！！」

走る二人の後ろから怒号が聞こえてくる。

それに合わせ、顔の横を何かが通り過ぎた。

「ま、マジですか・・・・・・」

走り続ける二人の横で、何リラするのか検討もつかない壺が跡形もなく砕けた。

「頭下げて！！」

ダンゼルの悲鳴に近い叫びとともに、ガムルの頭が下へ押し下げられる。

今度は一瞬遅れて、頭があった空間を氷の塊が貫いた。

刃物のように鋭いそれは数メートル先のドアに突きたつ。

「こ、殺す気かよ！？」

いきなりの死への恐怖につまずきそうになるのをこらえ、ガムルは尚も走り続けた。

恐怖。それだけが今、ガムルを突き動かしていた。

氷の刺さるドアまで、後三メートル。

亀のように首をすくめたまま、勢いそのままに二人は玄関から飛び出した、

バン

「バン？ あがつ！？」
「ぐえっ！！」

逆さになる視界の中、するはずのない爆発音に首を傾げていると、ガムルはそのまま首から地面に落ちた。

その横でダンゼルが背中から落下し、ひかれたカエルのような声を上げる。

ぐらぐらと揺れる視界にガムルは横たわったまま動けない。

何かが焦げる臭いに覚醒されたガムルは、痛む首をさすりながら体を起こした。

「いてて。おい、ダンゼ、ル・・・・・・・・」

そして見つけた。

真珠のように白く、だが虎のように発達した美しい足。

ガムルは首の痛みなど忘れ、恐る恐るその視線を上げ、見てしまった。

「ガムル、どこに行くの？」

満面の笑みを浮かべている、リタニア悪魔を。

「ほらその二人!!　なにぼーつとしてるの!?!」
前方から聞こえる悪魔の声にガムルは過去から現在へと引き戻された。

「へいへい、すみません」

「はい、は一回!!」

どこのオカンだよ、と言いたいが、言えない。
それは火に油を注ぐことに等しい。

ガムルはその微妙な表情でダンゼルを見ると苦笑いを返された。

「早く目麗しい美女二人をエスコートしなさい!!」

「・・・自分で言うなよ。」

「何か言った!?!」

色々と突っ込みたい衝動を抑え、首を振った。

「いえ、なにも。」

「ならさっさとしなさい!!」

リタニアの一方的な言葉の投擲に疲れたガムルは、素直に彼女達の方へと歩き出した。

「で、ガムルが言ってた店ってどこなの？」

人の数も減ってきた商店街。夕飯の材料などを買い終えた客が思いの通路へと散っていく。

その中リタニアは、他の迷惑などお構いなしに後ろを振り返った。薄れつつある喧騒。その中心に目的のものはあった。

「商店街の、外れ、だよ。」

「だけど、まだ、開いてない、ぞ。」

両腕に塔のように箱を積み上げられたガムルとダンゼルだった。

その色鮮やかな塔はリタニアからは二人の顔を完璧に遮っている。

遮られた二人もなんとか顔を見て話そうと左右に首を傾けるが、その塔は横幅もあるため、頭の先が少し見える程度だった。

その横では崩れそうな荷物の山をフィロが必死で押さえている。

「かなり遠いわね。なら私たちは帰るとしようかな。」
「は？」

「は？」

全く悪意のない無邪気な意見に男性陣から声が上がった。

それに周囲の人達が彼らから距離をとる。

「何よ、文句ある？」

「いやいやあるだろ。荷物は？」

リタニアはしばらく考え込み、フィロと目配せすると、共に塔の中ほどを両手で挟んだ。

「仕方がないから半分持って帰ってあげるわよ。」

「半分かよ!？」

「なによ。か弱い女の子二人にこの荷物を持たせる気？」

「うっ」

リタニアの傍から聞いたら正当に聞こえる言葉。さらにフィロの、この下衆が、と言いたげなその視線に、ガムルはがっくりと肩を落とした。

ダンゼルもそれを慰めようとするが、彼自身も同じ状況にあることを思い出し、うなだれた。

「よろしくね」

「お願いします。」

満面の笑みで反対へ去っていく二人を残された二人は睨むしかできなかった。

結局、リタニアの巧みな言葉に押し切られたガムル達は肩を落としたまま、元の方へ向き直った。

彼女達に荷物を押しつけたい。

だが、いくら男勝りとはいえ仮にも女性。それは彼らの信念に反することだった。

かといってこのまま荷物を置きに帰るのももったいない気がする。

ガムルとしては荷物があるとは言え、あの破天石が今すぐ欲しい、という気持ちが強かった。

ならばすることは一つ。

「とりあえず行くしかないな。」

「僕、帰りたいよー」

泣き言を喚くダンゼルを軽く蹴飛ばし、ガムルは目的地へと歩き出した。

腕に荷物を抱えたまま一時間。ガムル達はやっとのことで目的地、『夢の石』にたどり着いていた。

商店街のはずれにあるその辺りは、もう闇に包まれている。ぽつぽつと灯りが設置されてはいるが、足下を照らすにはあまりにも頼りない。

時刻はすでに八時を回ろうとしていた。

「やっとなついたー」

疲れたという表情を隠すことなく出しながら、ダンゼルはふらふらと近くのベンチに腰掛けた。

「僕待ってるから行ってきなよ。」

「ああ。」

私的な目的というのもあって、ガムルは何も言わず荷物をダンゼルの横に置いた。

「荷物よろしくな。」

「はいはい。お金は渡したよね？」

「ああ。持ってる……ん？」

懐からかなり厚みのある茶封筒を取り出してみせながら入り口に近づいた、その時だった。

「痛い！！」

いきなり受けた肩の衝撃に仰け反ったガムルの横を黒い影が通り過ぎた。

その一瞬の間、その目に見覚えのあるものが映った、

紅い珠が。

「おい！！ それは、っ！？」

それを問い詰めようと振り返るが、それ以上前に進めなかった。

その巨体がふわりと空中に浮かび、そのまま向かいの建物に叩きつけられたのだ。

「がっ！！」

「ガムルさん！！」

ドサリとそのまま地面に落ちたガムルにダンゼルがすぐさま駆け寄る。

だが、それよりも早く起き上がったガムルは見たくない光景を目の当たりにした。

「嘘だろ……」

呆然とするガムルの前で、あの店から煙が噴き出しているのだ。

しかし、なぜだろうか。燃えているはずなのに階段から光が一切出ていないのだ。

それに気づいたガムルはすぐに立ち上がり、同じく呆然としていたダンゼルに叫んだ。

「ダンゼル！！ 中に多分一人、レイナっていう女がいるハズだ！
！ 全身にできるだけ高濃度の水の膜を張って助けてくれ！！ この炎は普通じゃない！！ 火がついたら最後だぞ！！」

その言葉にハッと我に返ったダンゼルはホルスターから機械剣を引き抜いた。

「分かったけど、なんでそんなことを!？」

「いいから早く行け!! 俺はアイツを追う!!」

ガムルの指差す先にはあの黒い影。

かなり小さくなってしまったが追いつけない距離ではない。

「頼んだぞ!!」

「ちょ、ガムルさん!？」

騒ぎを聞きつけた人達の塊の中、ダンゼルの制止を振り切り、ガムルは駆け出した。

「もう逃がさないぞ。」

右手に持つ鉄パイプを握りこみ、ガムルは目の前の黒い影を見た。身長はガムルの肩より少し高い。平均より少し高めに見える。だが、それからは性別が判断できない。

黒いローブを身に纏っているせいでガムルには女性特有の曲線の有無を確認できなかったのだ。

「お前……誰だ？」

ガムルはスッと目を細め、見失わないよう目の前の影を睨んだ。

辺りはもう暗い。いつもなら満天の星空や月が地面を照らすはずだが、都市部の光のせいだろう。そこにはお互いの姿を視認できる

だけの微弱な光しか差し込んでいなかった。

闇の中、動かない影。

そんな中、その手元で何かが紅色に光った。

「てめっ!!」

それにいち早く気づいたガムルはすぐさま駆け出し、その常人より一回り大きいその右の拳を突き出した。

冥力を纏ったその拳は、バチン、と空気の壁を貫く音を奏でた。

そう奏でたのは空気を貫く音。

(なっ!?)

驚くガムルの目の前に、その姿はなかった。

一般の動態視力では視界に留めることすら難しい攻撃。なのにそれが捉えたのは影がいた空間だった。

そして捉えたはずのその本体は、すでになら空きとなったガムルの右側に潜り込んでいた。

ガムルもすぐさま対抗しようとその頭部に向けて右肘を引き寄せ
る。

だがそれよりも早く、その影は紅い珠を握ったままの拳を脇腹へと叩きつけた。

拳を突き出した不安定な状態でそれがよけられる訳もなく、ガムルの体はくの字に折れ、そのまま吹き飛ばされる。

「ぐっ!!」

一回地面で跳ねてから体勢を立て直し、屈んだ状態で地面を滑った。

ザザザッと靴の裏で細かい小石をすりつぶす音が壁に当たり反響する。

巻き上げた砂で視界が悪くなる中、ガムルは痛みに顔をしかめていた。

（体を反らさなかったら、肋骨が逝ってたな。）

胃の奥からこみ上げてくるものを押し込み、ガムルは左手に握っていた鉄パイプを両手で構えた。

鉄パイプは戦闘の補助として持っていたが、そんな余裕は今のガムルにはなかった。

その動作の間にも影の左手に握られている紅い珠の輝きは増していく。

もう時間がない。そう判断したガムルはまた駆け出した。

上段に構えた鉄パイプを黒い影が間合いに入ると同時に振り下ろす。

それを影が僅かな動きでかわしたところで、手首を返し、逆に一

気に振り上げた。

突然の切り返しに反応が遅れた黒い影は、舌打ちのような音と共に慌てて後ろへ飛び退いた。

それには普段のガムルとは比べものにならないキレイがあった。それでもその鉄パイプはただそのフードを掠めるだけだった。

「ちっ」

ガムルは小さく舌打ちしながら一步踏み出した。が、すぐさまその足で後ろへ飛び退いた。

また地面を滑り砂煙を巻き上げながらガムルは目を凝らした。

暗い闇の中、何かが蠢くのを感じたのだ。

次いでガムルが感じたのは、鼻をつく空気が焦げる臭いとむき出しの肌をチリチリと刺激する熱。

影が持つ紅い珠の光に照らされ、最初と同じ距離が開いているその二人の間に、なにやら黒いものが蠢いていた。

それが何なのか、ガムルが認識した時に、その思考と共に退路は断たれた。

彼らが走ってきた道にも、大通りへと続く角の先の道、そのどちらもがいきなり爆発したのだ。

いや、そこだけではない。街の至る所で連鎖的な爆発音が轟いて

いる。

その状況を把握するとガムルは肩をすくめた。

「なるほど。誘いこまれたのは俺の方っていう訳か。」

瓦礫に埋もれた通路。さらには他の場所でも爆発が起こっている。明らかにこの事態を予測していた。

ふう、と小さく息を吐いたガムルは改めて鉄パイプを構え直した。

退路を断たれた今、ガムルにはそれしか選択肢がなかった。

ゆっくりと腰を落とすガムルの周りを、闇に紛れた何かがゆっくりと這っていく。

それを気配で感じながら少し、ほんの僅かに足をずらした。

それを待っていたかのように、今まで静止していた影の腕が動いた。

それとほぼ同時に横に跳んだガムルを追うように黒い線が走った。それは影からガムルがいた場所まで引かれ、パチパチと木が弾けるような音が聞こえる。

その間に、また距離をつめたガムルは鉄パイプを振り下ろした。

それがたどる軌道は先ほどとほぼ同じ。

それにあの二連撃を恐れてか、影は少し大きく飛び退いた。

それを好機と見たガムルは上体を倒しながら全力で走り出した。

全力の疾走を始めたガムルは冥力を刃を研ぐように鉄パイプに薄く張り巡らせ、それを横に薙いだ。

ゴウツという空気を押しつける音と共に全くの鈍器である鉄パイプが影の腹を薄く切り裂いた。

だが、どうやら衣服を裂いただけらしくその動きには乱れはない。

すぐさま振るわれた腕の動きに合わせ、黒い線に見えるそれが横からガムルに襲いかかる。

「くっ」

逆に一瞬反応が遅れたガムルは無理やり体をよじり、それをかわした。

（間合いを・・・・・・）

そのまま攻撃の手を止め、なんとか間合いを取ろうと細かくステップを踏んでいくが、回避によってバランスを崩したガムルにそんな隙など与えてくれるわけがなかった。

明かりの少ない路地裏で、闇に溶け込む漆黒の何かによる攻撃。

ガムルは自分の集中力がすり減っていくのを感じた。

それでも狭い空間で微かな光に照らされる黒い線、いや奔流を必死によけていく。

だがそれも長くは続かなかった。

ドン

「っ!？」

ガムルは自分の背に当たる固い感触に表情が強張った。

知らない間に壁際に追い込まれていたのだ。

元々広さもあまりない路地で逃げ続けられる訳がない。分かっていた。だが、回避に専念していたがために、完璧に慎重さを欠いていた。

すでに周りは囲まれており、もうそこ以外微かな光で見える地面は真っ黒に染まっている。

その空間を区切る壁も溝などが全くない滑らかな表面を見せている。

もう安全地帯と呼べる場所は存在していなかった。

「くそっ!!」

もう一度悪態をつきながらガムルは周りを見回した。

（何か、何か・・・・・・）

思考を巡らすガムル。だが、影はそれを許しはしなかった。

またゆっくりと、だが明らかな殺意を持って振るわれたその腕に

よって、黒い奔流はガムルの前方から押し寄せ、
いとも容易く飲み込んだ。

「レイナさーん!!」

モクモクと煙が立ち上る階段で、ダンゼルはリタニアが買っていたタオルを口に当てながら降りていた。

暗がりの中、外からの明かりを頼りダンゼルは進んでいたが、そのことに違和感を感じていた。

なぜ燃えているはずなのに明るくないのか。

そのことを気かけながらダンゼルは階段の最下層である踊り場にたどり着いた。

ここまで来ると煙に遮られているせいか、全く光が射し込んでいない。

ダンゼルは灯りを求め、ホルスターから機械剣を抜いた。

「『展開』」

ダンゼルの言葉に機械剣は白く輝き始め、それが収まる頃にはその手に別のものが握られていた。

その手にあったのは『長銃』と呼ぶのが相応しい、肘から先を差し込む大剣と見紛う銃身の長い銃だった。

彼はその銃身に詰められた幾つもの宝石のような破天石、その内の一つである黄色い破天石に触れた。

それと同時にその表面から術式が展開。彼の頭上に光を灯す白い球体が生まれた。

春の日差しのように優しいその光に照らされた彼の体は、キラキラと輝いている。

よく見るとその体の周りには薄い透明な膜が張られているのだ。ガムルの指示にあった水の系統を纏えというのはこのことだろう。

ダンゼルは一度それがちゃんと張られているかを確認してから、歪んだ扉に向けて引き金を引いた。バウン、という大口径ならではの獣のような銃声と共にその扉は吹き飛んだ。

少し間をおいてから、ダンゼルはそこに一気に駆け込んだ。

「なんだよ、これ………」

その頭上で輝く球体、それに照らされた室内はダンゼルはこれまでに見たことのない奇妙なものだった。

室内をうねりながら動き、片っ端から家具を燃やしていくそれは、

光を発さない『漆黒の炎』だった。

「うっ」

得体の知れない炎に怯んでいたダンゼルの耳に微かな呻き声が聞こえた。

声は目の前にあるカウンターの奥からのようだ。

ダンゼルはすくみあがる自分の体に鞭を打ち、奥に急いだ。

また傾いている扉を吹き飛ばし、ダンゼルはカウンターの奥にある部屋に踏み込んだ。

入ってから目標を見つけるのにそれほど時間はかからなかった。

真っ黒な部屋の中、入り口のすぐ横の床に、一人の女性が倒れ込んでいたのだ。

「レイナさん!!」

すぐに彼女を抱え上げると、うっと唸ってからレイナはうつすらと目を開けた。

「あなたは……」

蚊が鳴いたような細かい声にダンゼルは頷いてみせた。

「しゃべらなくていいよ。ガムルさんから頼まれたんだ。とりあえずここから出よう。」

ダンゼルはレイナを背に担ぎあげようと彼女の体の下に腕を入れてから、あることに気づいた。

（なんで、この娘は燃えていないんだろ？）

彼女が倒れている床にはもちろんのこと黒炎が燃え移っている。現に今も床に張っている板をかなりの速度で塵すら残さず燃やし尽くしている。

にも関わらず、彼女の体はどうだろうか。
全く焦げ目一つついなかった。

首を傾げながらもそのまま持ち上げると、チラリと捲れたシャツの間から横腹が見えた。

視線を逸らそう、そう思ったダンゼルの視界にほんの一瞬、またおかしいものが目に入った。

再び気を失った彼女のシャツを捲ると、なぜかその腹部に殴られたような真新しい腫れがあったのだ。

（なんでこんなものが・・・）

通常では有り得ない事象の連続にダンゼルは思考を巡らせるが、

「それより、早く出ないと。」

無理やりそれを中断し、意識を失ったままのレイナを背中に担ぎながらダンゼルは一目散に階段へと走り出した。

僅かな光を打ち消した闇はゆっくりと一步を踏み出した。

先ほどまでガムルが立っていた場所では黒い炎がパチパチと乾いた音を奏でているだけでもう跡形もない。

無音で進む黒い影。

だが、ふとそこへ向けられていた足が止まった。

フードの奥に隠れた視線がガムルがいた地点からゆっくりと上へ向けられていく。

そして目的のものを捉えた。

宙に浮かぶ巨漢の男を。

「ふう」

ガムルは地面から三メートル上の空中にぶら下がっていた。

黒炎が燃え移る寸前に、とっさに壁を蹴り、そこまで跳んでいたのだ。

宙に浮かんでいるように見えるが、それはその伸ばされた左腕があるものを掴んでいた。

そのたくましい左腕が掴んでいたもの、それは鉄パイプだった。

彼の右手にはもう一本ある。

つまり、それは一番最初に黒い影に投げつけたものだった。

投げた場所が坂であつたのと、避ける時に軌道をずらされた。その負の要因が正へと転換した瞬間だった。

ガムルはその幸運を噛み締める暇もなく、そのまま右手に握るもう一本を力一杯壁に打ちつけた。

冥力で強化されたそれは、若干の抵抗を受けながらも根元深くまで壁に差し込まれる。

ガムルはそのまま両手でぶら下がった状態になると、一気に自分の体を持ち上げた。

ピシリと壁に亀裂が入るがガムルは気にせず、体をその上まで持ち上げ、立ち上がった。

「全く。危なかったぞ、本当に。」

ふう、と大きく息を吐いてからガムルを見上げ続ける影を見下ろした、挑発的な笑みを浮かべながら。

「黒い炎、やっぱりそれ、『黒天』こくてんか。」
「……………」

「どうしたんだ？ 黙り込んで。
ほら、早く攻撃しろよ。今ならがら空きだぞ？」

明らかな挑発をガムルはしてみせるが、影は動かない。いや、動けないといった様子だった。

それにガムルは予想通りだと言わんばかりにニヤリと笑ってみせた。

「そうだな。それしか持っていないと、ここまで攻撃出来ないよな。」

ガムルのこの言葉に黒い影は初めてその体を微かに揺らした。フツと鼻で笑いながらガムルは手をポケットに突っ込む。

「まあいい。一つ訊かせてもらおうか。」

「・・・・・・・・」

無言を貫くそれに、ガムルは平坦な声をぶつけた。

「お前、どこまで知っている？」

「・・・・・・・・」

やはり無言。だが、そんなことなどお構いなしにガムルは続ける。

「あの店にはかなりの数の『破天石』があった。なのにその中からお前はその一つだけを盗んだ。わざわざ店まで燃やしたのに、だ。」

「・・・・・・・・」

「痕跡まで消しているんだ。それを盗むのが目的だったのは明白だ。答えろよ。どこまで知っているんだ？」

『六天』か、『使徒』か、それとも『この国の裏』まで知っているのか？」

その三つの名詞に影の肩が微かに揺れたのをガムルは見逃さなかった。

「知っているんだな。ならもう一つ質問しようか。」

その反応にガムルはフツと満足気に笑いながらポケットから拳を出した。

「誰からそれを聞いた？」

「・・・・・・」

「この事はこの国じゃ俺を含め、数える程しかないはずだ。誰から聞いたんだ？」

「・・・・・・」

「おいおい。」

まだ黙り込む黒い影に今まで平然としていたガムルは肩をすくめてみせ、

「もういい加減だんまりは止めにしよう、ぜ！！」

その拳を壁に叩きつけた。

ガムルの後ろにある壁は、強度、耐震、耐熱性を強化した最新の特殊な石材で造られたものだ。

だが、冥力を纏ったガムルの拳は一瞬で壁に蜘蛛の巣なヒビを生み出し、瓦礫の雪崩を引き起こした。

その流れの下にあるのは、黒い影。

それをみた影はすぐに手元の紅い珠を輝かせ、先ほどは暗闇のせ

いで見えなかった赤黒い術式を男の頭上に展開した。

その中心からは黒炎が吐き出され、降ってくる瓦礫を押し返した。

「へえ。機械剣なしでそこまで操れるのか。」

その異常なまでの熱量に一瞬で溶かされた瓦礫が、影の周りで凄まじい蒸気を噴き出していた。

「嘗て世界を破滅に導いた人間。それを駆逐するために産み落とされた漆黒の炎、『黒天』

確かに聞いていた通りの威力だな。」

「・・・・・・」

その光景に嘆息しながら、ガムルは壁を叩いた左手を服で拭った。

「なぜ知っている？ と訊きたそうだな。だけどお前は答えを知っているはずだ。」

『俺』という答えをな。」

ガムルの意味深な言葉に黒い影は視線を落とし、紅い珠を輝かせた。

同時に赤黒い術式が突き出したその右手に展開。今度こそはつきりと見える漆黒の炎をガムルに向けて撃ち出した。

打ち出された炎弾はそのまま一直線に進んでいく。

「届かねえよ。」

だがそれは、ガムルを避けるように放物線を描きながらガムルの

下の壁に当たった。

黒い影はもう一度炎弾を放とうと術式を構築するが、撃ち出される前にそれは霧散した。

その現象が理解できないのか黒い影は尚も構築を続ける。

そんな黒い影がかなり動揺しているのがガムルには手に取るように分かった。

何度か同じことを繰り返した後、苛立ちの込もった視線を向けてくる黒い影にガムルはやれやれと首を横に振った。

「無駄だ。黒炎は地上に巣くう罪深き人間を焼き尽くす、断罪の炎。地上を焼くための炎が空中を進める訳がないだろ。」

「・・・・・・ちっ」

「おっ、やっと声を発したな。そうだ、ついでにいいこと、いや、お前には悪いことを教えてやるよ。」

「・・・・・・」

先ほどと同じように黙り込むが、その意味合いが変わってきていることにガムルは気づいていた。

先ほどまでは情報を漏らすまいという警戒、そして今は、ガムルという破格の存在に対する警戒だった。

主導権はガムルの手に渡ろうとしていた。

「破天石の店の女、生きてるぞ。」

「っ!？」

意外な発言に黒い影はバツとガムルの方に視線を戻した。

その反動で揺れるフードの間から覗いた瞳は明らかに動揺で揺れていた。

「黒炎は断罪の炎だ。つまり、『必要のない死』を生み出した者だけを燃やせる裁きの炎。

アイツが死ぬわけがないだろ？」

「・・・・・・」

「悪いけど、逃がすつもりはないぞ。それに、息が荒れているな？」首を動かし、辺りを探ろうとする影をガムルは声で制した。

「そりゃあそうだよな。

機器による補助無し of 生身での術式の構築。しかも『六天』をだ。お前じゃ、容量不足なんだよ。」

相手をあざ笑うような笑みを浮かべ、ガムルは二本のパイプの上でしゃがみこんだ。

ゆっくりと動かされた手がパイプの一本を掴む。

「もう終わりにしようか。そろそろ兵士達が来るだろうからな。」

ガムルはニヤリと口の端を吊り上げながら、曲げた足で壁を蹴り、砲弾のように飛び出した。

が、

「ちっ」

なぜか影に届く直前で鉄パイプを地面に突き刺し、その反動で反

対側まで大きく跳躍。

着地したガムルはそのままドサツと片膝をついた。

その剥き出しの腕や顔、さらには破れた服の下で皮膚が焼けただけ、血が流れている。

「くそっ!!」

視線を上げたガムルは拳を地面に叩きつけた。

先ほどまで影がいた場所には、一人が通れる縦穴が生まれていた。

その穴の周りは赤く腫れ上がり、時たまパチパチと弾け、溶けた石材が熔岩となって飛び散っている。

最後に展開した術式、それは影の足下に向けられたものだったのだ。

超高温の黒炎を当てられた地面は容易く溶け出し、自らの重さに耐えきれず穴が開く。

影はそこから脱出したのだ、恐らく傷を負いながら。

「油断した……くそが。」

もう一度、ガンと地面を殴りつけ、ガムルは唇を噛み締めた。

だらだらと話さずに捕まえていれば、と。

麗那のことが気になったガムルは立ち上がり、崩れた岩壁に向け

て歩き出した。

肩を落とし、歩みを続けていたガムルは知らず知らずのうちに『夢の石』があつた場所に戻っていた。

そこは全てが完璧に燃え去り、その塵だけがうず高く積もっている。

その場に警備兵も駆けつけたらしく、立ち入り禁止の札が下げられた黒と黄色の綱が野次馬の侵入を防いでいた。

「ガムルさん!!」

野次馬に混じり、ぼーっとそれを見ていたガムルはその声にハッと振り返った。

「ダンゼル・・・・・・・・」

「その様子だと逃がしたみたいだね。」

薄い肌色のコートの裾を叩きながらダンゼルが歩み寄る。

「あの娘、別状はないって。かなり煙を吸っているけど問題はないらしいよ。」

「そうか・・・・・・・・」

その報告に安心する一方、ガムルは唇を噛み締めた。

麗那を店を一目見ただけで分かる。彼女がどれだけこの店を大切にしていたか。そして店の事を聞き、どれだけ悲嘆にくれるかを。

それを思うと、ガムルの中でまた悔しさが込みあがってきた。
それは犯人を逃がしたというだけではなく、間接的にはあれ、
ガムルにもその責任があるからだ。

「一応検査入院をするらしいよ。」

面会は明日の昼からだってさ。」

「そうか。」

声からして明らかに落ち込んでいると分かるガムルを、なんとか
励まそうと考えていたダンゼルは、あっと呟いた。

「そういえば、野次馬の人たちから一つ、興味深い話を聞いたよ。」

「興味深い話？」

眉根をひそめるガムルにダンゼルは頷いてみせた。

「最近、この街では放火が多いんだってさ。」

「だけどそれとこれとは関係な……」

「いや、それなりにあるし、なにより『僕達』に関係大ありだよ。」

『僕達』、つまり『銀翼旅団』にとって、という言葉にガムルは
眉を寄せた。

「野次馬の人たちから聞いたら、最近、放火が相次いでいて、その
周辺であの黒いコートの男を見たんだってさ。」

「どこでだ!？」

目をカッと見開くガムルに若干たじろぎながら、ダンゼルはすぐ
横のベンチに地図をひろげた。

それはこの街の地図らしく、中心にある高層建築物の建ち並ぶ都

市部、その周りにある商業区、さらにその周りにある居住区、この三つの円に分かれている。

その中でダンゼルの指が指したのは商業区だった。

「実はこの放火は予告されてから行われたものらしいんだ。」
「予告？」

「そう。予告状が出されてから行われているんだって。」
ハッ、と軽く鼻で笑いながらガムルはダンゼルの指した場所を追った。

放火のあった商店は商業区内で円を描いているように散らばっている。

「それは放火にあった店に………じゃないな。『僕達』と言うからには俺達に関係のある………おい、まさか………」

ぶつぶつと自問自答を続けるうちに、ガムルはある一点に目が止まった。

それにニヤリと笑いながらダンゼルは地図のある一点、ガムルが見ていたある一点を指差した。

「その通り。ヒューズさんが経営するヒューズ・クリプトン本社だよ。」

商業都市（後篇）（前書き）

何かを失う事で手に入るものもある

俺はそれを見つけたんだ

商業都市（後篇）

広い会場の中、スーツを自然に着こなす人や華やかなドレスを纏った貴婦人がひしめいていた。

そんな中、明らかに周囲の空気に吞まれているのが分かる二人の男がいた。

「結構な人だな。」

「そうだね。」

それは黒いスーツに身を包んだガムルとダンゼルだった。

そこはヒューズ・クリプトン本社ビル最上階、四十九階にあるパーティー会場だ。ワンフロアを丸々会場にしているそこは、数百人いや千人以上を軽々と収容している。

その収容されている人々もまた違った。

会場や主催者が一流であれば招待される客もまた一流揃いだった。パッとガムルの目に映るだけで、伯爵や大貴族、その他の分野に置ける実力者がごろごろいる。

ガムルは苦しい襟元に指を引っ掛けたまま、キョロキョロと辺りを見回した。

それは何も有名人を探している訳ではない。いや、ある意味では有名人だが。

「来ると思うか？」

「多分来るよ。」

あえて主語を抜いた会話を紡ぎ、ガムルは腰にある堅い感触を確

かめながら、昨日のことを思い出していた。

彼らが根城とするホテルのリビングでガムルとダンゼルの二人は『銀翼旅団』のメンバーと今後の予定を話していた。

「予告状ねえ。」

「時代錯誤もいいところだけど、本当らしいよ。放火があった八回が八回とも来たらしいから。」

だから今日聞いてみようかな、と思ってさ。

で、ヒューズさん。教えてくれるよね？」

「ははっ、君達にはかなわないよ。」

向かいのソファに腰掛けた、まだ若さの残るヒューズは、そうぼやきながら懷から何かを取り出した。

「丁度、今日はその話をしに来たんだ。見てもらえるかな？」

六人が囲むテーブルの上に置かれたのは、九つの茶色の封筒だった。

「へー、本当に来ているのね。」

なぜか感心したように呟きながらリタニアがそのうちの一つをヒョイトつまみ上げた。

それにならい、残りの四人も目の前にある封筒を手にとっていく。

『我々は貴殿の会社に対し、新技術の発表を中止することを要求する。』

『飛空艇』、空飛ぶ船。

これは神への冒瀆であり、決して許されるものではない。

即刻廃止にしてもらいたい。

この要求を聞き入れてもらえないようであれば、我らの正義の炎が、貴殿の周りで無関係な者達がその生活を、その命を消し去るだろう。

銀翼旅団』

「銀翼旅団!？」

中身を読み終えたガムルとダンゼルが同時に素っ頓狂な声を上げた。

それにゆつくりとヒューズは頷く。

「恐らく、船舶関連の仕事をする崇神派の仕業だと思うんだけどね。」

「崇神派？」

「この世界を作った存在を『ユビキタス』として崇めている神派よ。」

ガムルの疑問の声にすぐに答えてから、リタニアは先を促した。

「けどどうにも情報が少なすぎるんだ。」

何より、君達の存在を知っているのが気になる。」

「だから、これの出番か。」

ヒューズの言葉を遮り、龍牙が何かを机の上に投げた。

それは今朝、龍牙が全員に見せた薄い桃色の封筒だった。

「じゃあ、その犯人達を明日のパーティーに誘い込むということですか？」

「いや、待てよ。放火が八回なのに来た封筒は九、つまり犯行予告が来たと？」

フィロとガムルに頷き、ヒューズは懷からおもむろに五つ、変わ

った形のブレスレットを取り出した。

「だから、私は君達を護衛として雇いたいと思う。」

「えっ!？」

意外な申し出にこういう場面では冷静なりタニアでさえ驚きの声を上げた。

「この街の自警団に頼まないのか？」

唯一、動じなかった龍牙の問いにヒューズは小さく首を振った。

「正直に言って、この犯人は冥術を使っている。しかもかなりの手練れだ。自警団では逆に現場をかき回すことになりかねない。」

「確かに。」

龍牙もその意見に首肯した。

それぞれの街にある『自警団』要は軍隊だが、紐解けばちよつと訓練した一般人の集まりで、正式な兵士ではない。

そのため『冥力』を使う冥術士への対処ができないのだ。

「引き受けてもらえないだろうか？」

引き受けてくれる、そのような確信がヒューズから感じられた。

恐らく龍牙と昔からの付き合いなのだろう。

何となくガムルはそうに感じた。

「分かった。引き受けよう。」

その言葉にヒューズの顔を一瞬にして笑みが覆った。

「感謝するよ。」

謝礼は軍資金に上乘せさせてもらうから。」

「分かった。」

明日の予定についてだが、何かあれば教えてくれないか。」

「一応、ここにあるんだけどね……ああ、これだこれだ。」

一緒に持って来た鞆の中から書類を五束取り出し、机の上に並べ

た。

「これが明日の予定表だ。

今のところ変更はないけど、何かあればすぐに連絡するよ。」

「分かった。」

それに一通り目を通し終えた龍牙が頷くと、ヒューズは安心したように笑い、そのまま扉の向こうへと姿を消した。

「参加ありがとうございます。この度はそちらの鉄鋼のおかげで完成出来ました。」

「いやいや、ヒューズ君の会社の技術力の賜物だよ、これは。」

部屋中にぶら下げられた幾つものシャンデリアに照らされる中、高級そうなスーツやドレス、アクセサリを身につけた人が幾つかの集団を作っていた。

中には、挨拶まわりをしている人もいるが、この世界では当然と言える光景だった。

強い者をいかに味方に引き込むか、それがその会社の勝敗を分けるのだ。パーティーとはいえ、気を抜くわけにはいかない。

それはガムルとダンゼルも同じだった。

多くの人に囲まれたヒューズから一定の距離を置いた場所、そこにガムル達はいた。

それぞれがそれぞれの空腹を満たすべく食べ物に手を伸ばそうとするが、毒を混ぜられている可能性も考え、控えているのだ。

「いや、やっぱり美味しいねー」

「そうですねー」

そんな中、耳に入って来た声にガムルとダンゼルは揃ってため息をついた。

リスのように口に一杯料理を詰め込む二人には愛らしさがあったが、もうガムル達は呆れるしかなかった。

「いや、お前ら食べ過ぎだから。」

その二人の視線の先にあるのはリタニアとフィロの手の上にある皿。そこに溢れんばかりにのせられていた料理だった。

リタニア達が食べている名目は、即効性の毒が入っているかもしれないから念のため毒味として全ての料理に手をつけておくというものだが、山のように盛られたそれは、明らかに『毒味』の量を超えていた。

「…………豚になるぞ。」

「何か言った？」

「いえ、何も!!!」

急に視線が鋭くなるリタニアに、ガムルは慌てて手を横に降った。

「ふーん。まあ、いいわ。」

フィロ、あっちにデザートあるみたいだから取りに行こ？」

「はい!!!」

頷きあう二人に、ガムルはただ新たな料理えものに向けて二頭の獣が放たれるのを見るしかできなかった。

その間にもパーティーは進んでいく。

先ほどまで参加者と談笑していたヒューズが移動を始めたのだ。

「行くぞ。」

「うん。」

部屋の中央へ数人のボディードと共に進むヒューズを追って、二人もまたゆっくりと歩きだした。

「そういや、次は何だっけか？」

尚も襟元に指を引っ掛けたまま、ガムルは隣のダンゼルに目を向けた。

その二人の数メートル先では、ボディードに囲まれたままヒューズが身なりをチェックしている。

「ヒューズさんの挨拶だよ。」

「……………ああ、そうだったな。」

「普通に考えてパーティーの間にヒューズさんがすることと言ったら主催者の挨拶だと思うけど？ いたっ」

ぼそぼそと呟くダンゼルの頭を若干顔を赤くしながらガムルは叩いた。

「痛いなー あ、始まるみたいだね。」

ガムルに冷ややかな視線を送ってから、ダンゼルは部屋を見回した。

微かに明かりが差し込んでいた窓にはぶ厚いカーテンがかけられ、部屋中の照明が消えていく。

演説の開始を告げる合図に、招待客の間から会話が途切れていくのが感じられた。

そして話し声が全て消えるのと反比例して、部屋の中央に設置された舞台が明るく照らされ始めた。

「皆様、本日は我が社、ヒューズ・クリプトン社の世界初の新技術、『飛空挺』の御披露目パーティーに参加いただき、ありがとうございます。」

まずは、社長であるヒューズⅡクランクより挨拶があります。
社長、お願いします。」

司会者の呼びかけに軽く手で応えながら、若き社長は明るく照らされたステージの真ん中へと登った。

「皆さん、我が社の新技術、『飛空挺』の御披露目パーティーに参加いただき、ありがとうございます。」

今日、この日に皆さんをここにお招き出来たことを嬉しく思います。」

マイクを片手に話すヒューズは口調と共にどこか楽しそうだ。

「『飛空挺』は、我が社の技術を総動員し、六年という歳月を費やして生まれたものです。」

この技術は、このロザンツ帝国の新たな光となるのは間違いないでしょう。」

ヒューズは高々と手を上げ、指を鳴らした。

すると、彼の図上に6つの巨大な画面が現れた。

「では、少しばかりネタばらしといきましょうか。」

今回、開発した『飛空挺』はこれまでの輸送界に革命を起こすこととは間違いありません。」

まず注目すべきはこの飛空挺が出す、『速さ』です。

従来の船で一週間かかっていた距離を、多少の誤差はありますが、これはたったの十二時間で飛ぶことが出来ます。」

それに、おおっ、と観客がどよめく。

「凄いね。」

「ああ……ん？」

ガムルはおもむろに振り返った。

照明が落とされ、判別できない顔が見渡す限り並んでいる。

その中に何もおかしいものはない。

だが、ガムルは何か違和感を感じていた。

「……ちよつとトイレに行ってくる。その間、頼んだぞ。」

「うん。」

まだ続くヒューズの演説を背に、ガムルは入口の方へと歩きだした。

廊下に出たガムルは左右に首を廻らせた。

ホールから続く赤い高級そうな絨毯を踏みしめながら、彼はその足先を左に向けた。

理由はない。それは数えきれない程の修羅場を潜り抜けてきたガムルの勘だった。

「…

…」

無言のまま彼はゆっくりと進んでいく。

最上階であるそこには会場となっているホールがかなりの広さなので、それ以外には化粧室、着付け室、用具室しかない。さらにホールの照明も落ちていることもあり、奥に行けば行くほど暗さが増していく廊下でガムルはふと立ち止まった。

「お前らか？ 予告状を出したのは。」

腰に右手を廻しながらそう口を開いたガムルの周りで、その空間

を支配する闇が動いた。

ヒュッ

風切の音と同時に死角の闇から何かが飛んでくる。

「くだらないな。」

だが、それは全てガムルの肌に触れる寸前で叩き落とされていた。先ほどと変わらぬ姿勢のガムル。ただ一つ、ガムルの右腕を除けば。

天井に向けて伸ばされた右腕、その先に握られる物に闇の中の動きが一瞬止まった。

その闇に潜む幾つもの気配は全員こう思っただろう。

「何だ、あの馬鹿でかい斧は？」と。

そう、ガムルの右手に握られているものそれは、ダンゼル作、ガムルの新たな相棒だった。

以前と変わらない闇に溶け込むような漆黒の本体に四つの珠が輝いていた。

いや、これも不適切だ。輝いているのは三つだけ。もう一つ、その中心に備え付けられた珠は、ただ自分の存在を強調せず、ただそこに収まっていた。

「変わった武器を使うな。秦の方のだよな？　これ。」

そう言いながらガムルは足元の何かを蹴り飛ばした。

それは鎖。しかもただの鎖ではない、その先端に分銅が付けられているのだ。

「崇神派は確か秦の血筋の者が大半らしいからな。濡れ衣を着せるには十分すぎる相手だな。」

ガムルの言葉に返答はない。代わりと言わんばかりに、新たな鎖が伸びてくる。

「どうやら当たりみたいだな。」

それを叩き落としながらガムルは一步前に踏み出した。

「誰に命令された……なんて聞くまでもないか。あのくそ野郎が考えそうなことだ。」

そこまで口にしたところで、闇の中で動きがあった。ガムルの周囲四方から一人ずつ飛び出してきたのだ。

その手には、片刃の短刀や投げナイフ、鎌といったものが握られている。

それでもやはりガムルは微動だしない。そして四人がガムルの間合いに入った瞬間、

キンツ

微かな金属音と共に鮮やかな赤が舞った。

「この程度かよ。」

ガムルはそう呟きながら、腰を落とし駆け出した。その巨体は一直線に正面へと向かっていく。

闇に慣れてきたガムルの目はまず、正面の二つの気配を捉えた。一方はいかつい男、もう一人は身体のラインから女性なのを感じる。

ガムルの突撃に意表を突かれたのか、二人の反応は遅い。

その隙を見逃さず、腰だめにした斧を、床を割るすさまじい踏込と同時に振り出した。

ゴウツという通常ではありえない音とともに二人は吹き飛んだ。

残すは四人。

吹き飛ぶそれらに見向きもせず、ガムルはさらに駆ける。

すぐ横にいた男の腹部に柄の部分を叩き込み、屈みこむその背中に飛び乗るとそれを踏み台に大きく跳躍。勢いをそのままに残りの三人のうち二人を横薙ぎで切り伏せた。

残り一人。

それには着地したガムルから五メートルという近いような遠い距離を残していた。

「お前が大将か？」

突撃の体制を解いたガムルは構えていた斧をそれに向けて突き出した。

「正解、だが間違いだ。」

その初めての返答にガムルは、ふん、と鼻で笑った。

「それは計画の発案者のことを言ってるのか？ それとももう一人別にいるのか？」

切っ先を揺らさずにさらに問うガムル。だが、その言葉は徐々に不機嫌さを含んできた。

「くっくく」

「何がおかしい？」

うっすらと見える肩が揺れているのにガムルは眉をひそめた。

油断しているようで全く隙のない立ち振る舞い。なにより突撃しようにとしたガムルの身体が彼の意味とは関係のないところで制止をかけたのだ。

（こいつ、強い。）

「結構な手練れを連れてきたのに、こうもあっさりやられるとはな。

しかもその洞察力……すばらしい。この一言につきるな。」

「ふん。敵に褒められてもうれしくないな。」

「そう言うな。俺は認めているんだ。今の構えだってそうだ。俺にお前右側を攻撃させようとしているんだろ？」

「ちっ」

ガムルは渋い顔をしながら斧を下した。

「そう睨むなよ。この俺が褒めてるんだ。喜べよ。」

「慢心は時に仇になるぞ。『燈赤のレオン』」

暗闇の中から歩み出てきたのは、あのつなぎ姿の少年だった。

「へえ、本当なんだな。万人の冥力を識別できるってのは……」

キンツ

つなぎの少年レオンの目の前で二つの金属が衝突した。

一つはガムルの斧、そしてもう一つは……レオンの持つ工具として用いられる『レンチ』と呼ばれる工具だった。

大きさも色も形状も通常のもものと変わらず、両端が二股になっているだけの金属の棒である。しかし、そんなもので、大の大人を軽々と吹き飛ばすガムルの横薙ぎを片手で受け止めていたのだ。

その光景は明らかに異常だった。

「奇妙な『機械剣』を使うな。」

「これが一番しつくりくるんで、ね!!」

片腕とは思えない力にガムルは即座に後ろへ跳んでその力を逃がしていく。

「誰が逃がすかよ。」

レオンのレンチが赤く輝き、そこから五発、橙色の炎弾が撃ち出された。

その大きさと威力をすぐに悟ったガムルは、空中で身を捻り、無理矢理左足で床を蹴った。

それによって身体を横へと急転換することでかろうじて避けるが……

（体制が！？）

無理な回避による体制の崩れを直そうと踏ん張ろうとするが、その度にレオンの追撃に遭い、それはどんどん悪化していく。

そして、その時が来た。

後ろへ跳び退るガムルに覆い被さるようにレオンが接近し、腕を振り上げた。

（速い！？）

回避も間に合わないとは即座に判断。ガムルは受け止めようと構えるが、

「壊れな」

いつのまにか両手で構えた斧ごとその身体を地面に打ち付けられていた。

「がはっ！？」

押しつぶされた肺から一気に空気が漏れる。

「悪いな。俺は強いんだよ。」

そう言いながら見下ろすレオンにガムルは何も言えなかった。その息は荒く、その身体は急な衝撃に耐えきれず痙攣を起こしている。

もう戦闘を続けるのは無理だった。

「だけど、まだ弱いな。お前のその『機械剣』を完成させれば少しはマシになるんじゃないか？」

口から唾液を垂らしながらガムルは覗き込んでくるレオンを睨んだ。

「おお、恐っ。　だけど、お前にはまだ手を出すなって言われてるからな。」

レオンはそう呟きながら立ち上がった。

「かわりにヒューズの命を頂こうか。」

「とりあえずここは大丈夫みたいです。」

ヒューズの演説が終わりに向かおうとしていることにダンゼルは安堵の声を出した。

ダンゼルは今、舞台から少し離れたところで様子をうかがっていた。

「ええ、とりあえず山は越えたでしょう。」

ダンゼルの横には黒いスーツに身を包んだ上背の男がいた。黒い髪は全て後ろになでつけ、スーツの下では鍛え上げられた肉体がこれでもかと自己主張している。

「これもあなた方が協力してくれたおかげですよ。」

「カイルさん、まだ終わっていませんよ？」

ダンゼルの指摘にカイルは苦笑いしながら腕を引っ込めた。

「その通りだ。恥ずかしい限りだよ。秘書兼ボディガードとして最後までやり抜かせていただくよ。」

「頑張ってください。」

ダンゼルは軽く会釈をしてからその場を後にした。

「ガムルさん、遅いな……リユーガさんどこか行っちゃうし。」

二人を捜しに行きたいが仕事を投げ出す訳にはいかない。

ダンゼルはしぶしぶ、カイルが向かった方と反対側、つまり入り口に近い側の舞台に歩を進めた。

途中にまだ料理を食べている女性陣が目に入るが無視して与えられた位置についた。

円形の舞台に二メートル間隔で黒服の屈強な男たちが囲んでいる。ダンゼルが立ち止まったのはそこから十メートルほど離れたところである。

本当はその円の中に入る予定だったが、彼らの身分上、断念したのだ。

腰元に忍ばせている二本の円柱に軽く触れながらダンゼルは舞台の上に視線を上げた。

「我々はこれからもより一層の努力と共にこの国を新たな境地へ誘うことを今ここに約束いたしましたでしょう。」

手に持つグラスを高く掲げヒューズは一際声張り上げた。

「ヒューズ・クリプトンとロザンツ帝国に乾杯!!」

それに習い会場にいる人たちがグラスを掲げ一気におった。

そして会場を拍手喝采が会場を満たす……はずだった。

「ううう……」

だが、実際に会場を埋めたのはどこからともなく聞こえる呻き声とバタリと床に倒れこむ音だった。

「いったいなにが……っ!?!」

それは客人だけではなかった。

舞台上でマイクを握っていたヒューズも苦しげに顔を歪め、身体が傾く。

「社長!?!」

それに一斉にボディーガードたちが駆け寄るのを見ながら、ダンゼルは傍らに倒れこんでいる男性の横に屈み覗きこんでみる。

（呼吸は正常……全身に痙攣……それにこの全身の斑点……『ナンブダケ』か。）

『ナンブダケ』は秦の国に多く見られる毒性の強いキノコである。隠密行動時によく使われるらしく、かつて起こった秦の国の者による貴族の子息誘拐事件。その大半でこれを使われているという記録もある。

（じゃあ、これも秦の国が？ だけど何のために……？）

ダンゼルはおもむろに立ち上がろうとした瞬間、背後からの気配にとっさに横へ跳んだ。

パン

回る視界の中、ダンゼルは見た。

自分を捉えるはずだった鎖がその奥にいたボディーガードの頭部を粉碎するのを。

ダンゼルはすぐに立ち上がると腰から二本の円柱を引き抜き、振り向き様に腕を前に突き出した。

それに呼応して展開したその二つの機械剣が彼の代わりに吠える。

ダダダダッとマズルフラッシュが暗い部屋の中対照を照らしている中、撃ち出された弾丸は吸い込まれるようにいくつかの影に向かうが、なぜか一つとして肉が弾ける音がしない。

意外な結果にダンゼルは目を少し見開きながら、さらに横に跳び、勢いそのままにテールブルの影に滑り込んだ。

（結構数がいるし、かなりの手練れ揃い……ちょっと厳しいかも。ヒューズさんは？）

ダンゼルはぶつぶつ呟きながら舞台へチラリと視線を向けると、丁度ボディーガード達がヒューズを舞台から引きずりおろしているところだった。

「カイルさん！！」

「大丈夫だ！！ 応戦に専念してくれ！！」

「はい!!」

焦りの混じった声に返答しながらダンゼルは耳をすました。
未だ明かりは灯らず、思うように視界が確保できない以上頼りになるのはこれだけだった。

（足音が遠い……ということは壁にそって移動してるのか。）

ダンゼルは出した機械剣を肩に当てた。

その機械剣は前回、麗那の店で出したものとは形状が異なっていた。

前回は肘から装着するような巨大なものだったが、今回は機動性を重視したのだろう。銃身も短くまた手首から装着するものへと変わっていた。

それでもこの状況はダンゼルにとって明らかに不利なものだった。

銃の利点はその威力と命中精度、さらには連射性能があげられる。だが今の状況は明らかにその利点が打ち消されていた。

会場中には客人が倒れているため、相手の機動性を削るための足元への攻撃がしにくい。同じ理由で火力も落とさなければならぬ。残った二つの利点だが、幾つものテーブルに囲まれている以上銃身は必然的に短くなり、命中精度も落ちてしまう。

そう、戦場としてはダンゼルにとって最悪だった。

それでも戦いを放棄する訳にはいかない。

まずは、ふう、と一息。

そのまま立ち上がると近くのテーブルを踏み台に高く跳び上り、両手に構える二本の引き金を引いた

パン、パン、という乾いた音と共に正面の一人の頭部を撃ち抜く。

彼の前方の至る所から飛んでくる刃物を撃ち落しながら白いテーブルクロスを踏みつけ、もう一度跳躍。

また一人、撃ち抜こうと銃を構えるが、横からの殺気に無理矢理身体を回転させた。

「づうっ!？」

こめかみからジョリッといういやな音を立てながら、自分のではない力に押され背中から床に落ちた。

一瞬、思考が停止した。

脳震盪で揺らぐ視界の中、やけにうるさい自分の心音に混じり、誰かの足音がダンゼルへと近づいてくる。

「ふむ。期待はずれだな。」

徐々に回復してきた視界の中、ダンゼルはテーブルの影からその声の主を見た。

それは長く伸びた黒髪を三つ編みにした普通のどこにでもいそうな男だった。だが、一つだけ普通と違うものがあつた。

それは、目。

その男の目には黒く深い闇が住み着いていた。

そのあまりの濃さにダンゼルは鳥肌が立った。ここまで人は闇に堕ちることができるのか、と。

「正直、もっと楽しませてくれると思っていたが……もういい。」
男は何事か手で合図をしながらダンゼルに背を向け歩きだした。

「くそ……」

霞みはじめた目に力をいれながらダンゼルは三方から迫る影を睨んだ。

もう分かっている。邪魔者を排除した今、その男が向かうべき場所が。

「行かせるわけには……いかないんだよ。」

ダンゼルはこめかみの血を拭い、握るグリップに力を込めた。目には見えない力、『冥力』がダンゼルの手から銃へ、銃からはめ込まれた『破天石』へと流れ込んでいく。

「もう、許さないよ。」

「もう、ゆるさねえぞ。」

先ほどまでいくつかの影があった赤い廊下は、変わり果てていた。

赤い絨毯がひかれていた床はめくれかえり、とげのように鋭い灰色の突起物が飛び出していた。それは壁もほとんど同じだった。

たった一瞬、言葉の通り怒りを具現化したようにその空間は変わり果てていた。

その中心で巨大な斧を地面に打ち付けている男が一人。

そう言いながら見つめる先にももう一人、その向かいで背中を丸めた男がいた。

「ちっ」

その男は巨大なレンチを杖替わりにして、その左手を腹部に当てている。

そう、二人の立場が変化していた。だが変化しただけだ。決して逆転した訳ではない。

現に、ガムルもまた地面に突いた斧に寄り掛かるようにして立っている。

「予想外だった。まさかここで『冥術』を使用するなんてな。油断した。」

「よく言う。お前だって微量だが機械剣に『冥力』を流し込んでたくせによ。」

両者とも肩で息をしながらそれぞれの武器えものを構えた。

「やっぱ『冥力』の流れを見る能力を持っていると違うな。」

「この程度、お前でもできるだろうが。それよりもお前に訊いておきたい。」

「何が知りたいんだ？」

「なぜ俺に正体をばらした？ 俺を殺すなという命令があるにも関わらず、だ。」

ガムルの問いにレオンはふっと薄く笑みを浮かべた。

「さあな。」

「俺がばらさないとでも思っているのか？」

「いや、お前の場合『ばらさない』じゃなく、『ばらせない』だろ。」

レオンの言葉にガムルはスッと息を飲んでから、先ほどよりも強く斧の柄を握り締めた。

「何が言いたい？」

「簡単さ。お前は自分の『正体』をあいつらにまだ知られたくないはずだ。誰よりもあの出来損ないの英雄さんに……」

「黙れ」

レオンはその一言にすぐ口をつぐんだ。故意ではない。すさまじい殺気に彼の身体が自然と声を出すのを拒否したのだ。

その殺気をまき散らす方へ眼を向けるとその視線だけで人を射抜けそうなほどに鋭かった。

「構えろ。」

「は？」

意味が分からないといった顔をするレオンに構わずガムルは斧を下段に構えた。

「一瞬で逝かせてやる。」

意味深な言葉を呟きながらガムルは下段に構えたそれを床に突き刺した。

ピシリ

「っ!？」

足元から聞こえた何かが裂けた音に危険を感じたレオンは即座に上へ跳んだ。

遅れてそこから飛び出したのはあの突起。

材質は先ほどと同じ金属、だがそのサイズは桁違いだった。先ほどの人の胴ほどこしか太さがなかったが、今回ののはその優に五倍はある。

そのとげはレオンを貫かんと弾丸のような速さで上へ伸びていく。

それよりもいち早く逆さに天井に着地したレオンはすぐさまガムルの方へと飛び出した。

その背後でとげが天井を貫き、周辺に雨のように瓦礫が振りまかれる。

接近を続けるレオンは、上から迫る凶器を振り払うように巨大なレンチをバトンのように軽々と頭上で回すと、そこから生み出した遠心力をそのままに目標へと振り下ろした。

ガゴン、と床が陥没する音が床、壁、天井、至るところへ伝わっていく。

レンチを打ち付けたレオンは振り下ろした体制のまま、なぜか彼の右側を睨んだ。

「くそが」

「隙ありだ。」

巻き上げられた砂煙の中から飛び出した大きな影が茶色の残像を残しながら、その巨大な斧で地面すれすれを薙いだ。

打ち付けた反動で空中で止まったままのレオンに、剣山のようなとげが迫る。

「ふっざけんな！！」

まさにとげが彼を貫く寸前、レオンは力づくで身体をレンチに引き寄せ、引き抜いた。

「『粉碎』^{バースト}！！」

そして、先端の二股の間そこに溜められた冥力が爆ぜた。

目を焼くような鋭い閃光と共に、二人を中心に辺り一帯を爆発が呑み込んだ。

「なんか揺れたな。」

「別働隊で何かあったんじゃないか？ 退避ルートの確保をしくじったんじゃないか？」

「なら援軍に行かないと、な。」

「ぐっ」

腹部を蹴られ、食道まで何かがこみあげてくる。

それを飲み下しながら周囲を見回し、目当てのものを見つけた。

頭上で繰り広げられる会話にダンゼルはおおよその状況を理解していた。

だが今、この状況だけはダンゼルにとってありがたいものだった。彼らの意識は外から聞こえる爆発音にいつている。

ダンゼルはゆっくりと傍らにこぼれた機械剣に手を伸ばした。

「いや、向こうにはあの人がいるんだぞ？ 助太刀にならないと思うが。」

「いないよりかまじだろ。」

「僕もそう思うよ。」

「は？」

三人がきょとんとした顔で声の方を向くのと、銃口から弾丸が吐き出されるのは同時だった。

一瞬の間に吐き出された三発の弾丸は三人の胸骨に衝突。その圧力で内臓を押しつぶしながら後ろへと吹き飛ばした。

それを見ながらダンゼルはもう一つの相棒を捜した。

異常に気付いたのだろう。テーブルの影を進むダンゼル目がけて幾つものナイフなどが飛んでくる。

その内のいくつかを撃ち落しながら、ダンゼルは目当てのものへと飛び込んだ。

着地と同時にそれを掴み、身体が持ち上がると同時に反撃を始める、そのはずだった。

「あれ？」

だが、ダンゼルが振り返ったときには、そこには誰一人としてい

なかった。

隠れているのではない。本当にいないのだ。

「すまないが、もらったぞ。」

聞き覚えのある声にダンゼルはため息とともに振り返った。

長い銀髪に紅い瞳、そして代名詞とも言うべき巨大な片刃の剣。

「他人の獲物を奪うのはずるいですよ。リ्यूガさん。」

「安心しろ。まだ終わりじゃない。」

そう言いながら龍牙はダンゼルの後方を見つめた。

それに気づき視線を追ったダンゼルは納得したという風に頷いた。

「ああ。なるほどね。」

二人が見つめる先では、まだ十を超える影がうごめいていた。その手にはじゃらじゃらと物騒なものが握られている。

「リ्यूガⅡFⅡエスぺラント、ヒューズⅡクラークをどこにやった!？」

その中から一步、一人の男が出てきた。それはさきほどダンゼルのをさげすんだ男だった。

だが、先ほどとは違い、あの深い闇を宿していた瞳がこれでもかと揺らいでいる。それにダンゼルは肩を揺らしているとこれでもかと睨みつけられた。

「答えろ!！」

「俺は知らないが?」

「貴様、あれだけ私の追跡の邪魔をしながら知らないだど?」

よく見れば、確かに男の服は所々破けており、その下から赤いものがにじんできているのが見える。どうやら手荒く妨害を受けたようだ。龍牙らしくない行動に疑問に思いながらダンゼルは構えた。

「ああ。」

「貴様……もう許さんぞ。」

「ああ。こちらもそのつもりは全くない。」

ダンゼルにちらりと目配せしてから彼もまた愛剣を構えた。

「リ्यूガさん。あいつをください……」

「無理だ。」

「ですよね……仕方がないか。巻き添えを食わないように気を付けてくださいね？」

そういうダンゼルの両手をまばゆい光が包んだ。

「誰に言っている？」

「ははっ。それもそうだね。」

ダンゼルは笑いながら光の収まってきた両手を前に突き出した。突き出された両手に握られていたのはあの長銃だった。

「さて、もう覚悟してよ。」

肘まで差し込んだ銃を微妙に動かし、その引き金を絞った。

パンパン

「ぐあっ!？」

部屋中に木霊する二つの悲鳴。

だが、銃口を突き付けられていた男たちは現状を理解できずにいた。

銃声とともに確かに銃口から煙がでている。確かに発射されたにも関わらず、なぜ『俺たちではなく奴の背後の奴らが撃たれたのか』と。

「疑問に思ってる？」

「っ!？」

「簡単だよ。君たちは銃弾の檻の中にいる。」

「は？」

「はい。もう終わりだよ。」

啞然とする男たちに明らかな侮蔑の笑みを浮かべながら、タン、と空中に跳んだ。

そして横に一回転しながら男たちの頭上に休みなく連射。そしてゆっくりと着地した。

「消飛べ。」

その一言が引き金だった。どこから飛んできたのか分からない無数の弾丸は、茫然自失と立ち尽くす男たちの急所を的確に撃ち抜いた。

「堂々と姿を現した時点で君たちの負けは決まっていたんだよ。」
機械剣を円柱状に戻しながらダンゼルは残りの二人がいるであろう方向へ目を移した。

「どうやら終わったらしいな。」

「黙れ。」

男は右手に持つ鎖を横から龍牙に向けて振るった。

「ん？」

異常を察した龍牙はすぐさま回避の距離と速度を増やした。

その残像を切り裂き、龍牙の剣にかすめながら鎖は通り過ぎる。
だがそれで終わらない。

その先端にある分銅の影から男が飛び出してきたのだ。

意外な死角からの敵の出現に若干目を見開きながら龍牙は振り下ろされた刃物を受け止めた。

「っ!？」

手に伝わる鈍い衝撃。だが、受け止めてもなお迫ってくる刃に龍牙はとっさに剣をぐっと前に押し出した。

「ちっ」

「惜しいな。」

鏢競り合いとなったところで龍牙は初めて相手の武器を視認した。
剣で受け止めているはずなのに刃が龍牙の喉元に触れている。それを可能にする武器。

それは『鎖鎌くさりがま』。

しかし、それも特注品なのだろう。通常、鎌は片手剣ほどのサイズしかないが、それはどちらかというと槍に近かった。

槍のように長い柄に大きな黒い刃。突きも考えているのだろう。柄の先端にも突起物がある。

その姿はまさしく崇神派の文書にある魂を刈り取る『死神』だった。

「ふん。やはり秦の国の者じゃないな。」

「……何のことだ」

「その鎌。あの女、『魔女』の真似だろ？」

「……」

黙れ。もう一度振るわれた鎌はそう言っているように龍牙には聞こえた。

左から迫る湾曲した刃に自分の刃を当て、うまく受け流しながら龍牙は時計回りに回転。

その回転力の加わった、高速の斬撃が男に向けて繰り出された。

「っ!？」

予想外の早さの反撃に驚きの表情を浮かべながらも男はそれを長い柄で受け止めた。

「ぐっ」

だが、止まらない。歯を食いしばる男の身体は引きずられるように右へとずれていく。

そう、受け止めたはずの剣の圧力を消しきれないでいるのだ。

「ふん。やるな。」

必至に受け止めようとする男に対し龍牙はまだ余裕が見えた。龍牙はさらに剣に力を込め、そのまま一気に振りぬいた。

「ぬおっ!？」

さらに加えられた力に男の身体ははつきりと斜めに傾いていく。そこに向けてあの太剣が高く掲げられ、

「本気でいくぞ。」

左足の踏込と同時に振り下ろされた。

（回避をつー！）

ボウツと発火でもしそうな異常な剣速で振り下ろされる大剣に、男は回避などできる訳もなく、鎌を交差するように持ち上げられた。だが、

「がふあっ!？」

その口から奇妙な声が零れていた。

（な、なぜ……）

赤く染まっていくなかに視界に映ったのは、滑らかな黒い柄の断面と自分の血液。

「ありえん……」

「今ので決まらないか。お前、意外とやるな。」

突然のことに男の脳は完璧に動きを停止していた。傍から見れば、それはあまりにも単調だった。

ただ龍牙が男の構える鎌の槍ごと男の顔を斜めに斬ったのだ。

斬ったとはいえ、男は寸前で顔を上に向けていたのが功を奏したのか、斬られたと表現するにあたる負傷は彼の口から顎までですんでいた。

だが、

「だけど、これで終わりだ。」

その幸運を男が生かすことはなかった。

龍牙は茫然自失とする男にまた高く剣を持ち上げ、振り下ろした。最後の抵抗か、真っ二つに裂かれた鎌を頭上に掲げたが、龍牙にとってそれは木の葉に等しかった。

ピツと素振りのような音と共に振りぬいた龍牙は、内臓などと一緒にならずに下がる黒装束の上部に憐れみの視線を向けてから振り返った。

カラン

金属が落ちる音。それを聞きながら汚いものを払うように剣を薙いだ
「格の違いを知れ。」

ボタボタと垂れる水音ですら汚らわしいと言わんばかりに龍牙は
足早にその場を立ち去った。

「お疲れさま。龍牙さん」

「ああ……ふっ、こっぴどくやられたな。」

龍牙の微かに歪んだ口元にダンゼルは唇を突き出すが直ぐに顔を
しかめた。

少し身体を動かすだけで色々なところに痛みが走るのだろう。そ
の表面の傷口からそれが容易く龍牙には予想できた。

その痛みを我慢しながらダンゼルは辺りを見回しながら傍らのテ
ーブルに腰かけた。

「終わったみたいですな。」

「ああ。あいつらは？」

龍牙の問いに、はははっとかわいた笑いがダンゼルからこぼれる。

「あそこですよ。」

「ん？……ああ、なるほどな。」

その指の指す方を見て龍牙の口からもまたあきれたような声がこ

ぼれた。

「あいつら、何しに来てたんだろうな？」

「さあ？」

二人のあきれたような、憐れむような冷たい視線が向けられる先にいたのはリタニアとフィロの二人だった。だが、周りに無関心な龍牙にそんな目をさせるだけはある。二人はある意味予想通り、客人と一緒に床に倒れていた。

その彼女たちの手の中にワイングラスがあるのが龍牙の目に映った。それもまた予想通りだが、そうあってほしくなかったというのが龍牙の本音だった。

龍牙は小さく歪めた口元を戻しながら、また周りを見回した。

「龍牙さん？」

「もう一人はどこだ？」

「……あ!!」

「はあ」

テーブルから跳び上がり、涙目になっているダンゼルに額を押さえた。

「忘れていたのか？」

「いや……それよりガムルさんが部屋を出たまま帰って来ない……」

「なるほどな」

その説明に龍牙は納得した、と頷いた。

先ほどから微かにだが徐々に強くなってくる気配を龍牙は敏感に感じとっていた。

一つは恐らくガムルのもの。そしていくつかの微かな気配に混じり、ガムルと同等、いやそれ以上の強さのものを感じていた。

さっきまで感じられなかったということは、気配を隠す気がなくなっただけということ。

つまり、全力で攻めに来るとのことだ。

「助けに行くべきか、否か。」

龍牙はしばらく思考してから入り口とは違う方向へ歩き出した。

「え？ 龍牙さん？」

「ダンゼル、この爆睡している姫たちを連れて帰れ。」

足元の二人に龍牙は自分のコートをかけてやると今度こそダンゼルの背後にある入り口へ歩きだした。

「だけどガムルさんが……」

「俺が行く。あの弾幕の裏に非常用エレベーターがある。それを使って地下に行け。」

肩をポン、と叩かれたダンゼルの頭に、地下？ と疑問符が浮かぶがすぐに理由が分かった。

『ヒューズⅡクラークはどこだ！？』

はあ、とため息をつきながらダンゼルは目を廻す二人を担ぎ上げた
「重っ。」

二人が起きていれば風穴が空くことは必然とも言える発言。だが龍牙はただ微笑むだけですぐに入り口に向かって消えた。

「ちっ、無茶をしゃがる。」

傍らにある瓦礫で体を支えながらレオンは武器を構えた。

彼の周りにはもう原型をとどめていなかった。赤い絨毯は焼け焦げ、天井からは満天の夜空と満月が顔を覗かせている。

「ふん……どっちがだ。」

まだ残る火に照らされた、右腕に刺さった瓦礫を引き抜きながら笑みを浮かべるガムルの顔は、心なしか青白い。

そんな彼の腕から赤い滴が一つ、床に落ちた。よく見れば、その腕にこぶし大の瓦礫が突き刺さっているのだ。

だがそれとは別にガムルの眉がピクリと動いた。

「何のつもりだ？」

そう問いかける先でレオンの機械剣が円柱状に変化していく。

「もう終わりだ。」

「なんだと？」

「終わりなんだよ。あいつらしくじったみたいだからな。」

「俺たちをなめるからだな。」

「ああ。だから今日は引かせてもらおうぞ。」

レオンは天井の穴から外へ飛び出した。

「待て！！」

「最後に一つだけ教えてやる。だから代わりに一つ教えろ。」

膝を曲げ、すぐに飛び出せる状態でレオンはその目を青白いガムルの顔に向けた。

「昨日の朝、街で火事があったのはしっているな？」

「ああ。」

「あれを起こしたのは俺たちじゃない。」

「……本当か？」

「ああ。それは俺たちじゃない。いや、ロザンツ帝国の意向じゃないと言ふべきかもな。」

「お前らのうち誰かが勝手にやったということとは？」

「俺たちは極力無駄な殺しはしない主義を通してるんだ。そんなことはない。なによりうちはそっちと違って管理はしっかりしてるんだ。馬鹿にすんなよ。」

ガムルは終息しかけていた脳細胞を叩き起こし、思考を再開した。確かにヒューズに見せてもらった調査書には死傷者ゼロ。それゆえにガムルの中でその一件が引っかかっていたのだ。

だが、まさか自分が求めている情報がこうも容易く手に入るとは。そのことにガムル驚きを隠せないが、同時に疑問を感じずにはいら

れなかった。

「なぜそれを今教える？」

「別に隠す必要もないし、冤罪はごめんだからな。」

「……そうか。」

「代わりに一つ訊かせろ。」

「なんだ？」

「なぜ奴らにお前のことを話さない？ お前の持つ情報である国王を追いつめられるのによ。なによりあいつらは『お前の目的』を達成するのにうってつけの『駒』だろ？」

その問いにガムルの肩がピクリと跳ねた。

レオンの『事情を知っている者』として当然の疑問に、ガムルは視線をそらさずにはいられなかった。

なぜそれを知っているなどという無粋な質問は必要なかった。

「ふん。証拠もないしな。それに……」

自分が持っている情報。もしそれを事実であると証明できれば確かに国王を失脚させることができる。だが、それでは足りない。足りないのだ。

「そんなもので終わらせる訳ないだろ。」

「っ!？」

足元から伝わる地震。だがそれは違った。レオンは自分の身体が上へ持ち上がっていくのを感じた。

「何の真似だ!？」

レオンはとっさにまた中へと跳びながら、腰に手を回した。その背後でガンッとかみ合う音が放たれる。

反対側の壁に横に着地しながらレオンは状況を理解した。

彼がさっきまで屈んでいた場所、そこが巨大な岩壁によって煙突のような形で塞がれていたのだ。

予想だになかった不意打ちに驚きながらも、レオンはキツとそれを起こした張本人を睨んだ。

獣のように鋭い橙赤色の瞳。そこには映るガムルは業火に焼かれて
いるかのようなだった。

「俺が殺してやるんだ。俺を二度も地獄へ誘ったあの男をこの手で……」

それを見返すガムルの瞳もまた鋭い。漆黒ともいうべき純粹な黒に染められたガムルの瞳はレオンを捉えて離さない。

二人の距離はおおよそ五メートル。だがガムルはそのまま腰だめにされた斧を片手一本で横薙ぎに振るった。

それに沿ってまたあのとげが一気に空中で無防備なレオンへ飛び出していく。

「そうかい。まっ、その程度の力じゃ無理だろうがな。」

あきれた。そう言いたげな声色だが、彼の目はそうは言っていない。

レオンは展開した彼の機械剣をすぐそばの壁に叩きつけた。

バウン、と火薬に引火したような音。それと共にレオンの姿が一瞬にして消え、

「ふん!!」

そしてそれは背後から現れた。

突如、背後から現れたレオンにガムルは冷静にあの岩壁を生み出す。

炎を先端に纏ったレンチが壁とぶつかり、派手な爆音が木霊する。だがレオンの攻撃は止まらない。

右、左、前、後ろ、そして上と目では追えない速さで、移動しては攻撃。攻撃しては移動を繰り返していく。

（わかってるさ。）

爆音によって足音を消され、防戦一方になるガムルは心中でぼやいた。

そう願うガムル自身がよく分かっていた。自分にはまだ力が足りないことを。

この世は力が全て。そのような時代錯誤ともいうべき古い世界が大きな壁となってガムルの前を遮っていた。

サンドワームの時もそうだ。結局、昔の栄光にすぎり、現在の自分を見失っていた。

今の自分もそうだ。今の自分の実力では到底敵わない。相討ち覚悟でやっと一撃だろう。

だがガムルは今の自分の選択をなぜか正しいと思っていた。

五つの方向からの攻撃にガムルはついには自分の周りに岩の箱を生み出していた

「ふん。甘いんだよ!!」

狩人にとって獲物が動きを止めてくれることほど楽なものはない。レオンは術式を同時に五つ、岩の箱の周りに出現させた。

なぜそう思うのか、疑問でしかたなかった。

「殺すなど言われてるんだけどな。」

術式の中心が徐々に赤みを増していくにつれ、獰猛な笑みが広がっていく。

そして、太陽のような輝きに至った瞬間、レオンの口は自然と動いていた。

「消えてくれ。」

だが、今なら分かる気がする。

橙色の閃光が射出されると同時に一帯の音が消えた。

「……決まったか。」

廊下から漏れてくる鋭い光に龍牙はぼそりと呟いた。

龍牙には『力』を感じするような能力は持ち合わせていない。だが、これまでの何百何千もの戦いの中で、気配でその力量を測ることが出来るほどに彼の気配に対する感覚は鋭く研ぎ澄まされていた。今の光もそうだ。建物そのものを揺らすほどの力の衝突、そして閃光。確かに凄まじかった。だが、それと同時にどこか『抜き』があるのも感じていた。

自分の身を守るためのとっさの抜きだろうが、これほどの威力のものをその微妙な力加減でコントロールした時点でその力量は明らかだった。

「強いな。」

それこそ自分と同等に。

そこまで思考を廻らせながら龍牙は薄く笑った。まるで、お前たちのしたいことが分かったぞ、と言わんばかりに。

会場が襲われた時、ダンゼルが戦う中、実は龍牙はヒューズのボディーガードに紛れ、避難をさせていた。その時に龍牙はヒューズから興味深い話を聞いていた。

『知っているかい？ 龍牙』

『何をだ？』

『また秦国と戦争をするらしいよ。』

なぜこのタイミングでヒューズがその話題を出したのか、龍牙は今まで分からなかった。

だが、今なら分かる。開戦まで後一年。その情報こじがこの事件を紐解く鍵だったのだ。

「腐っているな、この国は。」

反吐がでる、そう口にしながら龍牙はもう一人の仲間ともの元へと足先を向けた。

激しい閃光が収まっていくのと反比例して、外から聞こえる騒音は先ほどよりも大きくなっていった。

バチバチと火花を散らす切れた電線。その微かな光が周囲の惨状を照らしていた。

それが通っていた天井が、壁が、床が、全てが吹き飛んでいた。

天井は先ほどガムルが塞いだが、関係ない。なぜなら、

建物の一角が丸々吹き飛んでいたのだ。

ひびの入っていた壁は跡形もなく消飛び、ひんやりとした上空の空気が流れ込み、捲れる程度だった床も削り取られ、階下が丸見えになっている。

「……ぐう」

また巻き上がった粉塵が外へ流れていく中、微かな呻き声がパチパチと火が爆ぜる音にかき消されながらも、かろうじて辺りへと届いていた。

それに加え、ガラガラと瓦礫が崩れる音が二か所から聞こえてきた。

一つは建物の外側に近い壁。

もう一つはその一つ下の階の部屋の中央だった。

生命が生きているなど奇跡とも思える現状で、もぞもぞと二つの影が頭を持ち上げた。

倒壊した天井から差し込むほのかな光がその二人の姿を映しだす。だが時間のせいかな、二人ともその身体のみしか視認することができない。

しばらく二人はぜえぜえと荒くかたで息をしていたが、

「てめえ」

怒りでか、それとも痛みでか分からない震えた声、それを合図に二人がよろよろと立ち上がった。

あの凄まじい熱量を持った熱線による衝突。その威力は明らかに常軌を逸していたのだ、撃った方も撃たれた方もただではすまないだろう。

「詰めが甘いんだよ、お前は。」

だが二人は立っていた。

あのような爆発を受けたのにもかかわらず立っていたのだ。

あの衝突は、いやあの熱線はフィロが使ったものと同等的には

それよりも強化されているともいえる。そんなものを受けて、撃つ
た方と同じように立っているなど異常以外のなにものでもない。

その異様な空気の満ちた廊下だった場所。その中央で一歩前に踏
み出した彼の顔を月明かりが照らしだした。

青白い、ガムルの顔を。

あの協力的な熱線を彼は全方向から受け止めた。なのに彼の身体に
ある傷は腕の刺し傷と一部の皮膚が赤くただれているだけだった。

「くそっ」

それに対して、自分の身体を抱きしめるようにしているレオンは、
体中から少くない血を流していた。

「なぜだ！？　なぜあの状況で避けられた！？　それになんなんだ
よ、これは！？」

だがそれも熱線によるものではない。その傷跡は『銃痕』のよう
だがそれでもない。

その奇妙な傷跡にレオンは叫ばずにはいられなかった。全身を襲
う尋常ではない痛み。気を失わなかったのがある意味奇跡といえる。
だがそれよりも、なにより『四聖人』の一人として現状をそのま
ま受け止めることなど不可能だった。

それを知ってか知らずか、ガムルはうつすらと笑みを浮かべた

「簡単だ。石を弾丸みたいに飛ばしたただけだ。」

「そんなことがあの一瞬でできるはずが、なによりよりお前の身体
が持つわけがな……まさか！？」

信じられない、そう言いたげな表情を浮かべるレオンにガムルの
口元の歪みが増した。

「やっとわかったのか？　ああ。俺はあの中にいなかったんだよ。」

「だが、なぜ俺の射出のタイミングが分かった！？　視界が確保で

きないはずなのに……」

「お前、忘れてないか？ 自分で言っていたのによ。」

ニヤリと笑うガムル。その瞳が一瞬、『蒼く輝いた』。

「その眼か！？ その眼で俺の術式を！？」

「あとは壁の中に引火しやすい気体を詰めこむだけだ。簡単だろ？」

「くそっ！！」

ガンツとレンチで床を叩いてからレオンはよろよろと立ち上がった。

「俺が、この俺がこんな奴に……」

一步、だがそこまでだった。体中に傷を負ったレオンはそれ以上に進むことができなかった。

「その驕りが勝敗を決したんだよ。普通にやれば俺の負けだった。」

「くそっ」

そんなレオンにガムルが歩み寄っていく。しかし、そのガムルも傷は少ないとはいえ、あまりにも血を流しすぎた。彼の相棒を引きずるようにして、一步、また一步と近づいていく。

そして二人は初めて真正面から向き合った。

「俺はあまりとどめを刺さない主義なんだが、お前は許す気がさらさらない。」

「くそっ」

「お前はあいつらを駒だと言ったな？ だがそれは違う。」

お前は間違っている。ガムルは青白い顔を横に振って見せた。

「くそっ」

「全てを失うことで得られるものがある……俺はそれを手に入れたんだ。」

「くそっくそっ」

弱い自分を決して見放さず、『仲間』^{とも}と言ってくれる四人。そんな最高の仲間を手に入れた。その喜びは彼自身の無力さを遥かに上回るものだった。

「だから、その仲間を駒ともと言ったお前を許すわけにはいかないんだよ。」

「くそっくそっくそっ」

俯き、同じ言葉を呟き続けるレオンにガムルは残された全ての力で巨大な斧を持ち上げ、

「後悔はあの世でやれ。」

振り下ろした。

「くそがあああああああああああ！！！！！！」

ただの死に際の叫び声。だがその声になぜかガムルの身体が吹き飛ばされていた。

「くっ」

大気を振動させる、ただそれだけなのに気付けばガムルの身体は反対側の壁際まで押し返されていた。

「マジかよ……」

先ほどまでお互い力を使い果たし、もう立ち上がることにすら難しかった。

だが、今はどうだろう。

ガムルの前にいるレオンの身体が火によって形造られた円に囲まれていくのだ。

「俺は、負けられないんだ。負けられないんだよ！！」

そしてその炎の高さは増してゆき、ついにはその身体を完全に覆

ってしまったっていた。

「マジかよ……」

同じ言葉を繰り返すガムルの瞳には鮮明にその変化が映し出されていた。

「『力』が、戻っていく？」

そう、空っぽで『眼』にすら映らなかったレオンの輪郭が今、はつきりとその眼に映っているのだ。

「まさか、お前は……」

「俺は、お前とおんなじだ。」

炎の奥から聞こえてくる声にガムルは全身から汗が噴き出るのを感じた。

逃げろ、そう言っているかのように。

だが彼は動かなかった、いや動けなかった。もう彼の身体には動くだけの力が残っていなかったのだ。

それと同時にガムルはあることを思い出した。レオンの持つ機械剣、それにはたった一つしか『珠』が着いていなかったことを。

わなわなと震えはじめるガムルの前で幕が開けられるように、その炎の壁の中から『それ』は姿を現した。

赤黒く染まった身体。黒く長い爪。歪みなく並ぶ鋭く長い牙。窪んだ瞳。そして、橙色だったその髪の間から人間にはないはずの『角』が二本、生えていた。

もうその姿は人間からは程遠い、その姿はまさしく、

イフリート
「炎神……」

「レオン、お前も……『複合体』^{アマルガム}だったのか。」

大きく目を見開くガムルを、レオンは長い爪で指した。

「俺は……負けられないんだよ。」

その瞳は彼の意志の強さを表すようにその赤みを増していく。

「お前もだせ、今のお前の本気を。」

レオンの言葉にガムルはハッと自分の斧の中に納まる黒い珠を見つめた。

その隙を見逃さず、レオンはその手に赤い術式を出現させ、それをガムルに向けた。

ゴウッ

ガムルはかろうじて身をそらすと、その彼のすぐ横をあゝ熱線が通り過ぎた。

（速いっ!?!）

絡まりそうになる足を無理矢理動かし、次々と襲ってくる赤い狂気をかわしていく。

「まだそんな力があつたか。なら、」

そんなガムルにレオンは太さも増した脚を曲げ、砲弾のように飛び出した。

「させるか!?!」

一直線に向かってくる赤い砲弾にガムルは走りながら残った少ない冥力を注ぎ込み、岩の壁ととげをその前に幾重にも並べて出現させた。

「くだらねえ。」

だが今のレオンにとってそれは大気に等しかった。一メートルは

ある厚い壁を、人の胴ほどもあるとげの束を、全て溶かして突き進んでいくのだ。

「なっ!？」

そして何も遮るものがなくなり、膨らんだレオンの身体がガムルにぶつかった。

「うああああああああああああああああ!!」

じゅう、と肉が焼ける音と臭いをまき散らしながらガムルは壁を突き抜け、その先の壁に叩きつけられた。

「う、ああああ」

床に崩れ落ちたガムルの姿はひどかった。彼の身体を覆っていた服が彼の皮膚と一緒に焼け爛れているのだ。その痛みは想像を絶していた。

床に転がるガムルを見ながら全身が赤く染まったレオンが暗い中へと踏み込んできた。

「お前は俺と同じだ。なら早くお前も出せよ。本性を。」

一步、一步、それがカウントダウンだと言わんばかりにゆっくりと歩みよってくる。

「もし出さないなら、」

そして、それは目の前で動きを止めた。

「死ぬだけだ。」

『死ぬだけだぜ。』

奇妙な合成音にガムルは頭を押さえた。耳から聞こえてくるレオンの声、それと同じタイミングで彼の脳に直接語りかける声があった。

『俺を忘れたなんて言うなよ? ロー、おっと今はガムルだったか?』

(黙れ、『煌月』。)

『覚えてくれていたのか、嬉しいねー』

ガムルは耳から流れてくる情報を全て無視し、頭の中に響くわざとらしい口調に集中した。

(今更、何しに出てきた?)

『お前が死にそうだからよ。パートナーを見捨てるわけにはいかないだろ?』

声に出さず、心中で呟くように話しかけると答えが返ってきた。

(何が言いたい?)

『俺を使え。』

その言葉にガムルの眉がピクリと動いた。

『俺を使えばお前は本来の力を使える。それならあんなガキ、一捻りだろ?』

(……条件はなんだ?)

明らかな警戒を見せるガムルに声は笑い声を響かせた。

『ハハハッ、なーに、簡単だ……お前の身体を貸せ。』

(断る。)

『ちっ。やっぱそう言うよな。はあ。』

ガムルの即答にやれやれと言う声色で答えながら、仕方がねえ、と声は続けた。

それと同時にガムルの身体を黒い何かが覆い始めていた。

『使う、使わないはお前次第だ。好きにしろ。』

(ありがとな。煌月)

『ちっ』

照れ隠しなのか舌打ちを残しながらガムルの頭から声が消えた。そこでガムルは初めて通常的时间を取り戻した。

『本当はここで使いたくないんだけどな。』

尻餅をついた状態から立ち上がるガムル。

月の光が遮られた暗闇の中、ガムルの身体を黒いものが蠢いていた。

「あの出来損ないの英雄さんのためか?」

鋭い牙の間から漏れる声にガムルは顔を上げた。

「答える気はない。」

そっけなく答えながらガムルは暗闇から月の光の元へ一歩踏み出

した。

「それが、お前の本当の姿か……っ!？」

声を発していたレオンは突如自分の頬を襲った圧力に、その身体が外へと押し出された。

「正解だが、間違いだ。」

レオンのお株を奪うガムルの腕は黒く、どこまでも黒く染まっていく。そしてそれは徐々に彼の顔にまで伸びていた。

「まだ、破壊は始まったばかりだ。」

「ちっ」

何事もないように立ち上がりながらもレオンは焦っていた。

顔面に受けた攻撃は大したことはない。だが、それ以上に、レオンはガムルの攻撃の動作を感じられなかったことに焦っていた。

「お前の特殊系の破天石もなかなかだ。だけど、これには勝てない。今の俺には勝てない。」

「ふん。驕りは身を滅ぼすとか言っていた奴の言葉かよ。」

「これは驕りではない。事実だからな。」

「なめるな!!……ちっ、時間切れか。」

レオンは牙をむき出しに唸っていたが、ふと左に顔を向けてから後ろへ走り始めた。

「ガムル、覚えておけよ!! 次会った時、お前を殺す!! 絶対な!!」

「待て!!」

ガムルの制止を振り切り、レオンは走った勢いをそのままに壁の亀裂から人工の光に満ちた外へと飛び出した。

「生きているか？」

「なんとかな。」

赤く光る獣が飛び出した後、穴の開いた壁をくぐり座り込むガムルに影が落ちた。

「ふん。お前もこっぴどくやられたな。」

「お前もってあいづらもなんとか無事なんだな……」

「少なくともお前よりはマシだ。」

「手厳しいな。」

自嘲の笑みを浮かべながらガムルは立ち上がった。

「誰に襲われた？」

「……知らない。」

「本当か？」

「ああ。」

正面から龍牙の紅い瞳を見つめ、よろよろとその横をすり抜けた。

壁の割れ目ではなく扉から出ていくガムルを目で追いながら、龍牙は、はあ、と息を吐いた。

「わかりやすい奴だ。」

これまで何千、何万の人間を見てきた龍牙にとって、ガムルが何かを隠していることは論ずるまでもなく明らかだった。

だが、それと同時にそれは気軽に尋ねられるものでもないということに気づいていた。

「仕方がないな。全く、なんでこうも訳ありな奴ばかりが集まったんだろうな。」

面倒だ、そう言いたげなその言葉とは裏腹にその顔はどこか楽しそうだった。

「いや、今回は本当に君たちに頼んでよかった。」

またあのホテルの最上階で『銀翼旅団』の四人とヒューズがそろっていた。

「報酬はいつもどおりあの口座に頼む。」

「分かっているよ。今日にでも入れておこう。後で引きだしてくれ。」

「助かる。」

「でも、あそこまで大事になるとはね。」

あのホールの強襲から三日、ロザンツ帝国中の都市はこのことでもちきりだった。

新聞などの情報端末では表紙を飾り、そのためにヒューズは記者に常に囲まれ続け、今日になってやっと解放されたのだ。

だがそれは龍牙たちにとってもありがたかった。重傷者が二名もいる状態で長距離の移動はできる限り避けたかったからだ。

それを心得ていたのだろう。ヒューズは何も言わず一同を見回し、首を傾げた。

「あれ、そういえば例の彼は？」

「ああ、ガムルなら……」

コンコン

「はい。」

白い壁や天井がまぶしい部屋の中、同じく白いベッドに横たわっていた少女、麗那が身体を起こした。

意識が戻ってから三日、検査も正常で明日で退院となっていた。「よう。」

白い横滑りの扉をくぐってきた人物に麗那はクスリと笑った。

「何笑ってるんだよ。」

彩り豊かな花束を抱えたままガムルは複雑そうな表情をした。

「ごめん。ごめん。いや、似合わないなーと思ってさ。」

「せっかく、恥を忍んで来てやったのによ。」

「ごめんってば。」

ベッドの傍らに置かれた椅子に腰かけてからガムルは棚の上の花
瓶に花を挿しだした。

「これでよし。」

「まあ、及第点かな。」

「手厳しいな。」

苦笑をもらすガムルに麗那は、ははは、と笑うがすぐに暗い表情
になった。

「ねえ、」

「ん？」

太い指で器用にリンゴの皮を剥いていたガムルは手を止め、麗那
を見た。

「私は……ここを出てからどうすればいいのかな？」

俯く彼女にガムルはただ黙ってナイフを棚の上に置いた。

「なんでそんなことを考えるんだ？」

「だって、店もお金も、私の作品も全部燃やされちゃったし。それ
に……」

「大丈夫だ。」

「え？」

一言そう呟くと突然、ガムルは病室を出て行った。

「なんで……」

彼女は自分が混乱するのが分かった。入院していた四日間で見舞
いに来てくれたのはガムルただ一人だった。それも毎日。だからこ
そ麗那は信じたくなかった。

ガムルが自分を見捨てたのだと。

「うっ」

はつきりとそれを意識した瞬間、彼女の口から呻き声が零れた。それに続いて手が、肩が、足が、身体が震えだすのを感じた。

（私はどうすれば……）

手で顔を覆っていると扉が荒々しく開かれる音が聞こえた。

ゆっくり、恐る恐る手をずらしていくと先ほど飛び出していったガムルがそこにいた。

服装は先ほどとおなじだったが、なぜかその両手にはバッグが一つずつ下げられ、もう一つ背中に背負われていた。

「結構重いもんだな、これ。」

ガムルはそつと荷物を床に下すと、その内の一つ、背中に背負っていたものをベッドの上に置いた。

「お前のだ。」

「え？」

開けられたバッグの中身に麗那は涙を拭くのも忘れてそつと手を伸ばした。

ゆっくりと手に取ったその感触、形、色、輝き。間違いなかった。

「私の……『破天石』」

「そうだ。建物や店の金は無理だったけどこれだけは多分全部ここに入ってると思う。」

「だけど、なんで……」

「詳しくは話せないが、燃えなかったんだ。」

唇を軽く噛むガムルに麗那は問いを紡ぐ口を閉じた。

「そうだ。後、もう一つ。」

そう言いながら、ガムルは下げていたバッグを開け、その中から一つ取り出した。

「ど、どうしたの？ それ。」

ガムルの手に握られていたのは、札束だった。しかもバッグの中にはそれが後二十はあった。

「慰謝料だよ。」

「え?」

「俺からの、俺たちからのだ。」

「だけど、あれはあなたたちがやったわけじゃ……」

「だが、俺を狙ったの行動だった。それに、この行動そのものを俺には防ぐことができた。なのに、しなかった、できなかった。」

「……」

「だから頼む、今は受け取ってくれ。」

ガムルが手に乗せてきた札束を麗那は虚ろな目で見つめた。

それをしばらく見ていたが、ガムルは何も言わず立ち上がり、扉へ歩き出した。

「じゃ……」

「これが……その『責任』の取り方なの?」

取手にまでかけた手をおろし、ガムルは振り向かずには答えた。

「思っていないさ。」

「なら、その『責任』をこんなお金じゃなくて、誠意で返しなさいよ。」

彼女の声に力はない。だがその奥にガムルの心を動かすものが眠っていた。

「それができないからって、こんなお金で済まそうなんて……」

「じゃあ、どうしろって言うんだ!!」

「っ!?!」

凄い形相で詰め寄るガムルに麗那はビクッと震えた。

「俺たちは……国賊だ。」

「え!?!」

「この国が全力で俺たちを殺す気にいるんだ。死ぬ気はないが、俺たちそれぞれの目的のためには死ぬのも覚悟でいかないといけないんだよ。」

「あ……」

「俺だってできるならしたいんだよ！！　だけど、だけどな。」
顔を俯け、拳を強く、固く握りしめた。

「それでも俺にはやらなくちゃいけないことがあるんだよ。」

その様子を静かに見つめていた麗那は足の上のバックから手を突っ込んだ。

「……わかったよ。」

そう頷きながらガムルの手を取り、取り出したものを握りこませた。

「それが終わってから、それを持って私に土下座しにきな。」

握りこまされたものを見てガムルは目を見開いた。そこにあったのは紅い『破天石』だった。

「これは……」

「私の作品で一番の傑作だよ。壊したり、なくしたりしたら容赦しないからね。」

目の端に涙を残したまま笑顔を見せる彼女にガムルは顔を上げ頷いた。

「……ああ。」

差し出された手を握り締め、ガムルは名残惜しさを感じながらも部屋を後にした。

「どうだい？」

暗い部屋の中、二人の影が向き合っていた。一人は椅子に腰かけ、もう一人はその前に跪いている。

「さすが、というべきです。」

「そうか。で、例のものは？」

「ここです。」

椅子に座る影に跪いていた方が懷から出したあるものを手渡した。
「ふふ、これでやっと一つ目だね。」

その手に握られた『紅い珠』に照らされた口元は愉快げに歪んでいた。

「さて、後もう一つか。情報は？」

「いえ。やはり『六王獣』の巣をあたるのが最適かと。」

「流石にヴァリアントの巣を一人で行くというのはあまりさせたくないんだけどね。どうしようか？」

「奴らに探させては？」

「……そうさせてもらおうか。彼らから一番近いのは？」

「……『翼王獣』^{マンティコア}です。」

「そうか。方法はまかせるよ。」

「はい。『機械剣』の使用を許可していただけませんか？」

「いいよ。できる限り、痕跡を『残す』ようにね。」

「はい。」

そして二人は霧のように姿を消した。

「本当に良かったの？」

「……お前もしつこいな。」

また走り出したビークルの中、あのソファに腰かけていたガムルは振り返った。

その視線の先にいたのはいつものようにカップを片手に見下ろすリタニアだった。

一同と合流したガムルはヒューズから振り込まれた報酬金を引き出

し、その足でビークルで街から出たのだ。

引き出した報酬の額にガムルは啞然としていたが、ベッドの横にポンと置かれている鞆を見ているとなんだか夢のような気分だった。

無骨なガムルの反応にリタニアは、はあ、とため息をついた。

「そんなものはいらない。それに、今のあいつに俺なんか必要ないんだよ。」

自分に言い聞かせるようにそう呟いたガムルは手の中にある紅い珠を見つめた。

あの『珠』ほどではないが、その輝きもまた鮮やかで美しい。

それから視線を外し、ガムルは頭上にある窓を見た。

そこから見える空はここ数日で一番晴れ渡っていた。

濃い霧の中で（前編）

「へっくしょん！！　いってえ！！」

盛大なくしゃみをしたガムルはソファの上で転げまわった。街を出てから早五日。ダンゼルやリタニア、フィロといった面子はあの襲撃による怪我はもうすぐ完治という状況だった。

その中、ガムルはただ一人、全身に包帯を巻かれたままだった。ダンゼルの持つ塗り薬とガムルの驚異的な回復力で普通ではありえない速度での回復をみせてはいるが、それでも完治まではまだ幾日かかる様子だった。

その証拠にくしゃみをしたガムルは全身に走る激痛に悶えている。その様子にリタニアはあからさまなため息をつき、運転するダンゼルとその横に座るフィロはくすくすと笑っていた。

「うう……なんか寒くないか？」

「そりゃあ、そうよ。私たちが今いるのは『サムヘア湿原』なんだから。」

『サムヘア湿原』

『フィリーズ』から街道ではなく道なき道を西へしばらく進むとこの大陸でも最大級の湿原がある。それが『サムヘア湿原』である。一年中、濃霧に覆われ、太陽光が遮られているため、冬はもちろん、夏でも他の地域での冬と同等の気温までしかないかない。

そのためこちら一帯は他の地域では見られない生態系を築き上げていた。そうそれはあまりにも異世界としかいようがなかった。牛、犬などといった他の地域では普通にいる動物などは存在せず、植物ですら全く別物だった。

光ではなく霧を体内で分解し、栄養とする植物。視力を削り、聴

力、嗅覚が発達した生物。そしてそれを狩る大型の生物『ヴァリアント』、そして『幻獣』と呼ばれる希少種が存在するのだ。

そのため生物学をはじめとする様々な研究者がこぞってこの中へと入りこむのだが、その中で帰ってこれるのはほんの一握りだけだった。

とはいえ、人間が全く住めない、というわけではない。

中には古くからここに住む、特殊な技術を持つ『サメツト族』と呼ばれる少数民族が存在する。

研究者の中にはこの技術を求めて入り込む者もいるらしいが、その関連の商品が出て来ていないことから恐らく、失敗したのだろう。まあ、私個人としては……

「つて、またこの雑誌かよ!!」

リタニアに渡された雑誌を床にたたきつけるとその表紙に、『猿でもわかる地域事情（サムヘア湿原編）』と印刷されていた。

「ちょっと、それ私のよ!!? なにやってるのよ!!」

「お前か、お前なのか。このふざけた雑誌を買ってたのは。」

「そうよ!! なにか文句ある?」

「もっとましなの買えよ!!」

「私はこれが一番わかりやすいのよ。文句ある!?!」

「だから……もういいや。疲れた。」

徐々に痛みが増してきた身体をまたソファに倒しながら、ガムルは右側の窓を見つめた。

どこに木が生え、どこに沼があるのか分からない、自然がつくった罠の山に不安を隠せなかった。

「……またいやな予感がするな。」

ぼそりと呟いたその予感がまた当たる。そんな確信がまたガムルの中で廻っていた。

「そういや当たるだったな、俺の予感。」

霧で数メートル先が見えない中、そう呟くガムルの少し先に白い箱が見えた。

それはガムル達が乗っていたビークルな訳だが、心なしかその車体は傾いていた。

今ガムルがいる場所が斜面なのではない。

「脱輪ね。」

隣からかかった声にガムルは顔を向けると、不機嫌そうに腕を組みながら近づいてくるリタニアが見えた。

「ああ。」

そう、消えることのない霧や降らない日の方が珍しい雨。その悪条件が地面にぬかるみを生み出し、後輪を沼の中に引きずり込んでいた。

「だめだ。かなり深く沈んでるよ。」

そう言いながら額の汗を拭うダンゼルが二人に近づいた。その肩には様々な工具を詰め込んだバッグが抱えられている。

「やっぱり何か引っ張るものがあるみたいだよ。」

「ここじゃ、土系統の術式は使えないわね。」

「まあ、この土質じゃあな。」

ガムルが蹴りつけた足元を見ると、抉れた土の間から水がしみ出していた。

土系統の術式は基本的に強力だが、その地形に左右されやすい。それは単純に強度の問題だった。

いかに多くの冥力をつぎ込んでも泥は泥。強度はたかが知れている。

そのため、彼らには今、手段がなかった。

火系統で乾かそうとしてもこの湿度では思ったような火力も確保できず、また乾かしたそばから湿ってしまう。

水系統でもここまでの水分を操るのはなかなか骨が折れる。なによりこれ一度で終わるとは限らないのだ。

「とりあえず、リユーガに連絡しました。」

「ひとまずそれで様子を見ましょう。」

「うん。そうだね。」

「了解。」

そう結論づけ、ビークルへ戻り始める四人。だが彼らの足はその乗車口に足をかける前で止まっていた。

「おいおい……」

彼らの鼓膜を揺らす音に、勘弁してくれよ、という顔をするガムルを残し、残りの三人が駆けだした。

「くそっ」

それに気づき悪態付きながら駆けだしたガムル。急いでダンゼルの方へ向かうその横で派手に地面が弾け飛ぶ。

突然、真横で起こった爆発に吹き飛ばされながら、ガムルはダンゼルがいる方向に別の人影があることに気付いた。

最初の一つだったそれは一つから二つ、二つから三つと瞬く間に増えていく。そして気付いた時にはもう一切の隙間なくガムル達の周りを囲まれていた。

「なんなんだよ、こいつらは。」

「『サメット族』だよ。」

岩陰に滑り込んだガムルの横でダンゼルが答えた。

「攻撃する理由は？」

「わからない。だけど、どうやら向こうは僕たちを今すぐ殺す気はないみたいだね。」

そう予想するダンゼルにガムルは頷いた。どうやらこの砲撃はあくまで威嚇のようでビークルには全く当たっていないのだ。

性能のせいかもしれないと疑ったがすぐにそれは晴れた。

それはビークルから五十メートルほどの距離からこれだけの数を撃ってビークルは愚か、その周囲のものに当たらないなど考えられなかったからだ。

「つまり、俺らに降伏して出てこいと？」

「まあ、そうだろうね。」

「どうする？」

「うーん……リタニアさん。どうする？」

『半殺しぐらいで止めてあげるわ。』

肩につけていた通信機を通して聞こえてくる恐ろしい言葉に苦笑いしながらガムルとダンゼルは機械剣を取り出した。

「さて、さっさとやるか。」

二人が戦闘を開始してから数分。

敵の目的が分からない以上、『殺す』という手段に出れない彼らの状況は、あまりよくなかった。

得意な土の系統を封じられたガムルはただ風の刃を生み出すのが精いっぱい攻撃だった。ダンゼルについても狙いがはっきりと定

められないため、うまく戦えないでいた。

そのような状況で彼らが無事なのはただ一つ、『サメツト族』が遠距離にこだわっているからでしかない。

女性陣の方からいつものような派手な音が聞こえないでいることから状況はあまり変わらないのがガムルには容易く予想できた。

周囲の状況を確認し終えたガムルは、またさっきの岩にもたれなかった。

「ガムルさん大丈夫なの？」

息を荒げるガムルに近づいてきたダンゼルは、チラリと視線を向け、霧の中に引き金を引いた。

「……大丈夫だ。」

そう返すガムル。だがその額にはそれが嘘だと主張するように冷や汗が噴出していた。

「ガムルさんは休んでいてよ。」

「だから大丈夫だって言ってるだろ！！　っ。」

怒鳴ろうとした身体を丸めるガムルにため息を一つ。ダンゼルは銃身を岩の角に当てて構えた。

「やせ我慢したって無駄だよ。」

岩の影から銃口だけが飛び出したような状態でその引き金を引いていく。

それが引かれるたびに周囲の霧に赤い光が映し出され、遠くで爆発音が轟くのがガムルの耳に届いた。

「おい！！　殺すな！！」

「威嚇だよ。流石に殺さないって。それに、」

睨むガムルから視線を外すとダンゼルは銃を下げ、ニヤリと意味ありげに笑った。

「……それに？」

そう尋ねたあと、ガムルはダンゼルの背後から聞き覚えのある音が近づいてくるのに気付いた。

その音は間違いなくガムル達の方へ一直線に近づいてきている。敵か、そう思い斧を構えたガムル。だが近づいてきたそれは向かいにいるダンゼルのすぐ後ろで高く、高く舞い上がった。

「最強の援軍がきたしね。」

長いコートをはためかせながら着地したそれはザザッと泥を跳ね飛ばしながらガムル達とサメツト族の間で止まった。

「止めろ!!」

あの冷静沈着な龍牙にしては珍しい獣のような咆哮にガムル達は愚か、サメツト族ですらその動きを止めていた。

龍牙はバイクを立てかけるとそのまま剣を片手にガムル達とは違う、霧の向こうへと消えていった。

「リユーガ!!」

それにハッと動きを取り戻したガムルはその屈強な手を伸ばすが、そう長く宙をさまようことはなかった。

それは何かガムルに起こったのではない。ただ、霧に消えていく龍牙が振り向かずにつつと手を上げたのだ。

心配するな、そんな意図がその行動から感じ取れたガムルにその行動を止めることなどできる訳がなかった。

同じ気持ちなのだろう。あうあうと声が出ず、口の開け閉めを繰り返すにダンゼルの肩にガムルは上げていた手を乗せた。

「待つしかないな。」

「……………うん。」

取り残された二人はただ無言で霧の向こうを見つめ続けた。

隠れていた岩に腰かけたガムルとダンゼルはビークルの方から二人、近づいてくるのに気付いた。

「リユーガは？」

開口一番のこの言葉にガムルとダンゼルは無言で消えていった方向をみやった。

「そう。」

その反応にただ頷くと傍らにいるフィロを連れてガムル達の近くの別の岩に腰かけた。

霧の向こうでは緊張感が切れたのか、がちゃがちゃと金属が擦れあう音が鳴り響いている。それをボーと聞きながらガムルはリタニアの横に座るフィロがあまりにも静かすぎるように感じた。

龍牙ほどの実力を持てば、もしやといったことは起こらないだろう。だが、フィロはなぜか妙に龍牙になついていた。それこそ本当の家族のように。

だからガムルは不思議だった。だが、彼女のまっすぐな瞳を見てすぐに分かった。

彼女は龍牙を信じているのだ。それも『絶対』という言葉をつけるとの確信をもって。

（敵わないな。）

ガムルは改めてこの集団の結束の信頼の堅さを思い知らされた。

「帰ってきました。」

そうやって一人嘲笑の笑みを浮かべていると、フィロの言う通り霧の向こうから人影が近づいていた。

だがその数は一つではない。真ん中を先頭にして三人が歩いてくるのだ。

ガムル以外の三人は立ち上がりその影を待ち受けるが、ガムルは立ち上がらずに腰の機械剣に手を掛けた。

「お前ら、何のようだ？」

霧をかき分けるように現れた三人にガムルが威嚇の意味を込めて機械剣を引き抜いて見せる。

「『銀翼旅団』の方ですね？」

それに全く動じず、真ん中の一人が発音に不快感を感じる言葉と共に一歩前に踏み出した。

そこで座ったままのガムルにも姿がはっきりと見ることが出来た。

頭から足先まで茶色のマントを被っている。唯一外気にさらしている顔はと言うと口元は布で覆われ、目元は大きめのゴーグルで隠されていた。

ガムルから視認できる体の部位は結局『サメット族』の特徴でもある大きな鼻だけだった。

「そうだけど？」

「我々と共に来ていただきたい。」

返答など分かっているとでも言いたげにそれはリタニアの言葉に続けるように声を発した。

「もう一度訊く。何の用だ？ リューガはどうした？」

「それは我々について来れば答えましょう。」

「ちっ」

表情の読めない相手との交渉はあまりにも分が悪い。それを理解しているガムルは舌打ちを一つ、岩から飛び降りた。

「では、こちらへ。」

それを了承と理解したのだろう。短い手を霧の方へ伸ばし、一同を誘導し始めた。

「待て。先にこいつを引き揚げろ。」

「それは我々が責任を持って回収させていただきます。皆さんは早く村の方へ。」

「ちっ」

あっさりと追及をかわされたことに舌打ちをこぼしながらガムルは右手に握る機械剣を腰に戻した。

「では、ご案内いたしましょうか、我々の村に。」

どこか嬉しげなその声に四人は違和感を感じながらもそのあとに続いた。

ビークルを残した沼地からしばらく進むと七人はさらに霧の深い森の中に踏み込んでいた。

すぐ隣の人ですらぼんやりとしか見えないほどの濃さにガムル達四人の緊張感は増していた。その緊張感は霧のせいだけではない。その向こうにあるもの、つまりガムル達の両脇を固めるようにして並んでいるサメツト族から向けられる視線のせいでもある。

「異様な雰囲気だね。」

「ああ。だけど……」

言葉を濁しながら辺りを見回すガムルにリタニアは首肯した。

「敵意が全く感じられないわね。」

「どちらかというと、探っている感じですね。」

「なんでだ？」

「さあ？ あ、霧が晴れてきましたね。」

こそそそとそれぞれの感想をかわしていると、フィロの言う通り、少しずつだが周囲の霧が薄まっているのがガムルにも分かった。

だがそれと同時に、その先に奇妙なものがあることに気が付いた。
「なんだよ、あれ。」

この原生林にしか存在しない、日光ではなく大気中を生き物のようにさまよい続ける霧を使って養分を生み出す木々。それを餌にしている小型の目のないトカゲのような生物。さらにはそれを捕食する大型の二つ足で羽の生えたライオンのような生物まで全てが、

死に絶えていた。

そしてこれまで幾多の死骸を見てきた彼らの目には明らかだった。それが、銃弾や爆発物によるものと。

「そういうことか。」

その奇妙な焼野原は彼らの左右へ霧で見えなくなるまで延々と続いている。明らかに人為的な惨状に四人の足は自然と早まっていた。そんな四人の足がまたひとりと進むのを止めた。

「フーン、フーン」

それはどこから聞こえる風の音のように微かに聞こえる甲高い鳴き声。そしてそれは彼らの前にいた。

「フーン、フーン」

彼らの進む先、そこには小さい黒い身体で大きなものを必至に押している何かがいるのが見える。

全身に白と茶色の縞々の模様を刻んだ身体は猪に近いが妙に長い尾が印象的だ。

その小さな身体で押しているのは恐らく、母親なのだろう。自分の数十倍はあろうそれを、ただただその小さな頭で押し上げていた。

そんな必至な子に対し、やはりその母親の身体には生気が宿っていなかった。

身体の半分が焼け焦げ、その身体の縞々の模様が消えかかり、頭部にはいくつもの銃痕が覗いていた。

だが、それでも子豚はあきらめない。必死に、押し続けていた。そこへ七人が近づくと子豚は振り返り、牙を剥き喰らだした。

「ヴー」

逃げ出しそうになる身体を押し付け母親の前に立つその宝石のような瞳には強い光がともっている。

戦闘を歩いていた三人は見向きもせずに通り過ぎていくが、後ろの四人はそのすぐ横で立ち止まっていた。

その中から一人、可憐な少女がその子供に向け歩き出した。

晴れてきた霧の中、艶やかな黒髪をなびかせながら、フィロは全身を震わせる子供に手を差し出した。

「おいで。」

ガブリ

「っ!!」

鋭い痛みを感じた右手を少し引っ込めると、ぷっくりと血が浮き

出ていた。

だがフィロはその鮮やかな赤が滴る右手をかばわずにまた手を差し出した。

「フーン、フーン」

「大丈夫だよ。」

諭すようなゆっくりとした口調にその子供は迷いが生じたのか後ろの母親の亡骸を見やった。

たったの一言。だがそれが全てだった。幾千幾万の言葉よりその一言が擁する真意は深かった。

子供がこの数日味わってきた孤独感、恐怖、悲しみ。その全てを覆い尽くすようなやさしさに満ちた言葉だった。

恐らくそう言われたその子供も、現状を理解しているのだろう。

母親がもうこの世にいないことを知っていたのだろう。亡骸を見るその瞳がそう告げていた。

だが、その子供の決意は固かった。

赤い滴を垂らす手をその小さく震える頭で押し返してくるのだ。

その反応にフィロは身動きができず固まるしかなかった。その肩に後ろから近付いたガムルがポンと手を置いた。

「止めておけ。」

「……でも、」

ガムルの声が正しいと思いつつもあがる抗議の声。だがその声には力がなかった。

「……分かりました。」

ふう、と小さく息を吐いてからフィロはゆっくりと立ち上がった。服に付いた泥を払い、それをつぶらな瞳で見えてくる子供の頭を撫でた。

自分と同じような孤独を抱えるその小さな身体を、抱き上げたい。

「元気でね。」

だが、それはもう許されない。

その気持ちを断ち切るために小さく囁くようにそう告げてから、フィロは先に進みだした仲間の後を追った。

「変わった方々ですね。」

「何がだ？」

先頭に追い付いた四人を迎えた侮蔑の言葉にガムルはあからさまに不機嫌さをだすと、その三人は軽く肩をすくめた。

「いえ、あんな小さな命を気にするのがおかしかったので。」

「命に大きいも小さいもないだろうが。」

さらに眉間にしわを寄せながら、その三人に近づくが、

「何人も殺してきたあなた方には言われたくないですね。」

「てめえ!!」

「ガムル!!」

その一言に真ん中のサメツト族に掴みかかろうとするその寸前でリタニアに肩を掴まれていた。

「怒るのは凶星だからでしょう？　これだから人間は嫌いなんですよ。」

「止めなさい!!」

獣のように激しくもがくガムルを必至に押さえつけながら、リタニアはキツと三人を睨んだ。

「私たちは確かに人殺し。それを否定する気はないわ。それは……私たちの選んだ道でもあるから。」

「ふふ、面白いですね。殺人鬼は言うことが違う。」

さらなる挑発にガムルのなかで爆発しかけているのを感じたりタ

ニアはさらにその腕に力を込めながら目つきを険しくした。

「だけど私たちは殺人鬼ではない。純粹に殺しを楽しむほど狂っていない。」

「口では何とでも言えますよ。」

「あなたはよほど私たちを殺人鬼に仕立て上げたいみたいね。ならなぜその私たちを殺さず誘導しているの？」

あくまで冷静に。その漢書の問いかけに三人の視線が一気に彼女に集まった。

「それは着いてから長の方から説明があるでしょう。」

「その里はどこにあるのよ？」

「ここですよ。」

リタニアの問いに即座に答えたサメツト族が指差したのは彼らの進む先。一層霧が濃くなり、伸ばした手の端までしか見えないところだ。

「ここって？」

「ここですよ。」

そうダンゼルに答えながら、先頭を歩いていた一人が何も無いはずの空間にその姿を消した。

「え？」

「結界か。」

そこにあったのはあのビークルを受け取った『駅』と呼ばれる場所と同じものだった。

空間に広がる波を見ていると、残りの二人も四人を残し、先にその波の中心へと姿を消していく。

四人はそれにしばし様子をうかがっていたが、

「行くしかないか。」

そう呟き、やっと怒りの収まったガムルが一步そこへ踏み出した。その言葉に頷き返し一同はほぼ同時にその結界の中へと踏み込んだ。

水中にいるような何かが肌に張り付く感触を耐えること数歩。青く歪んでいた景色がまた光を取り戻した。

「あら、いたって普通の村なのね。」

「そうですね。もっと洞窟のようなどころだと思っていました。」
結界を通り抜けた先の景色にいつの間にかリタニアの口から声が漏れていた。

だが、彼女たちがそう思うのも仕方がない。霧に包まれたこの地にある村ともなれば、薄暗い洞窟のような場所に住んでいると予想するのが当然だ。

しかし、実際は違う。

分厚い雲と濃い霧で包まれているはずなのに、なぜかこの村にだけは太陽の光がさんさんとふりそそいでいたのだ。

太陽光があるということは、それはその村の生物の多様性を促進していた。植物や家畜ではすぐ脇の農場でガムル達が見てきたものと同じものが存在している。その大多数は、この森にしか棲息しないものだが、一部に牛などの普通のものが混ざっているのだ。

「ようこそ。サメツト族の里、エリシウム『楽園』へ。」

それに見入ってる四人にまたあの声がかかった。

「どうぞこちらへ。」

護衛を兼ねていたのだろう。村に着いたら必要ないと言いたげに、そこに残っていたのは真ん中に立っていたサメツト族一人だけだった。

いやな奴を見たとき舌打ちをこぼすガムルを先頭にそのサメツト族の差し伸べる方へ四人は歩きだした。

彼らがいる里の入り口の方は全くと言ってもいいほど人がいない。だが、ガムルの耳にも遠くの方で多くの人の気配を感じ取っていた。

入ってすぐ二股に分かれた道を右に折れ、その気配のする方向へ進んでいると、並ぶ建物の影から何かが見えてきたのにガムルは気付いた。

「おい。」

「なんですか？」

呼び止め、指差すと前のサメツト族はその指先へと視線を向けた。「あれはなんだ？」

建物の影から頭だけだしたそれを指差すガムルにゴーグル越しにチラリと視線を向け、若干歩く速度を落としながらもごもごと口を動かした。

「あれは『世界樹』^{エルデ}ですよ。」

「エルデ？」

聞き覚えのない言葉に四人は同時にその名を冠するものに視線を向けた。逆光のせいで輪郭は分からないが、歩くにつれその大きさが増していく。それを感じながらまた速度を増したサメツト族について足を速めた。

しばらく進んだ後左手に曲がると人通りの多い通りにかかっていた。

商店が立ち並び、通りを埋め尽くさんばかりにサメツト族がその間を行き交いしている。

だが四人はそんなものには興味がないと言いたげに揃って上を見上げていた。

「あれ、本当に樹か？」

「まるで山ね。」

「大きいです。」

「初めて見たよ。」

通りの彼らとは反対側にあるものに彼らは茫然と呟いていた。

圧倒的だった。彼らを見下ろすようにそびえ立つ山のように巨大な樹『エルデ』。その圧倒的な存在感に四人は確実に吞まれていた。「この里にしかないからな。」

それぞれ思い思いの言葉を紡いでいるとガムルの前でぼそぼそとサメツト族が妙に自慢げに呟いていた。

その反応にしばし四人は固まっていたが、すぐにリタニアの顔に悪魔の笑みが浮かんだ。

「あら、あんたやっぱりこの里が大好きなのね。」

「……何が言いたい？」

本人は冷静に言っているつもりなのだろうが、その声は先ほどよりも少し高かった。それにまたにやにやと笑いだしたリタニア。その笑みに不穏なものを感じたのだろう。そのサメツト族はすぐに踵を返し、その『エルデ』の方に歩き出した。

「おい。待てよ。」

呆れ気味に呼んだガムルはそれに追い付くためにだるそうにその足を速めた。

「ガムルさん。傷、大丈夫？」

そのだるそうな歩き方が気になったのか、徐々に距離が縮みだしたガムルの横にダンゼルが並んだ。

「ん？ ああ。大丈夫、大丈夫。」

その心配そうな顔にニツと笑いかけながらガムルはバシバシとダンゼルの肩を叩きだした。

「痛い！！ 痛いよ！！」

「俺はこんなもので音はあげねえよ。」

「……さっき上げてたよ。」

平手打ちを背中に叩きこみ、ガムルはガッハッハという明らかなごまかし笑いを披露しながら早足でダンゼルの横を追い抜いた。

「よくぞ来られた。」

広い応接間のような部屋に通された四人は野太い声に迎えられていた。

あの商店街を抜け、その先にある『エルデ』。そのふもとにある里の長の屋敷に四人は通されていた。

石造りの高い塀にぐるりと囲まれた敷地は、遠くから見ても相当のものだと分かるほど横幅、縦幅ともに大きい。

だが実際、その大きさが逆に後ろの『エルデ』の大きさを強調してしまうことに、ガムルはその主に同情せずにはいられなかった。

「本当にデカいな。」

二メートル四方の立方体の石を積み上げた中心にある円柱状の塔。

その高さは縦に窓の数を数えると六。

石材による建築物としてはガムルが見てきた中で最大のものだ。

だがそれでもガムルの目は自然とその先にある巨大な樹に目を奪われていた。

圧倒的な存在感。それに目を奪われたまま門の中へ踏み込むと、まだ見えるはずのその木は消え、いつのまにかこの状況になっていたのだ。

突然の出来事に四人は現状が理解できず、目を右往左往していると、それにガハハと笑う声が響いた。

四人はほぼ同時に目をその声の方へ向けるとそこには長いひげを生やした男が目に入った。

「ハハハ、この屋敷はちと変わった作りをしているのでな。驚いた

だろう。」

正面の大きな椅子に座るこれまた大きな身体を揺すりながら、それは立ち上がった。

「へっ」

立ち上がったのであろうそれを見て、ガムルは目を瞬き、リタニアは手を口に当て、ダンゼルは目を擦り、フィロはボーとしていた。それは大きな目に大きな鼻、大きな口とその身体に備えている部位に異常はない。だが、その身体そのものがおかしかった。

「ハハハ。主ら、ドワーフを見るのは初めてか？」

そう、その身長があまりにも小さいのだ。白髪交じりの頭を見る限りその歳は若くない。だが、なぜかその身長は五歳児ほどしかなかったのだ。

全ての大きなパーツを動かす様に見入っていると、ガムルの横でダンゼルが震える指を突き出した。

「ドワーフ……ドワーフってあの？」

「おお。知っておるか。なかなか博識じゃな。」

そのはっきりとした肯定の言葉にダンゼルは自然とその指の振幅を増していた。

「だ、だけど確か北の方にしかないはずじゃ……」

「その通り。じゃが、わしらはここにいる。このロザンツに、な。」

「おい、ダンゼル。一人で勝手に理解しないで俺たちにも説明しろ。」

理解できないと首を小さく振るダンゼルの肩を掴み前後に揺すると、うぷっという何かが出そうな音を発しながら答え始めた。

「北の、方に、いる、種族の、一つ、だよ……ガムルさん、気持ち悪い」

「俺は気持ち悪くない!!!」

「いいから放しなさい!!! ガムル」

バシッと小気味よい音を立てた頭を押さえるガムルの横でリタニアが腰に手を当てた。

「先に進まないじゃない。」

リタニアの制止の声にガムルはしぶしぶ手を放すと、ぜえぜえと荒い息を続けるダンゼルは苦しげにだが説明を続けた。

「身長は普通の人間の子供ぐらいしかないけど、筋力が人間のおよそ二倍。さらに冥力による肉体強化を得意としているんだよ。ただ昔、それが原因で、」

「ガムルさん、リタニアさん、ダ『ドワーフ狩り』が行われた。さっきまでそのドワーフが座っていた椅子の横、そこに腰かけていた見覚えのある顔が意味深な言葉を紡いでいた。

「強力な戦闘能力を有する『ドワーフ』。だが、同時にドワーフは平和を愛する種族でもあった。ここまで言えばさっきの意味が分かるんじゃないか？」

その視線にガムルは、いやその場にいる皆が龍牙が言わんとしていることをすぐに理解した。

「……国がドワーフを狩りだしたのか。」

ガムルの言葉にその場の空気は一気に凍りついた。というより、ガムルを除いた三人はいきなりの急展開に目を白黒している。

「そう。そこで我我の祖先は同じく狙われたあるもう一つの種族と結託し、この国で唯一安全だったこの森の中へと逃げ込んだんじゃない。」

「もう一つの種族って？」

リタニアの問いに頷くと後ろを振り返った。

「それはの……リリー来てくれんかのう。」

「ええ、ただいま。」

あの大きな椅子、その向こうから現れたものに四人は目を丸くした。

「お呼びかしら、あなた。」

そこにいたのは、淡い緑のドレスに身を包んだ女性だった。

切れ長な吸い込まれそうなほど美しい瞳にすっと通った鼻筋。その顔目立ちはそれ以上言う必要もないほど整っておりなによりその身長は、女性のなかでは高いリタニアを超えていた。

明らかにドワーフとも人間とも違うその体軀に四人はそろって首を傾げるが、突然腕を組んでいたダンゼルがバツとその女性を指差した。

「まさか、『エルフ』の方ですか？」

おそろおそろ尋ねるダンゼルにリリーと呼ばれた女性は笑みを浮かべたまま頷いた。

「ええ。」

「……ダンゼル、」

「分かった。分かったから、教えるから、だから肩を掴まないで。」
先のがトラウマになりかけているのか、ガムルの手を払落し、ダンゼルは口を開いた。

「ドワーフとは対称的な種族だよ。肉体の強度は人間に劣るけど、体内にある冥力は二倍以上。だから人間の何倍も強大な術式を構築できるし、寿命も何倍も長いんだ。」

その説明をにこやかに聞いていたラウルが深くうなずき、もう終わりだと言わんばかりに一步前に出た。

「紹介が遅れたの。わしがここの長、ラウルⅡサメット。こっちが妻の、」

「リリーⅡサメットです。」

ペコリと頭を下げられ、慌てて四人も頭を下げ返し、各々自己紹介を始めた。

「ガムルさん、リタニアさん、ダンゼルさんにフィロさんですね。」
にこにこ笑顔を崩さないリリーに頷くとラウルがおっと声を上げた。

「忘れとった。レイ。こちらに来なさい。」

「……分りました。」

不機嫌さが滲んだ返答と共に近づいてきた声にガムルは無意識に顔をしかめた。

「わしの息子のレイじゃ。ほれ、ゴーグルを外しなさい。」

「……」

口元を覆う布と一緒に外したゴーグルの下から現れた顔に四人は目をパチパチとした。

それもそのはず、体格こそドワーフであるラウルに似通っているが、その顔はリリーの血を多く受け継いでいるのが分かるほど整っていた。唯一、鼻だけが他より大きい、それだけだった。

「何だ？」

「いや、お前が王子ねえ。人は見かけによらないな。」

「つけ上がるなよ、人間。」

「なんだと？」

「とまあ、紹介も終わったところでそろそろ本題に行くとうか。」

わしわしとレイの頭を撫でまわしながら、それと火花を散らすガムルに席に着くように促した。

その有無を言わせぬ圧力にとりあえずすぐ横の椅子に腰かけると残りの三人も続いて楕円状の机を囲むように席に着いた。

だがガムルはまだ収まらない苛立ちを鋭い視線をもって、さも当然のように座る龍牙にぶつけた。

「とりあえず、なんでお前がそこにわが物顔で座っているのか教えてもらえるか？」

「それはの……」

「特に理由はない。ただ昔、俺が個人的にこの里に世話になったただけだ。」

明らかな挑発。だがそれからかばおうとするラウルを手で制し、冷静に龍牙は答えた。

「で、その個人的に縁があるこの里に俺たちを呼びつけた理由は？」

「それが今回の本題じゃ。すまぬがここから先はわしが進めさせていただく。」

そう言いながら、ラウルは傍らから一枚の紙を取り出し、机の上に広げた。

「これが、『サムヘア湿原』の地図じゃ。」

一メートル四方の厚めの紙には確かにガムルが記憶している『サムヘア湿原』の輪郭と一致している。だが、その精度の面では比べものにならなかった。

湿原を歩く上で目印となるもの、最短ルート、採掘採集場所、危険地域などその情報量は桁外れだった。

「恐らくここへ来る途中に見たじゃろ？あの焼野原を。」

「ああ……まさか、」

「そう、あれは帝国軍の仕業じゃ。」

その言葉に部屋の空気が一瞬で変わった。それは焼野原の事実を知ったからではない。先ほどの会話から推測される結論。帝国軍の目的がはっきりと見えてきたからだ。そして理解した。自分たちがなぜ呼ばれたのかを。

「……あいつらは、また『ドワーフ狩り』をやろうとしているのか。」

「そして『エルフ狩り』もな。」

しばし部屋を沈黙が支配するように思えたが、リタニアがそれを許さなかった。

「で、私たちに何をしろと？」

「我々と共に戦って欲しい。」

「父上!!」

頭を下げるラウルにレイはすぐにその肩を掴み、引っ張り上げた。
「レイ……」

先ほどとは打って変わって弱弱しい目をするラウルから視線を逸

らし、レイは背を向け立ち上がった。

「私は反対です。いくら彼らが父上の知人とはいえ、人間に頼るなど……」

「レイよ……今、種族の話などしているときではないだろう。」

「今だからこそ言っているのです!!」

諭そうと差し出された手を払い落とし、レイはその横の龍牙をキツと睨んだ。

「いくら帝国と敵だと言っても所詮人間……群れない訳がない。」

「レイ!!」

叱責の声が飛ぶがレイは気にせず言葉を紡いでいく。

「いいえ!! 私はやめません!! この五人は災厄を持ち込んでくる。そうイヴァ様のお告げには出ています。」

『イヴァ』という声にうっと一瞬息を詰まらせるが、浮かした腰をおろし、手を組んだ。

「あんな不確定なものを信じるほどの余裕は我々にはない……」

「こんな時だからこそ昔からの風習を重んじるべきではないのですか!?!」

目を吊り上げ、必至に自分が正しいと言い続けるレイにラウルは力なくゆっくりと横に首を振った。

「どうやらお前とはもっとしっかりと話さねばならないようだな。」

「……ええ、そうですね。」

数秒、親子で睨みあうと、レイは足早に部屋を飛び出していった。

「申し訳ない。見苦しいところを見せてしまった。」

「気にするな。時間に余裕があるわけではないが、全くないわけでもないだろ。」

照れ隠しにぼりぼりと頭を掻くラウルに、龍牙は感情のない返事をしてから立ち上がった。

「こんな状態で話し合いなどできないだろ。俺たちを部屋に案内してもらえるか？」

「……ああ。案内してくれ。」

最初とは違い沈んだ声で使用人を呼びつけると、ラウルは悲しいような悔しいようなそんな背中を見せながら奥の方へと消えていった。

「さて、いろいろと聞かせてもらおうか。」

案内された部屋は客室らしく、色鮮やかな絨毯が引かれた部屋はビークルよりはるかに広い。その壁にある大きな窓からは先ほどの街並みが見える。

その部屋に備え付けられたベッドに腰かけながらガムルは向かいに座る龍牙の目をまっすぐ見た。

「ああ。」

残りの三人も思い思いの場所に着くのを待ってから龍牙は口を開いた。

「先に言っておくが、ラウルとは特にそれといった事情はない。今回この話を受けようと思ったのは、俺たちの利益になる、そう感じたからだ。」

「利益、ねえ。で、なんでそう思えるの？」

窓に寄り掛かるリタニアの問いに龍牙は懷から一枚の文書を取り出した。

「今回の帝国軍の攻撃はどうやら議会を通したのではなく、あの皇帝の独断だ。しかも報告なしのがな。」

机の上に広げられたのは『中央制御室』から地方に向けて出された秘匿文書。そこには確かに龍牙の言う通りのことが書かれていた。

「だけどそれなら、皇帝は危険を感じたらそれを切り捨てるはずじゃあ……」

「それでいいんだよ。」

疑問の声をあげるダンゼルにガムルはふう、と息を吐いた。

「つまり、これを解決することを条件に、あいつらに『国崩し』の手助けをさせようということだろ？」

「ああ。」

ガムルの言葉に頷きながら龍牙は懷からもう一枚、今度はこの国の地図を取り出した。

「あいつのことだ。国内を治めたぐらいで満足できるわけがない。

つまり、『首都』^{セントラル}から秦国に行くためにこの湿原の近くを通るはずだ。」

「その妨害をしてもらおうと？」

「ああ。その時が来たらな。」

龍牙の意図することを理解したガムルは深いため息をこぼした。

「……ならその『国崩し』が失敗したときはどうするんだ？」

「どういう意味だ？」

「『国崩し』が失敗し、俺たちに加担したことがバレたとき、どうするんだよ!!」

突然の大声にさすがの龍牙も驚いたのか、目を見開き立ち上がったガムルを見た。

「俺たちに加担する。それは国家反逆罪だ。」

それに黙って聞いていた三人はガムルから龍牙へと視線を向けると、龍牙はなにも思っているのか分からない目をしていた。

「お前はあいつらを俺たちの戦いに巻き込む気なのか!？」

「いや、違う。」

詰め寄ってくるガムルに龍牙は平坦な声で答えた。

「これは、ラウルの頼みだ。」

「あの人の……」

意外な人物の登場に高ぶってきていた感情が一気に冷めるのを感じ

じた。

「この里だったら確かに安全かもしれない。だが、それでは一生この狭い世界しか知ることができない。」

龍牙はそう話しながら目の前に広げていた地図を取り上げた。

「ラウルはな、子供たちに、里の者に知ってもらいたいんだ。自分たちの世界がどれだけ狭いか。この世界がどんなに広いのか。」

ガムルには必死に息子であるレイを説得するラウルの姿が脳裏に浮かびあがった。

「俺は友人としてこの願いを叶えてやりたい。だから受けた。これでも、文句があるか？」

しばし強い意志を宿している紅い瞳を見つめていたが、ちっと舌打ちをこぼしてからガムルは外へつながる扉に手を掛けた。

「……勝手にしろ。」

そんな話を聞かされてガムルに断れるはずがなかった。それは彼もまた人情というものを重んじる男だからこそそんな親心に満ちたラウルの意志を切り捨てる、そんなことできなかった。

複雑な気持ちを抱えたまま扉をくぐったガムルは、またいつの間にか屋敷の正面に出ていた。だがそのことに驚く余裕はガムルにはなかった。

「……散歩にでも行くか。」

久しぶりに浴びる太陽の光がその気持ちを溶かしてくれる、そう信じながらガムルは通りに向けて歩き出した。

「霧の岬で手に入れた『ギビリム』だよ!! 新鮮だよ!!」

「今朝狩ったばかりの『ラモウ』の新鮮な肉だよ!! 安いよ!!」

「おっ、その御嬢さん。一ついかがかな?」

フィリーズほどではないが、活気に満ちた通りには普通の街では見られない一風変わった形の果実や魚などが売られている。

果実は三日月のように湾曲し毒毒しい紫や青といった色をしており、魚は目が無く、巨大な鼻と口しかない。そのどちらも全く食べようとは思えない見た目をしている。

それを当然と言えば当然だがその奇妙な食物を買っていく里の住人に若干引き気味になりながらも、モノは試しとすぐ前にある台に乗っている青い星型の果物を手に取った。

「これもらえるか?」

別の客の対応を終えた中年の女性に声をかけると、はいはい、と明るい声が返ってきた。

「はいはい、五十リラだよ……おや、珍しいね。人間がここにいるなんて。」

明らかに下がったトーンにガムルは首を傾げた。

意味が分からない、そう行動で示すガムルに店の中にいたその女性は周囲を見回しながらそっと耳打ちした。

「全員が全員じゃないけどね。人間嫌いもいるんだよ、気をつけな。」

「えっ!?!」

狐につままれたような顔をしたまま周りに目を向けると、いくつかの視線を感じた。中にはただ単なる好奇心もあるようだが、そのほとんどは明らかに敵意に満ちていた。

「ちよっと前まではそうでもなかったんだけどね。ほら、森を燃やされただろ?」

「ああ。なるほどな。」

レイの言っていたことは予想以上に深刻だった。

外とのつながりが薄いこの里では帝国のしたことそれがすなわち人間全体の仕業とされるのだ。

「仕方がないよ。あんたはそんな人には見えないけど、他はどう思うか分からないしね。」

「そうだな……」

「まあ、がんばりな。」

赤い変わった形の果物もそっと手に握らせてからその女性は別の客の方へと歩み去って行った。

「こりゃ、大変だな。」

「よう、」

「ん？」

肩を叩かれる感触に振り返るとそこには見覚えのないドワーフの男がいた。

「何かよう……」

ドゴッ

「っ!？」

鈍い音と共に後頭部に走る鈍い衝撃。それと同時に回り始める周りの景色の中で笑っているその男の顔を捉えたところでガムルは意識を手放した。

薄暗い部屋の中、背の低い二つの人影があった。

一つは光の柱に照らされた椅子に腰かけ、もう一つの小さい影は扉の方からその椅子の方に歩み寄った。

埃の舞う部屋の中、その靴音と共にトントンと指で椅子の手すりを打つ音が響く。

そのまま歩を進め、椅子から二メートル前のところで近づく影が
停止し、一礼した。

『王子……』

舌を巻いた独特の発音であるサメツト語で紡がれる言葉。だがその
一単語にピタリと手すりを打つ指が止まった。

『……その呼び方はやめろと言っているだろ。』

ドスの低い声に近づいていた影はピンと背中を伸ばし、すぐさま
膝をついた。

『申し訳ありません。ですが……』

『……俺に同じことを二度言わせたいのか？』

『いえ！！ 滅相もないです！！』

深く頭を下げる影にふん、と息を吐いてから指の動きを再開した。
薄暗い部屋の中、そこだけが明るいせいか、照らされているはずの
その椅子の男の姿が黒ずんでいるように見える。

その動作の再開を許しと取った膝をつく影は、また一礼してから
立ち上がった。

『今日の昼ごろ……里に人間が入り込んだようです。』

その言葉にまた打つ音が止まった。だが今度は影はひるまない。
その指が止まった原因は自分ではないことを理解していたからだ。

『人間が、』

『はい。』

『……そうか。』

乱れたリズムを取り戻しながら、その男はゆっくりと天井の隙間
から差し込む光を見上げた。長い金髪がその動作に合わせ、その顔
を覆うようにずれ落ちていく。

『分かっているな？』

その髪の間から鋭い眼光で目の前の影を見つめるとその影は恭し
く一礼した。

『はい。』

もうそれだけで二人には十分だった。もう一度一礼した後、膝を
ついていた影は部屋を後にした。

『許さない。』

残された影は立ち上がり、差し込む光をその手で遮った。

『我らこそが最も優れ、最も強い。なのに、』

そしてその逞しい手をグツと握りこんだ。

『奴らは我々を恐れ、こんな場所に追いやった。』

「そうだ。許すな。」

今まで全く聞こえなかった、しかもロザンツの公用語で紡がれる
声。それは光の届かない部屋の奥から発せられていた。

『お前には感謝している。』

だがその言語が理解できるのか、それに受け答えるように言葉
と共にそちらへ視線をチラリと向けると、その声の先にあった影は
スツと肩をすくめて見せた。大したことではないという意味だろう
と受け取りながら男はそちらへ向き直った。

『変わった奴だ。人間のくせに『俺たち』に恐れを抱かず、協力し
てくれる。』

「当然だ。あんな奴らはこの世には全く必要ない。必要なのは……
お前たちのような存在だ。」

コツコツと靴音を響かせ、低い声と共に差し込む光の下に来たそ
れは、黒いフードに包まれていた。

あまり背丈の変わらないそれを一瞥し、顔を上にあげた。埃に遮
られるのも気にせず、目を細めながら天井に空いた穴。いやその先
の太陽を見つめた。

「なのにお前たちは迫害され、こんな責務を負わされている。その
弱い、人間のために。」

『ああ。もうこりこりだ。』

「そうだ。これはその存在を知らしめるための第一歩だ。そうだろうか？」

『ああ。分かっている。』

全く表情の見えないその黒いフードの男にふっと笑いをこぼしながらまた椅子に腰を下ろした。

『分かっているさ。』

「ガムルさん、遅いね。」

「そうね。」

暮れはじめた太陽を見つめながら、気だるそうにダンゼルに相槌を打つリタニア。

しかし、その動作とは裏腹に彼女の中は穏やかではなかった。

（いやな予感しかないわね。）

そう心中で呟きながら、そっと窓の端に見える街を横目で捉えた。商店が閉まり始めたのか、先ほどまでリタニアのいるこの部屋まで聞こえていた活気に溢れた声が消えていく。

そんな時間なのに全く帰ってくる気配がない。これまでの感覚からリタニアは大体の予想がついていた。

「また、何かに巻き込まれたんでしょうね。」

「いや、そんなさうと言われても。」

ソファの背にのせた腕に顎を乗せるリタニアに苦笑いをこぼしながらダンゼルは自分の荷物を腰に巻き、立ち上がった。

「僕、見てくるよ。」

そうダンゼルが口にした瞬間、リタニアの肩がピクリと跳ねた。だが、どこか負けず嫌いの性格が出たのか、なにも言わずただそわそわと身体を動かしている。

「リタニアさんは行かなくていいの？」

「そうね。私も行くわ。」

その言葉を待っていたと言わんばかりにすぐさま用意を済ませたリタニアは扉の前に立つダンゼルを押しつけるように飛び出していた

「全く、どれだけ行きたかったんだか……」

はは、とあきれたような笑いをフィロと交わしてから、それじゃあ、と手を振りながらリタニアの後を追った。

どこまでも続いているかのような一本の並木道。その道を巨漢の男、ガムルはただ黙々と歩いていた。

陽は傾き切り、山の向こうに消えた太陽からの光は徐々にその量を減らし、もう灯りなしでは歩けないほどの暗さだった。さらに今日の天気は曇り。唯一の頼りである月明かりすらガムルの瞳には全く届いてこなかった。

この暗さに若干の危うさを感じたガムルはひたすら前に出していた足を止め、辺りを見回した。

「さて、どうするか。」

なぜ彼はこのような場所で立ち止まっているのか。それは数時間ほど前まで遡る。

「んっ」

軽いうめき声と共にガムルは閉じられた瞼をゆっくりと開いた。霞みがかかった視界に何度か瞬きをしていると自分が見覚えのない

場所にいることに気付いた。

「どこだ？　ここは……ん？」

一度辺りを見回した後、起き上がろうと手をつこうとしたがなぜかその腕は動かない。そのことに首を傾げながら胸元を見てみると、いつの間にかガムルの身体は綱でぐるぐる巻きにされていた。

「……なんだ、これ？」

「やっと目が覚めたか。」

傍ら、それもあり近くから聞こえる声にハッとして全身を使い、後ろへ身体を回転させると、

「……」

「やあ。」

ガムルと同じく縛られた男が転がっていた。だがその姿恰好にそれはもういつそのこと忘れたいと思えるほどに見覚えのある姿だった。

「……お前は何をやっているんだ？」

「あなたと同じですよ、ロー……」

「その名前はやめろ。」

「おっとすいませんね、『ガムル』さん。」

「ワザとだろ。」

黒いスーツに寝転がっているはずなのに、首を曲げてしわを付けまいとするトレードマークともいえる黒いシルクハット。

「で、お前はいったい何をやっているんだ？　フォーマル。」

「あなたと同じく捕まっているんですよ。」

ほらほら、と縛られている手を見せてくるいい大人に、はあ、と息をつきながらごそごそと腰のあたりをまさぐり、目当てのものを見つけたのかそれを引き抜いた。

「お、意外と器用ですね。」

「意外は余計だ。」

隠し持っていた小型ナイフで縛られたロープを切り落とし起き上がると、それをじっとフォーメルが見ていることに気付いたガムルは手首をさすりながら明らかに不機嫌な目をして見せた。

「なんだ？」

「私のも切ってもらえませんか？」

「嫌だ。」

「なんでですか？　こんな無力な一般市民を見捨てるなんて……」

「いや、お前は一般市民とは言わないだろ。というより暗器はどうしたんだよ？」

「全部取られちゃったんですよ。」

「……………」

「なんですかその目は。」

明らかに冷たい視線を向けるガムルに色白の顔を左右にフォーメルがじたばたともがきだした。

「私のも、切ってください。」

「お、おい。じたばたするな、バレるだろうが。」

「なら、切って、ください。」

「分かった、分かった。だからじっとしている。」

完璧に根負けしたガムルは急かされるようにすぐ横のフォーメルの紐を切り出した。

「ふう、あー、痛かった。」

大げさに伸びをして見せるフォーメル。だが、それに向けたガムルの視線は先ほどと違い、妙に鋭い。

「……で、本当の理由は？」

ニヤリと笑みを貼り付けながらフォーメルはガムルを見るが、開きかけたその口を閉じた。

冗談は通じない、そう感じたのだろう。一度形のいい目を伏せて

から口を開き直した。

「先日の『ヒューズ・クリプトン本社襲撃事件』とそれに類する放火事件についての調査ですよ。」

「ん？　ならなんでここにいるんだ？」

「なんでもなにも、」

呆れ顔を見せながら、窓の外を指差した。

「ここはフィリーズですよ。」

「は？」

フォーメルの言った意味が分からず、ガムルは耳の穴をほじくり、一歩フォーメルに近づいた。

「いやいや、ここは『サムヘア湿原』だろ？」

「じゃあ、あれはなんですか？」

窓の外に見える高層建築物群。そんなもののこの国には一か所しか存在しなかった。

「本当に、フィリーズ、なのか？」

「ええ。そうですが、どうかしましたか？」

「おいおい……じゃあ俺、一体何日気を失っていたんだよ。」

「六日です。」

「……マジかよ、嘘だろ。」

その巨体を後ずさりさせていると、部屋に置かれた木箱に膝裏を叩かれバランスを崩すとそのままその上にドスンと腰かけた。

ビキビキと木目が裂ける音がするが、気にしない。いや気にする余裕がなかった。

もう、現状を理解しようと全ての脳細胞を一片も余すことなく稼働していたのだ。

(どういうことだ?)

「いや、正直、あなたが連れてこられた時は驚きましたよ。この街を離れたはずのあなたがここにいるんですから。」

考えこむガムルに切れ長な目を細めながら声をかけるフォーメルだが、なぜだろう。ガムルにはそのフォーメルになにか違和感を感じていた。

「……お前は本当にフォーメルか？」

「なぜそんなことを？ まあ分からなくもないですけど。」

冷静なフォーメルの返しに、問いかけたガムルはそれ以上訊けず黙り込むしかなかった。

「ただ、」

「……ただ？」

「気のせいかもしれませんが、」

「なんだよ。」

「あなたが現れるちょっと前、何か空間が、」

「空間が？」

詰め寄ってくるガムルの間に手を出しながらどもり気味に続けた。

「歪んだ気がしたんですよ。」

普通の生活では聞くことなどありえない言葉にガムルは目を見開いた。

「空間が……歪んだ？」

だが目を泳がすほどの驚き、それは初めて聞くからという理由で説明できないほど大きかった。

「気のせいだとは思いますがね。」

(気のせいじゃねえよ。)

内心で否定しながらガムルは、おもむろにこの部屋唯一の出口に向かった。

それを面白そうに見ていたフォーメルもまたゆっくりと腰を上げた

人通りもまばらになってきた通りの中、たたずむリタニアにダンゼルが駆け寄った。

「だめだ。やっぱりいないよ。」

そう、と返しながらふと周囲からの視線に目を向けた。

「見た人は？」

「いや、それがさ……」

言葉を濁しながらリタニアと同じように周囲を見るダンゼルに彼女は彼が何を言いたいのか理解した。

周囲から向けられる視線、それは心地よいものではなかった。奇異の視線、悪く言えば、嫌悪のこもった視線を向けてくるのだ。

「人間に教えることなんか何もない、だってさ。」

「そう……」

また視線を足元に向けるリタニアに何か声を掛けようとダンゼルは手を伸ばすが、それが届く前に下した。

今、どのような言葉も意味をなさない、そう分かっていたから。ダンゼルはラウルの言った言葉の真意に触れたような気がした。

「とりあえず、できるだけ訊いてみるよ。」

「ええ。私も訊いてくるわ。」

この空しさを埋めるように必要以上に声に力を込めて二人は反対に走り出した。

ゴウン、という轟音とともに吹き飛ぶドアからガムルは一步外に踏み出した。

もう太陽は沈みかけ、徐々にその暗さを増していた。

だがその中でもガムルの目に鮮やかに映るものがあった。

ドアのあった場所を出てすぐ、その先にある一本道を境に左右に色とりどりの花々が咲き乱れていた。

その景色はあの無機質な感を受けたフィリーズとは思えないほど、自然本来の美しさを感じさせるものだった。

「おや、珍しいですね。」

遅れて出てきたフォーメルもガムルと同じようにドアの脇に立ち、微笑をこぼした。

「どこだ？　ここは」

こうしている場合じゃない、とガムルはせわしなく辺りを窺いだした。

そんなガムルとは対照的にフォーメルはある一点を見つめていた。

「どうやらザフィーラ草原の西の端でしょうね。」

「なんでわかるんだ？」

キョロキョロと周囲を見回す自分と違い、ぼう、とある一点を見ているフォーメルがなぜわかるのか、そう疑問に思わずにはいられなかった。

だがその疑問に対する回答は単純なものだった。

「いや、あの山に見覚えがあるだけですよ。」

指差すさきにあったのは、頂上付近に生える『世界樹』^{エルデ}ほどではないがかなり大きな樹。樹齢も百年、二百年では済まないであろう大きさである。

「あの樹は……」

「どうかしましたか？」

「……いや、なんでもない。」

フォーメルの追及を避けようと首を振りながらもガムルはその樹から目が離せなかった。

(『^{エルデ}世界樹』まさか、そういうことなのか?)

「では、ガムルさん。私は失礼しますね。」

「お、ああ。」

一人物思いにふけるガムルを後目に歩き出すフォーメル。それに焦るように返事をしながらガムルは迷っていた。

自分の勘を信じるべきか。

それともいち早く『サムヘア湿原』に戻ることを考えるか。

「まあ、勘を信じるのが俺か。」

自分に言い聞かせるような、言い訳をするような言葉を口にしながら花畑を抜け、街へ向かうフォーメル、それと反対にある山の方へ歩き出した。

いつもの中する予感。今回も当たるか分からない。だが、今やらなければ絶対に後悔する。なぜかそんな気にガムルは駆り立てられていたのだ。

そしてそれから数時間、完璧に日が暮れた森の中、獣道を進んでいたガムルの足が止まった。

だがそれは目的地に着いたからではない。

「……ちっ」

周囲から感じられる殺気。自分を狩ろうとする明らかな意思表示。だがそれは明らかに人間のものではなかった。

グウウウウウアアアアア

その殺気に遅れて、鳴り響く唸り声。それにガムルは反射的に腰に手を回すが、

「……しまった」

引き抜いたその手にあったのは先ほどロープを切った短いナイフ一本。目当ての『機械剣』はそこにはなかった。

「どうするかな……」

包囲を狭めてくるそれをガムルはやっと視認した。『双頭狼^{デュアル}』と呼ばれる双頭の小型の狼、それがガムルの周りに、

「一、二、……十か。」

^{モンスター}

小型の『人ならざる者』ではあるがその戦闘能力、特に集団のでは一小隊など目ではない。それだけの強力なものがここにいる。その事実^にガムルは自分の勘が当たっていることを確信した。

だが、

「生きて帰れるのかね？」

答えが返ってくるわけがない。そう分かっているにも問わずにはいられなかった。

「仕方がねえな。全く。」

手にあるナイフを逆手に握り直してからガムルは浅く腰を落とし、深い深呼吸の後叫んだ。

「かかってこいよ!! このワン公が!!」

それが戦闘の合図だった。

「お帰りなさい。」

また部屋に戻ってきた二人を透き通った声が出迎えた。

「ただいま。」

「ガムルさんは……見つからなかったようですね。」

二人の表情からすぐに予想がついたフィロは何も言わず、手に持つ書籍にまた視線を落とした。

「リユーガが、『明日、会議をする』、とっていました。」

「分かったわ。ありがとう。」

礼を言いながら、リタニアは歩き回って疲れたその身体をソファに投げ出した。

「疲れたー」

「僕はちよつとシャワーを浴びてくるよ。」

その子供っぽい行動に苦笑しながらダンゼルは横の個室の中へと消えた。

「どこまで行っていたんですか？」

キリのいいところまで読み終えたフィロは本を閉じ、寝転がるリタニアの後ろに立った。

「この里のはずれまでよ。」

「それはまた遠くまで行きましたね。肩もみましようか」

「あ、嬉しいかも。それがね、この里の人が全然口をきいてくれないのよ。」

小さい手から伝わるほどよい刺激に目を細めながら里の住人の反応を思い返していた。

「溝はかなり深いようですね。」

「ええ、そうね。」

ラウルの理想とする未来。その重要性は彼女たちの予想よりもはるかに高い。そう実感せざるをえないほど今のこの里は閉鎖的だった。その事実に分人たちが負うことになる責任、その大きさを嫌でも実感させられた。

「それにしてもあの人はどこに行っただんですかね？」

その重い空気を取り払おうとフィロは少し語気を強めた。

その幼い少女の気遣いにリタニアはふつと自嘲の笑みをこぼしな

から感謝するようにその話題に意識を戻した。

「さあ、もしかしたらとんでもなく遠いところにいるのかもね。」

「だけど、」

「ん？」

「絶対、帰ってくる。そんな予感というか、」

「確信がする？」

「はい。」

恥ずかしそうに言うフィロ。だがそれにリタニアは真面目そうに頷いた。

「実は私も同じことを思っていたのよ。」

肩に置かれた白い肌の手に分自分の手を重ね、ゆっくり肩から降りしながらリタニアはふう、と息をついた。

「今すぐは無理かもしれないけど、いつか必ず帰ってくる。そんなことをね。」

そう自分で言ってからリタニアは笑い出した。

「全く、会って一か月ぐらいの奴をこの私がこんなに信用するなんてね。」

「同感です。」

ふふふ、と笑いあいながらフィロはまたリタニアの肩に手を置き力を入れた。不満を口にしたからかその方は先ほどよりも柔らかくなっている気がした。

「昨日はすまなかった。」

最初に通された部屋、そこに踏み込んだ龍牙をはじめとする四人はラウルの謝罪に迎えられた。

結局、待っていた姿は現れることはなくそのまま夜が明けてしまったのだ。そのため朝早いこの集合に、龍牙以外の三人は眠たげな眼

を擦り、あくびを溢していた。

「気にする必要はない。どうやら全員、この里の現状をよく理解したみたいだからな。」

その言葉に頭を下げていたラウルの目が後ろの三人を捉えたかと思うと、今度は窓の外へと向けた。

「この里はいわば孤島だ。」

その言葉にリタニアは眉をひそめた。そのラウルの吐き捨てるような言い方に違和感を感じたからだ。

「だけど、今のあなたたちの状況を考えたら当然じゃないの？ 人間に迫害を続けられている訳だから。」

「だからこそ、じゃ。」

奥の壁に刻まれた円の中に幾何学的な形が並ぶ文様の前に立ち、ラウルはスーと大きく息を吸った。

「我々の祖先より受け継いだ、この身体、この魂、そしてこの胸にくすぶる強き意志。」

建物が振動するほどの大声を出しながら振り返るとスッと右手を胸の前に掲げた。

「その全てが叫んでいるのじゃ。ドワーフやエルフが人間と対等だと認めさせろ、とな。」

そこまで話したところで、険しい顔を崩し、ぎこちない笑みを浮かべて見せた。

「わしらがわしらであるために、な。」

その言葉にリタニア達は何も言えなかった。自分たちが旅をする上で常に持ち続けていた決意。それをもう一人の自分に言われたような、そんな気分だった。

「お前らにも分かるだろ？ こいつの気持ちちが……俺たちと同じだと。」

龍牙のトドメの一言に三人は自然と頷いていた。やはり、否定できないと。だから三人は自分から昨日座った席に腰を下ろした。

それに満足げに頷き、龍牙はラウルの横に座った。

「そういえば、レイと口論していた彼はどこに？」

「それが……」

「ああ。またふらふらとどこかに行っただろう。気にしないでいい。」

「そうなのか？　ならいいが。」

突然自分の言葉を遮られたことにリタニアは目を見開くが、ラウルはそれに気づかず話を進めていく。

「そちらに頼みたいのは、明後日攻めてくる『帝国軍南西部統治部隊』の迎撃、及びその統率をしているその部隊を指揮するヴィネッツ大佐の撃破、あるいは捕縛をお願いしたい。」

「かなりの難題だね。」

「ああ。まさか南西に移っているとはな。」

「鬼將軍ですか。」

四年前、ゴブリンと呼ばれる、背が子供のように小さな緑の身体を持つ『人ならざる者』の集団が、四つの村と街を壊滅に追い込むという事件が起こった。

その集団は百を超えるという『人ならざる者』としては前代未聞の事例に国中に衝撃が走った。

だが、この事件を最も世間に知らしめたのは、『クロン・ヴィネッツ』　この男だった。

その地域を担当していた部隊がその報告を受けるとすぐに三十人の騎士による大隊を編成、その根城と報告を受けた街へと出動した。だが、結果は惨敗だった。

ゴブリンたちの訓練されたのではと疑うような集団戦法に大隊は一日も持たずに壊滅。支部に戻ってきたのは怪我人八人のみだった。その報告に本部が四聖人の投入を考え始めた頃、あるもう一つの報

告が舞い込んだ。

『ある中隊がゴブリンを殲滅した』、と

たった十五人しかない部隊。それが騎士三十人でも敵わなかった百以上ものゴブリン達を殲滅したというのだ。本部は耳を疑った。だが、その真偽を確かめるために現地に派遣された調査員が見たものとは……

一方的な虐殺だった。

闇夜の中、逃げ惑う緑の小人たちを容赦なく焼いていく紅い炎。そして鼻を突く強烈な肉が焼ける臭い。

地獄だ。そうその調査員の記録に書かれていたという。

そしてその奇跡とも取れる勝利をもぎ取った中隊。その隊長が当時少佐のヴィネッツだったのだ。

個人の實力もさることながら、その頭脳から繰り出される数々の『奇策』。その事件で大きく評価されたこの彼の能力に対する本部の期待がどれほどのものかは、たった三年の間に二階級昇格という通常ならばあり得ない昇進ぶりを見れば明らかだった。

個人の實力は騎士団の中でも屈指を誇り、次の四聖人入りの候補にも挙がるほどの實力者だ。

そして何より評価されているのは、異常ともいえるその正義感だった。

『全ては国民のために。』

これを口癖にするほど彼はこの国の民に対して軍に身を置いてい
る者とは思えないほど気を配っていた。だが、それと同時に行き過
ぎることもある。その例がゴブリンの事件だった。

彼が一度『悪』と決めつけたものは上からの指令がない限り、殲
滅するまで殺し続ける。そう人間ではない。伝記にもその名を残す、
『鬼』と形容しても遜色ない狂気の塊でもあったのだ。

その恐ろしさは同じ帝国軍に身を置いていた四人はよく理解して
いた。

「最近、あまり名前を聞かないと思っていたらこんなところにいた
とは、予想外だったね。」

「私たちにとって最悪の相手よね。」

「ええ。正直この中で彼と対等に戦えるのはリユーガぐらいですが
……」

「リユーガじゃ目立ちすぎて例えヴィネッツを倒してもまた帝国に
攻め込ませる口実を与えてしまう。」

ため息交じりのリタニアの言葉に焦りを見せるラウルは身体を少
し乗り出した。

「そんなにそいつは強いのか？」

向けられた視線に少し答えるべきか迷っていたが、ダンゼルはコ
クリと頷いた。

「ええ。正直僕たち三人がかりでも勝てるか分かりません。フィロ
ちゃんの冥術も彼の前では無力でしょうし。」

そう言いながらダンゼルがフィロに視線を移すと、彼女はすつと
悔しげに俯いた。

その反応に事実なのだと判断したラウルは助けを求めるように龍
牙を見るが、

「さて、どうするか……」

その龍牙ですら策がないのか、天井を見上げ思考を巡らせていた。普段見ることのない動作に、銀翼旅団の団員である三人は、いや、そうではないラウルでさえも現状の厳しさを再認識していた。

ガンツと堂々巡りを繰り返す思考への腹立たしさを机にぶつけると、ラウルは何かを決心したのか、鋭い視線を龍牙に向けた。

「龍牙、」

「なんだ？」

その先ほどとは違う雰囲気に向けていた背中を引き戻した。

「明日がなければその先はない。そうだな？」

「ああ。その通りだ。」

「ラウルさん、それって!？」

龍牙との会話でラウルの意図することを理解したダンゼルはガタンツと椅子を倒しながら立ち上がった。

「……それしかあるまい。」

「だけど……」

その諦めにも似た言葉に何か言いたげにダンゼルは口を開くが、あうあうと息を吐くしかできなかった。

言いたいのに言えない。そんな弱い自分に腹立たしさを感じずにはいられなかった。そんなとき、脳裏に浮かんだのは、昨日、他人^{ひと}のために怒り、そして消えた男の顔だった。

（もし……）

「だから、龍牙、お主が……」

（もしここにガムルさんがいたら……）

「私がやります!!」

「僕が……えっ？」

自分のものではない声にダンゼルは驚きのあまり言葉を止めた。

一步前に踏み出そう。その決心を踏みにじる声をダンゼルは急いで探した。そして見つけた、入り口に立つ者を。

「レイ……」

一斉に集まる視線を受け流し、その声の主、レイは入り口から堂々とした足取りで龍牙の向かいの席の前に立った。

「私がそのヴィネッツを倒します。」

「ちよっ、ちよっと。」

混乱していた思考がやっと追いついたダンゼルは制止の声を発していた。そのダンゼルらしくない行動に驚きの表情を見せるメンバー。その中でそれにギョロリと空のように碧い瞳が向けられた。

「何か？」

「……あなた一人で倒せると思っているんですか？」

「じゃあ、あなたにはできると？」

なぜ意義を唱えたのかダンゼル自身、分からなかった。自分の決心を踏みにじられたからかもしれない。だが、それ以上にレイの身を案じている自分がいることにダンゼルは気付いていた。

「いえ、ただ……」

口ごもるダンゼルにふん、と小馬鹿にしたように息を吐き、レイは入り口へと踵を返した。

「大した力もないのに大口を叩く。これだから人間は……」

「あんたに私たちの何が分かるのよ。」

囁くような、どこか独り言にも似た一言に、一定のリズムを刻ん

でいた足が止まった。

ゆっくりと向けられる鋭い視線を、その眩きの主、リタニアが前髪に隠れていた目で受け止めた。

「何か言いたいことでも？」

「ええ。おおありよ。」

ゆっくりと椅子から立ち上がると、自分と同じぐらいの身長、だがその気迫からそれ以上に大きく感じる男の前に立った。

「まず、大した力もないのにとか言っていたけど……先に言わせてもらうけど、私たち全員、あなたよりも強いわよ。」

「なに？」

ピクリと眉を揺らすレイを無視し、リタニアはさらに続けていく。「人間だから、人間だから。何回もこう言っているけど、あんたに人間の何が分かるのよ。」

「分かりますよ。人間は欲深く、傲慢で群れをなすしか脳がない種族でしょう？」

「じゃあ、ドワーフやエルフにはそんな人はいないと？」

「ええ。我らは誇り高き種族。そんな下等生物と同じにされては困りますよ。」

明らかな挑発に吼えたい衝動を押さえようと拳をギュッと握り締めた。

「だけどその団結するという脳がないから今苦しんでいるんじゃないの？」

「ですがそれは、あなた方人間のその果てしない欲が原因でしょう？」

悪びれもなく答えられる言葉。それに怒鳴りたい衝動を押し付け、リタニアは尚も続けた。

「じゃあ、ドワーフやエルフにはそんな人はいないと？」

「ええ。我らは誇り高き種族。そんな下等生物と同じにされては困りますよ。」

その明らかな挑発にダンゼルは吼えたい衝動が沸き上がるが、た

だ平然と耐えるリタニアを思い、拳をギュッと握り締めた。

「だけどその団結するという脳がないから今苦しんでいるんじゃないの？」

「ですがそれは、あなた方人間のその果てしない欲が原因でしょう？」

「それはそうかもしれない。だけどそれはある一部の者の仕業だわ。」

「ですが、私たちはそんな人間しか知らない。」

「なら、私たちを知ればいい。」

それをニンマリと優越感に満ちた笑顔を浮かべながら告げるリタニアにレイは意味が分からないという顔をした。

「あんたたちのそのつまらない先入観、それをぶち壊してあげるわよ。」

レイはしばらく呆気にとられていたが、思い出したかのように入り口の方に振り返った。

「ふん、低俗な種族らしい考えだ。」

そう吐きながら自信を削られたのを示すように少しゆっくりな歩調で光に満ちた出口に消えた。

「楽しみにしてますよ。」

「おいおい、まだ楽しませてくれるのかよ。」

ぜえぜえ、と肩で荒く息をつきながらガムルはナイフを握る手で額の汗を拭った。

彼が立つ周りには、少し前まで獲物に群がっていた黒い肢体が転がっている。だがそれは一つや二つではすまない数だった。少なく

ともその胴は二十はその場に転がっている。

だがその黒い円の周りにはまだ十を超える獣の姿があった。

「ちっ、まずいなこりゃ。」

そう呟きながら手に握るナイフに目を落とした。ガムルを縛っていた紐をすぐに切り裂いたそのナイフは、赤い血に濡れ、もうその切れ味を維持してはいなかった。

「どうする……つう」

その現状を理解することで集中力が切れたのか、麻痺していた痛覚が戻ってきていた。

空いている左手で抑えた脇腹は、着ていた服が切り裂かれ、その下に巻かれた包帯が血に染まっているのが微かな光の中でも分かった。

「くそが……」

もう斬るという動作に使用できなくなった武器を折れそうなほどに握り締め、歯を食いしばった。

最初に襲われた場所からはかなり移動しており、ガムルには自分がどこにいるか分からない。このような状況で地の利を生かすのは厳しい。

かといってこのまま戦っても、鋭い牙や爪をもつこの獣たちを相手に満足に戦うことは難しかった。

（どうする……）

包囲している『双頭狼^{デュアル}』は、味方の半数以上を倒したガムルの戦闘能力に危険を感じているのか、なかなか攻めてはこない。これがガムルにとって唯一の救いだった。

もう一度辺りを見回していると、雲の隙間から差し込む月明かりの中にあるものを見つけた。

「どうやら、まだ見捨てられたわけじゃないらしいな。」

フツと自嘲気味に笑いながらガムルは一気にその方向へ駆け出した。

突然のガムルの疾走に、動き出しが遅れた狼は、身動き一つする間もなく、鈍らと化したナイフに心臓を一突きにされ、ただの入れ物となったその身体をガムルに踏み砕かれた。

だが流石というべきか、この突然の出来事に恐れを抱くことなく、狼達はすぐにそのあとを追いだした。

ガムルの目に映る目標、そこまでの距離はおおよそ百メートル。狼たちに捕まるかどうか微妙な距離だった。

「ふん!!」

それをよく理解していたガムルは加速を付けたまま、木々が生い茂る中大きく前に跳躍。

「オラァ!!」

そして地面に着地すると同時にその地面を盛大に踏み砕いた。

バキバキとひび割れる音と共に狼たちの悲鳴がガムルの耳に届くが振り返らない。それは、その不安定な足場の中、未だに殺意を振りまきながら迫ってくる個体がいくつかあるのが感じられたからだ。現に、突然の足場の変化に後ろを走っていた狼たちはバランスを崩し、五体が転倒していたが、残りはまだ走り続けていた。

それでもその速度は明らかに落ちている。

その間にガムルは木々の間の視界の開けた場所へと飛び出していた。

「やっぱり、そうか。」

茂みから飛び出し、少し進んだところで立ち止まったガムルは目の前のものを凝視した。

それはあの崖に生えていた大きな、大きな樹だった。

その堂々とした佇まい。それは樹とは思えないほどの存在感に満ちている。それに圧倒されそうになりながらガムルは急いでそれに駆け寄った。

（どこだ。どこにある？）

唸り声が近くなる中、何か、ガムルは何かを求め樹の周りを手探りで探し出した。

（『あの巻物』が正しいなら、ここに、ここに必ずあるはず……）

少しずつ少しずつらしながら探すガムルが目的のものを発見するのと狼たちが樹の根本にたどり着くのは同時だった。

すぐ下から聞こえる吠え声にガムルはチラリと視線を移しながら、ニヤリと口元を歪めた。

「悪いな、ワン公。もう鬼ごっこは終わりだ。」

ガリガリと樹の幹を削りながら上がるとうとする狼に向けて手に持つナイフを投げつけると、ガムルは目の前にある幹を強く押し込んだ。

ガコッ

何かがハマる音。それと同時にガムルが押した幹が窪み、その中から少しずつ光が漏れだした。

闇夜を切り裂く眩い光。それに本能的な恐れを抱いたのか、狼達は樹を登るという行動を止め、先ほどよりも控えめな唸り声を絞り出していた。

それに一切見向きもしないガムルの前でそれは大きさを増し、ついには子供一人が通れそうな大きさの穴が、いや光の扉が口を開けていた。

グウウウウウウウウウウウウウウウ

普通の人なら一度も見ることもないであろう、異常な光景。そしてその奥から漏れてくる『双頭狼^{デュアル}』とは違う腹底に響く獣の声と只者ではない気配。

それを見つめていたガムルの口からぽつりと言葉が零れた。

「……『長^{おさ}』、またあんたのが役に立ったぞ。」

誰に向けて言っているのだろうか。その彼を誘う光を見つめながら囁くその表情はどこか懐かしそうどこかさびしげだった。

「……あのくそ野郎。殴った分倍返しにしてやる。」

だがその表情は一瞬だった。

その囁きがなかったかのようにガムルは悪態をつくど、恐れを抱く狼達をさげすむ目を向けてから、迷いなくその光の中へと飛び込んだ。

霧が立ち込める平地。その真ん中で、部下と思われる男から報告を受けた銀色の鎧の男はやや足早に霧の中に歩き出した。

後ろで結わえられた金髪を揺らしながら歩くその歩幅は大きい。

しばらく歩き、うっすらと霧の向こうに人影が見えたところで男は跪いた。

「大佐、準備が整いました。」

「そうか。」

ガチャリと一際高く鎧が擦れる音と共にそれはすぐ横に身体を向けた。

鎧でその身を固める茶髪の男とは相反し、その声の主、クロン・ヴィネッツは騎士団の上層部が会議に着るような緑を基調とした制服に身を包んでいた。

この明らかに戦闘に不向きな服装。だが、茶髪の男もそれが当然と思っているのか、何も言わない。

「兵たちはどうなっている？」

「はっ、皆、早く正義の鉄槌を下したいそうです。」

「正義の鉄槌、か。」

ふふっ、と小さく笑うヴィネッツの前で視界を遮っていた霧がゆっくりと流れたかと思うと、その向こうから信じられない光景が飛び出してきた。

銀、銀、銀。どこまでも広がり不気味に輝く鋼鉄の色。それを視界におさめてからヴィネッツはスッと息を吸い、

「今、ここで、『悪魔の子』の殲滅が始める！！」

吐き出した、その細い身体に似合わない大声と共に。

「稀有な力を皇帝のために使わない種族。人と同じ姿でありながら我らが皇帝に、帝国に抗い、恐怖を与える異常種たち。」

徐々に熱がこもっていく兵士たちを見ながらヴィネッツは腰に差した機械剣を抜いた。

「そんな悪は、必要ない！！」

ドゥツと沸く歓声と足踏みの音に、遠く離れた場所にいた鳥は飛び立ち、獣たちは森のさらに奥へと逃げていく。

ヴィネッツはその鼓膜が張り裂けそうな音の乱舞の中、先ほど以上の大きな声を発した。

「これから振り下ろすこの剣こそが正義。我らが正義。」

ウオオオオ、と収まることの知らない歓声と共に地面を踏みしめる音が地震のようにヴィネツツの身体を揺らす。それを心地よさげに笑みを浮かべながらその手にある機械剣をそのまま天に掲げた。

「先人が成しえなかった正義の鉄槌。今日、この日。君たちの前で、叩きつけて見せよう！！」

その言葉に兵士たちの沸き立ちは最高潮に達した。

「全軍、進軍開始！！」

『長、敵が動き出しました。』

こちらにも濃い霧の中で、ラウルがサメツト語で報告を受けていた。「ついに始まったか。」

ボソリと呟くラウルの横で背の高い者が片膝をついた。

「俺たちはあくまで迎撃に専念するが、大丈夫か？」

そのラウルの表情を気遣う友人に、大丈夫だ、と返しながらラウルは後ろを振り返った。

空気を漂う霧の向こう、そこに隠れる『世界樹』の方を見ていると横にいた龍牙がラウルの耳に顔を近づけた。

（本当にいいのか？ お前の息子にやらせて。）

ぼそぼそと小声でささやかれる言葉にラウルは一瞬迷ったが、しっかりと頷いた。

（息子を信じる。これが親の務めだ。それに……）

（それに？）

尋ね返す龍牙から目を離し、ラウルはもう一度『世界樹』^{エルデ}の方を見た。

（それに、もしものときは『彼』が助けてくれるはずだ。）

（彼？）

何を指す言葉なのか理解できない龍牙。その肩をポンと叩き、ラウルはニツと笑って見せた。

（気にするでない。時が来れば分かる。）

（……ならないが。）

もう終わりだと察した龍牙はコートに付いた土を軽く払いながら立ち上がり、霧の奥で控えていた他の三人の方に歩み寄っていった。「作戦に変更はなしだ。」

「ふーん。で、私たちはどうすればいいわけ？」

「俺たち四人はこの防衛の方を手伝う。」

「遠距離からの狙撃は大丈夫ですか？」

ダンゼルからの質問に龍牙は首を横に振った。

「必要ない。それにお前たちの術式は目立つからな。」

「じゃあ、私たちは何をするの？」

可愛らしく首を傾げるフィロに何か奇妙な光を宿した目を向けた。

「目立たないようにやる、それだけだ。」

ドスン

「っ、いってえ。」

岩でも落ちたような落下音とともに発せられた声が周囲の壁に跳ね返されていく。その中で落下してきたそれはのそりとその身体を揺らした。

「つう。ここが中か？」

痛む尻に手を当てたまま、落ちてきたもの、ガムルは立ち上がった。

そこは塔のように天井の高い場所だった。

彼が踏みしめる地面は、枯れ枝や枯葉で敷き詰められ、その声を跳ね返す壁は全て太い植物の茎に覆われている。ガムルが落ちてきた天井もすでにその扉を閉じている。

だがガムルはふとある違和感があることに気付いた。

「どこから出てきたんだ？」

上を見上げるがガムルは自分が出てきたと思われる入り口を全く見つけられないでいたのだ。

彼の頭上ではただその周りを囲んでいる樹の幹が捻じれ、先の尖った塔の中のようになっている。

それに首を傾げていると、同時にもう一つ疑問が浮かび上がった。

なぜこんなに明るいのか。

r

今度は口にすることはなかったこの問いはすぐに解決された。

三百六十度囲まれたもの、樹の幹。何の変哲もないそれに、ザクザクと枯れ枝を踏む碎きながらガムルは歩み寄った。

何か特別なものがあつたわけではない。ただ、そうしなければならぬ、そんな使命感に支配されていた。

そしてその手が幹に触れた。その瞬間、

「ウオッ」

瞳を焼くような、だがどこか暖かい光がその空間を満たした。とっさに驚きの声を上げたガムルだったが、その懐かしさのような

感覚に自然とそれを受け入れていた。

どこかで感じた、そう母親の腕の中にでもいるような安心感。その黄金に満たされた音のなき世界の中で、ガムルの耳に微かなガチャリという何かが外れる音が入ってきた。

眩しさをこらえながらゆっくりと目を開けるとガムルが触れていた場所に、先ほどまでなかった裂け目が出現していた。

「来いつてか。いい身分だな。」

誰に向けてなのだろうか。そう毒づきながらガムルは新たな光源に向けて歩き出した。

『戦況は？』

ガムル達を通った沼地と正反対の場所に位置する小高い丘の上。濃霧が立ち込める中、背伸びをしながら双眼鏡を見続けるサメツト族の兵士にラウルは声をかけた。

『予想通り、あまりよくないようです。』

「おらおらおら！！ この程度か！？ この悪魔どもが！！」

「弱いな！！」

「この程度の力で俺たちを止められると思うなよ！！」

ついに始まった両者の衝突。先頭を突き進んでいた重装兵とドワーフの一軍の交戦を開始したのだ。

だがその状況はおの兵士や飛び交う言葉の通り、サメツト族にとってあまり好ましいものではなかった。

『黙れ、下郎共が！！』

『この森から無事に帰れると思うな!!』

負けじと声を張り上げ、士気を保とうとその部隊の隊長が声を張り上げるが、ぐらついていた情勢は予想よりも早く帝国側に傾こうとしていた。

霧の濃いこの森の特性を生かし、白兵法ともいえる少人数による撃退を彼らは試みていたが、それはほぼ完ぺきに無効化されていた。

その原因はただ一つ。帝国軍が持ち込んできた、『機関銃』^{ガトリング}のせいだった。

通常の火薬を使った銃ではなく、『火』『風』の冥術による補助を追加した強力な大型兵器。

サメツト族の兵士たちは通常の銃などでは決して貫けない巨大な岩やこの特有の木々の影に潜んでいたのだが、その兵器を前にしては無意味な行動となっていた。

『第一陣が崩されるのは時間の問題かと。』

『そうか。第二陣は?』

『先ほど準備が完了したようです。』

『そうか。戦力は報告通りで間違いはないかの?』

その問いに兵士はもう一度背伸びをしながら双眼鏡を覗きこみ、頷いた。

『はい。敵の数はおおよそ三千。その内、騎士団、冥術師が五百ほどです。』

『こちらは五百と少し。リユーガ達がいるとはいえ、表だって戦えないことを考えると……厳しいか。』

『ええ。それに……』

『どうした?』

ラウルの問に敢えて答えず、兵士はラウルに双眼鏡を手渡した。しばしその無言の意味を考えてからラウルは促されるままに双眼

鏡を目に当てた。

濃霧に満ちた沼地。普通なら見えないはずのその双眼鏡の向こうでは銀色の塊が綺麗にいくつもの正方形に並んでいる。それだけでもただならぬ雰囲気醸し出しているのだが、その中心で一際異様な空気を出している一団があった。

周りにいる兵士や騎士とも違う、特注であろう鎧をまとった騎士たちの集団。

ヴィネッツ率いる騎士五十人で形成される部隊だった。

そこまではなにも言われずに理解したラウルはすぐに兵士が伝えなかったこともすぐに見つけた。

『肝心のヴィネッツがまだ姿を現していないのか。』

『はい。どうしますか？』

差し出された双眼鏡を受け取ると兵士は傍らに置いてあった子供の頭ほどもある四角い箱を差し出した。

その箱の上面にはきれいな正円の穴が開いている。

ラウルはそこを覗きこむように顔を近づけるとすう、と大きく息を吸った。

『作戦に変更はしない。このまま続行する。』

そう告げるラウルの顔は箱から発せられるほのかな黄色い色に照らされている。

そのまま数秒、帰ってくるはずの声が届いて来ないことを確認してからラウルは顔を上げた。

『例の件はどうじゃ？』

先ほどまでとは違う押し殺した声にかけられた兵士も決して崩すことのなかったその表情を陰しくした。

『現状を詳細に伝えましたが、向こうからは何も反応がありません。』

『そうか……基本的に我々とは無干渉だからのう。仕方がない。』
『どうしますか？』

『どうするもこうするもないじゃろ……こちらからは何もできないのだから』

『そうですね。』

『誰か、』

『え？』

風のように微かな声に兵士は意外そうな顔をした。それはラウルというドワーフが里の英雄ともいえる彼がこんな弱弱しい声を出すなど信じられなかったのだ。

だがそれと同時に、そんな人には見せない弱さを自分に見せてくれたことに不謹慎と思いつつも嬉しさを感じていた。

そんな兵士の心境などいざ知らず、ラウルは遠くで聞こえる冥術独特の破碎音、それと共に広がる振動に目を細めた。

『誰か、あの方々に好かれる人がいれば、な。』

その声は風に乗る、この湿原を見下ろす大木へと流れていった。

ザクザクと枯葉を踏みしめ、また壁のような樹の割れ目をくぐったガムルは、これまでと違う風景に足を止めた。

これまでと比べものにならない高さの縦穴がそこにはあった。

石粒のようにしか見えないほど天井は遠い。だが、なによりガムルを驚かせたのはその側面に空いた無数の横穴だった。

大きさも形も様々なうろと表現すべき穴の一つを覗きこんだ。

ひゅお、と音を立てながらガムルの頬を風が撫でていく。その風に覚えのある匂いを感じたガムルだったが、それが何だったか思い出せず、とりあえず他の穴も覗きこんでみることにした。

最初に覗いた穴はガムルの胴ほどの大きさだったので、今度はガムルの背丈ほどもある穴を覗きこんでみるが、先ほどと同じように風が匂いを運んで来ていた。

どうやらこの横穴全てが大小関係なく外へとつながっているようだ。

「へえ。」

その訪れたことのない奇妙な空間に自然とガムルの口から感嘆の声が漏れていた。

だがその声はどこか誰かに向けた賞賛の声にも聞こえた。

「で、お前等は俺をこんなところまで連れて来て何の用だ？」

そのガムルの言葉に、彼の頭上から突然、今までなかったはずの気配が姿を現した。

しかも一つではない。最初は一つだったのが、一つ、また一つと増えて行き。最後には三十以上の影がガムルの頭上で輪を作っていた。

その情景を平然と見回していると、ガムルはふっと正面に向き直った。

理由はただ一つ。強大な気配を感じたからだった。

その感覚に狂いはなかった。徐々に視線を上げていくガムルの前でそれは悠然と姿を現した。

強靱な筋肉を浮かびあがらせた黒と金の縞模様。その四肢の先に備えられた強靱な爪。ゆらゆらと宙を漂う蛇のような頭が着いた緑色の尾。獰猛な肉食獣ならではの鋭い眼光と共に光る白く鋭い牙。

そして何より目を引くのは、極彩色ともいえるその身体にはあま

りにも不釣り合いな純白の翼。

それは『六王獣』の一角、『合成獣^{キメラ}』と呼ばれる『変異種^{ヴァリアント}』だった。

『主がそうなのか。』

純白の翼を大きく広げたまま開けられた口から発せられた言葉にガムルは疑問符を浮かべずにはいられなかった。

「何の話……」

『主が、『使徒』なのか？』

そのしわがれた声にガムルは閉口した。

別に驚いたわけではない。仮にも相手は『六王獣』、知っていて当然なのだ。

ガムルが口を閉ざしたのはただそれ以上にそこまで知ったうえでどのような話を振ってくるのかが気になったのだ。

相手にもその沈黙の意味を理解したのだろうが特に話の間を縮めることはせず、平然とまた話し出した。

『なら、問おう。若き『使徒』よ。主はこの国の、この世界の真実にどれほど近づいた？』

ガムルはその声とは別に獣の唸り声を発する口を見つめ、黙り込んだ。

それはこの問いについて正直に答えるべきか迷ったからだだった。

『六王獣』の使命ともいえるものの一つに、その秘密の保守が含まれているのを彼は知ってしまったていたからだ。

「……お前ら六人が共有するところまでだ。」

そこまで考えた上での答えに正面に立つ他より一回りも二回りも大きなキメラはその切れ長な目を細めた。

『なら『六天』が本来、誰が元にあるべきかは知っているな？』

「……ああ。」

今度は目を細めるのはガムルの番だった。その正面に立つ恐らく『六王獣』であろうキメラ。その口に銜えられた黒い棒に見覚えがあったのだ。

黒い棒の先に付いた黒い刃。そしてそこに填まった五つの宝石たち。

それは間違いなくガムルの『機械剣』だった。

『この世界に存在する、自然の中で生成しえない六つの珠、六つの天』、そして六つの『災厄』。』

「それは『六天』のことか？　どういう意味だ？」

『そうか。主はそこまで知らないのか。』

機械剣を口からこぼし、やれやれと言った風に首を振る仕草にガムルの不機嫌さは急上昇していた。

ガムルはこの国の、世界の闇を知っている数少ない人間だ。そういう自負もあり、客観的に見ても彼より深いところまで知っているのはこの世界でも数えるほどしかない。

そんな自分を、深い闇を見てきた自分を否定するように子供のように扱うキメラに苛立たずにはいられなかった。

「知らないって何をだ？」

その苛立ちからか、それとも自分が知らないということに対する恐怖からか、ガムルの言葉は自然とその語尾を強めていた。

そんな小さなガムルの醜い自尊心に呆れたようにキメラは前足を伸ばし大きな伸びをした後、全身の筋肉を躍動させ、ガムルの頭上に向けて跳びだした。

針の穴のように小さく見える真上の穴から差し込む舞台の明かり。そんな光の柱の中に優雅に飛び込んだキメラはゆっくりと、そして力強くその大きな翼を開いた。

『この世界の真実を、だ。』

「そろそろ出るぞ。」

割り当てられたテントの中、傍らに立てかけていた片刃の剣を持ち上げる龍牙。それにつられ、フィロやリタニアも立ち上がった。

里と沼地の中間地点に位置するここでも戦闘の激しさが増していくことを耳で、目で、身体で感じていた。

気味の悪い緊張感が満ちた外と中、龍牙はそれを仕切る布を持ち上げるが微かに入った声にその動きを止めた。

「ガムルさんはどこにいるのかな？」

ただ一人腰を上げず、自分の手の中にある機械剣を見つめながら呟くダンゼル。それにチラリと視線を向け、何か言うのかと思えば、龍牙は何も言わずに外へと出て行った。

それを慌てて追いかけるフィロを見送ってからリタニアは木箱の上に座るダンゼルの横に腰を下ろした。

「ダンゼル、」

「えっ？ あっ、ごめん。もう行くのかな？」

自分が言葉を発していたことにすら気づいていなかったのだろう。ハッと顔を上げると大慌てで機械剣をホルスターにしまい、立ち上がろうとした。

「ダンゼル、」

が、リタニアの制止の声にピタリとその動きを止めた。

「もしかして、僕、口にした？」

恐る恐るといった感じに見てくるダンゼルのリタニアはただ無言

で頷いた。

「……そうかー」

その反応を見て自分の不注意さに呆れたような声が口から零れた。
「そんなにあいつのことが心配？」

俯けた自分の顔を覗きこんでくるリタニアのまっすぐな瞳を見返せず顔を背けた。

「リタニアさんは心配じゃないの？」

子供がすねた時のような声色で問われる言葉にリタニアは両手を後ろに付き、天井を覆う布地越しに微かに光を照らす太陽を見上げた。

「心配よ。」

「なら、」

バツとダンゼルは身体を乗り出すが、リタニアはそれを軽く手を上げることで制止した。

「だけどそれ以上にあいつを信じてみたい……私はそう思う、って言わなかったかな？」

どこかいじわるげな言い方をして見せるリタニアに対し、ダンゼルは冷めた目を向けた。

「初耳だけど……」

呆れるような口調のダンゼルの横で爆風によって壁替わりの布が大きくなびく。

それに一切注意を向けず、リタニアは顎に手をあてうーんと唸った。

「ああ、あれはフィロに言ったんだっけ？　まあ、いいわ。そういうことだから。」

無理矢理話題を終わらせ、先いくわよ、と言い残し布地の向こうに消えていく彼女をダンゼルはぼーと見つめた。

普通ならばため息をついていたところだろう。

だが、今回は違った。

ざつくばらんとした言い方だが、その言葉の節々に彼女なりに悩んだ痕跡を垣間見たのだ

「……どうしたのかな、僕は。」

もうダンゼルが悩むことはなかった。

それは人生の先輩が悩みぬいて得た答えを否定するだけの解答をダンゼルは見いだせなかったからではなく、単純にダンゼルもまた彼女と同じように信じてみたくなったのだ。

『ガムル』という存在に。

また布地が大きくなびいた。どうやら戦火は着実にこちらに近づいてきているようだ。

「行くとしようかな。」

それに急かされるわけでもなく少年は決して大きくないその一歩を踏み出した。

実際は成人男性の半分ほどしかない歩幅。だがその時ばかりは少年は自分の一歩をとて大きく感じていた。

この世界には『神教』と呼ばれる宗教が存在する。

この世界はある一人(?)の神によって作り出され、今もなおその神によってこの世界は統治されているという考えだ。

その『神教』では伝承をまとめたものを聖書としているが、その

中の一説にこうあった。

『激しい閃光の中、人の形をしたものが六対の翼と共に天より舞い降りた。』
と。

今、ガムルは脳内でその一説が何度も再生されていた。

彼はその一説が示す意味をある程度のところまで理解していた。神、という存在。これは何を示すのか分からないが、六対の翼、の意味は理解した。

いや、この言い方は不適切だろう。そう、その答えが目の前にある、というべきなのかもしれない。

上から照らされた光のせいで表情は見えない。だが、ガムルにはそのシルエットだけで十分だった。

格が違う。

そう直感的に思わせるほど、大きく広げられたその翼からは神々しきにも似た圧倒的な存在感があふれ出していた。

『主は……』

それをただ茫然と見上げていたガムルはその影から発せられた声にハッと現実に戻された。

『主はまだ弱い。』

自分でもそんなことは分かっている。いつもならそう反抗心が心の中で顔を覗かせるのだが、なぜだろう。今のガムルにはこれに反抗しようなどという考えが浮かばなかった。

『我ら『六王獣』はこれまで世界の安定のために、常に人間を監視し、時には武力を持って殲滅した。』

そこでキメラはガムルに発言の意がないことを察するとすぐに続きを話しはじめた。

『そんな中ここ数十年で、人間は我々の脅威、さらに言えば世界の崩壊にも繋がりがねない技術を確立してしまった。』

「人工破天石の生成と遺伝子への直接的な干渉による十階梯の生産か？」

思いだしたかのようなガムルの発言に是とも非とも取れるような頷き方をした。

『確かにそれもだ。……だが、奴らはそれとは別に、この世に存在してはならないものを生み出した。』

そう言いながらまた元の場所に舞い降りていくキメラ。

「存在してはならないもの？」

『そう、その名は『究極』^{アルデマ}、この世界を一瞬にして滅ぼしてしまう最強最悪の兵器だ』

ガムルは絶句した。

『世界の崩壊』などという話をいきなりされてすぐに納得できるほどの情報処理能力をガムルは保持していなかった。

「嘘だろ……？」

そんなガムルにはこう口にするしかなかった。このキメラが嘘をつくわけがないことなど分かり切っている。だが、それでも疑いたくなる、いや、疑わずにはいられない。それほどの威力をそれは持っていた。

それを分かったからだろう。キメラの方も何も言わずにガムルの言葉を待っている。

「なぜそんなものが……？」

やっと思考が追いついたガムルにキメラは伏せていた視線を上げた。

『ある一人の『男』が、この世界の真実にたどり着いたのだ。』

「一人の男……おい、まさか!？」

目を大きく見開く前でキメラは頷いた。

『そうだ。その男の名は……』

ノーブルⅡヘイルⅡロザンツ 現、ロザンツ帝国皇帝だ。』

予想はしていたが、それを実際にキメラの口から発せられたことにガムルは衝撃を受けていた。

「あいつが……じゃあまさか、あの『十五年前の殺戮』は!？」

『そうか、やはりそうだったか。』

「ッ!？」

話しすぎた、とガムルはとっさに口を押えるがもう遅かった。

『やはり主があゝの里の三人の生き残りのうちの一人か。』

その落ち着いた口調にガムルは驚きを隠せなかったが、同時に当然だなとも思っていた。『当事者』以外、誰にも知られていない事実だが、彼らなら知っていてもおかしくないそう思えたからだ。

だが、その『当事者』であるガムルはキメラのある一言に違和感を覚えずにはいられなかった。

「三人、だと？」

（あの時の生き残りは俺たちだけだったはず……）

『ああ、三人だ。主ら二人にもう一人。主のよく知るものだ。』

「俺の知るもの……そんな馬鹿な。」

そんなわけはない。そんな現実逃避とも取れる、ハツという笑いを溢すがキメラの表情は変わらない。

『信じるか信じないかは主の自由だ。それに、私がこのことについて話せるのはここまでだ。』

「どういう意味だ？」

『そのままの意味だ。』

「なぜだ？ 知らないという訳じゃないんだろ？」

その鋭い指摘にキメラは目を細めた。

驚きに驚きを重ねたせいだろうか、ガムルは徐々にだがいつもの冷静さを取り戻していた。

『我々の口からそれを語ることはできない。』

「なぜだ？」

『それが我々六の種族が護らなければならない契約だからだ。』

「契約……いったい誰とだ？」

質問を繰り返すガムルにそのキメラは黙り込んだ。もう何も話すことはない、そう無言で告げていた。

「おい、」

『我々が与えられる情報の中にその問いに対する答えはない。』

「ちっ。なら訊く。その兵器とはなんだ？」

『答えられない。』

「発動条件は？」

『答えられない。』

「なら、それはどうやって知ればいい？」

答えられない範囲をうまくなぞるようなその問いにキメラはしばし黙り込むが恐る恐るといった感じに口を開いた。

『まだ答えられない。』

「まだ？」

『私にはまず主に答え、実行してもらわなければならないことがある。』

その何とも言えないやり取りに苛立ちを覚えながらもガムルは今の自分が置かれた状況を再認識したうえでもう一度問うた。

「今回のこの湿原での戦い。帝国の狙いはなんだ？」

忘れかけていたこの疑問に初めてキメラはその大きな口を歪めた。

『奴らの狙いは『ここ』にある。』

「ここ……?。」

その示す場所、つまり今いるこの場所を見つめ、先ほど嗅いだ匂いを思い出したところである一つの場合に思い当たった。

「『世界樹^{エルデ}』、か。」

『その通り。なぜか……主にはもう分かっているのだろうか？』
「ああ。」

ここが『世界樹^{エルデ}』、つまりあのサムヘア湿原ににいるというならばもう思い当ることは一つしかなかった。

『そこで頼みがある。』

「さっきの答えと引き換えに、奴らを倒せ、か？」

『話が早くて助かる。『使徒』よ。』

「その『使徒』っていうのは止めてくれ。」

『ならばロー……』

「ガムルでいい。」

『そうか……フッフ　ハーハッハッハッ』

ガムルの強引な物言いに正面のキメラはこらえられないと言った感じに笑いだした。

その突然の笑い声にそれを取り巻く他のキメラたちは同じように笑うべきかどうか迷っているのだろう。先ほどのピンと張りつめた緊張感は消え去り、全員がそわそわしている。

そのまましばらくそのキメラは笑っていたが、パンパンと前足で地面を叩いてから穏やかな表情を浮かべた。

『そうか。なら我のことはフェリクスと呼ぶと言い。』

「……ああ、そうさせてもらう。」

ガムルは若干の沈黙の後に頷いた。

それは『六王獣』が軽々しく自身の名を告げたことに対する驚きだった。

『冥術』の中にも相手の名を知ることによって発動する『特殊系』と呼ばれる系統があるからだ。

ガムルに対する信頼の証なのか。それともその程度の『冥術』では倒せないという自信なのか。

両方なんだろうな、と結論付けながら、それから投げつけられた機械剣を受け取った。二日ぶりの相棒の感触を確かめながらガムルは背を向け、元来た道に戻りだした……が、ふと何かを思い出したように立ち止まった。

それにフェリクスをはじめとするキメラたちも何事かとざわめいた。

『どうかしたか？』

「それで、だが……」

『ん？』

振り返ったガムルは頭を掻きながら恥ずかしそうに笑った。

「出口、教えてくれないか？」

これにキメラたちが四本足で器用にずっこけたのは言うまでもない。

濃い霧の中で（中編）

戦況はやはり帝国軍の優勢のまま進んでいた。

最初こそ拮抗しているように見えていたが、今では雪崩のように里や逃げていくサメツト族の方へ帝国軍の兵士や騎士たちが向かっている。

その陣形は全くと言っていいほど崩れていない。

先頭を進む重装歩兵部隊では最初より明らかに人数が減っているが、そこだけだった。

だがその正方形に形作られた陣形の中心で、周りと違う奇妙な生物がいた。

細長い緑色の尾に平べったい同じく緑の四足の身体。そしてその先に付いた巨大な目。

『水巨竜^{イグアナ}』だった。

なぜそんな生物がいるのかというと、理由は明快だ。

「第一、第二部隊は左方より第三、第四部隊は右方より迂回。第五部隊はこのまま直進する。」

その緑一色の生物の上に人が乗っているのだ。

銀色の鎧を身に纏い、後ろで自身の金髪を結い上げた男だった。

青年というにはあまりにも存在感がありすぎる歴戦の勇者といった風格がある彼は、先ほど。丘の上でヴィネッツに報告をしていた男だ。

「カイルさん。偵察部隊より報告です。」

そんな彼に兵士とは思えない線の細い青年が報告する。

「敵陣営は予想通りこの先の森の中で隊列を組み直した模様です。」
「そうか。」

カイルと呼ばれたその金髪の男はしばし茂みを見つめた後、カイルは手元の通信機を取り、静かに、だがはっきりと命令を告げた。

「全隊、進軍止め。森の中に入らず、隊列を整えろ。」

え？ というどよめきは彼の周りからは起こらなかった。

先ほど進軍を告げたばかりだということになぜそれをすぐさま止めたのか。他の部隊では口にはしないがそのような雰囲気の流れていた。

それに対し、彼の周りを囲む騎士のみによる部隊、第五部隊の面子は疑うという考えすらないといった風だった。

それに特に何も言わず、カイルは通信機から口を離れた。

「これから何をするか、もうお前たちには分かっているだろう？」
その言葉にその場にいた全員が一切のずれなく頷き返した。それをうれしげに見つめながらカイルは腕を掲げた。

「やれ。」

『なんだ？ 動きを止めた？』

少し高台で木の葉で身を隠しながら様子を窺っていた兵士の一人が、その奇妙な動きに訝しげな表情をした。

普通、敵が逃げ出せばそれを追いかけるのが鉄則だ。

それはおもに、相手に体制を立て直させないと自軍の指揮力を上げるためでもある。

そして今、サメット族側は逃走を開始し、第二陣営まで下がってきている。この流れを途切れさせないために帝国軍は追いかけてくるに違いない。

そうラウルや彼らは予想していた。

だが、事実は違った。

追ってくるはずの帝国軍が全軍、森に入る前で出てくるのを待っているかのように隊列を整えてその動きを止めている。

この誤算はサメット族にとってかなりの痛手となっていた。

彼らの作戦は、この森に誘い込みそこに仕掛けた様々な仕掛けや白兵戦法で数を確実に減らすというものだった。

この入り組み、視界の悪い森の中では鎧に身を包んだ男たちよりも小柄なドワーフ達の方が機動性が優れているということも思慮したうえで、の作戦だったのだが、それはもう実行不可能としか言いようがなかった。

兵士は必至で望遠鏡を覗きこんだ。この帝国軍の動きがこちらの作戦に感づいてのことか、それとも別の目的のためなのか。そしてその突破口を見つけるために。

『いったい……ん？』

手前から中心へと慎重に望遠鏡をずらしていたその兵士はあるものを見て固まった。

その顔からは一気に血の気が失せ、目が大きく見開かれた。

『あ、あれは……』

手から望遠鏡が零れ落ちるのも気にせず、兵士は口に手を当て、必死の形相で森に向けて叫んだ。

『逃げろ!! 殺されるぞ!!』

だがそれを言うにはあまりにも遅すぎた。

「止まった……?」

出陣しようとしていた龍牙は本来ならばありえない状況に知らず知らず呟いていた。

「あれ? もしかして終わったの?」

その後ろからかかった声に振り返り首を横に振った。

「いや、」

後ろから歩み寄ってきた三人は現在の戦況を見つめ、渋い顔をした。

「これは……まずいんじゃないのかな?」

「そうね。この状況で帝国軍がとる陣形としてはおかしいわね。」

「あの陣形は、超級の冥術発動のための術式を意識してのものですね。」

三者三様の意見を述べていく。それはそれぞれの専門分野から見た上での意見だった。

ダンゼルが言っているのはサメツト族が完璧に包囲されていることから。

だがその横で呟いたりタニアはかつて指揮官に付いたことがあるものとしてダンゼルとは正反対の危機感を持っていた。

兵士の数で圧倒的に劣るサメツト族に対し、ここまで兵を散開させるという帝国軍の戦法に納得がいかなかったのだ。

これが平原のような見晴らしのいい場所ならば理解できる。だが

これから戦うのは森という機動性の落ちる場所なのだ。しかもこの森は視界が悪い。ここに住み慣れているサメツト族に対し、最初から歩兵隊を突撃させるにはあまりにも代償が大きすぎる。

かの名將がこのような失策を獲るわけがない。そう分かっていたからこそリタニアは逆に危機感を感じていたのだ。

（何かがある、絶対に。）

そんな中、帝国軍の戦術を正確に理解していたのはフィロだった。

フィロが注目したのは中央を陣取っていた騎士と冥術師による部隊。

それが先ほどから正方形から三重の円へと陣形を変えているのだ。

それはこの世界の冥術の深いところまで知ってしまったフィロからすれば、理解するのは造作もないことだった。

その部隊が構築している術式は『炎獄』インフェルノ。広範囲を焼き尽くす上級の術式だったが、フィロには彼らがやっていることがそれだけではないことも理解していた。

彼らが作っている円。それは彼らの身体を術式の一部として利用することで術式全体を安定させ、より強大な冥術を発動するためのものだった。

『冥術』はとても不安定なものだ。『冥術』を発動するにあたり、まず行うのが術式の書き換えだ。

展開される円形の術式には様々な情報が書き込まれている。

その術式の系統、形状、威力、距離、範囲など、見る人が見ればそれだけで発動しようとしている『冥術』が分かってしまうほどの情報量を含んでいるのだ。

通常、これらを書き込むには多大な時間を要するため、冥術を使

う多くの者が『機械剣』という『媒体』^{デバイス}を通して書き換えを行うのだ。これで速度は著しく上がるが、あくまでこれは補助。結局のところ使える術式の難易度、速度はその術者の性能に帰結するのだ。だが、いくつかこの結論から外れられる方法が存在する。

そのうちの 하나가、複数で一つの術式を構築するというものだ。

矢が束になれば折れにくいように術者が増えればその安定度は増す。とはいえ、元々人によって『冥力』の質が違うため増すと言っても微々たるものだ。

だが、今回、フィロの前で行われようとしているのは、それと一世代前の技術の融合だった。

数十年前に流行った地面に術式を直接人の手で書き込むことというものだった。もちろん時間の問題で実践投与はされなかったが、一部の物好きの間で別の形で使用されていた。

それは外郭の指定。

術式の外郭部分を先に地面に書き込むことで術式の規模を指定することでその術式の安定度と威力を高めるというものだった。

そう、今回帝国軍が行っているのはこれだったのだ。

彼らの肉体を術式の外郭と設定することでその術式を安定させ、より大規模な『冥術』を発動する。

その威力はこの森を容易く焼き尽くすほどだった。

そこまで理解したフィロはその術式を止めようと槍を高く掲げるが、

「フィロ。止める。」

「っ!?! だけど……」

龍牙にその手を掴まれた。

手を掴み、制止の声を発する龍牙の行動が信じられない。そういった風に、フィロは珍しく声を張り上げた。

これをしなければ大勢の命が奪われる。それを龍牙も理解しているのが分かっているからこそフィロは龍牙が制止する理由を理解しなかった。

「止めるんだ。」

「だけど、これで私たちの存在がばれるかもしれないけど、このままじゃ……」

「大丈夫だ、」

フィロの疑念を振り払うように少し語気を強めながら龍牙は戦場と反対方向を見た。

「すでに手は打ってある。」

そんな内輪もめが繰り広げられている間にもカイルを初めとする騎士と冥術師の部隊の術式は完成しようとしていた。

三重の円を構築する騎士たちを繋ぐように赤い線が走り、その間に幾何学的な様々な情報を含んだ文字が書き込まれていく。

徐々に輝きを増していく中、その完成を告げるようにその中心が一際明るく閃光が吐き出された。

その赤い光に、

森にいた兵士たちは驚愕を浮かべ、

フィロ達は動揺の色を見せ、

そして、カイルは愉快げに笑った。

術式の中心から発せられた赤い光は濃霧の中、天を貫き、そしてこの術式の本体というべき熱風が森に向けて吹き込んだ、

はずだった。

「なっ!？」

カイルは固まっていた表情を驚きに変えていた。

だがそれも仕方がないと言えるだろう。

その熱風が、その場にいる者たちの表情が、どこかからか発せられた青い光によって『打ち消された』のだから。

「これは、いったい……」

「いったい、なにをしたの？」

フィロ疑惑の視線を龍牙に向けるが、当の本人は帝国軍の中央部分が慌てふためくのをみて楽しんでるようだった。

「ねえ？」

あからさまに感情を表に出すという龍牙にしては珍しいことだが、それよりもこの疑問を解決することが先決だった。

「俺は何もしていない。」

「え？」

「ただ助言してやっただけだ。」

「助言ってだれに……?」

「何もサメツト族は森にいる奴らだけではないだろ？」

「……どういうこと？」

「確かに向こうは冥術師や騎士が五百人いる。だが、こちらにはそれ以上の戦力があるのを忘れたのか？」

龍牙のその遠回しな答えに三人はハッとして戦場とは反対、里の

方を向いた。

「もしかして、エルフの人たちを？」

リタニアの他の二人もたどり着いたであろう答えに龍牙は、ああと頷いた。

「だけど、いくらエルフの冥力量が三倍っていつても、あんな巨大な術式に対処できないでしょ？」

尚も納得のいかないリタニアは質問を繰り返すが、その中でフィロが何かに思い当たったのか目を大きく見開いた。

「まさか、サメット族のエルフの方に彼らと同じことを？」

信じられない、そういった風に形のいい目を大きく見開くフィロに、龍牙は頷いた。

それもそのはず。その答えから導き出されたのは驚愕の事実だったからだ。

「どうということ？」

意味が分からない。そう顔を顰めるリタニアにフィロは自分を落ち着かせようと胸に手を当ててから言葉を紡いだ。

「帝国軍がやっていたのは、自分たちの肉体を術式の一部として設定し、安定度を増した複数による大規模な術式です。」

「じゃありューガさんはそれをサメット族の人たちに？」

「待ってよ。それじゃあ、リューガ！？」

フィロもたどり着いたであろう結論に至ったリタニアは悲鳴に近い声を出した。

「あいつらの戦術、見抜いていたの？」

「ああ。」

三人はその現実離れた所業に言葉を失った。

確かに敵の兵士の動きを予想するぐらいならばリタニアにもできる。だが今回龍牙がやって見せたのはそのもう一步、二歩先のことだった。

冥術を『打ち消す』ことは、要は相手の『冥術』を自分の『冥術』

の威力が上回ればいいのだから簡単といえば簡単だ。

だが、それが『相殺』となるとその難易度は跳ね上がる。『相殺』するにあたり必要とされるのは、相手の『冥術』の規模に対応するだけの『冥力』。そして相手の『冥術』と対局に位置する属性の『冥術』だった。

規模が小さければ可能かもしれない。しかし、今回はあまりにも術式が巨大すぎた。

発動時に普通より長く術式が展開していたためフィロのように術式から冥術の種類を読み取ることは可能だ。これは知識さえあれば誰でもできるだろう。だが、それを相殺するにはそれと同規模のものを構築しなければ間に合わない。

そう、龍牙は相手が使用する『冥術』の種類までも予想し、見事に的中させたのだ。

まさに神の所業ともいえるものだった。

エルフの冥力保有量は人間の三倍。基本的に発動できる『冥術』の規模もまた冥力の量に比例する。

帝国軍の騎士、冥術師の数は五百。それに対し、里にいるエルフの数は三百。この点においては十分すぎる戦力だった。

「やっぱり英雄は違うわね。」

嫌味とも取れるリタニアの言葉だが、それには一切そのような負の要素は含まれていなかった。単純な賞賛の声。残りの二人もただただ哑然とするしかなかった。

「だが、本番はここからだ。」

もう勝ったと言いたげな三人に、というより自分に言い聞かせるように龍牙は呟いた。

「さて、ヴィネッツはここでどう出るか。」

帝国軍の隊長は基本的にその部隊で最も力を持つ者になることが多い。このヴィネッツという男もまたその例の通りだった。

そのヴィネッツはというと、茂みの中を水巨竜イグアナに跨り、進んでいた。

鬱蒼とした木々の間をなめるように進んでいく中、少し視界が開けたところで綱を引いた。

地面を削る音と共に制止をかけるイグアナの上でヴィネッツは左腕に巻かれた腕時計にチラリと目をやった。

「爆発音がないな。」

天を貫く赤い光を視界に捉えていたにも関わらず、届くはずの音がないことにあからさまに表情を歪めながら腰から通信機を取り出した。

「何か……?」

『た、大佐、』

通信機に話しかけるや否やすぐに返ってきたのは、動揺を隠せていないカイルの声だった。

「どうした? そんなに慌てて。」

『実は……』

できる限り正確に伝えようとしているのだろうが、まだ落ち着けていないのか、その説明はチグハグなものだった。

「つまり、冥術が相殺されたと?」

『は、はい。どうでしょうか?』

ヴィネッツに話したことで自分の中でも整理がついてきたのだろう。カイルの声には少しずつ落ち着きが戻ってきていた。

「ふむ。ならば正攻法で攻めればいい話だ。その間に私が『目的』を完遂する。」

『はっ。ご武運を。』

カイルの言葉を聞き終えるかどうかというところで通信機を切った
ヴィネッツはあからさまなため息をついた。

「情けない……」

部下の前であれほどまで慌てるのがどれだけ士気に影響するか
分かっているのか？ と苛立たしげに思ってみたが、これまで自分
の右腕として共にしてきた彼のことを考えるとよほど衝撃的だった
のだろう。

だが、そんな報告をうけてもヴィネッツの表情には一切変化がな
い。

あの部隊のほとんどがこうなることを予想していなかっただろう。
確かに彼らの帝国軍の中での立ち位置やその実際の实力を考えると
確かにその予想に達するのは難しいだろう。

もし、相手がドワーフとエルフであると知っていればそれを考え
るものもいたかもしれない。

だが、だれにも言わなかったがヴィネッツはこうなることを的確
に予想していた。

なぜなら『あの男』がいるから。

彼らは知らない。彼がなぜたった十五人で百以上のゴブリンを殲
滅できたのか。

ヴィネッツはそこまで思考を巡らせたところで一度自分の腰元を
見た。

剣を差すように腰にぶら下がっている棒状の機械剣。それは彼の
階級の割には装飾もなにもないただの棒に見える。

だがその実、見栄えよりも実践を考え、無駄なものを省き、必要
なもののみを詰め込んだ洗練されたものである。

それを長いコートの中に隠しながらヴィネッツは前方上空を見上げ、握っていた綱でイグアナを叩いた。

「グエエ」

奇妙な鳴き声と共に茂みへと走り出したその上で、ヴィネッツは見えなくなるまでその視線の先にある一際大きな樹を見つめていた。

「遠距離部隊前へ!!」

冷静さを取り戻したカイルの命令に部隊の中央の方にいた集団が前に出てきた。

かなり重厚な鎧に身を包んだ騎士たちに対し、遠距離部隊、つまり冥術師たちは騎士たちほど筋力や機動性がないからだろう。その身には鎧ではなく少し厚めのコートのようなものが纏われていた。

『騎士』と『冥術師』は似ていてその実違うものである。

これらはこの世界における共通の呼称であり、四年に一度行われる試験によって階級が分けられるのだが、同じ階級でも『騎士』と『冥術師』では全く意味合いが違ってくる。

『騎士』の場合は、実戦的な試験によって合否が決められるが、『冥術師』の場合はあくまで『冥術』の発動速度、規模、使用可能な冥術の数、難易度などで決められる。

では最後の一つ、『宮廷騎士』というのは何かというと、これは『騎士』『冥術師』それぞれの試験において六階梯以上の階級を獲得したものに与えられる称号である。

つまりリタニアの言う『宮廷騎士』の九階梯というものは常人には届きえない、とんでもない階級なのだ。

前方に二列になって並んだ冥術師の胸元には何階梯かを表す星が

少なくとも五つ以上つけられている。

その彼らの誇りともいえる星を揺らしながらそれぞれの機械剣を構えた。

「目標半径五百メートル以内全域！！ 術式は火系統広範囲を選択！！」

カイルの指示に冥術師たちは黙々と自身の機械剣の指を滑らせていく。

そして、それらの先端に赤い光が灯ったのを確認してからカイルは掲げた腕を振り下ろした。

「撃てえ！！」

直後に展開される何十もの術式。そしてその先端からは赤い球体が射出され雨のように森の中へと降り注いだ。

『ぐうあっ！？』

『ちくしょう！！ 覚えてろよ！！』

『落ち着け！！ 撤退して隊列を整えるんだ！！』

その火の雨が降り注ぐ森のなかでは以外にも悲鳴は少なかった。

最初の巨大術式、それを見たサメツト族は例え相殺されたとはいえ、その精神的なダメージは計り知れないものだった。

その最悪の情景が脳裏をよぎる中、そのまま待機するなど彼らにできるわけもなく、その攻撃よりも早く撤退を開始していたのが功を奏した。そのままいけば全滅はないにせよ、その半数以上がやられていたのはだれの目にも明らかだった。

『俺たちの森が……』

逃げ切ったサメツト族はしばらく呆然と逃げてきた森から目を離すことができなかった。彼らの安穏な生活を陰ながら支えていた古き友たちの最後から目を背けられなかったのだ。

焼け落ちていく樹齡何百年もの木々をどこかさみしげに見ながらサメツト族の兵士たちは第三陣までの撤退を余儀なくされた。

『あいつら、絶対ゆるさねえ。』

『当然だ。目にモノを見せてやる。』

『次が勝負どころだ。』

口ぐちに恨み言を呟きながら兵士たちは緩やかな坂を登っていく。この森は湿原に近い方は平らだが、奥に行けば行くほど坂になっていく。いわばこれがサメツト族にとっての砦なのだ。

霧が徐々に薄まってきたその坂の頂上付近、そこにはラウル率いるサメツト族本隊が陣取っていた。

「ラウル」

その中心にある布で仕切られた場所から敵の動向を窺っていたラウルは視線を外さず、声だけで答えた。

その背後から近づいてくる影は四つ。その先頭を歩く男の名をラウルは呼んだ。

「リユーガか？」

「ここからが本当の戦い、か？」

「ああ。そうじゃ……手伝ってくれるのか？」

「ああ。約束は守る……だが、」

「ん？」

急に口ごもる龍牙に視線を向けるとその本人は全く別のところを見ていた。

綺麗に整列された軍列の中、その端のほうで奇妙な空気を振りま

く集団があった。

「レイのことか？」

そうそれはあのヴィネッツを打ち取ると言っただけのけたレイの部隊だった。ドワーフだけでなくエルフも数名混ざった合計十人の小規模な部隊だ。

「ああ。」

「何が気になる？」

「雰囲気、がな。」

「雰囲気？」

「ギスギスしすぎているわよね。」

リタニアの言葉にラウルはもう一度そこへ目を向けた。

確かにラウルの目にもそこだけ他とあまりにも違う空気が流れているのは感じ取れた。だが、それがどのように危険なのか、皆目見当がつかなかった。

「だが、それは強敵と相対する前だからではないのか？」

「そうだったら、武器をあんなところに置いておいたりしないですよね。」

ダンゼルの指摘する通り、その集団の誰もが鎧はつけているが武器を手を持つということはせず、中には武器を少し離れた場所にある荷物に立て掛けてさえいた。

このギスギスした緊張感を発するにしては余りにも無防備すぎる。いつ敵からの攻撃を受けるかもしれないのに、だ。

「そうですね。まるで自分達が死ぬことはない、という感じですね。」

「それはどういう……？」

「そう。例えば、自分達の命を保証されているけどそれがバレると困る、みたいな、ね。」

「まさか……!？」

「予測の域を出ませんけど。」

フィロの援護射撃なのか分からない言葉にラウルは口を噤み、自分の息子に視線を向けた。

これから殺し合いに行く前だというのに仲間の一人と親しげに話、時々笑みをこぼしている。

（そんなわけ……）

「あの部隊はお前が決めたのか？」

思考の渦にのまれる寸前で引きとめられたラウルはその問いを向けてきた龍牙をみやった。

「いや、あれはレイがいつも連れている仲間じゃ。その方がやりやすいと言って……」

「そうか。……俺たちはもう行くぞ。」

「え？」

その意外な反応にラウルが言葉を失っていると龍牙たちはラウルに背を向け歩き出した。

「お前は目の前の戦いに集中しろ。」

（何を他人事みたい……）

背中越しにかけられる声にそんな反感を持たずにはいられなかった。

「だが……」

だが、俯いたままのラウルは龍牙が立ち止まっていることに気付けなかった。

「安心しろ。」

頭の上からかけられた声にゆっくりと視線を上げた。

顔を上げたラウルが視界いっぱいに捉えたのは見たことのない龍牙の満面の笑みだった。

「俺たちがどうにかしてやる。」

片手をあげて去っていくその後ろ姿にラウルは自然とその頭を下

げていた。

「ねえ、リユーガ？」

「リタニア、お前がついてくれ。」

「りょーかい。で、リユーガ達はどうするの？」

「当初の予定通り、頭を潰していく。」

「そっ。わかったわ。」

リタニアはそう答え、トントンと靴先で地面を叩いてからレイたちとは反対の方向に跳んで行った。

「でも、リユーガさん。」

「なんだ？」

「ヴィネッツはどこにいるのかな？ どこにも見当たらなかったけど。」

「ふん。」

それに不機嫌そうに鼻を鳴らしてから龍牙は戦場の方を見やった。

「どこかでこれを引っ掻き回す準備でもしているんだろう。」

「あれ？ リユーガさん鬼將軍を知ってるの？」

「まあ、な。」

龍牙の雰囲気からこれ以上は聞けないと察したダンゼルはそれ以上聞かなかった。その気遣いを知ってか知らずか、龍牙もまた話題を変えようと乱れていた襟を正した。

「俺たちも行くぞ。」

「了解。」

「うん。」

足並みをそろえた三人の背中へ、ゆっくりと濃霧の中へ消えていった。

「撃ち方止め！！ 全隊、前へ！！」

通信機越しに飛ばされる指示に正確に従う帝国軍は一つの塊のよう
に一切の乱れなく森へと進んでいく。

「遠距離部隊は最前列を歩兵隊に譲りつつ、前で敵の遠距離攻撃に
警戒しろ！！」

肉声によるカイルの指示通り、冥術師たちは歩行速度を緩め、二
列ほどの騎士たちの後ろへと移動。冥術師や騎士を保有しない他の
部隊では半数を森の前に残し、残りの半分が中へと歩き出している。
それはあらゆる状況を考慮し、対応しえる布陣だった。

その圧倒的な数による包囲網はまだ距離があるにも関わらずサメ
ット族の兵士たちに何とも言えない緊張感を与えていた。

じっと相手の接近を待つサメット族の方では一切の音が失われて
いた。

身動き一つ取らず、ただ己の視覚と聴覚のみに神経を集中させる。

その中央でしっかりとした歩調で前にでたラウルは振り返り、す
う、と大きく息を吸った。

『全員、聞け！！』

そして吐き出された声は周りの音を全て打ち消した。

『かつて、我らが祖先は姿形を理由にこの森へ追いやられた。』

サメット族の兵士たちはだれもが悠然と彼らの前に立つラウルを
見つめていた。

『そして今、我々はこの最後の居場所でさえも奪われようとしてい
る。』

そうだ、戦おう、などと声が兵士たちから上がるがラウルは上に
あげていた手を握りこむことで黙らせた。

『我々は戦わねばならない……だが、この戦いは憎しみを糧に戦っ
てはならない。』

意味が分からないとざわめきが起こるがそれはすぐに収まった。

ラウルが愛用の斧を墓標のように地面に勢いよく突き刺したからだ。
『この戦いは、我々ドワーフが、エルフが、悪魔の子などではなく人間と同じなのだ、何も変わらないのだと証明するための戦いだ！！』

この言葉にもう兵士たちは声を上げなかった。それよりも、ただただラウルの言葉を待っていた。

『我々にとってこの森こそが全てだった……だがこの世界は狭すぎた。外から来た我々という異分子のせいで長い年月をかけて確実にこの森の寿命を削っていた。』

ラウルはそう口にしながら脇に生える木々を見た。茶色だった幹には黒い腐敗の跡が刻まれている。

『もうこれ以上ここには留まることはできない。やはり我々はもっと広い、太陽に照らされた光の世界にいないければならないのだ！！』

ラウルは地面に墓標のように突き刺さったままの斧を握り、一気に天に掲げた。

『さあ、剣を取れ！！ この森のために、そしてサメット族の誇りのために！！』

ウオオオオオオオオオオオ

今まで黙っていた兵士たちはラウルに答え自らの武器を掲げ、力強く地面を踏みつけた。

『全軍、前へ！！』

『ふん、くだらないな。』

『おお、おお、手厳しいね。王子様？』

その一団から離れたところで休憩していたレイは唾を吐き捨てながら、声をかけてきた人物を睨んだ。

『その呼び方は止めろと言ったはずだ、サイ。』

ドワーフにしては珍しく長身なその男は頭には毛糸で編まれた帽子を、目元には大きなゴーグルを装着し、その手元にはレイの身長ほどある大砲のような武器が握られていた。

『ははっ。悪い悪い。つい、な。』

『ちっ』

あっけからんとしたサイと呼ばれる青年に舌打ちを溢しながらレイは進軍を始めた兵士たちを見た。その横に今度は背の高い恐らくエルフであろう女性が腰をかがめ目元に影を落とすように額に手を当てた。

『あらら、正面からぶつかる気かしらね？　いくら高台だからって

冥術師がごろごろいるのに、馬鹿じゃないかしら。』

戦闘装束かと疑いたくなるような露出の多いその衣装は女性らしい起伏に富んだ身体を惜しげもなく表している。

その豊満な谷間に後ろから手を伸ばそうとするサイ。だがその手が届くより早く、神速の蹴りがその頭部にめり込んでいた。

『うっ……相変わらずだねえ、メリーちゃん』

崩れ落ちながら呟くサイをこみを見るような目で見下ろしてからメリーはレイに回答を促した。

『ふん。それはいずれ分かることだ。こっちはこっちで勝手に動く。』

『あらあら、白状ね。まあそこがいいんだけどね。』

自分の肩ほどしかないレイの顔を自分の豊満な胸に押し付けながら満面の笑みを浮かべている。

対してそれをされているレイは一切動じず、絡み付いてくるメリーの腕をほどき、森の中へと歩き出した。

『俺たちも行くぞ。』

『ええー もう行くの？』

明らかに嫌そうな顔をするメリー。だがそれはレイの一睨みで黙殺された。

しぶしぶと言った感じで彼女もまたレイが消えていった森の方へ歩き出した。

もちろん地面に転がったままのサイ（ゴミ）を踏みつけるのを忘れなかったのは言うまでもない。

ウオオオオオオオオオオ

気高い雄叫びと共に走り出したサメツト族の兵士たちは勢いをそのままに坂を下りだした。

それはメリーの言う通り通常ならば考えられない戦術だった。

単純に考えて、下では自分たちの何倍もの数の敵がしかも強力な遠距離攻撃を持つ者たちがいる中、制止の難しい坂での全速力は愚の骨頂としか言いようがなかった。

それを真下から見上げていたカイルもまた口元に笑みを浮かべていた。

「遠距離部隊、最前列へ！！ そのまま後退する！！ 遠距離部隊は射程距離内に入り次第攻撃を開始しろ！！」

後ずさりするように正面を向いたまま後退を開始する帝国軍。その最前列でついに火が噴いた。

ヒューという花火のような音と共に数えきれない火の玉と鉛玉が駆け降りる兵士たちへ襲いかかる。

「っ!？」

だが、それが兵士たちに当たることはなかった。

帝国軍の攻撃を待っていたかのようにその火の粉を遮る巨大な岩の壁が出現したのだ。

それは地系統の術式の複数同時展開によるものだった。坂に現れた小さな『棘』から新たな『棘』が生まれる。その繰り返しによってその壁は魚の鱗のように波打つ堅牢な城塞となっていた。

帝国軍から見れば巨大な龍に見下ろされているようだが、サメツト族の兵士たちは大きな器の中にいるようだった。

その壁の裏側、つまり上は内側に反り、綺麗な曲面を見せていた。その斜面にそびえる巨大な壁の上で勢いを殺しきったサメツト族の兵士たちは、それぞれの武器を手には見えないところに並ぶ、まではしたが、それ以上の動きはなく、全員が全員上を見上げていた。

その圧倒されそうな光景にカイルは少し目を見開くが、先ほどのように慌てることはなかった。

先ほどは予測できなかったが、今回は予想の範疇だった。ただそれだけだ。

だが、それ故に対処も早かった。

「あの岩の壁を砕け!!」

カイルの指示に後退を止めたその先頭で術式の発動を知らせる赤い光が発せられた。

「うわああああ!!」

「ぐっ!？」

「ぎゃああああ!?!」

だが続いて発せられたのは爆発音ではなく数えきれない断末魔の叫びだった。

「何が……っ!?!」

気配を察知したカイルは腰から機械剣を抜き様に展開。通常の剣の形に整えられると同時に自分の顔の顔を薙いだ。

スパッ

こぎみよい音を立てながら綺麗な刀身が斬りおとしたのは目の前で迫っていた矢。

それは一度では終わらなかった。二本、三本とその数は徐々に増えていく

「そういう、こと、かつ!?!」

尚も飛んでくる矢を切り払いながら視線を上げると、その弓矢は鱗のような壁から雨のように降り注いでいた。

それに対抗しようと冥術師たちが術式を組むが、それが発動するよりも早くその身体は崩れ落ちていく

「重装歩兵隊、前へ!! 壁を作るんだ!!」

慌てふためく兵士たちに声を張り上げながら、カイルは目の前に術式を展開した。

緑色の輝きを放つ術式が消えると同時に現れたのは、彼らの部隊を守る巨大な壁。だがその材質はサメツト族のモノとは違うものだった。

急に矢の雨が止んだ空を見上げた騎士たちは奇妙そうな顔をした。

彼らの前にそびえ立つ壁、それは巨大な樹の幹だった。家屋のように何本もの木々が彼らを守るようにそびえ立ったのだ。

だが騎士たちは困惑に近い表情を作っていた。その理由は至って単純だった。

なぜ燃えやすい木材の壁なのか？ 火系統の攻撃を食らったらひとたまりもないのはカイルも分かっている。それを知っているからこそ疑問だった。

だが、流石はというべきなのだろう。特に慌てることもなく騎士たちはそれぞれで回答を導き出していた。

カイルはあの一瞬で、この地面の湿り具合での壁の形成における強度と、地中を駆け巡る木の根、大気など様々なものを比較したのだ。その一瞬で決めるその判断力に敬意を表しながらも、そこにいた騎士たちは一人として違わず、次にすべきことを考えていた。

「援護を頼む。」

しかしそれよりも早くイグアナから降り、そう告げながら地面に手をつくカイルに騎士たちは何事かと見つめていたが、尚も続く矢の行き刺さる音に冥術師たちが壁の影から応戦を始めた。

だが、その応戦は効果を発揮することはなかった。それは圧倒的なサメツト族の攻撃に押されたから、ではない。

それは単純に、彼らの攻撃スタイルに問題があったのだ。

一般兵士たちが持つ遠距離武器は銃器ばかり。最新のカトリングもあの重厚な壁を前に無力化されていた。

そして冥術師や騎士たちもまた、正確な座標を捉えられないがために決定打に欠ける術式を構築するしかなかった。

文明が進みすぎたが故に生まれた差。これは彼らにとって明らかに不利な状況を作り出していた。

そんな動揺のこもった様々な色が満ちていく戦場で、手をついたカイルのコートは自分の身体から吹き出す冥力の波にゆらゆらと揺れていた。

周囲の情報を切り捨て、手にのみ全神経を集中させる。

数秒の沈黙の後、カイルは閉じていた目を見開いた。

「ふっ」

微かな吐息と共に足元に展開された緑色の術式。それはしばらく時計のようにぐるぐるとまわっていたが、その速度は徐々に落ちて行き、ついには停止した。

それを見届けたカイルは地面に突いていた手を地面から放し、肩より高い位置でその動きを止める。

一体何をするのか。それを見ていた全員がそう思う中、カイルは勢いをつけてその腕を地中へ思いっきり突き刺した。

液状に近い泥がその腕に付けた鎧の隙間から彼の身体を濡らしていく。

その奇妙な行動に啞然とする騎士たちの前で、肩まで地面に差し込んだカイルは腕を微かに動かしていたが、何かを掴んだのか、その肩に力が入っていくのがその横から見ていた騎士たちにも分かった。

「ふん!!」

そして顔を紅潮させながら、カイルは力いっぱいその腕を引き抜いた。

露わになっていく泥に汚れた鎧。その先でその手に掴まれていたのは、

「カイルさん、それは……」

「木の根だ。」

そう木の根だ。だが、ただの木の根ではない。引きずり出しているうちに露わになる徐々に太さを増していく木の根。だが、他と違うのはそこではない。

他と明らかに違う点。それはその中心に人が通れそうな穴が開いていることだった。

ある程度引っ張ったところでカイルは木の根から手を離れた。

ドスンと腹の底に響く音を出しながら転がるそれはもう大人一人が余裕で通れるだけの穴が開いていた。

「これを使って私が攻め込む。残りは私の攻撃を合図にあの壁とその上の坂に向けて攻撃を開始しろ。」

『はっ!!』

司令官らしい厳格な声色に騎士たちはそろって敬礼を返す。それに敬礼を返し、カイルは通信機から聞こえてくる返事に耳を傾けながら、その穴の中へと飛び込んだ。

「あら、意外ともってるみたいね。」

木々の間を駆け抜ける集団。その前の方を走っていたエルフの女性、メリーは言葉の割に全く感情のこもっていない声を発した。

それに戦闘を走っていたレイがチラリと視線を向けた。彼らは今、戦場とは別の方向に進んでいるのになぜメリーは戦況が分かったのか、普通なら疑問に思うところをレイは特に気にする風もなく前に視線を戻した。

「メリー、ヴィネッツはどこにいる？」

視線を前に向けたままのレイにメリーはこめかみに白く細長い指

を当てながら口を開いた。

「うーん。私たちから北西に十三キロかしら。」

「やっぱり進行方向は変わらないか？」

「ええ。」

こめかみから指を外し頷くメリーにレイの横を走っていたサイが近づいた。

「やっぱり便利だな、その目は。」

走りながらサイはメリーの目を覗きこんだ。

通常、エルフは蒼い目をしているがメリーの両目は翡翠色をしている。

「俺もほしいぜ。」

「ふん。あんたなんかにわたったところは無法地帯に変わるわよ。」

「ひどい言い方だな　流石の俺も傷つくぜ？」

「しつこい。」

肩に手をかけ、執拗に覗きこんでくるサイを睨みつけると、走るために踏み出した脚を軸に一回転。その勢いを殺さずにそのままう一方の足をサイに繰り出した。

「ぐぼっ!？」

そんな急な攻撃をかわせる訳がなく、見事に喉元にくらったサイは奇妙な声を発しながら倒れこんだ。

「うおおおう」

人間とは思えない声を発しながら周りに助けを求めるが、その誰一人として手は差し伸べられない。それどころか、皆が皆、それをためらいなく踏みつけていた。

もちろん真っ先に踏みつけたメリーは、急いで先に行くレイの横に並んだ。

「俺たちに遊んでいる暇はないはずだ。」

並ぶと同時にかけられた言葉にメリーは明らかに不機嫌な表情を浮かべた。

「だけど、あれは……」

「言いわけか？」

「……いや、」

殺意のこもった目を向けられ、メリーは黙り込むしかなかった。

「速度を上げるぞ。」

そんな彼女のことなど知らないと言いたげにレイは後ろに指示を飛ばした。

ただ黙々とレイの後ろについていく中で、メリーはレイの背中を見つめながらその本人について思考を巡らせた

どちらが本当のレイなのか。先ほどもで囲らんでいたレイは笑顔をよく浮かべる温厚な少年だ。だが、いざ今のように一度戦闘に入るとその態度は一変する。自分の勝利のためには手段を択ばないのだ。例えばそれが仲間であっても足を引っ張るようであればためらいなく切り捨てる。

温厚な彼と冷酷なレイ。

どちらが本当の彼なのか。

そこまで考えてからメリーはその考えを打ち消すように小さく頭を振った。

「どっちも彼に変わらない、か。」

「何か言ったか？」

「いや、なにも。」

そんな自分の思考も断ち切るように答え、彼女は目を見開き、遠くを見るように瞳孔を狭めた。

（自分がやるべきことをやるだけ。それが私がここにいる理由。）
彼女にしかできないこと。

瞳孔が狭まっていくにつれてその翡翠色の宝石はより輝きを増した。

彼女が生まれつき持つ特殊な能力、『遠視』。それは読んで字のごとく自分よりも離れた位置にいるものを肉眼で捉えるように、その映像を脳内で正確に再生する。詳しく言えば冥力を周りに散布し、それを介して情報を直接脳内へ転送する、それが彼女の『能力』^{ちから}だった。

だが、もちろん無制限、という訳ではない。

この能力の制限は、彼女の知覚可能範囲でしかできないこと。つまり、彼女が冥力を散布できる範囲でしかこれを使うことができない。

これに加えもう一つ、それは彼女の容量を超えないこと。

人間にも一度に処理できる情報量に限界があるようにエルフにもそのしほりがあるのだ。

生まれてからずっとこの能力と向き合ってきたメリーは通常よりもはるかに多大な情報量を処理できるが、それでも範囲内すべての情報を受け入れるにはあまりにも少なすぎる。

そのため、彼女は常に範囲内での知覚の精度を下げ、もやがかかったような状況で過ごし、いざというときにその一点で制度を上げているのだ。

そんなもやがかかった中、メリーは奇妙な気配に気づいていた。

「レイ……」

「分かっている。放っておく。」

「分かったわ。」

背後をチラリと見てから、メリーはまた速度を上げたレイの後を追った。

「気付かれていない、か。」

鱗の壁の上、誰もいないはずの場所から人の声が零れた。それにその壁の上にいる誰もが気付いていない。その声の主もそれを分かったうえで声を発しているのだろう。

だが、どこを見てもその影はない。

「意外とあつけないな。」

尚も響く声は、その斜面にポツンと一本だけ生えている樹から零れていた。

「さて、行くか。」

声と同時に響いたザクリという微かな音はその茶色い樹の根本からだった。最初は蟻の巢の入り口ほどだった小さな穴が徐々にその大きさを増し、ついにはぽっかりと大きな穴がそこに出現していた。そしてその中からヌツと鎧の男が現れた。

カイルである。

地表から目までをだし、周囲を確認してから勢いをつけて一気に跳びだした。

「ふっ。」

腰から引き抜いた機械剣を展開しながらカイルは駆けだす。

そこから壁まではおおよそ百メートル。壁の上にはここから見る限り百近くいるがそのだれもが気付いていない。

この距離は通常ならば弓による反撃は可能な距離だ。

だが、カイルの意識の中にその攻撃に対する対処という思考は一切なかった。

理由は簡単だ。その心配自体が杞憂に過ぎないからだ。

カイルは斜面を駆け降りながら正面に幾つもの手のひらほどの大きさの術式を展開した。

色は茶、緑、赤。

それが展開されるとすぐに現実が改変された。

駆けるカイルの左右の地面が隆起し、それが雪崩となって壁の方へ流れ込み、それを追うように地中に埋まっていた木の根が生き物のように群がっていく。

『なっ!?!』

『なんだこれは!?!』

『馬鹿な!?!? これだけの『冥術』を発動させる時間は与えてないはず……』

案の定、上からの攻撃を警戒していなかったサメツト族の兵士たちから驚愕の声が上がる。

火の玉を目の前に出現させたまま走っていたカイルはその反応に妙な違和感を感じていた。

(なんだ、この違和感は……)

だがその違和感に神経を集中している暇はなかった。一足早く壁にたどり着いた岩石や木の根は壁の上にいたサメツト族の兵士たちを押しつぶし、押し流し、絞殺し、絡め捕った。

パニックに陥る兵士たちを見ながらカイルはついに壁の上に足を乗せ、固まった。

「そんな……」

火の玉を構えたカイルの前、そこには地面で悶え苦しむ百人近くの兵士たちがいるはずだった。
だが、

「なぜだ……」

そこにいたのは地面に転がる息も絶え絶えの十人ほどの兵士たちだった。

確かにカイルの『冥術』により何人かの兵士を押し流し、押しつぶした。だが、あまりにも少なすぎる。

「いったい何が……」

『はん……かかったな。』

火の玉を構えたまま周りに視線を巡らすカイルに一人の兵士がとぎれとぎれに呟いた。

『見事にかかってくれてありがとうとよ。』

「何を言っている？」

サメット語をかじった程度しか勉強してしないカイルだったがその兵士が言うことは何とか理解できた。

『もうお前は、終わりだ』

「まさか……!？」

ふと頭上を見上げたカイルは全てを理解すると同時に彼が感じていた違和感の正体を見つけ出した。

斜面を下るときに感じた違和感、それは悲鳴の声があまりにも少ないこと。そしてこの行動をとる前から感じていた違和感は、なぜあれだけ強大な冥術を展開できるサメット族がもう一度それを使わなかったのか。

そう。それは他でもない、カイル（じぶん）を騙すためだったのだ。

彼らがとった戦術は単純なおとり作戦だった。

一つ目の違和感は簡単だった。最初から視覚から捉えた人数よりもはるかに少ない人数しかいなかったのだ。そして二つ目の違和感、彼らは冥術を使っていたのだ。

それは『幻術』

特殊系に分類される光などを使った補助的な効果の多いものだ。彼らが使ったのは、『幻術』のなかでも光学系の『複写』だった。

濃い霧を操作し画面として利用することで兵士の数を二倍にも三倍にも見せていたのだ。いや、それは兵士の数だけではない。弓矢の数もまた増やしていたのだ。

通常なら動くものの座標指定は困難を極める。それができるといふことが理解はしてもカイルには信じがたかった。

そんな動揺もあってかカイルは恨みが籠った目を兵士へ向けるが、それは兵士のドワーフの笑みを深くするだけだった。

『一緒に、死ねよ。』

「っ！？　くそっ！？」

動揺による判断の遅れか、一瞬のすきをつかれ、瀕死だった兵士たちが掴みかかってきたのに反応が遅れてしまった。

それによって集中力が途切れたのだろう。構えられていた火の球は霧散し、カイルまでもパニック状態になっていた。

必死に手足をバタバタと動かしもがくが、いくら瀕死とはいえドワーフが十人も掴みかかってきてはそれを振り払うなどほぼ無理だった。

「くそっ！！　なっ！？」

だがそれ以上にカイルは自分の耳に入ってくる音に背中からブワツと冷や汗が噴き出るのを感じた。

壁の下から聞こえてくる術式が展開された音、つまり自分の部下たちが攻撃を開始しようとしている音だった。

とっさに通信機に手を伸ばすが、もうその時には回線がめちゃくちゃにちぎられた後だった

必死になって通信機のボタンを連打するが全く反応がない。

そうこうしている間にカイルの上であるはずのない光が灯ったのに気付いた。

「やめろおおおお！！」

カイルの叫び声は木霊のように明るい火の雨の中で消えていった。

「さて、」

その頃、するりとイグアナの上から降りたヴィネッツは嵌めていた手袋を外し胸元に仕舞い込んだ。

乱れた服装を整え、いつもよりあえて大きめに一步を踏み出すとその足元からザッと乾いた地面を踏みしめる音が響いた。

そう、湿った地面ではなく乾いた地面を踏む音が。

この森のなかでこのような音を奏でられる場所はただ一か所を除き存在しなかった。

燦々と輝く太陽を望めるサメット族の里以外。

『止まれ!!』

大胆にも里の西側の入り口から中へ踏み込んだヴィネッツは案の定かけられた声の方を見た。

そこにいたのは片手で斧を構える二人の男のドワーフと弓を構える男のエルフだった。

だが、ヴィネッツは動かない。それは自分が死に直面したから、などという理由ではなかった。

それは言わばハンデだった。

自分とその三人の間にある絶対的な力の差を理解した上での判断だった。

そんなことをいざ知らず、エルフの弓が一際大きくしなり、弓矢が放たれた。

彼らとヴィネッツの間の距離は十メートル。普通ならばかわすどころか反応するのも難しい距離だ。

だが、ヴィネッツはそれを倒れるようにして交わした。

そこに矢が放たれるとともに駆け出したドワーフ二人が斧を振りかぶる。

二人と一人の距離はもう一メートルない。

さらにヴィネッツの身体は完全にバランスを崩しており、二撃はおろか一撃ですらかかわせないのはだれの目にも明らかだ。

だが、その二本の斧がヴィネッツの血肉を断つことはなかった。

『なっ!?!』

『なんだ、これは!?!』

代わりに断たれたのはドワーフ達の集中力だった。

だがそれも仕方がない。

最後の踏込のために踏み出した脚、それが地面に着かなかったのだから。

『何をした!?!』

目の前に平然と立つ何かをしたのであろう男を、宙に浮いたままのドワーフの男たちは喚きながら睨みつけ、そして気付いた。

先ほどまで何もしていなかったはずの手に白い手袋が嵌められていることに。

そしてその指の付け根のところに宝石のように輝く石が嵌められていることを。

呆然とする二人を嘲笑うようにヴィネッツは口を開いた。

「詰めが甘いのだよ。君たちは。」

不敵に口端を吊り上げながら意味ありげに指を三本くつつけた右手を突き出した。

その優雅な動作はもがく二人を時が止まったかのように黙り込ませた。

それほどの有無を言わせぬ威圧感がそこには存在した。

「さようなら、だ。」

そしてパチンと指を鳴らした瞬間、生肉をミンチにしたような、ぐちゃという生々しい音が響いた。

ただ一人、後ろで弓を構えていたエルフの青年だけ、それが自分の仲間を押しつぶした音だと遅れて理解した。

いつ地面に押し付けられたのか分からない、そんな『過程』を飛ばしたあまりにも激烈すぎる『結末』は容易く青年を恐怖のどん底に突き落とした。

こんな化け物に勝てるわけがない、と。

震えが止まらない足はもう言うことを聞かず、もう立っているだけで精一杯だった。

ぴちゃり

『ひいっ!?!』

赤い水たまりの表面を乱す波。

黒いブーツが踏みしめるたびに生まれるその波が、その悪魔の足音が、自分の死への秒読みだと青年は理解した。

そしてその理解が精神の崩壊に繋がるのにそれほど時間はかからなかった。

『うわあああああああ!!』

錯乱状態に陥った青年にもう策など思い浮かばなかった。

殺らなければ殺られる。

ただその考えに支配された青年は声の限り叫びながら、腰元のナイフを手を切りかかった。

「失せろ。」

だが、相手が悪すぎた。

獣のような形相で迫るエルフに対し、ヴィネッツは冷静そのものだった。

元よりヴィネッツには動揺などできるはずもなかった。

彼の目には、それはもう『モノ』としてしか映っていなかったのだから。

血走った目をこれでもかと思開き、飛びかかってくるそれにヴィネッツはただ手を突き出し、指を鳴らした。

パチン

『ぎゃあああああああ!!』

何かに弾かれるように後ろに吹き飛ばされた青年から零れたのは、激痛を訴える叫び、そしてその身を焼き尽くす業火だった。

生きたまま炭になるまで焼かれる激痛に、青年の断末魔は意外と短く終わった。

『全軍突撃い！！』

壁がカイルと共に崩れ落ちるのを見届けてから、ラウルは罪悪感に押しつぶされそうな心を無理矢理奮い立たせ、声を張り上げた。

それこそ、囃となって逝った同士のために。

戦争で一人の死者も出さずに勝つことなどありえない。それは分かっている。理解している。だが、それでもそれを願わずにはいられなかったのだ。

ラウルは尚もそのようなことを考える自分を戒めるために唇を血が滲むほど強くかみしめた。

『うおおおおおおお！！』

そんなラウルの心情を思っただけそれとも自らの心を奮い立たせるためか、兵士たちはこれでもかと声の限りに叫んだ。

人の何倍もの冥力量を持つドワーフ達の突進は圧巻だった。

冥力によって強化された脚力は容易く地面を踏み碎き、緩やかな坂を駆け降りるのではなく、それこそ飛び降りるように跳躍をし、一気に帝国軍へと詰め寄っていく。

それに対し帝国軍は、どうすればいいのか慌てふためいていた。ドワーフに混じったエルフたちの冥術により彼らの壁となっていた木の根は炎上。もう一刻として猶予がないのは火を見るより明らかだった。

だが、その中ですぐさま行動を起こした部隊があった。

「全軍、遠距離部隊を三列目に！！ 最前列を重装歩兵部隊で固めろ！！」

「全員、機械剣を展開。迫ってくる敵を確実に潰していくぞ！！」

それは騎士と冥術師によって構成されたカイルが率いていた部隊だった。

通信機を持っていた一人が全体に対し支持を飛ばし、その横でもう一人が彼らのいるその部隊に指示をだしていた。

この二人はカイルの補佐を務めている騎士たちだったためすぐにこのような行動に出れたのだが、

（カイルさん……）

その二人の頑張りも虚しくなるほどに、帝国軍の士気は明らかに落ちていた。

それは他でもない、カイルが壁の破片にまみれながら落ちていくのを見たものが何人もいたからだった。

（精神的なダメージが大きすぎる！！）

あの場にカイルに匹敵する人物を置いておくことは考えられない。つまり、何らかの策を講じられての結果だろうと予想を付けていた。しかしそうであるならば、とその騎士は近づいてくる足音を聞きながら思考を進めていく。

（名将として名高いカイルさんを二度も陥れるなんてそうそうできることではない。向こうの指揮官は本物だ。）

足元を通して身体に伝わってくる振動にもう時間はのこり少ない。それを実感したせいかな、その騎士の頭は冴えわたってきていた。

（ならば、そんな優秀で策士とも言うべき指揮官が、この状況、こ

の場面でここまであからさまな攻撃をするだろうか？)

そこまで思考し、ひらめくと同時に初めて金属同士が交わる音が戦場に響いた。

もう集団の先頭では激しい戦闘が始まっている。

(カイルさんが嵌められたのは恐らく囷作戦、しかもその場にいる本人にしか分からないような……つまり、『幻術』か!!！)

そこまで思考したところで恐ろしい考えが脳裏をよぎった。

そしてそれが真実だと一瞬にして理解した。

「右翼、左翼部隊の最後列、反対の方向に壁を作れ!!」

「おい、何を!？」

同じように支持を飛ばしていたその騎士の同僚の焦ったような声を敢えて無視してさらに続けた。

「敵の主力は正面の集団じゃない!! 敵の本体は我々の背後から現れるんだ!!」

「だから何を……なっ!？」

「来たぞ。」

口ごもった二人は同時に正反対の方向に目を向けた。

今までは聞こえなかったはずの数えきれないほどの足音が聞こえる左右の部隊の後ろへと。

「そんな……」

「やはり、か。」

動揺する同僚を捨て置き、通信機に手を掛けると声の限りにさけんだ。

「全軍、前方、後方に壁を形成したのち迎撃に当たれ!! 中央部隊はこのまま中央を一気に制圧の後に右左翼の援護に回る。」

「お前、あの数のドワーフだぞ!? 正面からぶつかってそんな簡単に倒せる訳が……」

「それが向こうの狙いだ。」

「えっ!？」

呆氣にとられる同僚を押しつけ、彼は中央部隊と通信機に向けてまた叫んだ。

「聞け!! 中央にいる敵部隊だが、恐らく半数ほどが幻影だ!! 敵は少ないぞ!!」

その現実離れした言葉に一瞬騎士や兵士たちに動揺が走るが、それが雄叫びに変わるまでそう時間はかからなかった。

「てめえらよくも!!」

「ぶっ潰す!!」

「おらあ!!」

徐々に士気が戻ってきたところで彼は通信機越しに今度は声を押さえて連絡を取った。

「ガトリングの準備はどうだ？」

『今、調整中です。あと数分で完了します。』

「それまでそれを何としても死守しろ!!」

『はっ!!』

通信機を切り、吐き出したくなるを押しとどめた。

現状は帝国軍劣勢と言わざるを得ないだろう。明らかに『流れ』を持って行かれてしまい、そしてなにより帝国軍の精神的な柱でもあるカイルの脱落がこの勝敗を決してしまいかねない程の打撃を与えていた。

それこそ、敵の思い通りに。

ヴィネッツ率いるこの部隊は常にこのような戦い方をしていた。

ヴィネッツ本人が目標物の奪取、あるいは破壊し、カイルが指揮

をとり最前線で戦う。

通常では考えられないことだが、カイルはどの戦いにおいても必ず単独で危険としか言いようのない行動をとっていた。それはカイルの個人としての戦闘力が飛びぬけているのが理由でもある。

『騎士』の第九階梯。一人で千人以上の戦闘力を持つこれを正面きって倒せる敵がいるなどだれも考えられなかったのだ。

「油断、か。」

その原因を憎々しげに呟いてから胸に八つの星を付けた騎士は最前線へと駆け出した。

「リユーガ、どうするの？」

緩やかな坂の上、樹の影に身をひそめていたフィロが耐え切れなといった感で声を上げた。

それにその横にいたダンゼルもまた促すような視線を向けるが、向けられた張本人はそんなことなど気にせず、太い樹の枝の上で眼を閉じていた。

その姿勢から今、龍牙が戦う気がないのが二人には分かった。だが、それでも目の前でとてつもない数の人間が命を落としている。そんな現実を前にして黙っていられるほど二人の精神は凶太くはなかった。

「リユーガ、」

催促するようにまた名前を呼ぶフィロに龍牙はしぶしぶといった具合に目を開けた。

「出ない。」

「なんで……」

最初から分かっていた通りの答えが返ってきた。だがその理由を

聞かなければ分かっているも納得などできるはずもない。

そんな二人の考えを理解している龍牙は持たれかけていた背中を離し、戦場の方へ目を向けた。

「今、サメット族の優勢で進んでいる。俺たちの助けが必要になるとは思えない。」

「でも、約束はどうするつもりなの？ リューガさん」

龍牙はダンゼルをチラリとみてからもう一度戦場に目を移した。

「……これから、またサメット族の劣勢になる。」

「え？」

「その時に出る。」

傍から見れば予言のような言葉だが、下にいたフィロはすぐに、ダンゼルは少し茫然としてから頷いた。

彼らは知っているのだ。龍牙のこの言葉は絶対なのだと。

「相手が勢いづき、油断が生まれたところで叩く。これでこの戦いは終わりだ。」

「もっと静かに逝かせるべきだったか。」

静かに呟いたヴィネッツは、かぶった帽子の鰐を握り、自嘲の笑みを隠すように目深にかぶり直した。

平然と佇む彼の周りには里の守りを固めていたサメット族の兵士十数人がいた。恐らく先ほどの悲鳴を聞きつけたのか、またはその惨状を見たのだろう。

『よくも、ネルたちを……』

どうやら後者らしいと適当に当たりを付けながらヴィネッツは話しかけてくるエルフに見向きもせず、何かを探すように首を廻らせた。

「ここでは見えない、か。」

『無視するな!!』

相手にもしないヴィネツツにしびれを切らしたエルフの一人が手に持っていた杖を突きだした。

その杖は、先端には青い破天石が埋め込まれているが、ガムル達を持っている機械剣とは全く違っていた。

それは単なる破天石を埋め込んだ杖。そう機械剣にはある補助機能^{（補助機能）}が全く備わっていないのだ。

それでもそのエルフは機械剣を使う騎士や冥術師と変わらぬ速度^{（ひょうかい）}で氷塊^{（ひょうかい）}を撃ち出した。

「ほう。」

そのエルフ特有ともいえる豊富な冥力量と処理能力に感嘆の声を溢しながらもヴィネツツはそれをひらりとかわし、指を弾いた。

瞬きの間に術式が出現し、弓を構えるエルフにどこからともなく雷が落ちた。

『ぎゃあああああ!!』

一瞬にして周囲を支配する轟音と閃光、そして血肉が焼け焦げる臭いが充満する中、虚しく断末魔の声が響いた。

プスプスと肌が弾ける音を奏でながら倒れるエルフ。だがここにいる誰もが先ほどの三人より訓練されているのだろう。十人ほどいる兵士たちはただ目の前の出来事を情報としてしか捉えず、それぞれが自分の武器^{（えもの）}を手に動き出した。

ドワーフとエルフが半分ずつほどでヴィネツツを囲むように形成されている円の中から、ドワーフの兵士たちが飛び出した。

飛び出したとはいっても先ほどのような直線的なものではない。だが通常、稲妻のようにジグザグと複雑な動きをすれば速度が遅れ、

捉えられやすくなる。だが、彼らの動きは直線と同等あるいはそれよりも速い動きのようにヴィネッツの目には映っていた。

「面倒な。」

背後から横に薙がれた剣を屈んでかわし、地面を手につき身体を横に流し流しながら指を弾こうとするが、それよりも早くもう一人がそのヴィネッツの頭部に向けて斧を振り下ろした。

「ちっ」

それにヴィネッツは発動しようとしていた術式を変更。薬指と親指を擦り合わせた。

バンツ

赤い火花とがヴィネッツの足元で弾け、その力で無理矢理その斧から逃れ、されに二度足元で弾けさせるとヴィネッツの身体はその包囲網を抜け、一つの家屋の上に舞い降りていた。

「ふう、意外にやりにくい。……仕方がないな。」

ずれた帽子を直しながら爆発を起こした足元に視線を落とした。何度も起こされた爆発により加熱された靴の裏は赤く輝きだしており、木造である足元の屋根から煙が立ち上っていた。だがそれを見下ろす本人は顔色一つ変えない。といのもこのような使い方をすることを最初から想定したうえで作られたものなのだ。そのため、靴の裏は特殊合金で覆われており、その気になれば相手が撃ち出した火の球を蹴り落とせるほどの熱処理が施されている。

そんな靴を履き直すように靴先をトントンと屋根に打ち付けてか

らヴィネッツは彼の相棒である両手の手袋をきっちりと嵌め直した

「悪いが、本気で行かせてもらう。」

それを展開すると同時に屋根の端に足をかけ、屋根を踏み碎きながら飛び出した。

一直線に跳んでくるそれに向かって後方で控えていたエルフたちが術式を展開していく。

「ふっ」

ヴィネッツはまず最初に飛んできた氷塊の群れに向かって中指と薬指を連続で弾いた。

それによって飛んできた氷塊は全て地面に木端微塵になるほどの勢いで叩きつけられ、叩きつけた張本人はまた足元を爆発させ、新たに向かってくる熱線を空中でかわした。

とはいえ、彼が今戦っている場所はいわば住宅街。それほど道に幅はない。つまり急に方向転換した彼の勢いを消しきるほどの距離は残されていなかった。

目前に迫る家屋の壁。だが、ヴィネッツはその勢いは殺さず空中でひらりと回転。頭と足の向きを変え、トンッ、と微かな音とともに何の衝撃も与えずに壁に着地した。

まるで足が壁に張り付いたような状態からヴィネッツは素早く目を走らせ兵士たちの位置を確認。すぐさま深く折られた足に力を入れ、一気に飛び出した。

その力に一気に崩れ落ちる壁を背中に、ヴィネッツは凄まじい速度で五本の指を何度も弾いた。

それと同時に世界は改変されていく。

地面を走るドワーフ達は爆発や不可視の力に押しつぶされ、エルフ達はどこからともなく飛んでくる雷に焼かれ、迫る不可視の刃にその身を切り裂かれていく。

もちろん彼らもただやられるつもりは毛頭ない。

彼らも必死に冥術や弓を撃ち出していくが、目にも止まらぬ速度で移動するヴィネッツの残像すら捉えられずに赤みがかった空へと虚しく消えていくばかりだった。

そしてヴィネッツの動き出しから僅か二分。

道一面に広がる血の海の中に立っていたのはもう一人しかいなかった。

ガタガタと震える身体を無理矢理押さえつけ、最後の一人であるドワーフの男は迫りくる冥術の嵐をドワーフの豊富な冥力を使って強化した脚力でかわしていく。

彼はこの部隊の中でも部隊長を努めるかなりの実力者だ。

だが、そんな彼ですら自分が勝つという映像が思い浮かばない。

それほどの圧力がヴィネッツから発せられていたのだ

それでも、この部隊長は部下のためにも、逃げるわけには、止まるわけにはいかなかった。

地面を覆う部下たちの血の海に足を滑らせそうになりながらも、そのドワーフは平然と立つヴィネッツ（バケモノ）へと向かっていく。

『はあああああ!!』

そして間合いに入ったドワーフの男は雄叫びを上げながら、腰だめにした斧を一気に振りぬいた。

パチンッ

「悪くない。」

だが、その渾身の一撃はその体に傷を付けることはできなかった。かなりの重量を誇る彼の斧が突き出された手の手前、触れる寸前で切っ先を震わすに留まっているのだ

その事実とその男は愕然とした。

これだけの人数をかけて、

これだけの決意をこめて、

まだ、まだ傷一つつけられないのかと。

「すまないが、消えてくれ。」

そんな彼の心をあざ笑うかのように指を鳴らす形で右手が突き出された。

それと共に突き付けられた圧倒的な実力差に、その部隊長にはもう指先一本すら動かすことができなかった

そして指同士がゆっくりと擦りつけられ……

「ふんっ」

だが、意外にもその手は指を鳴らす寸前で、部隊長のドワーフの男を押し倒していた。

一瞬、部隊長は何が起こったのか理解できなかったが、その直後、視界に入ってきた新たな影にその行動を理解した。

「ちっ、完璧に読んでやがったな。」

新たな現れた影は部隊長に背を向け、反対側、向き合う形となったヴィネッツに流暢な発音で男性特有の声で憎々しげにつぶやいた。そんな彼の手にはひと目でかなりの業物であることがわかる槍が握られていた。

そう乱入者が咄くように、ヴィネッツは部隊長を突き飛ばす反動で乱入者の攻撃を紙一重にも見える、最小限の動きでかわしていたのだ。

そう咄かれたヴィネッツの口元にはそれを証明するように弧を描いていた。

「それを分かっているながら切りかかってくるとは。よほどこれが大切なようだ。」

何かスイッチが入ったのか先ほどとは明らかに違う、獣のように凜猛な目で、目の前で刀を構える男を見た。

「お前には関係ないだろ。」

代わりに横から飛んでくる声にヴィネッツはその笑みをさらに深めた。

ゆっくりと首を向けた先、そこには先程までなかった影がいくつもあったが、そのうちの一つにその視線を止めた。

「王子の登場、か。」

それは、レイだった。

「私に何か用？」

樹の枝の上で、幹に手をついたりタニアはどこか呆れたような口調で目の前の人物に言葉を投げかけた。

「いや、後をつけてくるから俺に気があるのかなと思ってさ。」

そうふざけた風に返した人物、サイはリタニアの目の前の樹の上で背中を幹に預けた。

その真意のつかめない応答にリタニアは眉をひそめると同時にふと疑問が浮かんだ。

「話せるのね？」

「女の子に声をかけるために勉強したんだよ。」

「少しはまともに答えたらどう？」

「俺は真面目だぜ？」

「ふん。で、私に何か用？」

無理矢理話題をもとに戻すとサイはつまらなそうに煙草を吐き捨て、靴底でもみ消した。

真意かどうか分からない行動をしながら、サイは傍らに立てかけた大砲のような銃器を持ち上げ、肩に担いだ。

「……簡単な話だ。つけ回すのはもうやめてもらおうってハナシだ。」

明らかな威嚇の体制に入ったサイに、リタニアもためらいなく機械剣を引き抜いた。

「断るわ。」

サイも反応できないほど瞬時に展開された彼女の機械剣である弓。それを限界まで引いた状態で拒絶の意を告げた。

「だよな……」

その速さに驚きの表情を浮かべながらも落胆のため息を零した。

「女の子を殺すなんてやりたくないんだけどな。」

だがその言葉とは裏腹にリタニアに照準を合わせるその手に迷いはない。

お互いに発射されてもギリギリでかわせる、そんな距離を保ったままリタニアはできる限り情報を引き出そうと口を開いた。

「これからヴィネッツと戦うんでしょ？　なら私の追跡を拒む理由はないはずだけど？」

まっ先に浮かんだその的確な指摘に、サングラスの奥に隠れたサィの瞳が微かに揺れ動くのをリタニアは見逃さなかった。

「何をたくらんでいるの？」

「……命令なんだ。悪く思わないでくれよ。」

決裂の言葉を合図に二人の手が動くが、先に動いたのはサィの方だった。

背丈ほどもあるその銃器から発せられた弾丸が真っ直ぐ向かいのリタニアに飛んでいく。それに対しリタニアは回避行動は取らず、そのまま引き絞った弓矢を放った。

同じように直線で進んでいく矢はついには弾丸と衝突し、丁度真ん中で爆発が巻き起こった。

二人の間で黙々と立ち上る黒煙。

急に悪くなる視界の中、二人は同時にそれぞれの機械剣で牽制をしながら時計回りに駆け出した。

彼女達の指が動くたびに木の枝が弾け飛び、幹には大きな穴が穿っていく。

「キリがないな、っと。」

足元に飛んできた矢を跳んでかわし、尚も追ってくる矢を空中で軽やかに避け一度、二度と横に側転をするように宙を跳んでいく。

そしてそれが三回目に達したとき、サイが先に動いた。さきほどもでと同じように側転をするように跳んだ後、逆さになりながらサイは銃器をしつかりと構えた。

「喰らえ。」

小さく笑みをこぼす彼の右手がグリップのある箇所に触れると、その銃口に赤い術式が展開。回転を続けるその中心を銃弾が貫いた。

「ちっ」

微かに舌打ちを溢しながら、リタニアは赤い軌跡を刻む弾丸に、無意識にこれまでよりも少し深く膝を曲げ、先よりも大きな跳躍を見せた。

「弾けな。」

結果的にその行動は正しかった。

その赤い弾丸が彼女がいた場所に着弾すると同時に、これまでとは比べられない爆発が巻き起こったのだ。

その爆発は容易く樹齢数百年はある木々をへし折り、抉り、吹き飛ばしていく。

「っ！？ くっ！？」

そしてそれはまた、いち早く空中に跳躍していたリタニアも巻き込んだ。

とはいえ、本能的に危険を感じ大きく跳躍していたおかげで直撃は辛うじて避けてはいる。だが、直撃ではないにせよ、その衝撃はリタニアの痛覚を刺激するには十分すぎる威力だった。

何本か木の枝をへし折りながら吹き飛ばされた彼女は痛む体に鞭を打ち、なんとか一際大きな枝の側面に着地した。

「物体への『術式付加』、か。面倒、ね。」

痛みに小さく顔をしかめながら淡々と自分のなかで情報を整理するように呟いた。

『術式付加』とは銃弾や弓矢のような遠距離系から剣や槍などの近距離系のぶきまで全てに冥術の効果を付加する技術だ。

冥術が発動してから効果を発揮するまでの時間は特に差はない。だがこの技術の利点は術式の構築速度にある。

相手の正確な位置が分からなければ発動できない冥術を、敢えてその位置情報を削除し、ただその弾丸に位置情報を委託することで一気に術式の構築速度を上げたのだ。

つまり、武器というすでに座標指定を行われているモノを使うことで、冥術の発動速度を向上させる技術なのだ。

だが、リタニアが危惧しているのはそのことではなかった。彼女が危ぶんでいること、それは相手にも『術式付加』の知識があるということだった。

そう、リタニアもまた『術式付加』の使い手なのだ。

『術式付加』の戦い方の鉄則はいかに相手を欺けるか、だ。

だがこの条件は相手も同じ、と言いたいが、状況は楽観視できるほどよいものでもなかった。

理由は単純。この森を覆う濃霧のせいでリタニアは相手を見失っていたのだ。

この状況で頼りになるのは聴力と勘。

そう自分に言い聞かせながら、リタニアは弓を構えた。

「……」

不用意に攻撃はしない。自分の手の内を明かさないためだ。

「おいおい。口の割にはあんまり強くないんじゃないか？ 御嬢さん？」

様々な方向から聞こえる余裕に満ちた声に目を左から右へ動かしながらリタニアはふう、と息を吐き、弓を引いたままそれを下に向けた。

「ははっ、もう諦めたのか？ こりゃあ傑作だ。」

戦意喪失のように見えたのか、その声は明らかにリタニアのほうへ近づいていた。

「はっ、誰が諦めるってのよ！！」

獰猛だがどこか美しさと気品を感じる笑みを浮かべながらリタニアは引いていた弓をいきなり上空へ打ち上げ、

「何の真似だ？ ついにいかれた……」

「『妖精の雨』フェアリーテア」

喚くサイの声を打消し、そして濃霧すらも貫く閃光が辺りを埋め尽くした。

「ふむ。王子の親衛隊の勢ぞろいとは。ここまで歓迎してもらえとは思っていなかったのだがね。」

「口の減らない男は嫌われるわよ。」

「これは手厳しい。だが、」

メリーの一言にヴィネッツはあからさまに肩をすくめて見せた。彼の前にいるのはサイを除いたレイが率いる部隊全員だった。

「この程度で私を殺す気か？」

向けられた明らかな敵意と殺意という圧力に何人かがたじろぐがレイとメリーは平然とヴィネッツと向き合っていた。

「ああ。本当は俺一人で十分だと言ったんだが……」

「レイは私がいないとだめだからね？」

「途中の雑魚を殺すのに無駄な力は裂きたくなかったからな。」

「ぶっ」

「ほう、それはそれは。道理で私が密かに潜り込ませた騎士たちと連絡が取れない訳だ。」

目は冷静なまま驚いて見せるヴィネッツに気味悪さを感じながらもその場にいる八人がそれぞれ武器を手にとった。

「お前は、この森を痛めつけすぎた。その罪の重さを知れ。」

「ではそれを知らせた後、君たちはいったい何をするつもりだ？」

「なぜだ？」

予想だにしない切り返しのせいだろう。レイは無意識に肯定をしめす応えを返していた。

「簡単な話だよ。君たちが今立っている場所だ。」

「……何が言いたい？」

妙に回りくどい説明にレイの警戒心は強まっていく。

「ここはこの里の西側。で、君たちは北側から来たにもかかわらず、なぜか東側からここへ現れた。」

帽子の下に顔の隠しながらヴィネッツはピッと右の人差し指を天に向けた。

「ここから考えられるのはただ一つ。」

そこまで言われてレイはキッと目を細めるだけで何も言わなかった。

もうヴィネッツは答えに行きついていることを理解していたからだ。

「私に東側に行かせたくない。いや、あるモノに接触させたくないから、ではないのかね？」

「ちっ。」

やはりそうだった、とヴィネッツの考察力に感心すると同時に、自分の浅はかな行動に観念に舌打ちを零した。

「で、それを知ってどうするんだ？」

「いやね。目的が同じなら協力しないか、と……」

「断る！！」

一瞬でヴィネッツを間合いに捉えたレイは腰に差した刀に手を掛け、一気に引き抜いた。白銀色に染まるその刃は勢いそのままにヴィネッツめがけて斜めに斬り上げていく。

瞬きをする間に行われた神速の斬撃。だがそれは足元に爆発を生み出したヴィネッツの軍服を切り裂くだけに終わった。

レイから距離をとったヴィネッツは小さく切り裂かれた腰のあたりを見て、わざとらしく肩をすくめた。

「居合とは……なかなかの腕前だ。」

「お前に褒められても嬉しくない、な！！」

両手で下段に構えたレイは他の槍と鎚を構えた二人と共に動き出した。

それに対し、正面三方向から向かってくる三人にどこか嬉々とした目を向けながらヴィネッツは両手を突出し、指を鳴らした。

それは完璧な先制攻撃だった。

さらに近距離しかない三人に対し、中距離、しかもこれまでと同じく不可視の、あるいは突如として現れる攻撃をぶつけているのだ。それをかわすのは不可能に近い。だが、

『レイ！！ 上！！ ナブ！！ 右から爆発！！ デイン！！ 正

面から鎌鼬かまいたち三つ!! 槍で弾けるわ!!」

三人が三人とも、指定されたとおりの攻撃を全て交わしきり、また自分の路線へと戻っていく。

ヴィネッツは迫り来る三人を視界に収めながらも、その的確な指令を飛ばしたメリーを何とも言えない表情で見つめた。

「まさか、『複合体』フマルガムがそれも『風の精霊』ウィンディーネの血統がここにいるとは。素晴らしい。」

「っ!?!」

まるで宝石でも品定めするような、背筋が凍りそうになるほどの冷たい視線に、メリーは声にならない悲鳴を漏らした。

「お前には関係のないことだ!!」

だがそれを遮るようにレイは正面から下段に構えた刀を振り抜いた。

「おっと。」

おどけた風にかわすヴィネッツ。だがレイの攻撃は終わらない。

斜めに振り上げた刀を返し、袈裟斬り。その斬撃でまた緑の軍服に切れ込みをいれながらレイはさらに一步踏み込んだ。

「っ!?!」

跳躍をする余裕すら与えない連撃にヴィネッツの顔から余裕は消え、真剣な表情へと瞬時に変わる。

対して、レイは未だ傷が付けれられないことに舌打ちを零しながらも、返した刀でヴィネッツの胴を狙って横へ薙いだ。

「うっ!?!」

「もらったあ!!」

そしてついに体勢が崩されたヴィネッツにレイを含めた三人は上段に構えた各々の武器を一寸の迷いなく振り下ろした。

ガキイイイイン

もうよけられない。そう確信したはずの攻撃。しかし実際そこから発せられたのは、金属同士がこすれ合う音だった。

「ちいっ。」

レイの表情に若干の焦りが混じっていく。

それもそのはず、後ろに反るような不安定な体勢の中、レイ達の武器はヴィネツツの目の前でその先端を震わすだけで終わっていたのだから。

レイは柄をしっかりと握り込んだまま、慎重に自分の攻撃を押し返す力が働く場所を見、わずかに目を見開いた。

「甘く見ないでくれたまえよ。」

「クソッ」

彼らの攻撃はなんの変哲もないヴィネツツの両腕によって防がれていたのだ。これに残りの二人は驚きの表情を露にするが、レイが驚いたのはそれだけではなかった。

さらにレイを驚かせたのは、そのヴィネツツの腕にレイの刀が触れてはいなかったことだった。

「『流体の空間固定』か。」

「正解だ。」

大気や液体などの流体を一定の座標に固定することで金属と同様の強度を与える術だ。

とはいえ、これは口で言うほど生易しいものではない。

流体、すなわち形の定まらないものに形を与えるということはそれを実行するだけの空間把握能力とそれを制御するだけの繊細さを持ち合わせていなければならないのだ。

それを瞬時に行うという時点でヴィネツツの力量が『強者』つわものと呼

ぶにふさわしいものだと言易く予想が出来た。

しかし、レイはそれに恐れることなど無く、刀を握る力を強めた。
「無駄だよ。君ごときではこれを切り裂けやしないのだよ。」

たしかにレイがさらに力を加えているはずなのに刀身とヴィネツの腕との位置関係に変動はない。

だがそれを見てレイは不敵な笑みを浮かべてみせた。

「それは、どうかなっ!!」

チラリと左右に視線を向け、ヴィネツは気づいた。いつの間にかあの二人がいなくなっていることに。

「何を……っ!？」

一瞬で目の前に展開され、消える術式にヴィネツは咄嗟に回避行動を取るが、遅かった。

「吹き飛ばせ!!」

ほぼ零距离とも言える二人の間を分かつように赤燈色の爆発が巻き起こった。

その爆風に身を任せ、レイはひらりと空中で回転してからメリーの前へ着地をした。

もくもくと上がる黒煙。それを見ながらレイは右手に握る刀を前に構えた。

『お前ら、構えろ!!』

左右で武器を下ろす二人に激を飛ばしながら、レイは煙の向こうを見るように目を細めた。

『メリー、見えるか?』

何を、という主語を省いた言葉に、メリーは自身の目で同じ場所を確認し、首肯した。

『ええ。残念ながら、ね。』

「ふふふ。」

その応答の直後、風に流されていく煙の間から漏れてきた声に、レイは舌打ちを零した。

「まさか零距离で爆発を起こされるとは。私は君を甘く見すぎていたようだ。」

ゆっくりと晴れていく煙の間から現れたのは先ほどほとんど変わらないヴィネツの姿だった。

唯一違う点があるとすれば、頬に一点、赤く爛れていることぐらいだろう。

「危なかったよ。まさか私が傷を付けられるとは。」

「……化け物が。」

「そのまま死ねばいいものを。」

口々に恨み言を連ねる彼らの声など気にもかけず、ヴィネツは舞台に立つ役者のように大げさに腕を広げた。

「そうは行かない。私にはなさなければならないことがあるのだよ。」

「どこの大根役者だ、と罵声を浴びせたくなるのを我慢し、レイは浅く腰を落とした。

「それにしてもドワーフとエルフの混血ハイブリッドは便利だね。こんな荒業でも怪我一つしないのだから。」

「ちっ」

自分を『もの』のように見てくるその視線に吐き気を覚えながらレイはその体勢のまま、ザッと地面を踏みしめた。

『さっきと同じだ。ただ今度は連携でいく。メリーはそのまま、ルイス、ピーリは遠距離から援護、ベイとクォンは分かるな!!』

口早に支持を飛ばしながらレイがまた同じ道を駆け出すと同時にまた何回か乾いた音がレイの耳に届いてくる。

『レイ、前方！！ 空気の塊！！ ナブ、上！！ 加速して！！
デイン、右！！ 爆発よ！！』

ほぼそれと同時に飛んでくる指示に意識を集中しながら前方から迫る殺気を切り裂きレイはさらに前へ進んでいく。

ヴィネッツを自分の間合いに捉えるまで後五歩。

レイは走る足にさらに力を加え、ヴィネッツが指を鳴らすよりも早く間合いに入ると、上段からその肩めがけ刀を振り下ろした。

「同じ手はくわないよ。」

先ほどと同じように腕で刀を受け止めたヴィネッツは止めをさそうと左腕を掲げるが、

『させるかよ！！』

その手は指をこすり合わせるより早く、真横から打ち付けられたハシマーを受け止めるために宙に開かれた。

「面倒な。」

『二人でもだめか。』

『だが、終わりだ。』

完璧に両手を塞がれたヴィネッツ。その背後から最後の一人、槍を持つデインと呼ばれる青年がその中心に向けて構える槍を突き出した。

ボウツと空気が破裂する音を響かせながら伸びる槍。一寸のズレもなく伸びていくその槍はついに捉えた。

そしてグサツと肉を貫く音が辺りに響いた。

カハッ

吐息の溢れる音。その最後の灯火が消えかけている声に一同は言葉
を失った。

俯くようにして槍を突き出したディンは敵を討ち取ったことを確
信し、嬉々としたその目をゆっくりと自分の槍の刃先に向けた。

鉛色の一切のくすみのない刃。そこに滴る一筋の血を目で追って
いく。

そして血で濡れる槍の突き刺さった腹部を確認してから、ディン
は一気に視線を上げ、

「……………えっ!？」

愕然とした。

彼の正面にある顔、それが先ほど自分が助けたはずのドワーフの
ものだったのだから。

「な、なんで…………」

確かにあの余裕たっぷりのヴィネツツを突き刺した。なのになぜ、
目の前にあのドワーフの男が立っているのか、その余りにも信じ難
い現実にはディンと呼ばれた青年は言葉を失った。

今の彼にはただその現実から後ずさるしかできなかった。

『ぐふっ』

ズプリという音と共に抜けた槍の後から、ドバドバと地面の赤い
液体が流れ落ち、その水たまりにバタリと本体が倒れ込んだ。

「…………お前。何をした？」

両手でぶらりと槍を下げるディンにヴィネツツはチラリと視線を
向けると、未だ彼の左右で攻撃してくる二人を弾き飛ばした。

「くっ」

『ぐう』

軽々と弾かれた二人は、空中で体を捻り、倒れ込みそうになる体

を必死に抑えながら最初と同程度の距離でその勢いを殺しきった。そんな音に背を向け、ヴィネッツはデインへと向き直った。

「何をした、だったね。なら答えは簡単だ。」

見上げてくるデインにヴィネッツはさらなる苛立ちを与えるようにより高圧的な視線を向けた。

「彼を盾にした。それだけだよ。」

「ヴィネッツうー！」

それははじき返された二人が視線を上げると同時だった。

怒りに身を任せたデインの高速の突きが繰り出されていく。これまで何千何万と繰り返され、身体に刻み込まれた動き。

だが、兵士の三原則、心、技、体。このうちの一つである『心』を失ったデインにこの化物に傷を付けられるわけなどなかった。

「甘い。」

ヴィネッツは迫り来る槍の側面に空氣の鎧を纏った右手を添えると、そのまま下に押し込んだ。

その力の方向の変化に前傾体勢だったデインの身体が耐えられるわけもなく、デインから見て左下の方向へとその体勢を崩していた。

ここまで来れば、あとはもう一瞬だった。

体制を崩したデインにヴィネッツが余裕をもって左腕を突きつけ、指を鳴らす。ただ、それだけだった。

『ぎゃあああああああ！！』

冷静さという最も重要な部分を失ったデインはそのまま、どこからともなく現れた雷に焼かれ、黒こげになりながら地面に伏した。

「あの馬鹿が……」

「あら、これだけの美人を前にして他の人のことが気になるの？」

片膝をついたまま、サイはチツと舌打ちを零しながら、皮肉が飛んでくる方を見た。

「自分で美人なんて言う奴はだいたいブスなんだぜ。」

「言ってくれるわね。」

また最初のように二人は向かい合った形で固まった。だが二人の状態は全く違った。

リタニアの身体は爆風や煤すすのせいでその衣服の所々は破れ、その下から血が滲んでいる。

対してサイは、比喩物にならなかった。肩には何箇所か突き刺さった痕が、腕、足には貫通している箇所さえもあり、その顔を被っていた大きなサングラスにはヒビが入っていた。

「で、まだやるの？」

「はは、やらないわけないだろ？」

リタニアの挑発に乗るようによろると立ち上がるがその顔は激痛に歪んでいた。

手足の筋繊維を貫かれているのだ。立ち上がるだけでかなりの激痛を伴うのは予想に難くない。

「もう止めたら？」

弓を構えたまま近づくりタニアを一瞥してからサイはフツと自らを自嘲するような笑みを浮かべた。

「やっぱり諦めているんじゃないの？」

それが敗北を認めたようにリタニアに見えたのだろう。少し矢先を下げながら前に踏み出す足を早めた。

「誰が、だ？」

だが、その足はすぐにピタリと止まった。

「えっ？」

リタニアはピタリと止まってしまった自分の足を不思議そうに見

た。

制止の司令を出していないのに足が止まれば誰でもそのような反応を見せるだろう。だが、リタニアはその理由がすぐに分かった。

「っ!？」

咄嗟に横に跳んだリタニアの後を追うように炎が走っていた。

黒い炎が。

「何よ……これ？」

いち早く跳んでいたリタニアとその炎の距離はかなりあった。にも関わらず、彼女の金髪を巻き上げるほどの熱風が吹き荒れていた。それだけでその炎の温度の高さが伺い知れるが、リタニアが疑問に思ったのはそこではなかった。

それだけの高温のものが通ったにも関わらず、その樹があった場所に全く燃え移っていないのだ。彼女がいた場所ですら焦げ目一つ浮かんでいなかったのだ。

「あんた、一体……」

「答える義理はない。」

明らかに口調の変わったサイは割れたサングラスと一緒に抱えていた大砲のような銃器を投げ捨てると、腰から機械剣を引き抜いた。それと同時に彼の体を覆うように黒い踝くるぶしまで隠すような長く黒いコートが彼の体を覆っていた。

動きやすさを重視したのだろう。そのコートには体中に余裕があるものだった。

その膨らみの中でゴソゴソ動いていたかと思うと、その右手に棺桶のように巨大な金属の塊が現れた。

「盾？」

そうそれは最前線で守備のために使われる、盾だった。

「そんなものでどうやって……」

「答える義理はない。」

明らかに口調が変わったサイは腕を真っ直ぐ伸ばし、取り出した盾を腕を覆うように構えると、動いた。

リタニアが捉えられたのはそこまでだった。

気付いた時には彼女の身体は吹き飛び、何本もの木々をなぎ倒し、最後は受身も取れずに地面に打ち付けられた。

「ガハっ、ガッ、ハッ」

荒く息を付くリタニアの口からはダラリと決して少くない血が流れ出ていた。

全身をなんども強打したのだ。リタニアも自分で身体の至る所が『イかれて』いることが分かった。

「まだ生きているとは、凄まじい生命力だな。」

かけられた冷たい声にリタニアはただ目だけを動かした。いや、目だけしか動かせなかった。

それを悟ったのだろう。サイは持ち上げていた盾を下ろし、筒状に戻した。

「なんの、つもりよ……？」

「お前を殺すことは禁止されている。」

バサツとコートの端を靡^{なび}かせながらサイは横たわるリタニアに背を向けた。

「待ちなさいよ、サイ!!」

サイはそれに足を止めるとフードの下に潜めた目を向けた、

「どこでその名を聞いたか知らないが、それは偽りの名だ。」

紅い瞳を。

そこでリタニアは意識を手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6330r/>

VALIANT OF REVOLT～反逆の英雄～

2011年10月5日13時34分発行